ＴＳ勇者、メス堕ち地獄のその先に。

ＢＢＳ大阪

この作品はR18描写を含むため、18歳未満の方は閲覧禁止です。

HinaProject Inc.

注意事項

このＰＤＦファイルは小説家になろうグループサイトで掲載中の作品をＰＤＦ化したものです。
このＰＤＦファイルおよび作品の取り扱いについては、小説家になろう利用規約が適用されます。そのため、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止いたします。作品の紹介や個人用途での印刷および保存にはご自由にお使いください。

【作品タイトル】
ＴＳ勇者、メス堕ち地獄のその先に。

【Ｎコード】
Ｎ３６８２ＦＯ

【作者名】
ＢＢＳ大阪

【あらすじ】
異世界に召喚された勇者マサタカは、愛する三人の美少女と共に戦い、ついに大魔王を倒す。
だが、そこには卑劣な罠が仕掛けられていた。
大魔王のいなくなった世界では、勇者こそが世界のバランスを崩す存在となる。
異世界の勝手な理屈で理不尽にも殺されてしまったマサタカは、死の瞬間、隠されていたユニークスキル『転生』を発動させる。

そして時は移り、とある田舎にて一人の女の子が生まれた。名はミヤビ。

ミヤビは、やがて美しい少女に成長していくが、ある日、自分がこの世界を救った勇者だったことを思い出す。

自分が愛した三人の美少女はどこに？

そして世界はどうなった？

加護を失い非力な少女となったＴＳ勇者。

これは、運命に翻弄される元勇者の『弱くてニューゲーム』な物語。

――――――――――――――――――――――――――――――――

寝取られ、バッドエンド、リョナ、スカ、グロありです。このへん苦手な方は読まないでね。

スピンオフというかバックグラウンドというか、外伝ＳＳを独立短編で書きましたのでＸシリーズとしてまとめました。

ＳＳ第一弾『大魔王のドキドキハロウィン』も宜しくお願い致します。

てか、公式のハロウィン企画に乗っかっただけですけど（＾―＾；）

第1話　やったぜ美少女膣で脱・童貞！（前書き）

新連載です。
最後までではないですが、ある程度書き溜めてありますので、当面毎日更新します。
初日の今日は第2話を23時に公開します。
後は基本毎日23時公開で進めたいと思います。

しばらくはあらすじどおりの話が続きます。そこまでがプロローグ篇で、その後いよいよメス堕ち地獄篇が始まります。

お楽しみに！

第1話　やったぜ美少女膣で脱・童貞！

ぼくのおちんちんは、フルのざらつく襞に呑み込まれていた。

童貞卒業がこんな美少女の処女膣でだなんて！

夢みたいだけど、夢じゃない！

うねうねとまといつき奥へ奥へと呑み込むように蠢く襞が生む快感が、ぼくの亀頭や陰茎のあちこちからばしばし伝わってくる。

これはたまりません！

え？　処女ってほんまかいって？

そりゃあさ、わかるよ。いくら童貞のぼくでも。

『勇者』のユニークスキル『鑑定（ジャッジ）』で表示されるステータスが『処女』→『非処女』になったもん。

第一、おちんちんで強い抵抗を押し破ったし、今も血が掻き出てきてるんだから！

ありがとう異世界！

すげーよ勇者！

セックス万歳！

と、お、おお、ごめん。

今の状況、なんのことだかわからないよね。

あっ、でも、ぼくもっ。うっ。詳しく説明してる余裕ない！

しかも。

「あ、あ、あああああ、すごい、すごいです、あああ、勇者様、あああああっ、もう、もう」

なんてかわいい声であえぐもんだから、もう、ますますかっちかちのばっきばき。

あのフルが、ぼくのおちんちんでイキそうになってるなんて。

お、おお、おお、ごめんごめん。

この状況は一体なんだ、だよね。

ぼくもいっぱいいっぱいでもう限界だから、さくっと説明するよ。

ぼくは『大魔王』討伐のため異世界（この）に勇者として召喚された日本人、新妻雅貴（あずままさたか）。２３歳。召喚された際は入社したての社会人一年生だった。それから1年この世界にいる。

紆余曲折の末、ついに明日、大魔王の居城たるダンジョンに攻め入る。

最終決戦（ラストバトル）だ。

そして今日、ぼくたち勇者パーティー、そして（異）世界連合軍の大魔王討伐団の全員がダンジョンへの最前線であるここマルファス城に集結し、勝利を信じる前祝の宴が催された。

決起大会にして、覚悟を決める最後の晩餐会だ。

盛大な宴だった。人類の存亡この一戦にあり、だからだ。

討伐団の大半は死を覚悟している。

もちろん、ぼくたちも。
だから今日は、旨いものを喰って、旨い酒を呑む！

そろそろおひらきになろうかという頃、しこたま呑んでバルコニーで風に当たっていたぼくに、パーティーメンバーの賢者フルフールがすっと近寄り耳元でささやいた。

『1時間後にお部屋にお伺いします。大事なお話をさせてください』

時間どおりに部屋に来たフルの『大事なお話』ってのは、要約するとぼくのことが好きだ。でも大魔王との決戦で命を落とすかもしれない。その前に思い出がほしい、というものだった。

ぼくも、実はフルをずっと気にしていたんだ。
相思相愛だったんだから、そりゃもう、思い出作っちゃうよね！

いや、フルを、というのはウソになる。
ぼくのパーティーは、ぼく以外みんな美少女なんだ。どういうわけか。
いや、すっごーく嬉しいことなんだけどね！
最初はどぎまぎしたけど！

自慢じゃないが、女子とはまともに話したことない。男子ともあんまり話したことないけど。
一人で本を読むのが好きだったし。
ひきこもりじゃないよ。でも、友だちと外で遊んだりするタイプじゃなかった。
大学の時に数合わせで合コンに連れていかれたりはしたけど、あの雰囲気は苦手だった。
女の子からなぜか『かわいいー』とよく言われたけど。

なに喋ったらいいかわかんないし。それに……。
おっと、今ぼくの話をしてる余裕はない。

いつも青色の長いローブを着ているが、戦闘時にちらりとみえる時などに驚く、隠れ巨乳の金髪癒し系ほんわり美少女・アリアガルド法国の『賢者』フルフール。１８歳。

逆に爆乳を隠そうともしないビキニアーマー、目のやり場に困るぼくをいじるのが大好きな赤毛ウルフヘアの肉弾マッスル系褐色美少女・ガーランド帝国の『剣闘士』ラヴァーナ。１９歳。

一人称はボク、貧乳にしてスレンダー、攻撃魔法を得意とする銀髪ショートの華奢なクール系色白美少女・タランジ王国の『魔法使い』アリスネフィ。１８歳。

三者三様で、甲乙つけがたい！

でも今はこうして抱きしめているフルのことがイチバン！
ああ、おっぱいが柔らかい！
陥没気味のピンクの乳首、舐め舐めしちゃうよっ。

「あああ、すごい、すごいです！　勇者様！」
「あっあっあっ、ぼ、ぼく、我慢できないよ！」

この世界にコンドームはない。ぼくはイキそうになっておちんちんを引き抜こうとした。

「ダメです！　中に、フルフールの中に、ください！」
「ええ？　いいの？」
「いいに決まっています！　中に、中に出して！」

「あ、あああっ、フルっ、好きだよっ！」

フルフールの巨乳を揉みしだきながら、もう一度最奥まで全力ピストンした。

「ふあああああああああっ！　すごおいいいいいいいいいい！！！」

「フル！　ぼくも気持ちいいよおおおっ！　いくよおおおっ！」

快感が背筋をせりあがってくる！

ずびっ。

ぶにゅ。

ぶしゅぶしゅ。

どぶっ。

ぼくはフルフールの処女おまんこの最奥に射精した。

射精しながら可愛い唇を吸い、舌を絡める。

フルが口と股間を押さえられ、ひくひくとエビ反る。

うおおおおっ！　この征服感がたまらん！

……ふう。

いっぱい出たな。

そして、やがて襲ってくる賢者タイム。あ、フルのことじゃないよ。

（エライことやってしもーたパーティーメンバーに中出しってそんなんヤバいだろほかのメンバーとどういう顔して会えばいいんだよお明日から最終決戦なのにヤバいヤバいこれってフツーにセクハラじゃね一応フルの上司だしぼくあああでも賢者って非処女でもいいのか教会的な意味合いで）

冷や汗が出た。

「何をブツブツ言っておられるのですか？　勇者様？」

フルが全裸のままキョトンと俺を見てる。

表情がいつものフルなのにすっぱだかなのがギャップ萌え！

ああああ、やばいやばい、中出しした直後なのにまたおちんちんが勃起してくる。

「さすが勇者様、精力も規格外ですね。わかってはいましたけど、ちょっと妬けます。でも交代ですから」

「は？」

「くじで順番決めたんです。ラヴィが外で待っていますから、代わりますね」

そう言ってさっさと青い賢者の衣装を身に着けると、部屋を出て行った。

入れ替わるように入ってきたのは剣闘士ラヴァーナだった。いつものビキニアーマースタイルだけど、様子が変だ。

てか、ぼくはだかだよ！

フルとセックスした直後だよ！

部屋の中エロい臭いで充満してるよ！
シーツもいろんな液体でぐっしょりだよ。

あ、血もついてる……。

って、なんで普通に入ってくるの、ラヴィ！

「よ、よぉ、勇者」

ぼくをみて明らかに照れてる。
ラヴィがこんな表情をするなんて。

「一番はフルに譲ったけど、それはクジで負けただけだかんな！」
「ちょ？　ラヴィ、これは、いったいなにがどうなってんの？　てか見ないでよ！　恥ずかしいよ！」
「あー、もー、この鈍感！　恥ずかしいのがまんしてんのはこっちなんだよ！　俺はお前のことが好きなんだ！」

真っ赤になりながら叫ぶラヴィ。

なんだこれ。
こいつこんなに可愛い生き物だったの？

「ええっ？」
「だーかーら、俺の初めてを貰ってくれ！　準備はお互い出来てるみたいだし……」

ラヴィはぼくの股間に視線を送りながら、いきなりビキニアーマーを外した。

床に落ちてガチャガチャーンと大きな音が響くが、それどころじゃない。
ビキニアーマーに覆われていた部分の肌は、純白だった。
褐色は日焼けだったのか。

くっきりと濃度に境界のある女体は、きわめて扇情的だった。
大事な部分だけが白く切り取られた様になっている。白い爆乳の先にはイチゴのように真っ赤な乳首が尖っている。
そして全身が野生の肉食獣もかくやというべき弾けそうな筋肉に覆われているのに、股間に陰毛がなかった。

マッスルパイパン。

そのギャップに萌えた。
抱き寄せ、キスをする。
ぼくのおちんちんにぐいぐい血が集まってきた。

「ぷはあ……。お、おい、勇者。さっきよりチンポデカくなってないか……？」
「ラヴィがエロいからだろ！　責任取ってよ！」
「お、おお、なんかすまん。こ、これでいいか？」

ラヴィはぼくのおちんちんを舐めはじめた。フルの愛液や血やぼくの精液がそのままだったなあと思ったが、続けさせた。

ぼくの中のＳな部分が目覚めたような気がする。

勇者のユニークスキルのひとつに『覇道（ヘゲモニー）』がある。これのおかげでぼくみたいな軟弱者でも怖気ずに戦えるのだけど、このスキルは常時１００パーセント発動してるわけじゃない。戦闘が始まると自

動的に最大化される。
だけど、今このスキルがちょっと上がってる感じだ。
ラヴィとのセックスを戦いと認識したのかな？
たっぷり１０分はしゃぶらせた。そろそろ攻守交代。

「ラヴィ、ぼくにおまんこ見せてよ」
「え、やだ。そんな、恥ずかしい」
「ぼくのおちんちんしゃぶりたおしているラヴィが今さら何言ってんの。さっさと開いて見せてよ。これは、ぼくの命令だよ」
「ううっ、勇者の命令なら、仕方ないな……」

剣闘士ラヴァーナは、『全裸Ｍ字開脚マングリ返し自分の左右の指でビラ開陳膣まで丸見え』ポーズを取った。

いや、そこまで命令してませんが。
ラヴィ、実はＭ体質？

「こ、これでいいか！？」
「うん、そのままそのまま。ラヴィのおまんこ、ちょっと臭うな。ちゃんと洗ってる？」
「え、臭い？　のか。……すまん。なんか怖くて、ちゃんと中まで洗ったことない……」
「ふーん、ということはこの臭いは１９年ものか。それはそれで貴重だから舐めとこう」

ぺろり。

「あひゃあ！」

「なんだ、ラヴィ。らしくないよ。ひと舐めで悲鳴漏らすなんて」
「ちょ！　だって、だって、はじめてなんだもん」

処女二人目来ましたーー！

鑑定で知ってたけど！

第1話　やったぜ美少女膣で脱・童貞！（後書き）

今回は異常性癖は抑え気味でいくつもりですが、『かきしの』みたいに暴走したらごめんなさいね。

……まあちょっと覚悟はしておけ。

第2話　ハーレム勇者爆誕！

「へー、ラヴィ、はじめてなんだ。もっと広げちゃお。うん？　これが処女膜かな？　ちょっと指入れてみるね」
「えええっ！　……ええ。うん。仕方ない好きにしろ」

なんだかラヴィがしおらしいな。覚悟を決めてきたってことかな。

「あっ、つっ！」
「あらら、指に血がついちゃった。ちょっと破れちゃったね。ごめんよ。でもラヴィの中、ぬるぬるだね」
「だって、勇者がフルとしてるとこ想像してたら、待ってる間になんか、その、あ、溢れて来たんだ！」
「そう、そんなに興奮してたんだ。ラヴィってエッチな子だね」
「そ、そうだ、俺はエッチな子だ。だから、勇者、もう、じらさないで、早く」
「早く？　早く何するの？」
「早く、勇者のチンポを、俺のマンコに入れてくれ！　……入れてください！」
「しょうがないなあ」

実のところぼくも我慢できなかったが、ラヴィに懇願されたから、というふりをした。

ぶちぶちぶち！

「うはあはあはあああっ！」

さすがに二人目となるとぼくにも少し余裕がある。冷静に挿入できた。
おちんちんを一旦引き抜くと、出ちゃだめというかのように膣が伸びてついてくるが、カリがのぞくくらいまでぐっと腰を引く。
陰茎に血の筋が何本も引かれていた。
再度、ずぬぬと押し込む。
何度も繰り返さぬうちに、馴染んできた。

しかし、これは。
膣内部がぐねぐねとうねり、入り口から奥まで何段も複雑におちんちんを締めつけてくる。

何このパワーマシン！？

フルのがねっとりしっとり系なら、ラヴィのはがっつりぎっしり系だ。軟体動物と工作機械ぐらいの差がある。

一人一人違うもんだな。おまんこって。
どっちも気持ちがいいことには変わりないけど！

ぱん、ぱん、ぱん、ぱん！

勇者パワーでがしがし腰を打ち付けラヴィの処女膣を掘削する。
まけじとラヴィのおまんこも万力のように締めあげ吸盤のように喰いつく。

「あっ！　あっ！　あっ！」
「はっ、はっ、はっ、はっ！」

体位を入れ替えつつ、弾けるような胸を揉み、尻を掴み、舌をか

らめ、真っ赤な乳首を吸う。

「ああっ！　ああっ！　ああっ！　ああっ！」

ラヴィの喘ぎがどんどん切迫したものになっていく。

ぼくももう、そろそろ限界だ。

「あっ、出る！　出るよ！　ラヴィ！」

「中に！　中に！　中にっ！　頼むっ！　中に！」

どぴゅ。

ずぼぉっ。

ごぶん。

ラヴィの最奥で精液が爆ぜた。

ふう。

再び賢者タイム。

（うわーフルに続きラヴィにまで中出ししちゃったよこれパーティー修羅場になるんじゃないか明日から俺の取り合いになってうへへいやうへへじゃないぞ最終決戦なのに仲間割れになってはでもくじで順番決めたっていってたなてことは次はアリスの番かえええパーティー全員と肉体関係どこのハーレム展開だよまったく）

「勇者、今アリスのこと考えてるだろ」

「え、いや、そんなことは……」

振り返ると、ラヴィは既にビキニアーマーを着用していた。
まあブラとパンティだけみたいな格好だからすぐに着られるよね。
金属製だけどさ。

「いや、いいんだ。もうわかってるだろうし。アリスと交代だ。じゃあな、勇者、気持ちよかったぜ！」

サムズアップにウインクまでして出て行った。
男前なのか照れ隠しなのか。

……後者だな。

代わりに銀髪美少女が入ってきた。
アリスだ。

もう驚かない。
最初からこういうことだったんだよね。フルに呼ばれた時から。
一番くじを引いたフルが呼び出し係も引き受けたということなんだろう。
フルめ、説明を事後にしたの、わざとだな。

「勇者、ボクが最後。ちょっと残念な順番」
「え、アリス、何が残念？」
「ふたりと違ってボク、胸がない。貧相。最後がこれじゃ、申し訳ない」
「いやいや、巨乳は巨乳の良さ、微乳は微乳の良さがあるよ！　アリスは可愛いよ！　自信持って」
「可愛い？　ボクが？　勇者、ボクが好き？」
「ああ、好きだよ！　ボクっ子なのも、華奢でスレンダーなところ

も！」
「ありがとう、勇者、ボクも勇者が好き」
といいながらアリスは真紅のブレザースーツを脱ぎ始めた。
ブラウスのボタンを外し、タンクトップとパンティーという姿になる。
「これは勇者が脱がせて。自分でするのは恥ずかしい」
本来透き通るような色白の頬を真っ赤に染めてアリスがベッドに潜り込んできた。
ぼくは鼻息を荒くしながら、アリスの美しい薄い唇に甘いキスをし、同時にタンクトップをめくり上げた。
おお、ほんとにあるのかないのかという微妙なふくらみ！
でもその頂点には、薄いピンク色の乳首がピンと尖ってそそり立っていた。
ちゅぱちゅぱ。
自己主張の強いそれを吸い上げる。
うん？
銀色の陰り？
胸を舐めながら腕をとってそっと持ち上げると、脇にはふさふさの毛が。
おおお、ナチュラル派なのねアリス！
フルは手入れしていたし、ラヴィは天然無毛だったから、これは

また意外な。
乳首からつつましやかな丘陵を舐め下り、脇に顔をうずめると、草のような香りに包まれる。

「あ。勇者、ボク、へ、変になる……」
「アリス、変になっていいんだ！　もっと変にするよ！」
「もっと変になるの……？」

ぼくはパンティーに手をかけ、引きずり下ろした。アリスも膝を立てて、脱がしやすく協力してくれる。

おおお。

アリスのそこは、かなりの多毛だった。

でも、堅い毛じゃない。とても柔らかく、触り心地がいい。よく手入れされた銀色の猫の背中のように。

あ、これがプシーキャットってやつ？

ジャングルをかき分け、割れ目に指を伸ばす。ジャングルも熱帯雨林よろしくしっとり濡れていたが、本命の谷間は大河のようにトロトロだった。

まさに豊潤なデルタ地帯。
って、この世界にはナイル川はないか。

毛も多いが汁も多いぞ、アリス！

イメージ的にはラヴィと逆だな。ラヴィのパイパンにも驚いたが、

普段無表情なアリスがこんなに濡れる体質だったとは。

もうがまんできない。

密林に顔をうずめ、吸い上げた。

「あああああっ！　それ変になる！　それ変に――――！」

密林に埋まったルビーを掘り当てると、吸い上げ、ねぶり、甘噛みした。

その度にアリスの腰がバウンドする。

「あっ！　あっ！　あっ！　いやっ、変に、すごく変に！　ああいやっ」

「やめてほしい？」

「いやいやいやっ、もっと、あっ、いやっ、もっと変に、もっともっと変にしてっ　ああっいやっ！」

いいのか悪いのか訳が分からないよ。

てか、アリスも訳が分からなくなっているんだろうな。

こんなに濡れているのに、二人分待たされて、我慢の限界だったんだろう。

最奥の洞窟に舌を伸ばす。ピンと張りつめたような何かの感触。

うん、鑑定で知ってる。アリスも処女だ。

一晩で三人も処女をいただいてしまうことに！

でも、ぼくも我慢できません！

「アリス、入れるよ」
「ああっ、来てっ、勇者！　ボクの中に来て！」
「ちょっと痛いかもしれないけど、すぐ気持ちよくなるからね」

ぼくは腰を進めた。
一瞬の抵抗の後、すんなりおちんちんの全長が格納された。同時にどろどろの液体がぶしゅっと溢れだす。アリスの中に溜まっていた愛液が決壊したのだ。粘性の高い液体が多すぎて出血はうっすらとしか確認出来なかった。

「あー！　すごい！　すごいよ！　ボク、勇者、すごい！」

うん、確かにすごい。ぱんぱんぱんぱんとピストンを続けるが、アリスのおまんこはもはやゼリーだ。
いや、不定形のジェル？　突くたびに形を変え、からみつき、汁を噴く。

液体マンコ。

実際、股間からは間欠泉のように潮を噴き上げ、ぼくの下半身もべちゃべちゃに濡れていた。シーツも透け透けだ。

これがホントのジャングル温泉。

なんて冗談言ってる場合じゃない。粘性の高い熱い液体に包まれ揉まれ波打たれ、快感が駆けあがってきた。

「ああっ、またなんか変！　またなんか変！　あそこが膨れ上がってるよ！」
「アリス、行くよっ、行くよっ！」

アリスの中は今や嵐の海だった。その中を突き進む我が息子（マイサン）。波頭が砕け、巨大な波が襲いかかる。

ああああっ、これはまたベクトルの違う名器！　あっ、出るっ。

どぶっ。

どくんどくんどくん。

ごぼり。

あ、アリスの確認なしで中出ししちゃった。まずった！

「勇者、勇者の子種。変じゃない。気持ちいい。とても優しい気分」

「よかったの？」

「うん、これで三人とも一緒。公平」

可愛いな、アリス。

ぼくは優しくキスをした。

◇◇◇

「じゃ、明日は出発。朝早い。寝坊しないように」

「はいはい」

赤いスーツを着ると、いつもの無表情に戻って、アリスは出て行った。

ぼくは濡れタオルで体を拭き、びしょ濡れになったシーツはとりあえずハンガーに吊って予備のタオルをベッドに敷いた。

童貞卒業からの処女三連発。

しかも全て中出し。

誰かが妊娠したらどうなるんだろうか？
他のみんなも喜んでくれるんだろうか。

いや、みんな求めていた。中に出してくれと言ってた。
三人とも、そのつもりなんだ。
ぼくとフル、ぼくとラヴィ。ぼくとアリスの子ども。

すごくない！？

しかも三人ともぼくのことが好きだって！！
いや、なんとなくそんな気はしてたけど、この1年近くずっと一緒に魔族討伐の冒険してたし。

吊り橋効果ってやつもあるんだろうが。危機を共有すると愛が芽生えるってあれ。

でも、それだけじゃない。三人の気持ちは本物だった。
中出しを決めたときのあの幸せそうな三人の顔。

うへへ。

そうそう、中出し三連発なんて性豪みたいなことを童貞のぼくが出来るのは、勇者のベーススキル『再生（リプロ）』のおかげだ。

これは常時発動のベーススキルなので、ぼくの回復能力はべらぼうに高い。

戦闘時には加えて『覇道（ヘゲモニー）』が自動で発動し肉体と精神を超強化する。草食系のぼくが、一瞬で不倒不屈の英雄と化す。血や内臓を見ても平気だし、敵を殺すことを躊躇しない。

覇道（ヘゲモニー）は戦闘時以外も多少効果が出ている。通常時でも体力高めなんだ。

戦闘終了後も敵を倒したことを悩まないしね。

じゃないと勇者なんてやってられないよ！

ああ、でもこれで、念願のハーレムルート達成！

三人とパーティ組んだ時からの妄想が現実に！

後は大魔王を倒すだけ！

この世界は一夫多妻ＯＫだから、世界を平和にさえすれば、その後は、愛する美少女三人とのラブラブ生活が待っている！

元の世界ではなしえない！

異世界に召喚してくれて、ありがとう！

よーし、やったるぞ！

首を洗って待ってろ、大魔王！

第3話　ダンジョンで大乱交

「七人の導師が生みし七つの壁を持て、いざ屹立せよ絶対の防禦。導かれし守護の法よ彼の者に顕(あらわ)せ！」
「奥義、真・魔神剣無明殺粉砕斬！！」
「……バーニング・ボルテックス！」

フル、ラヴィ、アリスが絶妙な連携でダンジョン内のハ・ゴブーリやハ・ガゴールなど、そこそこ強い魔族も難なく討ち果たしていく。

以前からチームワークは抜群だったが、さらに一皮剥けた感じだ。
いや、一膜破れた感じ？

うへへ。

って、思い出し笑いしている場合じゃない。

三人に露払いをしてもらう間に、闘気(オーラ)を練り上(チャージする)げる。

エネルギー充填１２０パーセント！

「散開！」

ぼくの掛け声で三人が射線上から退く。

「掃射(スウィープ)！」

勇者のユニークスキル『殲滅（エクスタミネーターナクニック）』の派生技だ。全身から闘気を一直線に発射し軸線上の一切合切を薙ぎ払う。

タイマンなら『爆縮（インプロージョン）』、広範囲なら『追尾（ホーミング）』とか『爆裂（エクスプロージョン）』などの派生技もあるよ。

これは魔法のようだが、魔法じゃない。

勇者専用の特殊能力（ユニークスキル）だ。

それはともかく。

前方にいた数百匹の魔物は一瞬で消滅した。

この辺りの大魔王の戦力を一掃出来た。

いいね。

とりあえず一区切り。

『鑑定』で敵を殲滅したことは確認しているが、念のため連合軍が四方を調査し、戦果を確認する。

「この区画の敵戦力、残存無しを確認！」

「よし、予定どおり本日はここで野営！」

ダンジョンを抜け大魔王討伐に充てているのは7日間。

予想をやや上回る速度でぼくたちは進軍しているが、無理は禁物。

ただスケジュールよりも遅くなると、ダンジョン内の魔物はリポップする。

ペースを守ることが大事だ。

連合軍が初日のキャンプを張る。

ぼくらは最前線に居所を整える。ぼくらが最大戦力だということもあるが、フルの収納魔法（ストレージ）の効率的な利用ということもあるんだ。

そこに突如出現したのは、堅牢な石壁に覆われた平屋の砦だ。さすがに2階建て以上はダンジョン内には入らない。

フルは巨大な前線基地を楽々収容できる魔法力を有していた。最初は驚いたけど、今は当たり前の光景になった。仮設のテントよりもずっと安心だし、設備も充実している。これまでクエストでこの砦に何度救われたことか。

さらに、アリスが土魔法（クレイ）を駆使して石壁を増築し、ダンジョンの左右一杯に広げる。

魔族相手では堅牢無比とはいかないが、多少の時間稼ぎは出来る。寝込みを急襲される心配はかなり下がる。

砦の配置がすむと、戦略統括のアリアガルド法国司祭ダムス、全軍司令のタランジ王国の第二王子マシュエル、戦術参謀のガーランド帝国のジュギル皇太子の世界連合軍トップスリーがやってきた。

予定どおりだ。

砦の作戦室（兼ぼくの部屋）で、ぼくを入れた4人で明日以降の打ち合わせだ。気の利くフルが紅茶を淹れてくれた。

「勇者、今日は我軍の犠牲はなかったが、明日以降はどう思う？」

「ジュギル参謀、大魔王はこちらの実力を探ってるんと思う。今日は手ごたえがなさ過ぎた」

「勇者殿もそう感ずるか。お互い初日は様子見ということだな」
「うん。ダムス統括。本番は明日以降だと思う。今日のように安全に進軍出来ることはもう期待できない」
「今日の圧勝で兵がやや浮足立っている。抑える必要があるな」
「ああ、マシュエル司令。大魔王の本来戦力は今日とは比べ物にならない。これで勝てる気になっていたら、危険だ」

これまで、ぼくらは中ボスクラスやボスクラスを何体も討伐してきた。
瀕死の重傷を負ったことも何度か。
異世界チートクラスのぼくらでもそうなんだ。
しかもここは大魔王の本拠。
この先、ボスクラスが連続して出現するだろう。
そして大魔王本人の戦闘力は全く不明だ。
ぼくの勇者の能力でも、対抗できるのかどうかは未知数なんだ。
大魔王の姿すら、誰も見たことがないんだから。

その後、明日の陣形や進軍予定を確認し、トップスリー（トップスリー）は奥（入り口側）の連合軍キャンプに帰っていった。

この砦、部屋が４人分しかないしね。

三人が帰ったのを見届けるように、フル、ラヴィ、アリスが部屋に入ってきた。

「お帰りですね」
「あ、ああ、司令達は帰ったよ」
「では、勇者様、今からは私たちの時間ですね」
「お、おお」

そうなんだ。戦闘中から暗黙の了解というか、そういうムードだったんだ。

しょうがないじゃん！

みんな若いんだし、命張ってんだし！

トップスリーに知れたら不謹慎だと怒られるかもしれないけど、心と体の繋がり、大事だもんね！

念のため、フルが魔法障壁『万象の伝わりを隔て森羅の理（ことわり）を離せしむ』を、アリスが静寂魔法（サイレンス）を展開する。

これで誰も入ってこれないし、中の声が漏れることもない。

「勇者様！　三人一度に愛していただけるなんて、夢のようです！」

「お、俺はちょっと恥ずかしいんだけど、二人がどうしてもっていうからな、付き合いだ、あははは……」

「ボクは比べられるのがちょっと嫌。でも、してもらえないのはもっと嫌」

なんだこいつら。ほんとに可愛いな！

「うん、三人ともおいで」

この部屋のベッドは、さっきトップスリーとの打ち合わせに使った大きなテーブルの脚を折りたたんだものだ。テーブルにサイズを合わせた大きなマットをかぶせてある。

「はい」

「おお」

「ん……」

三人とも防具を外し、フルとアリスは下着姿で、そもそも下着を着けていないラヴィは全裸でベッドの上のボクにすり寄り、三人がかりでぼくの服を脱がし始めた。

三人とも戦闘後なのにいい匂いだ。タオルで体を拭いたんだろうか。

ぼくはさっきまで打ち合わせしていたから、そのままだ。

ぼくのシャツを脱がすと、我慢しきれなくなったのか、フルが情熱的なキスをしてきた。そしてそのまま自分の下着も脱ぎ、裸になる。ぽよんと巨乳がまろびでる。まだ恥ずかしがりやの陥没乳首は隠れていた。

キスをラヴィに交代すると、ぼくの胸に舌を這わせ、ちろちろと先端を舐める。

上目遣いのフルがやらしくてたまりません！

このエロ賢者！

めっちゃ気持ちいいよ！

ラヴィは爆乳を押し当てながらぼくの口の中に舌を差しいれ、歯の裏側や頬の内側をぺろぺろと舐める。

イチゴ乳首がむくむくと起きあがる。

下半身から衣服をはぎ取っているのはアリスだ。ぼくは少し腰を浮かせ、脱がしやすくする。

下着に引っかかって下に引っ張られたおちんちんが、ぺちんと飛び出てはねかえる。

すかさずアリスが口に含んだ。

洗ってもいないおちんちんをアリスはかまわずべろべろと舐る。

「アリス、汚いよ。今日一日そのままだから」

「大丈夫。勇者の味、濃厚。臭いけどおいしい」

臭いんだ。そこは否定しないのね。

たまたまを転がしながら、ハーモニカのように唇を滑らせつつ舌でカリをくすぐる。

唇、乳首、おちんちんの三点同時責め、そして体に絡みつく美少女三人の肉体。

三者三様の柔らかいふくらみとくびれが全身を刺激する。

あっ、アリス、そこは肛門！

舌入れないで！

ああ、たまりません！

「アリス、あなただけよまだ下着を着ているの。取るわよ」

「え、嫌だ。やめてフル」

「いいえ、だめです」

フルがアリスのキャミソールをめくりあげ、頭から抜き取る。

アリスの微乳ととんがり乳首が露わになる。

「嫌、ボクの平たい。見ないでフル、ラヴィ」

「でも乳首は舐めてほしそうじゃねえか。なあ勇者」

「うん、ああ、そうだな」

「勇者、裏切りモノ！」

アリスが涙目で訴える。
だーめ、ケツ穴舐められた分のお返しだよ。

「フル、ラヴィ、アリスのおちちを可愛がってやって」
「承知しましたわ、勇者様」
「了解、勇者」

フルとラヴィに左右のとんがり乳首を吸われ、のけぞるアリス。
それを見ながら、責めている二人の股間に左右の手を伸ばす。

「あっ」「うっ」

指でフルとラヴィのおまんこの溝をなぞると、もうしっとりと濡れていた。
これなら大丈夫だろうと人差し指と中指の二本を束ねて挿入した。

「あああっ」「おい、ちょっと、ああっ」

二人のお尻がふるふると蠢く。
それでも、二人はアリスの乳首をちゅぱちゅぱと舐めるのはやめない。
だって、ぼくの命令だからね。

アリスの即尺でギンギンになっているぼくのおちんちんも限界だ。
今、おちんちんに一番近いマンコは寝たまま責められているアリスのジャングル温泉。

昨日は一番最後だったから、今日は最初にいただいていいよね。

毛深いアリスのデルタゾーンに、おちんちんを突き立てた。

「あああああ！　ちんぽ、勇者のちんぽ、来た！　あああ！」

あのクールなアリスが絶叫した。

こいつ、ギャップ萌えを刺激しまくりだな！

「あ」

「ずるい！」

とフル、ラヴィが抗議の声を上げるが指入れピストンを加速して応える。

「あはあ！」「いいいいっ」

文句は言わせない。そして命令は絶対だから指マンされながらもアリスの乳首を責め続ける二人。

「あああああ！　あああああああ！　あああああああああああああああああああああ！！！！！　変に！　もう変！　変に！　変に！　なるううううう！」

アリスががくがく震えながら絶叫する。

同調してアリスの中がおちんちんをハリケーンのようにぐるぐると巻き込み汁を噴く。

こっちもたまりません！

両手はフルとラヴィの膣に挿入したままなので使えない。で、二人に命じた。

「フル、ラヴィ、アリスのクリトリスを剥いて擦って」
「あひゃ、ひゃい」
「おお、おひょおうっ」

かくかくしながら濡れ濡れのジャングルに二人が指を入れ、アリスの大事なルビーを探り当てた。

二人がかりで磨き上げる。

「きえええええええーーーーえええ！　いひいいいいいいーーーっ！！」

アリスが白目を剥いた。

鼻水とよだれをぶしゅううっと噴いた。
うわー、クール系美少女、台無し。

だが、それがいい！

ぼくもアリスのアヘ顔とおまんこのうねりに我慢しきれず、果てた。

どびゅ。
どびゅどびゅどびゅ。
ずりゃん。

「いいいいいっ！　勇者、出てる出てる出てる！　おごおおおおおおおっ！！！」

そう叫んで、アリスは失神した。

第４話　戦場は地獄だ

失神したアリスをベッドの端に寄せ、フルを引き寄せる。
ハート目になったフルが、犬のようにぼくの顔をぺろぺろ嘗め回してきた。

まだぼくは片手をラヴィのおまんこに突っ込んでいる。

「ラヴィ、フルのあそこを舐めてやって」

顔舐めからディープキスに移っていたフルの瞳が見開かれた。
蛇のように体を折り曲げたラヴィが顔をフルのお尻の下に突っ込んでいた。
結果的に顔面騎乗位のポーズとなってフルがラヴィに股間をぺろぺろと舐められている。

うん、エロい。

腰をぶるぶる震えさせているフルと舌を絡めながら、空いた片手でフルのおっぱいを揉みしだく。

ラヴィの爆乳まではいかないが、きめの細かい柔らかい巨乳。大福餅のような柔らかさだ。
ねちねち揉んでいると、陥没していた乳頭がむくむくと起き上がって顔を覗かせてきた。

キスをやめて、お出ましになったピンク色の乳首を吸い上げる。

「あっ、きゃっ」

たまらずフルが声を漏らす。薄い恥毛の下でラヴィの唇がもぐもぐとうごめいているのが見えた。

いやらしいぞ、ラヴィ。

もっとやれ。

挿入した指先からラヴィの中のうねりが伝わってくる。ラヴィもフルを責めながら興奮しているな。

こいつはM体質なのかS体質なのか？　どっちもか？

「ラヴィ、いったん離れて」

もう我慢できない。二発目行きまーす！

ぼくはフルの乳首を吸いながら、フルを少し持ち上げて挿入した。

「ひゃいいいいいっ！　勇者様のおちんぽキターーーー！」

のけぞりながら白目を剥くフル。

見事なアヘ顔だ。

対面座位でぎしぎしピストンする。フルのおまんこが粘り腰でおちんちんを締め上げる。

ラヴィがうらやましそうにベッドの端で見ている。

次お前だから、ちょっと待ってろと目くばせする。

「あっ、あっ、いいっ、勇者様、いいっ、あっ、ああっ」

ガンガン上体を揺らしながらフルがいやらしく叫ぶ。
たちまち背中を快感が駆け登ってきた。

こいつの軟体生物マンコ、ホント気持ちいいな！

「いっ、いっ、いっ、いくっ！　いくっ！　いくうっ！」
「出すぞ出すぞ出すぞっ」
「いっいっいっいっいっいっいっ」

どぴゅ。
どくどくどくっ。
ずびゅん。

あー、出た出た。フルの一番奥で出してやったぜ。

「ああ、あああ、あああああ……」

フルが崩れ落ちた。そのまま目を閉じて脱力する。

ラヴィと二人でフルをアリスの横に寝かせる。
アリスも起きないな。スースーという寝息が聞こえた。

「お待たせ」
「ほんとだよ！　お待ちかねだよ！」

真っ赤になりながら抗議するラヴィがまた可愛い。

「じゃ、ちんこ舐めて」

アリスとフルの愛液とぼくの精液まみれのおちんちんを突きだした。

「勇者、お前、恥はないのか！？」

と言いつつ目がハートになっているラヴィ。

「じゃあ舐めなくてもいいよ」
「舐めないとは言っていない！」

ぱくっ。

身体を折り曲げておちんちんを根元まで飲み込んだ。
深いいい！
ディープスロートなんていつの間に覚えたんだ。
やるやんラヴィ。

じゅばっ、じゅばっ、じゅばっ。

何もかも吸い取るお掃除フェラ。
顔がひょっとこになってるぞ、ラヴィ。
バキュームフェラをやらせながら、両のイチゴ乳首をつねつねする。

二発目出してややふにゃっていたぼくのおちんちんが、また元気になってきた。
よし、やろう。

ラヴィの尻を叩いて、四つん這いにさせた。
三角に白く焼け残った丸い尻肉をぐっと開く。

無毛のおまんこも、恥ずかしいお尻の穴も、丸見えだ。

たらりと糸を引いていた。おあずけ状態だったもんな。すでに出来上がっているな。

ぬむむむ。

「あああ、勇者が、勇者が、後ろから！」

わんわん（ドギー）スタイル。

いったん奥までぐっと押し込み、ずるるるっと抜いて、勢いをつけてピストン！

ぱんぱんぱんぱん！

ラヴィのスーパーボールのように弾む尻肉が気持ちいいリズムを奏でる。

ぎゅんぎゅんぎゅんと工作機械マンコが唸り、高圧で締め付け、ベアリングのようにグリングリンと内部が旋回する。

うん、高性能だな！

四つん這いのラヴィに背後から抱きつき、爆乳を絞る。

「おほほほほおおおっっ！」

ラヴィが赤い髪を振り回して叫ぶ。

あああ、ぼくももうたまらん！

いっちゃうよ！

どぶっ。
ずぶんずぶんずぶん。
だらあ。

ラヴィの最奥、マシンの中心に残り全部吐き出した。

ふう。すっきり。

もうしばらく出ないよ。
やりとげたよ、ぼく。

ラヴィの腕が急に脱力し、慌ててておっぱいを持ち上げて支える。
ゆっくりと頭がベッドに埋もれた。
気を失ったようだ。

アリスもフルも起きる気配はない。

仕方ないなあ。

ラヴィを二人の横に寝かせ、ぼくもその隣に寝た。
川の字より一本多いな。

美少女たちの体温と臭いが心地よかった。
ぼくもすぐに眠りに落ちた。

◇◇◇

案の定だった。

翌日軍を進めると、突如魔法結界に全軍が囚われた。

「警戒！　警戒！」
「各隊配置につけ！　来るぞ！」

出現したのは、ボスクラスの魔人が３０体。

前後左右から怒涛の如く襲ってきた。

１体でも、ぼくら勇者パーティーすら苦戦したボスクラス。通称ガ・シリーズ。
中でも、ガ・ベルゼやガ・アスモーデには、全滅一歩手前まで追い込まれた。
あれからこっちもレベルが上がっているとはいえ、同時に３０体は絶望的状況だ。

だが、さすがに精鋭。
連合軍はうろたえることもなく、戦闘を開始した。
だが、魔法も、弓も、剣も、ボスには傷一つつけることは出来なかった。
逆にするどい爪で引き裂かれ、悪魔術で燃やされ、牙でかみ砕かれていく。
歴戦のつわものたちが、紙でもちぎるかのようにぼろぼろにされていった。

唯一、こちらに勝機があったのは、ボス同士が連携しなかったことだ。

どいつも、俺が一番だと思っているから、やつらは基本的に仲が悪い。

そもそも複数のボスクラスが一か所に集まること自体異常だ。

だから、ボスたちを分断し、ぼくら勇者パーティーが個別撃破するという繰り返しで対応した。

だが、連合軍には多くの犠牲が出た。ぼくらが1体を倒している間、ほかのボスを足止めするのが彼らの役目だからだ。

足止めでいいとはいってもボス相手だ。じわじわと消耗していくばかりだった。

フルの高位魔法『顕現せよ大いなる癒しの使者』は広範囲の全体回復魔法なのだが、こっちもボスとの連戦だ。

接近戦特化のラヴィが特に危険にさらされる。実際すでに満身創痍だ。

それでも致命傷に至らないのはフルのおかげだ。

フルの防禦と回復、そして耐久力や攻撃力を底上げするバフが常時必要だった。

消耗の激しい高位魔法を使う余裕はなかった。

それでもとうとう最後のボス、ガ・ザダンを倒した際、生き残った兵は7割。

3割の損耗ですんだというべきか、3割も犠牲になったというべきか。

トップスリーが、死んだ兵を一か所に集めるように指示した。

その死体の山を、ぼくが『殲滅（エクスターミネーター）』で完全に灰にする。

ダンジョンで死体をそのままにしておくと、アンデッド化してしまうからだ。
残酷なようだが、仕方がない。
これは、ダンジョンに挑む前に決めた約束事だ。

とはいえ、マシュエル司令も、ダムス統括も、ジュギル参謀も、部下たちが灰になって消え去るまでずっと敬礼していた。

明日は何人が灰になるんだろうか。
それとも、今日のボスクラス３０体が大魔王の最後の戦力なのだろうか。

そうだといいのだが。

これまで遭遇したボスクラスよりも強いのが複数出てきたらと思うと、ぞっとした。

いずれにせよ、大魔王はボスたちよりもはるかに強い。そうでなければあのプライドの高いボスたちが付き従うはずがない。

ダンジョンを抜けた先が本当の勝負なんだから、戦う力を残しておかないと。

生きている者も大半が半死半生の重傷だったが、ぼくの『再生（リプロ）』をアリスの『マルチプルリフレクト』で広範囲に反射させて、ある程度回復させた。

この時フルにはもう『顕現せよ大いなる癒しの使者』も、蘇生魔法『神の鎖よ天より垂れ煉獄から救いたまえ』も使えるだけの魔力が残っていなかった。

フルは泣いていた。
賢者がいながら、大勢の命を救うことが出来なかった。

ぼくはフルの肩を抱いた。

張りつめていた糸が切れたように、フルは大声で号泣した。
ぼくはフルをいつまでも抱きしめていた。

ラヴィも、アリスも涙を流していた。

そのあと腰が抜けるまでむちゃくちゃセックスした。

三人と。

第5話　異世界召喚（前書き）

すみません、今回エロなしです。これからエロなし回が増えるかもしれません。

第5話　異世界召喚

少し時を戻そう。

1年前。

ぼくは新卒で会社に入りおよそ2カ月、入社研修が終わり配属を迎える直前だった。

全国のショッピングセンターや駅ビル、百貨店をはじめ、国内だけではなくアジアを中心に世界各国にも展開している名の通った生活雑貨ブランド。自社製造直販だから、小売りでもありメーカーでもある会社だ。

ここを選んだのは、このブランドのものをよく使っているからという単純な理由だった。シンプルなデザインとエコっぽいイメージが好みだった。それに、規模の大きい会社なので、採用枠が２００人と多かったから通りやすいんじゃないかな、と思ったんだ。

けれど、応募してくる人数も当然莫大だったから、最終選考で内定もらった時は本当に嬉しかったよ。

同期が２００人もいると、当然いくつかの集団に分かれる。7割は女性だ。積極的（陽キャ）な連中は男女で飲みに行ったり、カラオケしたり。女だけ、男だけの集団もある。ぼくは、集団をつくらない集団だった。会社が終われば、一人で自宅や下宿に帰る組。

仲が悪いわけじゃないよ。ＳＮＳではみんなと繋がってるし。

リアルで人と話すのが苦手な一団というだけだ。で、配属希望は大概が商品開発だ。ぼくもそうだった。

「新妻、今からカラオケ行くんだけど、付き合ってくれないかな。一人欠けちゃってさ、数が合わなくなっちゃったんだよ」

その日、定時で研修勤務が終わり、帰ろうとすると、同期の糸井川から声を掛けられた。糸井川は陽キャチームだが、売場実習が同じ店舗だったので、多少仲がいい。

「え、数合わせかよ」

このパターン、大学でもよくあった。カラオケ苦手なのに。アルコールも。

「そういうなよ。姫島さんも来るよ。親しくなるチャンスだろ」

姫島さんというのは、同期でもひときわ目立つ美人だ。もちろん陽キャチーム。

「いや、別にぼくは」

「またまたあ。それに新妻が来てくれると女子受けいいと思うんだ」

「なんで？」

「お前、知らないの？　けっこう女子がお前の噂してるよ。可愛いって」

「え？」

昔から女顔といわれてきた。高校の文化祭では王女役をやらされた。黒歴史として封印している。大学でも女子からよく可愛いねっていわれた。かっこいいといわれたことはない。男として見られてないんだろうと思っていた。

でも、社会人になってもいまだに可愛いってどうなんだ？

糸井川に頼まれおがまれ、押しに弱いぼくは結局カラオケに付き合うことになった。
ああもう、ぼくの軟弱者！

◇◇◇

気まずい。非常に気まずい。
ぼくの左右に女子が座っている。いや、男女交互に座ってるから当たり前なんだけど。
緊張する。
ぼくはほとんどしゃべってない。言葉が出ないんだ。
既に1時間半、うん、とか、へえ、とか、相槌を打ってるだけ。

女子の喜屋武（きゃん）さん、男子の金山、女子の西郷さん、ぼく、女子の伊藤さん、男子の田中。
テーブルを挟んで向かいに男子の毛利、姫島さん、糸井川、女子の知念（ちねん）さん、男子の小林、女子の原口さん。
男6、女6の計12人。全員同期だ。集合研修で何回か顔を合わせているから、全く見知らぬわけじゃないが、実習で一緒だった糸井川と伊藤さん以外とは、今日がはじめましてみたいなもんだった。

ぼく以外は何度も一緒に遊んでいるらしく、お互いに話が弾んでいる。

自分を場違いに感じながら、少し引いて同期たちを見ていると、少なくとも糸井川、金山、毛利の三人のお目当ては姫島さんだ。特に糸井川が積極的にアプローチしている。

姫島さん以外も結構可愛い。田中は伊藤さん、原口さんともっぱ

らしゃべっている。小林はまんべんなく。トークの引き出しも多い。感心するよ。

でも、糸井川、金山、毛利も姫島さん以外の女の子ともそつなく会話しているのは、やはり場馴れしているとしか言いようがなかった。滑り止め（セカンドターゲット）なのか？

ぼくには無理だな。このつきあい。

「わたし、ドリンク取ってくるわ。新妻君は何がいい？」

いきなり姫島さんに声を掛けられた。どきまぎしながらも「お、オレンジハイ、薄目で」と頼んだ。ぼくのグラスは空だった。姫島さん、よく見てるな。

「了解！」

「あ、姫島さん、おれも」

他にも空になりかけていた数人が注文した。

「それじゃ一人で持てそうにないから、一緒に行こう」

田中が席を立った。あーあ、今、姫島さんへのアプローチの大チャンスだったのに、糸井川は直前にトイレに立っていた。残念な奴だ。

このカラオケボックスはアルコールもフリーになっている。ビールはオートサーバー、チューハイやロングカクテルは自分で材料をステアして作る。男子が女子のドリンク作るとわざと濃い目にするようだ。下心見え見えだね。

その辺りもあって、姫島さんが自分でドリンクバーに行ったんだろう。

糸井川が戻ってきた。

「あれ、姫島さんは？」
「ドリンクバーに行ったよ」
「え、ひとりで？」
「いや、田中も一緒に」
「ちっ」

聞こえてるぞ、糸井川。

「ま、いいか、姫島さんお手製のチューハイってのもレアかも」
「お前頼んでないだろ、糸井川！」

毛利にからかわれている糸井川と入れ替わりで、ボクはトイレに立った。

が、トイレに行くつもりで、ドリンクバーの方に来てしまった。
あれ？　間違えた。トイレは反対側だ。
引き返そうとしたぼくの目の隅に、抱き合っている男女が映った。
ドリンクバーの柱の陰で、姫島さんと田中が密着してキスをしていた。田中の手は姫島さんの胸の上にあった。

うわあ。

見てはいけないモノを見た！
その場を逃げるように去り、トイレで用を足した。

ふう。

田中が姫島さんとほとんど話していなかったのは、既に付き合っていることを悟られないためか。

姫島さんは彼氏がいるのに、隠してちやほやされたいのか。

田中は彼女がちやほやされるのを横目で見て、フフ実は俺の女だぜと優越感に浸っているのか。

怖い！　怖いよ！　男と女のラブゲーム！

ぼくなんかがいていい場所じゃない！

と思いながらも、戻らないわけにはいかず、部屋に向かい始めた時。

ぼくは光に包まれた。

◇◇◇

異世界。

この世界の人が『ユーテラスタ』と呼ぶ大地。まだ一部しか調査が済んでいないらしいが、はるか東に海岸線が見つかっている。おそらくユーテラスタは地球に似たこの星の大陸のひとつなのだろう。

え？　地球じゃないのはすぐわかったよ。月に輪があったからね。

ユーテラスタ大陸には三つの国家がある。

テラスアリア神を唯一神と崇めるアリア教の総本山、アリアガル

ド大聖会を擁する神聖国家アリアガルド法国。
強力な魔法師団を背景に未開の辺境を開拓し、得られた希少物資を交易することで発展した自治領（ポリス）を多数抱える貴族王政国家タランジ王国。
テラスアリア神話に登場する神の戦士『ガーランド』より名を戴いたという万世一系の大帝が治める武装国家ガーランド帝国。

この三国はそれなりに緊張関係にあるが、戦争状態ではなかった。
経済的見地でいえば、タランジ王国が進めているようにこの大陸には人の住まない未開の地の方がはるかに広い。他国と人間同士で争うよりも、開墾し国土を広げていく方がよっぽど国家運営は効率的だった。

一方その事実は、ここが、人類が万物の霊長として世界を支配している星ではないということを意味していた。

人類を超える生物。

『魔（エビル）』と呼ばれる存在が、この星にはいた。

人類よりもはるかに強く、人類よりも数多く繁殖し世界を跋扈していた。人類よりも狡猾なものすらいる。
殺戮と破壊、恐怖と簒奪の権化。人を意味なく殺し、あるいは喰い、時に犯す。
極悪非道。
絶対悪。

この世界で人類が開発している『魔法』や『武具』、『奥義』は人間同士の戦争のためではなく、対魔のためのものだった。

それでも、人間が国家を作り、大陸に居住区を拡大出来ていたのは、魔が組織的な活動を行わない、バラバラの存在だったからだ。
もちろん、群れで行動する魔がいないわけではない。だがそれは、単体では弱い魔だからだ。社会というより、単なる集まりだった。その方が効率的に得物を捕食出来るからに過ぎない。
だから、獲物の奪い合いなどは日常茶飯事だった。群れの中で共食いすることすらあった。

逆に、強くなればなるほど魔は単独で行動しがちになる。
奴らの発想は自分中心であり、他と協調するなどという思考は原則的に無い。

しかし、この十年、魔の動きに変化があった。
社会性とは正反対の存在だったはずの魔が、連携をするようになったのだ。

はじめは、役割分担として認識された。

会敵するや否や逃走した魔獣の群れをガーランド軍が追撃したら、後方からより強い魔族の群れに襲われ、挟み撃ちにあった。
最初の魔獣は囮として使われたのだった。

そんな事件が何度も起きた。

魔の中でも、より強い個体が確認されていた。
その当時、高級魔（ハイエビル）と呼ばれ、現在は中ボス級（クラス）と呼ばれる『アプ』や『ハ』シリーズに名付けられたカテゴリーだ。

これまでも、中ボスは低級な魔を率いることがあった。
それは、力と恐怖で支配しているという印象だった。

低級魔は殺されたくないので一応従うが、人間側から見ても自分のボスを『こいつ、早く死なねーかな』とうっとうしく感じているのがありありだった。

中ボスを倒すと、喜び勇んで逃げ去っていった。ボスの敵を取るなんて発想はみじんも感じられなかった。

だが、最近の動きは明らかに異なっていた。

魔が役割を持ち、その役割を遂行することに喜びを感じている。そんな印象に変化していた。

上位の魔に忠誠心を持ち、魔組織、魔社会というべき機構が生まれていた。

やがて、人類は初めてそれに遭遇した。

高級魔（ハイエビル）を超える超位魔（スーパーエビル）、現在ボス級（クラス）と呼ばれる、まさしく桁外れに強力な魔。

彼らはいつしか怖れを込めて『魔人』と呼ばれるようになった。

当初は『魔人』が魔を統率していると考えられた。

それほど、知能が高く圧倒的な悪魔力を有していた。

魔人はカテゴリー『ザ』または『ガ』シリーズと名付けられた。

魔人に対して人類はほとんど歯が立たなかった。

わずかに、アリアガルド法国のクラス『賢者』、タランジ王国のクラス『魔法使い』、ガーランド帝国のクラス『剣闘士』に属する人類最高戦力メンバーだけが『ザ』『ガ』シリーズを退けることが出来た。

魔人を倒し切ることはできずに逃げられ、逆に人間側には多くの犠牲者が出るという結果がほとんどであったが。

さらにまずいことに、この時までは最強最悪の敵と考えていた『ザ』『ガ』シリーズすらも、連携して行動していることが分かってきた。

水源への毒攻撃と同時に薬草採取所が破壊されるなど、複数のボスクラスが人類にとってよりダメージが大きくなるように出現することがしばしば起きた。

それは、ボスクラスをも配下として手駒に使うさらに強力な魔人、『魔王（ダークロード）』とでも呼ぶべきものの存在を示唆していた。

やがて、何匹か捕えた下級魔への尋問により『大魔王（エクスダーキング）』の存在が確認された。

大魔王が支配する組織化された魔人、魔族、魔獣の大群。

すなわち魔王軍。

いや、『大魔王軍』。

それが本格的に各国に攻め込んで来たら人類は絶滅必至である。

三国会議の結果、アリアガルド法国に禁呪として長年封印されていた神聖魔法『境界の彼方より来たれこの世の理（ことわり）を超えし勇なる者』、すなわち異世界召喚術を使用することを決断した。

法国の大賢者六人の命を犠牲にし、この世界に呼ばれた『勇者』。

それがぼくだった。

◇◇◇

大魔王を討伐せよ、だの、人類を救え、だの、なんだかんだと説得された。

あきらかに地球の言葉ではない異世界語なのに会話が出来るのはユニークスキル『鑑定』のおかげだった。……らしい。

それよりも、ぼくを窮地に追い込んだのは、パーティーメンバーとして紹介された三人がそれぞれタイプの違う美少女だったことだった。

女の子、怖い！

あー、もう、トラウマだよ。

チェンジを要求したが、『男性勇者を召喚したら他のパーティーメンバーは全員女性』『女性勇者を召喚したら他のパーティーメンバーは全員男性』と記された古文書があり、その約定を破ることは出来ないと却下された。

百歩譲って全員異性なのは約定としても、全員美少女ってのは？

それなんてエロゲ？

第6話　出現、三魔王

この世界には変な礼儀がある。

自分よりも位の高い人物の名を呼んではいけない、そうだ。

なんでも、昔、真名（まな）を知られることは大変危険だったそうで。何が危険で何がどうなるのかは今となっては誰も知らないんだけど。

そのため、昔はお互いに本名を呼んではいけなかったそうだ。あだ名とか位で呼び合ったらしい。

三丁目の八つぁんとか棟梁の旦那、みたいな感じ？

今でもその名残で、自分よりも立場が上の人物に対しては、名前ではなく肩書や位で呼ぶのがマナーになっている。

ぼくは『勇者』。この世界ではテラスアリア唯一神の次に位置する存在だ。

だから、だれからも『マサタカ』という名前では呼ばれない。勇者とか勇者様と呼ばれる。

フルやラヴィやアリスもぼくを名前では呼ばない。

だから、パーティーを組んだ当初はよそよそしく感じられ、ぼくと三人の間はぎくしゃくしていたよ。

今となっては、そんな時期も懐かしい思い出だけど。

今日もガ・シリーズとの連戦だった。

最後にガ・ヴァッシュ5体が同時に出現したときはさすがに焦りを感じた。以前アリスが瀕死の重傷を負わされたボスクラスの中で

も厄介な敵だ。魔法耐性がカンストしていて、高位魔法ですらシールドを貫通出来なかった。ラヴィとぼくの物理攻撃のラッシュで何とか倒せたのだった。

だけど、今ではスキルと魔法の連携技がある。ぼくの殲滅（エクスタミネーター）にフルが光の加護を付与する。

『立ち昇る芽吹きの宴よ太陽のもとに集い賜え』。

光属性は、魔に対して効果絶大だ。殲滅（エクスタミネーター）はガ・ヴァッシュの耐魔法シールドをなんなく貫き、5体を一度に殲滅した。

アリスも光魔法（シャイニング）が使える。アリスは武器への属性付与（エンチャント）が得意なので、ラヴィとの連携が多い。

これで5日目が過ぎた。連合軍の損耗率は五割。そろそろ戦線維持が難しくなってきた。

が、退くわけにはいかない。大魔王は目の前だ。必ず倒し、凱旋する。

そしてその向こうにはラブラブハーレム生活が！　うへへへ。

◇◇◇

「ああっ、勇者様！　そこ！　そこ！　ああっ！　いいっ！」

フルの薄い恥毛の奥の二枚の花びらを甘く噛み、裏、表を丁寧に舐め、少し充血して厚ぼったくなった縁を吸う。さらに花びらの根元にある乳首同様恥ずかしがり屋で普段は莢に隠れている小さな豆

を、舌で無理やり剥き出しにしてベロベロと舐る。両手はフルの両の巨乳を揉み、搾り上げ、たまらずこんにちはした乳首を親指でコリコリと押しつぶすように苛める。

ラヴィはぼくの背中に半ば乗りながら爆乳を押し付け、腕を回してぼくの乳首をこねている。

アリスぼくの上げた尻に顔を突っ込み、たまたまを吸いおちんちんの裏側をツーと舐めている。

なんだか、3人一緒でヤルのが当たり前みたいになってきた。

「ああ、ああっ！　あぁぁぁぁぁぁあ！」

フルがエビ反りになってぶるぶるっと震えた。同時にぼくの口の周りに粘度の高い透明な液体が溢れる。

イったのだ。

一人でイくなんて、こらえ性のない奴だな。お仕置きが必要だね。

指をフルの肛門に挿し入れ、中でぐりぐりと動かす。

「あっ、お尻の穴っ！　ダメ！　ダメですううぅぅ！」

そのままフルの上ににじり寄ろうとすると、ラヴィとアリスも密着したまま前に進む。うん、出来る部下だ。

おちんちんをフルの膣に入れようとしたら、アリスが介添えしてくれた。

うやうやしくぼくのちんこを捧げ持ってくれる。アリス、うい奴じゃ。

ぐいっと腰を進める。角度調整下3度。

ずぶずぶずぶうっ。

「あ、勇者様のが、勇者様のが、今、ダメ、なのにっ、入ってくる！　イ、イっ、あっ、あああっ！　ダメっ！　ああっ、あああああっ、あああああああああ！！！！！」

フルの軟体おまんこが、ひくひくひくっと短い周期でぐねる。
なるほど、イった直後に挿入するとこうなるのか。
ケツ穴を指でごりごり。おっ、肉襞越しに自分の指でちんこをなぞれる。これはまた新感覚。

って感心してる場合じゃない。何十という小さな舌が回転しながらちんこを舐めているような微妙な刺激がたまりません！

しかし負けてたまるか。ぼくは勇者だ！
ぐっと我慢しながらゆっくりと腰をグラインドさせる。
フルの気持ちいいところ、全部ちんこで擦ってあげるからね！
指は抜いとこ。

「あああっ！　勇者様！　すごいっ！　すごいですっ！　おかしくなるっ！　あああ！」

フルが真っ赤になりながら顔を振っている。
あー、可愛いな、こいつ！

たまらず両の乳首を乱暴に舐める。べろべろべろ。べろべろべろ。
吸い付くようなきめ細かい肌触りの巨乳を鷲掴みにする。
腰は休まずグラインド。うっ、気持ちいいぞ！　フル！

いつの間にか、ラヴィもアリスもぼくから離れベッドの脇にいた。
もじもじしながら。
うん、ちょっとそこで見てて。まずはフルに出しちゃうからね。

いくぞ！　フル！

ずこずこばこばこ。
ずこずこばこばこ。
ずずこずずばこずずずばこ。
すっこんばっこんずこばこずっこん。

ぐらんぐらん。
ぐらんぐらんぐらんぐらん。

あれ？　なんかえらく揺れてない？　フル、またイっちゃったのか？

「勇者、変。これ、違う」
「魔法障壁を越えて外の振動が伝わってきてるんだ！　勇者！」
「アリス、静寂魔法解除（サイレンスリリース）！」

そのとたん、ガンガン響いてくる轟音。これは！

「魔人の攻撃だ！　フル、ラヴィ、アリス、装備を整えて！　迎撃だ！」

フル、ごめん、抜くよ。続きは後で！

「あっ」
「承知！」

「勇者。ひとまずおあずけ、わかった」
「ふ、ふあぃ……」

フルがまだボーっとしているが、出撃だ！

今まではエリア討伐後８時間は律義に襲ってこなかったが、ボスクラスはイレギュラーが多い。

こんなこともあるかもしれないと毎日ぼくらが最前線に陣取り砦と壁を作っていたのだが、とうとう現実になった。

「カウントゼロでフルは『万象の伝わりを隔て森羅の理（ことわり）を離せしむ』を解除。同時に散開しつつ敵に総力の一撃。そしていったん引く。ヒットアンドアウェイだ。いいね」
「「「はい！」」」
「よし、準備はいいね！　いくよ！　３、２、１、０！」

フルが魔法障壁を解く。同時に砦の天井が崩れ落ちた。支えになっていた障壁が消えたからだ。砦はすでに完全に破壊されていたということだ。

魔法で耐久力を強化していたのに。

敵は相当に強い。

落ちてくる瓦礫と粉塵を隠れ蓑に、ぼくらは分散して外に飛び出した。

崩れかけた土魔法（クレイ）の壁を挟んで、連合軍と何かが戦っているのが見えた。あれは……。

粉塵で視界が悪いが、敵は三体いるようだ。おそらく魔人だろう。

「導かれし守護の法よ彼の者に顕（あらわ）せ！」

「奥義・割砕剣一刀鎧斬！」
「ホーミング・サンダーアロー！」

最も近い敵に、打ち合わせどおりの連携攻撃。
そのとたん、真っ赤なアイコンが視界にポップアップした。鑑定スキルの警告（アラート）だ。

「全員、直ちに離脱！　ぼくの後ろへ！」

指示がわずかに遅かった。

敵との距離を詰めていたラヴィが最初に光芒に包まれた。そしてアリスも、フルも。
壁を盾にしていた連合軍の兵士も。

「爆縮（インプロージョン）！！！」

ぼくはカウンターを放った。が、敵の悪魔力（イヴィルマジック）の広がりの方が早かった。
ダンジョン内で猛烈なエネルギーが炸裂し、ぼくは天井近くまで吹き飛ばされた。

視界ゼロ。

「フル！　ラヴィ！　アリス！」

爆煙の中でみんなを呼んだ。ぼく自身も多少のダメージを受けたが、カウンターで威力を削いだのと再生（リプロ）スキルのおかげで着地した時にはもう無傷だった。

三人から返事がない。

爆発点に向かう。付近はダンジョンの床がガラス化していた。猛烈な高温だ。

地面に連合軍の鎧兜がいくつも半ば融けてめり込んでいる。持ち主は蒸発したのだろう。

また警告アイコンが右に出た。

鋭利な剣が右側面から襲ってきた。

勇者の剣（ブレイブソード）で受ける。

がっちーんんんん！！！

「ギュル、ギュルギュギュギュギュ、ギュギュギュギュエ！」

なんだ、この重い剣は！？

しかも二刀流！

が、力ではぼくも負けてはいない。クロスして押してくる二刀を剣で押し返す。

「ギュルギュル、ギュギュギュエ！」

敵とぼくは一旦距離を開けて正対した。

こいつは。

人体標本だった。

あー、いや、あの理科室にあるのとそっくりだったんだ。

左半身は皮を剥いで筋肉剥き出し。右半身は骨格標本って、あれ。

左半身の胸には黄色い脂肪の塊と、尖った赤い乳首が目立っていた。してみるとこれは女性の標本。

下腕はそのまま鋭く伸びて二本の刀と化していた。手はない。カマキリのようだ。

左側にしかない眼球がぎょろりと回ってぼくをにらむ。

こんな魔人は初めて見る。

警告モードで文字が赤い鑑定画面にも、個体名は???としか表示されていない。

勇者データベースにない魔人。ボスクラスを超えるボスということか。

人体標本が再度迫る。

両手剣並みに重い二刀流。斬り結ぶが、一刀では分が悪い。と、そこへ。

「奥義、真・地獄極楽剣暗剣殺撃滅刃！」

ラヴィが左から跳び込んできた。阿吽の呼吸でぼくも勇者の剣でカウンターを当てる。

人体標本に交差する、ぼくらの二刀。

「ギュルギュル、ギュギュギュエ！」

標本の両腕を斬り飛ばした。よし！

「ラヴィ、無事か！？」

「ああ、フルがとっさに魔法障壁を貼ってくれた。兵たちには届かなかったが……」

ラヴィの両足のアーマーが焦げていた。確かに危なかったな。

人体標本にとどめを差そうと踏み出した時、別の赤い警告アイコンがポップアップした。

突如黒い霧が視界を覆い、吐き気を催す腐敗臭がぼくらを襲った。

毒攻撃か！

「破魔の輝き持て清らかなる乙女の吐息！」

霧が一瞬で晴れ、背後からフルが清浄魔法で臭気を無害化する。

「フル！」

「勇者様、すみません、遅くなりました！」

よかった、フルも無事だ。

標本は前方にまだいた。ラヴィが追う。

奥から近づくもう一体。

あれはなんだ？

どろどろのスライム？

いや、腐った内臓だ。脳や心臓や肺、胃に小腸、大腸。それに子宮？

半ば崩れ液化になった赤や青の臓器が合体して蠢いていた。

個体名はやはり不明だ。

「ボゥ、ビュボビュ！　ボグエッ、ボボボビュビュボ！　ビュ！」

腐った内臓が気管を持ち上げ、そこから霧を放った。
猛烈な腐敗臭を放つ黒い霧が再び周囲に充満してきた。
フルの清浄魔法が押されている！

「ライトニング・ボルテックス！」

魔法の嵐で毒霧を吹き飛ばしたのはアリスだった。

アリスも無事だった！
しかも雷魔法付与。電気分解でオゾンを発生させ、より強力に脱臭、無害化する。
いいぞ！

「アリス！」
「フルのおかげで損傷軽微。もう動ける」

これで４人揃った。

好機とみて、ラヴィが人体標本に、ぼくは腐った内臓に物理攻撃を仕掛けた。
このタイミングなら！

が、左に新たな警告アイコン。

黒い炎をまとった手裏剣が何本も飛んできた。慌てて剣でさばく。
だが弾けない。黒いしみのように剣にへばりついた。
手裏剣自体が闇魔法で出来ていた。毒が広がるように刀身を黒く染めていく。

再生（リプロ）が発動しない？　阻害されているのか！？

ぼくは剣を捨てた。こだわっていると後手に回る。どこからだ？

視界の隅でラヴィも剣を捨てたのが分かった。いい判断だ。

そして闇から現れた三匹目。それは全身毛むくじゃらの半獣半人。狼男のような怪物だった。

伝承の狼男と違うのは、体中から何本も極彩色の細い触手をうねうねと伸ばしていることだった。

ぐおんと吠えると、触手から爆発性の悪魔術の塊を発射した。球状に広がる。

「爆裂（エクスプロージョン）！」

さっき見たから、対応出来た。闘気で悪魔術を吹き飛ばす。

三体目もステータスはマスクされていた。

人体標本と一緒。

こいつら、ボスクラスを超えるボスだ。

つまり、魔王。

三魔王。

おそらくは、大魔王の直衛だ！

第7話　大魔王降臨

フルがアイテムストレージから新たに剣を取り出しラヴィに渡す。
フルのストレージにはこれまでのクエストで集めた聖なる遺物（アーティファクト）が大量に収納されている。
中には元の世界の近代兵器にも似たものもある。
だが、単純な火力では魔は倒せない。多分神と同じく高次元の存在なのだろう。
魔法や勇者の力もエネルギー保存則や作用反作用の法則の埒外だしね。高次元物理学的ななにかなんだろう。うん。文系のぼくにはよくわからない。
ぼくは勇者の剣（ブレイブソード）を再度創造した。
「七人の導師が生みし七つの壁を持て、いざ屹立せよ絶対の防禦。導かれし守護の法よ彼の者に顕（あらわ）せ！」
フルの防御力向上魔法の輝きがぼくらを包む。温かい。
身体の芯から活力が湧いてくる。
それと同時だった。
腐った内臓が黒い波動を周囲に放った。
人体標本と狼男が紫がかった禍々しいオーラに包まれた。
人体標本の両手の刀が一瞬で再生、そのままこちらにダッシュで向かってくる。
速い！

「闇の強化魔法！？」

フルが目を見開く。

それも驚きだが、ぼくは魔が、自分以外の魔に強化魔法を掛けたことの方に驚いた。

こいつら、仲間意識を持っている！？

ラヴィが盾となり前に出て剣で受け止める。ガギン、と重い音がする。

魔法強化した者同士の鍔迫り合いだ。ラヴィの筋肉が膨れる。

が、人体模型は囮で、本命は背後に隠れていた狼男だった。人体標本越しに迫り、伸ばした触手から手裏剣を大量に射出した。

実体のない、黒く回転し飛んでくる浸食性の悪魔力の塊の大群。

しかし、この二段階攻撃はぼくらもすでに読んでいた。

「シャイニング・ボルテックス！」

「殲滅（エクスタミネホタミング）、追尾」

アリスとぼくの連携魔法（コ・マジック）（正確にはぼくの闘気は魔法ではないが、便宜上）を発動した。

光の渦が黒い手裏剣の動きをブロックし、闘気の弾丸で打ち砕く。

さらに残った弾が狼男、人体標本に降り注ぐ。

ラヴィは連携魔法発動と同時に後方に退いていた。

全弾着弾！

命中！

が、黒い障壁に阻まれ闘気は届いていなかった。
腐った内臓の防禦魔法か。
先にあいつを倒さないと。

「がああっ！」

ぼくの思考を読んだように狼男が大きなシャウトを放ち横から前に出てきた。
『魔』じゃあるまいし、人間にヘイトが効くか！

と、ラヴィが狼男を追撃する。
おいおい、つられてるのか！　ラヴィ！

「アリス、ラヴィのバックアップに。フル、奥のを狙う。バフ頼む！」

「承知」

「天にあらず地にあらず人にあらず、しかしてあらざるもの今この現世（うつしよ）にあるべし。破界は限りにあらず、輝く法にこそその望みを与えよ」

フルの高位強化魔法で生命（VIT）、防御（DEF）、抵抗（REG）、素早さ（AGI）、運（LUK）の各値が上昇、ぼくは弾丸よろしく飛び出した。

前方に人体標本の二刀が迫る。

「爆裂（エクスプロージョン）！」

自分を中心に闘気を爆発させた。覆いかぶさるように接近してい

た人体標本が宙に吹っ飛ぶ。が、今回は刃が折れない。闇の強化魔法のせいか。

しかし狙いは人体標本じゃない。速度を落とさずそのまま奥の腐った内臓へ。

「ボゥ、ビュボビュ！　ボゥ、ビュボビュ！　ボゥ、ビュボビュ！」

内臓が黒い魔法障壁を貼る。三重障壁！

「掃射（スウィープ）！」

闘気を細く練り照射。障壁に小さな穴をあける。

「突貫！　勇者の剣（ブレイブソード）！」

その穴に向かって剣を突き出し突進する。剣には『殲滅（エクスタミネーター）エンチャントさせ』をまとわせている。

いけえええええっ！

三重障壁を突き破り、腐った内臓を貫いた。

「爆縮（インプロージョン）！」

貫いた勇者の剣ごと闘気を圧縮爆発させた。まばゆい光と共に腐った内臓が猛烈な内向きの圧力の中で圧潰し、小さな黒い点となりやがて消えた。

この技使うたびにいつも思うけど、マイクロブラックホール化、だよね、これ。

「ギュギュギュギュ、ギュギュギュギュエ！」

半ば焼け焦げた人体標本が叫びながら迫ってきた。
激情に我を忘れたかのように。
腐った内臓を倒されて怒っているのか？
やはり仲間という意識があるのか？

魔人なのに？　いや、ボスクラスを超える魔王クラスなのに？

ぼくは勇者の剣（ブレイブソード）を三度創造した。すでに人体標本に闇の加護はない。術者は死んだ。

迫る人体標本と一瞬斬り結び、位置を入れ替えた。

標本の両腕と首が斜めに滑り落ちた。

「爆縮（インプロージョン）！」

倒れた人体標本を腐った内臓同様にマイクロブラックホール化して消した。高位の魔は断片でも残すと再生する能力がある。完全に消してしまっても、このダンジョンのような魔の気配が濃厚な場所だといずれ再出現（リポップ）するのだが……。

リポップまでのクールタイムは低級魔ほど早く、高位魔は遅い。
中ボスクラスで１０日ほどだ。
だから、ぼくら連合軍は大魔王討伐までの攻略期日を7日間と設定したのだ。

ラヴィとアリスは狼男と戦っていた。腐った内臓の闇の加護が無

く、接近戦と中距離魔法のＤＰＳ職二人のコンビネーションは強い。
魔王クラス相手に善戦していた。
が、さすがに決定的なダメージは与えられていない。
けれどよく抑えていてくれた。とどめはぼくが刺す！
「だあああああ！」
勇者の剣（ブレイブソード）を構え二人の背後から突進する。
タイミングを合わせてラヴィとアリスがさっと散開する。息の合ったパーティーならではの連携だ。
すかさず上段から一気にＶの字に斬り下げ斬り上げる。
狼男の両腕と胴を分断した。
「がああああああっ！」
胴を両断されながらも狼男が雄たけびを上げる。
だが、これで終わりだ。
「爆縮（インプロージョン）！」
マイクロブラックホールで狼男も消滅させた。
「やった！」
「さすが勇者。抑えるのが精一杯。こいつ強かった」
「いや、うまく戦っていたよ。ありがとう、アリス、ラヴィ」
「勇者様ー」
「フルもお疲れ。助かったよ」
そこへ、トップスリーが兵を率いて現れた。

「勇者、三魔王を倒したようだな」
「マシュエル司令。三魔王って？」
「法術士団が鑑定した。大魔王直属の三人の魔族、三魔王だ」
「ダムス統括。ぼくじゃ敵の情報がマスクされて鑑定できなかったよ。さすがはアリアガルドの法術士さんたちだね！」
「うむ。勇者とて、全知ではないからな。そのようなこともあろう」

ちなみに、勇者の固有スキル『鑑定』と法術士の『鑑定』魔法は同じ名前だが性能が異なる。ぼくのはゲーム画面のように目の前に半透明のスクリーンが浮き出て各種のステータスが文字や数字で表示されるが、法術士のは神のお告げのようなものだそうだ。

「しかし、三魔王による被害が甚大だ。残存戦力の2割を失った」
「ジュギル参謀、ごめん。ぼくらがもう少し早く参戦していれば」
「いや、我らも油断した。魔王はこれまでの魔族とはふるまいが違うともっと慎重になるべきだった。というより勇者がいるとどこか安心していたのかもしれない。こちらこそ、申し訳ない」
「そうだ、勇者よ。何もかも己れで背負うことはない。我らは勇者とともにある」
「マシュエル司令……」

しかし、これで連合軍の残存戦力は残り4割を切った。戦争では7割の損耗で全滅というそうだから、もはや全滅一歩手前だ。
敵も後は大魔王ただひとりのはずだ。
お互い、いよいよ最後の決戦だな。

突然、ダンジョンが大きく揺れた。
天井からばらばらと岩が落ちてくる。

フルが魔法障壁を大きく展開した。
残存兵を障壁内に呼び込む。

やがて震動が収まると、眼前に巨大な扉が現れていた。
真ん中が割れ、ゆっくりと観音開きに開く。

「これは」
「ボス部屋の入り口……。だよね、どう見ても」
「大魔王が誘っているの……」

あからさまに罠だろうが、行かないという選択肢はぼくらにはない。

「すまぬが連合軍はこの扉前で待機する。……この先は足手まといになるだけだろう」
「残念だが三魔王相手ですらこの状態だ。大魔王討伐は勇者パーティーだけが頼りだ」
「大魔王の配下が再度湧く恐れもある。われらはここで勇者たちの還るところを確保する」
「司令、統括、参謀。わかってる。ここからはぼくらだけの仕事だ。行ってくるよ」
「勇者よ、吉報を待つ」
「それにここも危険なのには変わりがないからね。お互い、生きて戻ろう！」

そしてぼくら4人が扉をくぐると、背後で扉がまたゆっくりと閉まった。
大魔王を倒すまで退路はない。

ぼくはフル、ラヴィ、アリスを見まわした。

みんな、決意に満ちた表情だ。よし。
負ける気がしない！

「行くぞみんな、最後の戦いだ！」
「はい！」
「おお！」
「ん！」

ダンジョン内のダンジョンというべきか、扉の内側は外よりも暗く狭い洞窟が続いた。
本当に大魔王だけしかいないのか。
ぼくらは油断せず進んだが、敵は出てこなかった。

やがて、広い半球形の部屋に出た。
ドーム球場のような大きさだ。

どう見ても決戦のバトルアリーナだな、これは。
ぼくは勇者の剣（ブレイブソード）を現出した。他のメンバーも得物を構えながら、アリーナの中心へと進む。

「よく来た！　勇者！」

突然声が響いた。
キーのかなり高い、幼い女の子の声？
はっきり言えばアニメボイス。
ぼくらを油断させる罠か？

いつの間にか、アリーナに人影があった。

フリルやレースがあしらわれた装飾過多な黒いワンピース。

手にはステッキ。
背中にはコウモリのような黒く小さな羽。
小さな黒いシルクハットをかぶり、黒髪を高い位置でツインテールにしている。
そして斜めアイパッチを右目に着けている背の低い貧乳女子。いや、貧乳美少女。
八重歯がちらりと見えるところなんか、悪魔的に可愛かった。

誰がどう見ても、中二病をこじらせたゴスロリ少女。いや、１０歳くらいにしか見えないから、小二病か？

しかし、ただの小学生がこんなところにいるわけがない。
見た目のかわいらしさにだまされてはダメだ。

「勇者マサタカだ。君は大魔王だな？」
「そのとおり、我が名は大魔王アャジャーガ・ジャギャアージャ。長いからジャーガと呼んでくれてよいぞ」
「魔人は位で呼ぶ風習はないんだな」
「なんだそれは。……ああ、そういえば、人間はそうだったな。名前呼びが慣れないなら大魔王でもよいぞ」
「いや、ジャーガにする。そういえば、普通に会話してるけどジャーガは人語が操れるんだな」
「あたりまえだ。わしをそこらの魔族と一緒にするな。魔人語も古代精霊語も堪能じゃぞ。それに、マサタカの国の言葉だってな」
「なに？」
「……忘れじの行く末まではかたければ今日を限りの命ともがな」
「ええと、それは新古今和歌集！」
「さすがは本好きマサタカじゃ。貴様の素性はわかっておるぞ。貴様の能力もな。あははは っ」
「勇者様、奴は危険です！　言葉巧みに攪乱しているのかもしれま

せん」
「わかってる、でもまだ手を出すな、フル！　ラヴィもアリスもだ！」
「ほう、勘は割とよい方だな。今その娘が動いたら即殺すつもりであったぞ。そんな貴様に提案がある」
「提案？」
「わしと組め。世界を滅ぼそう。このくそったれの世界をな！」
「ぼくは君を倒して世界を脅威から救うのが使命だ。君が世界を憎むのは何か理由があるんだろうが、世界を滅ぼさせるわけにはいかない！」
「理由か。貴様もすぐにわかる。まあいい、三魔王を倒してアドレナリンが上っているようだな。少し相手をしてやる。１０秒待つ。準備しろ。……１」
「フル、ストレージから魔法薬をありったけ出せ。そして高位強化魔法を全員に。出し惜しみするな。ラヴィ、アリスの剣に光をエンチャント。そしてアリスとフルは魔法薬を飲めるだけ飲んでドーピング！」

ぼくは体内の７つのチャクラを回した。勇者ハイパーモード。
これで倒しきれなければ……。

「……１０。我が右目の輝きを恐れよ！」

ジャーガがアイパッチを外すと、金色に輝く眼があった。そしてその眼が青白い炎をバイザーのようにまとう。
まったく厨二っぽいが、こいつは本物だ！

「いくぞ！」

何が起こったのかわからなかった。

ぼくはアリーナの床に叩き付けられていた。
人型に床がえぐれ、ひび割れていた。バフ上げしたハイパーモードだからダメージはさほどではないが、何をされたのか分からないのは初めてで対応が遅れた。

「いつまで寝ておるか！」

ジャーガが空中から猛烈な速度で降ってきた。
あ、パンツ見えた。
青い縞パン。

飛び蹴りされる寸前、横に転がり避けた。
轟音と共に床がさらに崩れ土煙が上がる。すごい威力だ。
跳ね起きて剣を構える。フルたちは？

素早く周囲を見ると、三人は別々にアリーナの隅で倒れていた。
よかった、気を失っているだけのようだ。ステータスが『気絶』になってる。

がれきの山に小さな手が伸びた。

「めり込みすぎた。この床ヤワイのう。スーパーダイヤモンドにしたらよかった」

ぶつぶつ言いながら、床の大穴からジャーガが出てきた。
ゴスロリ服には埃ひとつついていない。

こいつ、マジでヤバいな。

第8話　決着

「殲滅掃射（エクスタミネイタ）！」

接近戦は危険だ。ぼくは距離を取ってビームを放った。

無防備に見えたジャーガはビーム到達直前に姿が掻き消え、次の瞬間にはぼくの眼前にステッキを振りかぶった状態で出現した。

「くかかかっ！」

顔に迫るステッキ。

これ、殴打武器（ハンマー）なのかよ！

後方に退きつつ片手で受け流し、そのままカウンターパンチ。が、またジャーガが消えた。

背後から背中を蹴られた。

瞬間移動！

「ぐっ！」

「遅いぞマサタカ！」

前転しつつ着地、床を蹴って反転。

「殲滅追尾（エクスタミネイタ）！」

いったん四方に拡散したビームが再びジャーガに向かって偏向する。

一点に収束するが、その直前にジャーガが消えまたもやぼくの眼

前に出現する。
笑いながらステッキを両手で握って大きく振り上げている。
しかし、いつまでもやられっぱなしだと思うな！　瞬間移動だとわかれば対策出来るさ！

収束したビームは再度拡散反転し、途中で偏向してぼくの目の前のジャーガに焦点を結んでいた。
ホーミングというよりブーメランビームだね。

「きゃあんっ！」

再度一点収束、直撃！

どうだ！
アニメ声の悲鳴にはちょっとかわいそうな気になったが……。

だが、ジャーガは立っていた。
闘気の直撃でも倒せないのか……。

ゴスロリワンピースが裂けて、ジャーガの胸が露わになった。
ぺったんこ。
アリスと比べたらアリスに失礼なくらいの幼児体型だった。

「ううぬ、油断した。瞬間移動も絶対ではないのう」
「それはこっちのセリフだ。直撃で倒せないとはね。ほんとに、君は大魔王なんだな……」
「ふん、おぬしもたしかに勇者じゃな。まあ、まだまだ楽しませてもらわなくてはのう。次はこれでどうじゃ？　マサタカ」

ジャーガが分身した。ふたり、４人、８人、１６人、３２人、…

…２５６人！

「そんなめくらましに！」

「「「めくらましではないぞっ！」」」

２５６人すべてのジャーガが叫んでハモった。

そのとたん、数人のジャーガが消え、ぼくの前に現れた。

１体１体が重いステッキハンマーを叩き込んでくる。そしてまた消える。交代で新たなジャーガが瞬間移動しステッキ。

ステッキ、ステッキ、ステッキ。

２５６人のジャーガの連続瞬間移動攻撃をかわすのは無理だ。ガードしつつ位置を変え逃げ道を探るが、瞬間移動してくる敵にはあまり意味がない。

頭や胸の急所をカバーするのが精一杯。腕や足には砕かれたような痛みが蓄積する。

「どうしたどうした！　マサタカ！　防戦一方じゃ削られて死ぬだけぞ！　おりゃおりゃおりゃーーー！」

分裂しているせいか一撃一撃はさすがに即死レベルではない。だが再生（リプロ）が追いついてない。受け続ければ勇者の体でも崩壊し死に至る。

「「「いくぞ、全員全力（マルチマキシ）ハンマーアタック！」」」

ジャーガの分身体全員での総攻撃！

これが来ると思っていた。

そしてこれを待っていた。

ぼくは体の前面に細く針状にした勇者の剣（ブレイブソード）を無数に出現させた。
凶悪な剣山だ。
瞬間移動してきた２５６人のジャーガはまとめてずぶずぶと串刺しになった。

「きゃあああん！」
「ぎひいいっ！」
「いたいいたいいたい！」
「あああああっ！」

大半のジャーガは頭部を貫かれ即沈黙したが、胸や腹、腰などに刺さった何人かが悲鳴を上げた。

と、剣山からすべてのジャーガが消え、１体のジャーガが離れた位置に横っ飛びに現れた。
手足や顔から血を流している。背中の羽も片方が折れていた。
分身を解いたのだ。

「くそお、やられた。マサタカ貴様結構エグいのう。鬼畜か！」
「君が言うな！　大魔王相手に容赦するわけないだろ」
「あの気弱だったマサタカが！　いつの間にかクソメンタルに成長したな！　だがそれがいい！」
「ジャーガ、君は何を言ってるんだ……？」
「戦いはまだまだこれからだということじゃ！　いくぞマサタカ！」

ジャーガの右目の青い炎が大きくなった。

「顕現せよ大いなる癒しの使者」
「なっ！？」

ジャーガの傷が癒え、欠損部分が再生した。服さえも。
アリアガルドの法理魔法を使うのか！　魔に属するものが！？

「さあて、いくぞ、バーニング・ボルテックス！　マルチプル！！」

今度はタランジの攻撃魔法！　しかも複数同時起動だと！

襲いくる２５６本の炎の渦を剣で弾きながら次の攻撃に備える。
アリアガルド、タランジとくれば、次はきっと。

「割砕剣一刀鎧斬、二式！」

ステッキが漆黒の剣に変化した！

やっぱりガーランドの剣闘技が来るよな！
二式ってなんだよ！

がいん！

勇者の剣（ブレイブソード）とステッキが変化した剣、便宜上魔王の剣（デビルソード）と呼ぶが、二本がぶつかり重い音を立てた。
人体標本の剣も重かったが、それ以上だ。
とてつもなく重いくせに出が速い！

ジャーガが後ろ向けに跳び離れた。

「じゃあ次は全部乗せじゃ。『破界は限りにあらず、輝く法にこそその望みを与えよ』、『ダークネス・ボルテックス・マキシマム』、『真・地獄極楽剣暗剣殺撃滅刃・冥腐魔導』！」

魔法ブーストした上に闇と風をエンチャントした剣闘技だと！
一人何役なんだよジャーガ！

受け止めきれない！

ぼくは勇者の剣を並列起動し、柵のように前方に並べ盾にした。

がぎん！

何十本という勇者の剣が一瞬で斬り飛ばされ砕けた。魔王の剣を振りかざしたジャーガが推し込んでくる。
が、さらに無数の勇者の剣をウニの棘のように伸ばす。

「同じ手は何度も食わぬわっ！」

ジャーガの『破界は限りにあらず、輝く法にこそその望みを与えよ』は耐久値が桁違いだった。
剣山はジャーガの体表面を貫けず、折れ曲がった。
無茶苦茶な硬さだな！

「もらった！」

完全に間合いに入ったジャーガの魔王の剣が振り下ろされ、ぼくを両断した。
次の瞬間、真っ二つになったぼくの体はジャーガごと爆縮した。

……分身。

さっきのジャーガの技をコピーしたんだ。

敵が使った技やスキルを習得する。
これも勇者のユニークスキルのひとつ、『学習（スタディ）』だ。

ぼく本体は離れた場所で透明化していた。本当に透明になるわけではなく、究極に気配を消す。認識阻害の一種といってもいいかもしれない。ユニークスキル『不可視（インビジブル）』。

透明化を解いて、ジャーガを確認する。
残骸がない。
爆縮で溶けて蒸発したのか？
いや、あの硬さだ。欠片すら残らないはずはない……。

と、空間の一点から黒い円がみるみる広がり、４０センチほどの穴になった。
中から手がにゅっと出てくる。
空間の穴の縁を掴んで、ジャーガが顔を出した。

「くそっ、またやられた。マサタカ、さすが勇者じゃ。物理攻撃では勝てんなあ……」

といいながら、穴から出てくる。
ん～、ワームホール？
ジャーガは傷一つついていない。

「もう一度聞くが、わしと組まぬか。いいコンビになると思うがの」
「断る！」
「そうか。残念じゃが、なら仕方がない。遊びは終わりじゃ。本気で行くぞ」

本気じゃなかったんかい！

「殲滅、追尾（エクスタミネホタミング）！」
「なに！？」

フルやラヴィやアリスの技を使ってきたから、もしやとは思っていたが、ぼくの、勇者のユニークスキルもやはり使えるのか！

てか、それじゃもはやユニーク、じゃないじゃないか！

なんて考えてる場合じゃない。

分身を作り出して枝分かれして襲ってくる闘気に相対させる。
さっきのもそうだが、今作っている分身にはジャーガのとは違って意識や自我はない。ただの疑似餌（デコイ）だ。
でないと、自分とはなんだとか、自己犠牲がどうとか、哲学的倫理的な問題に悩まされそうだ。
ジャーガは魔に属するものだから、悩まないんだろうが。

ただのデコイだが、ホーミングビームにとっては的と認識するからそっちに命中する。
デコイは犠牲になったが全弾回避！

「分身を防禦に使うとは。さすが勇者、頭も回るのう。じゃがわしは、攻撃こそ最大の防禦派じゃ！」

ジャーガはまたも２５６体に分身した。２の８乗がジャーガの最大分身数なのかもしれないな。
しかしこれで攻撃してくるということは。

「「「くかかか、いくぞ、全員全力殲滅（マルチマキシエクスタミネホタミング）、追尾！」」」

２５６体から枝分かれする闘気が同時に発射された。アリーナの空間全てを覆い尽くすような勢いでビームが襲ってくる。ぼくと同じなら、追尾（ホーミング）は末端ではそれ自体が２の８乗、すなわち２５６本のビームに分裂するから、２５６人同時撃ちということは、６５５３６本もの闘気のビームだ！

デコイでもこんな数には対応できない。間にあわない！

「絶唱・導かれし守護の法よ彼の者に顕（あらわ）せ！　絶唱・破界は限りにあらず、輝く法にこそその望みを与えよ！」

フル！

意識が戻ったのか！

しかし、絶唱は術者の生命力を犠牲にして効果を増大させる技！ぼくを召喚したとき６人の大賢者が命を落としたのも、絶唱したためだ。

絶唱の二重詠唱なんて無茶すぎる！

「狂戦士・破天降臨！」

ラヴィ！

狂戦士（バーサーカー）化は諸刃の剣だ。強大な力を得る代わりに、時間経過で自分自身の肉体をも破壊してしまうんだ！

やめてくれ！

「ウルトラチャージ！　アルティメット・マルチプルリフレクト！　アルティメット・ボルテックス！」

アリス！

君までも！

限界を超えてマナを集めるウルトラチャージは、術者の脳をはじめ各種臓器に猛烈な負担をかけ、壊死させる！

そのうえ二重詠唱では、内臓が焼き切れてしまう！

３人は、死ぬ気か！

「なんじゃ勇者にへばりついたゴミカスか。勝負に水を差すな。消えてしまえ」

「ゴミなんかじゃないっ。ぼくが愛する３人だっ！！」

ぐわっしゃーーーーーんんんん！

アリーナは猛烈な轟音と閃光に包まれた。

天井が崩落した。

◇◇◇

砂塵がおさまった後は一面がれきの山だった。

ぼくは、生きて立っていた。

戦いの結末を反芻する。

……その瞬間、すべてがスローモーションのように見えた。
フルの超・魔法強化とユニークスキル覇道（ヘゲモニー）が融合し、精神（アクセレート）を加速させたようだった。

ジャーガの闘気（ビーム）攻撃は、フルの超・魔法障壁とアリスの超・反射魔法により大幅に減衰はしたが、完全に弾くことは出来ず二人のバリアを突き破った。
同時に、アリスの超・範囲攻撃魔法が台風のようにジャーガの分身をなぎ倒した。
狂戦士化したラヴィが超硬度のジャーガの本体を斬り裂いた。

が、バリアを抜けたジャーガの殲滅（エクスタミネーター）がぼくらを貫いたのも同じ瞬間だった。

ぼくを庇うように駆け寄ってきたフルが一番ひどく攻撃を受けた。
全身を何本ものビームで貫かれ、頭から足先まで粉々の挽肉と化し吹き飛んだ。
ピンク色の肉片の間に、ぼくを見つめる目玉が神経の尾を引きながら飛んでいった。

アリスは空中で超・嵐魔法を操り分身ジャーガを砕いていたが、同時に次々に襲いくるビームに焼かれていった。
手が足が、そして胴体が燃え尽き、最後は顔が焼け落ちて灰となって霧散した。

ラヴィはジャーガ本体に取りついたが、そのため本体のビームをすべて受け、胴が穴だらけになって上下に裂けた。
下半身は燃えて地面に落ちたが、上半身は焼かれて炭になりながらもジャーガを剣で深々と刺し貫いた姿勢のまま動かなかった。

ぼくは何をしてたかって？
ハイパーモードの残り残量を全部充填（チャージ）に回していた。
加速した覇道（ヘゲモニー）が、３人の死に動揺することを許さず、ただ大魔王を倒すことにのみ意識を集中させていた。
フルが、ラヴィが、アリスが命と引き換えにくれた最後のチャンス。
「殲滅限界突破（エクスタシーブレイク）、縮退（デジェネレーション）！！」
爆縮を超える重力縮退。
残ったラヴィの上半身ごと、ジャーガを捉えた。
そして閃光がすべてを覆い尽くし、余剰エネルギーがアリーナを破壊した。

◇◇◇

「か、完敗じゃ……」
両腕を失ったジャーガもまだ立っていた。腹に大穴があいている。
右目の炎は消え、金色の瞳は鉄サビ色と化していた。
そういえば、ぼくも左腕がない。自分ではよくわからないが、顔も半分吹き飛んでいるみたいだった。視界が狭い。
「まだ、生きているのか、ジャーガ」
「ああ、だがわしは間もなく消える。悪魔力が枯れてしもうた。貴様の重力縮退連鎖、もはや止められん」

ジャーガの胴体の穴がじわじわと広がり、肉がみるみる光の粒となり消えていった。

「わしが死んでも、頭だけは残るはずじゃ。どういう理屈かは知らぬが、大魔王とはそういうものらしい。勝利の印に持って帰るがよいぞ」

「生き返るんじゃないだろうな」

「その手があったか！　ってな、ジョウダン。もう無理じゃ。わしの世界線は終わったらしい。やっと死ねる」

「何を言ってるんだ？　ジャーガ」

「マサタカは3人を愛したと言ったな。あやつらもマサタカを護って、信じて死んでいった。いい仲間だったのじゃな。本当に……」

「そうだ、フルも、ラヴィも、アリスも。ぼくの大切な、愛した人だった！」

「そうか、この一年、いい旅をしたのじゃな。わしとはちょっと違うな……」

「さっきから何を言ってるんだ！？」

そんな会話のうちに、ジャーガの胴体は大半が光になっていた。

「何度も意識が途切れおる……。そろそろわしも最期じゃ。最後に言っておく」

「おい、だからなにを」

「三国には気をつけろ」

残っていた下半身が一瞬で光になって消え、ジャーガの首が落ちた。

ピンク色だった肌がみるみる黒ずみ、石のようになった。

大魔王は死んだのだ。

残った右腕で持ち上げると、渦になったツインテールがちょうど台座のようになっていた。

石化しても美少女だが、これが大魔王ですって言って信用してもらえるのだろうか。

よく出来た1分の1フィギュアヘッドみたいなんだが。

その瞬間、とてつもない喪失感がぼくを襲った。

戦闘終了により覇道（ヘゲモニー）の効果が薄れたのだ。

フル！

ラヴィ！

アリス！

みんな死んじゃった！！

なんでだよ！

こんなのってないよ！

どうしてぼくだけ生き残ったんだよ！

と、キラキラと光が輝き、ぼくの腕が再生（リブロ）した。視界も戻った。

再生にしては早すぎる？

「勇者様ー！」

「勇者！」
「勇者！」

フル、ラヴィ、アリスが駆け寄ってきた。

「大魔王を倒したのですね！」
「やったな勇者！」
「さすが。信じていた」

3人とも、生きていた！？

「え、みんな、どうして？　いや、無事なのは嬉しいけど、いったいなにがどうして？」
「申し訳ございません、勇者様には説明する時間が無くてご心配をお掛けしました。実は絶唱は四重詠唱してまして、治癒と蘇生魔法もあらかじめ遅延発動にて唱えていたんです」
「でなきゃあんな自爆攻撃、出来ねーぜ！」
「そう、最後の手段」
「ぼ、ぼくは3人が死んだかと！　本気で！」
「本当に申し訳ありません。私たちの望みは、生きて勇者様と帰ることでしたから。勇者様をお救いし、大魔王に一撃を与えるチャンスを作りだすにはあの方法しかありませんでした。……お嫌いになりました？」
「いや、嫌いになるなんて、でも、ほんとにもうこんなことはやめてくれよ。みんな死んでしまってもうどうしたらいいかと」
「あっ、そうだよ！　愛してるって言ったよな！　勇者！」
「はじめてお聞きしました……」
「いつも言ってると思うけど！」
「いつもは『好き』。『愛してる』は初めて」
「え、そうだっけ？」

「そうですよ、勇者様」
「そうだぜ、勇者！」
「え、そう？　ほんとに？」

なし崩しのように三人に抱きつかれた。
ぼくは三人の頭を撫でた。
ぼくも含め、みんな涙していた。
うれし涙だ。

その後砦を広げて、ベッドで腰が抜けるまでセックスしまくった。
扉の向こうで待ってる人たちには悪いけど、我慢できなかったんだよ！

こころなしか、ジャーガの首が微笑んでいるような気がした。

気がしただけだけど。

第9話　凱旋、そして。

扉を開けた。

ものすごい歓声に迎えられる。

まだダンジョンの中なのに、そんなにはしゃいでいていいのか？

いいんだ。

鑑定によらなくても、このダンジョンの魔の気配がどんどん薄くなっていくのが分かった。

ただの洞窟になりつつあった。

魔の大元というべき大魔王（エクスダーキング）が討伐されたからだ。

ここで倒した三魔王やボスクラスたちがリポップすることはなくなる。

安心だ。

魔の浄化が、このダンジョンだけの現象なのか、それとも世界中に広がるのかはよくわからない。

ただこの十年、あちこちで魔が活発に暴れていたのは大魔王の影響だろう。

だとしたら、魔がいなくなることはなくても、活動は沈静化すると思われる。

人類は、救われた。

「勇者殿！　やりましたな！」

「勇者様！　ありがとう！」

「勇者パーティーのみなさん！　万歳！」
「おめでとうございます！」

兵たちが口々に声を張り上げる。
なんか照れるなあ。
ついさっきまでエッチしてたんだけど、やりましたなってそんな意味じゃないよね。

でも、さっきのエッチは今までで一番乱れた。
自分で言うのもなんだけど、凄かった。
死んだと思っていた3人が生き返り、ジャーガを倒して昂ぶっていたこともあるけど。

◇◇◇

「ちょっと試したいことがある」

ぼくは両手の人差し指をおちんちんに変えた。

「げっ、なにそれ」
「『分身』を覚えたから、その応用」
「ないわー、それないわー」

そう言いつつラヴィはじいっと指ちんこを見てる。このすけべ。

「じゃあ、こんなのはどうだ」

すべての指をちんこに変えた。
前になれの姿勢で指を突きだす。まだ勃起前だから、太ったいも

むしみたいになってるが。
仮性包茎だし。

「おい、こ、これキモすぎるだろ！」
「さすが勇者様、３人どころか何人でも同時に愛していただけますね！」
「え、そういうことなのか勇者！」
「納得」
「いや、何人でもってことは考えてなかったけど、一人を相手にしている間お待たせしてるのもどうかなって思ってさあ……」

ふん、と力を入れて勃起させた。
鎌首をもたげる１０本のちんこ。

「お、おほおおん、そういうことなら指チンポもなかなかよいものに思えてくる、な！」

ラヴィ、目がハートになってるぞ。

ちゅぱちゅぱ。
ちゅぱちゅぱ。

「おい、ラヴィ、いきなり」
「仕方ないだろ。こんなにおいしそうなのが１０本もあるんだから。舐めずにはおれん！　ぅんぐんぐ」
「あ、ずるい！　左手はわたしが」
「ボクは元の」

フルが左手のちんこを親指から順に、アリスはぼくのズボンをはぎ取ってオリジナルの元祖ちんこをしゃぶり始めた。どういう仕組

か指ちんこをフェラされると股間の元祖ちんこに刺激が集まる。神経はどうなっているのか？　複製だからダイレクトに原型に繋がってるのかな？

まあ理屈はどうでもいいや。

１０本プラス１本のちんこをフェラしながらフルたちも服を脱ぐ。フルにフェラをやめさせ、キスしながら指ちんこで陥没乳首を刺激する。こんにちはした乳首を指ちんこで擦り上げる。さらに手を下げ股間へ。薄い恥毛の下の柔らかい箇所は既にぐっしょり濡れていた。

中指ちんこをまんこに挿入する。

「んんっ」

キスしながらなのでフルがくぐもった声を出す。

親指ちんこと人差し指ちんこでクリトリスを挟み、擦る。

中指ちんこはゆっくり抜き差しする。

フルの腰がぶるぶると震え、滴る汁が一気に増量した。軽くイッたな。

ラヴィは右手ちんこを１本ずつ丁寧に舐め上げていたが、指ちんこを挿入されたフルを見て自分も我慢できなくなってきたのだろう。キスしているぼくを上目づかいで見上げる。

そーかそーか。

「はぎゃああっ！」

ラヴィがのけぞった。

右手の5本のちんこをまとめておまんこに突っ込もう……としたけどさすがに入らないので3本にした。せっかくの重機まんこが裂けたりしたらもったいないからね。リョナ趣味はないし。

しかし、がっつり呑み込みぎちぎちに締め上げてくる。
ちんこの方が圧搾されそうだ。

おおお、フルとラヴィのおまんこのうねりと締め付けがアリスにしゃぶられている股間に重ね掛けされてダイレクトに伝わってくる。快感の3D刺激だ！　これはヤバい！

「勇者、ボクも」

アリスが背中を向けてお尻を突きだした。
尻の穴まで続く銀色の毛深いジャングルが薄い腰の中央に広がっている。
このギャップがたまりません！

いただきます。

じゅぶん。

ジャングルの中の沼地は濡れに濡れており、さしたる抵抗もなく元祖ちんこを飲み込んだ。

「あっ、来た。いい」

アリスは自分で腰を振りながら、膣内の気持ちいいところにちんこを誘導し、擦りあげる。
粘るような複雑な刺激が四方から波状に包み込んでくる。

ううむ。更に出来るようになったな！　アリス！

さて、フルだ。

遅延蘇生のことをぼくに事前に知らせなかったフルにはきつーいおしおきをしなくちゃな。

そりゃ、フルが悪いわけじゃないけど。

でもなあ、やっぱりあんな自爆作戦は実行しちゃだめだよ。いくら生き返るとしても。

ラヴィやアリスも、死ぬ時の痛みはとんでもなかったとか、意識が飛ぶ瞬間の恐怖は思い出したくないとか言ってたし。

フル自身だって怖かったろうにさ……。

というわけで、左手で余っていた薬指ちんこをフルのお尻の穴に突っ込んだ。

「あ、勇者様！　そこは、違いますっ！」

「違わないよ。フルはここも気持ちよくなるんだよ」

「え、そ、そんな。心の準備が」

「ぼくだってあの時は心の準備なんかなかったんだからね！　おしおきだよ」

「あああ、ごめんなさい！　ごめんなさい！　勇者様――――！」

ぐにゅにゅにゅ。ぐにゅん。

薬指ちんこは堅い肉の輪をくぐり抜けた。

哀願むなしく、アナルバージン、いただきました！

「あはあああああっ！」

だって股間、愛液でどろどろなんだもん。処女でも入っちゃうよ。

うん。

ちょっと期待してたんじゃないか？　フル。

お尻の穴をずぼずぼするたび凄い声で絶頂して何度も何度も前から潮噴いてたし。

え、細菌？

フルは清浄魔法持ちだから、その点は大丈夫。衛生的！

ああしかし、元祖ちんこへの快感のフィードバックがさらに増えた。これはもう我慢できません！

「出すよ！　出すよアリス！」

「勇者！　来て！　来て！　ボクの中に！」

「おおっ、出すよっ！　アリス！」

どっぷううんん。

アリスの最奥に盛大に爆ぜた。勢いでジャングル内部から白濁液が逆流し、ぼたぼたと垂れた。

ちなみに指ちんこからは射精しない。刺激が繋がってるだけで精管は繋がってないということなのか？

複製の仕組みはよくわからん。

体も心も完全な分身を造れば、もちろん射精するんだろうが、そんなの嫌だ。

いくらぼくの分身とはいえ、それって寝取られじゃん？　ぼくそのものじゃないもん。

フルもラヴィもアリスも、ぼくだけのもの！

たとえ分身でも、ダメ、ゼッタイ！

ということで、たっぷり愛したアリスと場所を交代しラヴィ、フルとも元祖ちんこでしっかりこってりセックスした。

フルが最後だったのはおしおきだからね。

指ちんこで肛門を犯しながら、元祖ちんこで膣内射精してやったぜ。

でも、フルが獣みたいに吠えながら絶頂したのは、ちょっとビビった。

二穴責めは、ほどほどにしよう。

うん。

◇◇◇

にしても3人ともやけにツヤツヤしてるなあ。

こっちはちょっとヤリ過ぎで腰に力が入らないってのに。

ラヴィのお掃除バキュームフェラで最後の一滴まで吸い尽くされちゃったし。

そういや3人ともエッチの後すぐに下着を履くんだ。

精液がこぼれたらもったいないらしい。

そんなに妊娠したいのか？　……したいんだろうなあ。

ぼくはまだ早いように思うけど。3人ともまだ十代だし。

この世界基準では子供がいてもおかしくない年頃らしいけど。

処女喪失からおよそ1週間たったし、念のため鑑定してはいるんだけど、受精や着床の表示は出なかった。

今、にこやかに兵へ手を振っている三人の美少女の膣内はぼくの精液をたっぷり溜めている。
何とも背徳的だ。臭うんじゃないかな。
陣の中央でトップスリーが待っていた。

「よく戻った。早かったな」
「ダムス統括。なんとか大魔王を討ちとったよ」
「うむ、法術士たちも呼んである。見分を」
「これだよ」

布でくるんでいたジャーガの首を取り出し、台において見せた。

「これが大魔王か」
「うん、マシュエル司令。見た目こそ少女だけど、とても強かった」
「よく討伐した。さすがは勇者パーティーだ」
「ありがとう。ジュギル参謀」

法術士たちの鑑定はすぐに終わった。
大魔王アャジャーガ・ジャギャアージャ。

間違いなかった。
生命反応・魔反応、ともになし。

完全死。

「アリアガルド法国司祭ダムス・アマル・ドゥエスガが宣言する。
大魔王を打ち滅ぼした！　凱旋じゃ！」

うおおおおおおおぉぉぉぉぉぉぉぉぉ！

　鬨の声が上がった。

　宗教上の理由で、魔王討伐宣言は法国の役割だ。タランジ王国のマシュエル王子もガーランド帝国のジュギル皇太子もうなずき、兵と共に拍手していた。

　終わった。

　終わってみれば、ここまでの道のりは短かったようにも思える。濃厚な1年だったが。

　後は美少女とのハーレム生活が待っているだけ！

　よっしゃー！

　ジャーガの首は神聖魔法を込めた結晶状の檻に納められた。魔の気配を完全に遮断するそうだ。

　復活は万が一にもない、と説明された。

　ジャーガは、大魔王のくせに、やけに人間臭い奴だった。アニメ声で可愛かったし。

　この世界を滅ぼしたがっていた理由はわからなかったけど。

　世界を憎んでいたようだったし。

　それに、なんでジャーガはぼくの過去を知ってる口ぶりだったんだろう。日本の和歌も知ってたし。

『忘れじの行く末まではかたければ今日を限りの命ともがな』

　いつまでも忘れないとあなたは言うけれど、未来はわからない。

　ならば、永遠の愛を誓う言葉を聞いた今、命がなくなってしまった

方が幸せなのかも。

そんな意味だ。

そんな歌をなんでわざわざ？

フルたちのことを言っているのか？

そりゃ、確かに未来はわからないけど、ぼくは3人を愛しているし、3人はぼくを愛している。

今が幸せの絶頂じゃない。これから長い人生を掛けて愛を深めていくんだ。

それを信じられないようじゃ、生きている値打ちがないよ！

ダンジョンから引き上げる行軍がはじまった。

攻略したら一瞬で出口に戻る魔法陣が出現！　なんてことはないからね。

でも、帰路は敵魔族もほとんど出現しなかった。ごくまれに魔物を見かけたが、向こうが逃げていった。

この世界基準では、かなりのんびりした、矛盾した言い方だけど平和な行軍だった。

連合軍の損耗は七割に達したけど、生き残った兵たちは一様に明るい顔をしていた。

そりゃそうだ。人類救世軍だもん。戻れば英雄だ。

そんな勢いだから、全体休憩時は仮設テントで宴会。

往路じゃそんな余裕はなかったからなあ。

ぼくらは別として。

トップスリーをはじめとして、いろんな兵たちがぼくらと一緒に食事をし、酒を呑んだ。変な話だが、兵の人数が減った分食料は多目に残っていた。たらふく食って、語りあい、歌い、呑んだ。

フルやラヴィやアリスもよく食べ、よくしゃべり、よく呑んだ。

三人は今や連合軍のアイドルだった。

まさに偶像。

まあ3人ともぼくのお手付きだけどね。うへへ。

あれえ、でもなんだか今夜はやけに酒が回るなあ。

再生（リプロ）や覇道（ヘゲモニー）のベーススキルのせいか、この世界に来てからアルコールがけっこうな勢いで覚めちゃうんだよね。現実世界では下戸だったのに。

でも今夜はそうでもないなあ。

大魔王倒して、緊張の糸が切れたせいかな。

フルたちは今はそれぞれの国の兵士のグループに混じっている。

自国の誇りだし、同郷のアイドルだしね。

みんな、この戦いを生きのこった戦友だ。

3人をずっとぼくが独占しているというのもよくないだろう。

「それで、どの国に住むか、考えてくれたかい？」

いつの間にかジュギル参謀が傍にいた。

いや、大魔王討伐が成ったから、今の立ち位置はガーランド帝国皇太子の側面が強い。

「ジュギル皇太子。まだ決めかねてるんだ」
「パーティーの3人を嫁にするんだろ？」
「ぶっ」
「おいおい、みんな知ってるし、みんなそのつもりだよ。今更隠すことでもないだろう？」
「え、そう、なの？」
「当代きっての法国の『賢者』、帝国の『剣闘士』、王国の『魔法使い』の3人だ。その3人を独占するなんて、普通なら男の敵と斬り捨てられても文句は言えないところだが、相手が『勇者』なら納得せざるを得ないだろう」
「また物騒なジョークを」
「冗談じゃないよ、何人か本気で君を暗殺しようと考えていた節もある。もうあきらめただろうがね。ははは」
「マジすか」
「まあ、勇者を暗殺するなんてできる奴がいたら、それこそ大勇者だろうがね。しかし、まだ凱旋後の落ち着き先を決めかねているのは、3人のことがあるからだろう？」
「確かに、それもあるんだけど……」
「どこかの国に属せば、その国出身の妻が自動的に正妻に、ほかの二人が側妻となる。当人同士はそのように思わなくても、周りがそう認定するからね」
「それだけじゃない。自慢じゃないけど、ぼく自身も3国のバランスを崩しかねないから」
「その点は大丈夫だ。以前説明したとおり勇者は3国から貴族位が与えられる。超国家的な位置づけだ」
「でも、住んでいる国、という事実は大きいと思う。それこそ周りがそう認定するよ。いっそ3国を1年ごとに住み替えるとかどうかなと思ったけど、将来、子どものことを考えるとそんなに頻繁に引っ越しするのは友達と別れたり、いじめれたりするんじゃないかなと……」

「勇者、きみは気が早いねえ。それに勇者の子供をいじめる奴なんていないだろうさ！」
「……経験からだよ。子どもは無自覚だから怖いんだ」
小学生の頃、父親の仕事の関係でほぼ2年ごとに転校した。その度に人間関係がリセットされるのがどれだけ辛かったか。
結局コミュ障になっちゃったし。

「いっそ未開の森林とかで暮らそうかなとも考えたんだ。ぼくらなら魔族やモンスターは平気だし、魔法があるから生活も不便じゃないし」
「いや、それはダメだろ。勇者が隠居してどうするんだ」
「え、やっぱりダメかな。割とマジに考えたんだけど」

その時、アリアガルド法国のテントから、悲鳴が聞こえた。

「きゃあああああ！」

フルの声だ！

第１０話　勇者死す

事態を把握するよりも先に身体が動いた。

瞬間移動。

ジャーガの技のコピーだ。瞬きするよりも早くアリアガルド法国のテントに来た。

世界がスローモーションで動いていた。

加速（アクセレート）だ。フルの危機に覇道（ヘゲモニー）が発動したようだ。

顔を真っ赤に焼けただらせたフルが、のけぞり倒れかけていた。

ガラスの小瓶がフルを追うように飛んでいた。

酸か！

投げた奴はすぐにわかった。

法国の高位法術士の一人。導師ウィルウィルス。よく知っている男だ。

なんでお前がフルの顔を焼く！

ごっきーん！

かなり手加減をしてウィルを殴り気絶させた。殺すわけにはいかない。

同時にフルを抱き寄せ再生（リプロ）を顔に向かって掛ける。

本来は自分の内面にしか作用しないユニークスキルだが、この1年の修行（スキルアップ）で外部にも効果が出せるようになった。

アリスのマルチプル・リフレクトとの連携で多数の連合軍兵士のある程度回復させることが出来たのはそのためだ。

酔っているせいか、一瞬で全快とはいかなかったが、傷跡が残らない程度には修復できた。

その頃には周りに大勢の兵が集まり、ウィルはガーランドの重歩兵数名により拘束、捕縛されていた。

「フル！」

「ゆ、勇者様、ありがとうございます……。後の治癒は自分で出来ます……」

「これは、なにがどうした！？」

「ウィルウィルスは法理大学の兄弟術師なのですが、私が勇者様の情けをいただいたことを裏切りだと、急に……」

「嫉妬かよ！」

「申し訳ありません。そんな感情がウィルにあったなんて、気がつかずに……」

「しかも全スルー！」

「ウィルが使ったのは浸潤性の変異薬でしょう。勇者に取られるくらいなら二目と見られない顔にしてやると叫んでいましたから。変異薬によるけがややけどは、法理魔法の治癒では治らないですから……」

そんなものがあるのか。

ガラス瓶の中身を『鑑定（ジャッジ）』する。

『高速細胞増殖酵素（キャンサーブースター）』。正常な細胞を悪性腫瘍に変異させる。通

称変異薬。置き換わった腫瘍を正常な細胞と誤認するため、治癒魔法や魔法薬では治療不可。唯一、勇者のスキル再生（リプロ）で治癒可能。ただし、事前に正常な状態の履歴が保存されている必要がある。

これまでのクエストで何度かフルたちを治しててよかった！

「勇者！」

「勇者殿！」

ラヴィとアリス、それにトップスリーも駆け付けた。

「フルは、大丈夫なのか！？」

ラヴィ、アリス、トップスリーに事情を説明した。

「なんということだ。ウィルがそのような……」

「ダムス統括。反逆者を砦まで連れて戻るより、この場でただちに処罰を決定すべきでしょう。まだ戦時です。我々にはまだその権限があります」

「そうだな。帰還の間の士気にもかかわる。戦時裁判を開くべきだな」

「ジュギル参謀、ダムス統括。私も賛成です」

マシュエル王子も同意し、ウィルに対する裁判はただちに始まった。ぼくたちは被害者だが、目撃者も多く、事実認定に疑義はなかったため法廷には呼ばれなかった。

一級反逆罪でウィルは死刑となり、裁判の終結とともに即首をはねられた。

勇者とその仲間に対し害をなすものは死罪になるのか。
唯一神に準ずる存在とそのご一行。近所にそんなのが住んでたら気が休まらないかも。

ハーレムライフはいいけど、真剣に居所について考えないといけないな。

そんな事件のせいで、その夜は宴どころではなくなった。さっさとテントで寝てしまうものが大半、数名でそっと飲むもの、気分転換に洞窟内を散歩するもの、武器を整備するものなどに分かれた。

ぼくらはフルの回復のこともあるので、裁判が始まる前に砦に戻っていた。

「変異薬か。なんで奴はそんなものを持ってたんだ？」
「勇者、おそらく奴はアリアガルドの監査官だったんだろう」
「監査官？　ラヴィ、なにそれ」
「兵を監察する兵だ。人間だからな、悪魔にそそのかされることもある。兵同士でいさかいが起こることもある。そんな時、法術士を無力化するには有効な薬だ」
「その監査官自身が、魔が差したってことか」
「うん。監査官はいるのかいないのか、それ自体秘密だ。誰が監査官なのかも、トップスリーしか知らないはずだ。俺たちガーランド帝国兵やタランジの魔法使いの中にも監査官がいると言われている」
「ボク、知らなかった。無知は恥」
「いや、アリス。あくまで兵の間の噂話だからな！　ガーランドの兵はこの手の軍事ネタが好きなんだよ！　知らなくてもゼンゼン気にしなくていいぞ！」
「昔の憲兵みたいなもんなのかな？　それとも軍警察（MP）か？　確かに、軍の秩序維持には必要かも。でも身分を隠す必要もなかろうに」

といいながら理由はなんとなくわかる。この世界は基本的に他人を信用していない。利用価値があれば手を組む。それだけだ。

監査官の身分が明らかになれば、買収や襲撃など別のリスクが起こり得る。

監査官がいるのかいないのかを含めて秘密にしておけば、疑心暗鬼から反乱分子がいても手を組みにくくなる。

多分そういうことだ。

それを考えれば、この連合軍を組織したのは大したものだ。国をまたいで手を結ぶなんて。

トップスリーの人望と統率力のなせる技だろう。

しかし。

「ってことは、勇者の監査官も、いるのかな？」

一拍おいて、ラヴィとアリスが爆笑した。

「あははは！　そりゃ無理、無理！」

「勇者は最強。どんな人間もかなわない」

「あんまり大きな声で笑わない！　隣でフルが休んでるんだから！」

「はいはい」

「勇者も声大きい」

「む……」

それから、ラヴィとアリスも自室に下がらせた。フル抜きでエッチするのは、ズルみたいだったからね。

それに、少し体がだるかったんだ。

お酒の抜けかけって、なんとなく気持ち悪くなるよね？

たぶんそれだろう。

夜更け。

気配に気づいて目を開けた。いつの間にか眠っていたようだ。

フルが傍に立っていた。

「どうした、フル？　もう起きて大丈夫なのかい？」

半身を起こすと、フルが抱きついてきた。

「どうしたの？　怖い夢でも見た？」

「夢なら……」

「ん？」

「夢なら……、よかったの……、ですが」

顔を上げたフルの左目は、真っ赤だった。

反射的に凝視してしまった。

フルの眼球から赤い粘膜が反発するようにめくれ、逆に吸い寄せられるようにぼくの右目に貼りついた。

目が焼けた。

「うわあぁぁぁぁ！」

激痛でフルを突き飛ばしぼくはベッドの上でのたうった。

しゅーしゅーと煙を上げながら眼球が溶けていく。

酸？

いや、変異薬か！
再生（リプロ）が発動しない。いや、この痛みと恐怖。覇道（ヘゲモニー）も効いてない。
勇者の力が出ない！？

残った左目で、ラヴィとアリスが部屋に飛び込んできたのを見た。
フルに詰め寄って何か叫んでいる。

ラヴィが剣を抜いた。

おい、やめろ！

しかしその頃には変異薬は眼球から視神経を通り脳まで浸潤しはじめていた。
猛烈な勢いで細胞が置換されガン化する。
変異した悪性腫瘍は勇者の力を乗っ取ったかのように猛烈なスピードで増殖していく。ぼくの顔の右側がいびつに膨れていくのを感じた。

「あー、あー、あー」

すぐに言葉すらつむげなくなり、視界がブラックアウトし、体中が腐っていくようなおぞましい感覚の後、何も感じなくなった。

全身が悪性腫瘍となったのだろう。

◇◇◇

しかし、ぼくは死んではいなかった。

正常細胞が全て死滅しあらゆる機能を喪失したはずなのに、いつの間にか視覚や聴覚などとは異なる別の感覚が生まれていた。

便宜上、超感覚と呼ぶことにする。

脳は溶けて腐ったはずだが、意識は継続していた。

異世界から召喚されたぼくの魂は、物理的な意味で肉体に宿っていたのではなかったのかも知れない。

超感覚は、どこの、誰がもたらしたのかわからない情報を伝えてきた。

しかし、それはきわめて断片的で、とぎれとぎれのラジオのようだった。

何が起こったのか、情報の欠片を繋ぎ合わせ、ようやくわかってきた。

おそらく長い長い時間が経ったのだろう。が、時間の感覚はとうに失われている。

あの日から数か月なのか、数十年経ったのか。もしかして数日か。

勇者と大魔王。

それは一対の存在だった。

大魔王が現れると、また勇者も現れる。

それはなぜか。

同じ存在の裏と表だったからだ。

大魔王が倒れると、魔が弱体化する。そして同時に勇者も弱体化するのだ。
力の根源は同じだからだ。

そして、勇者は次の大魔王となる。そのための器だ。

大魔王→勇者→大魔王→勇者→大魔王……。

この連鎖は、断ち切られなければならない。

そしてそのタイミングは、大魔王討伐直後しかない。しばらくすれば勇者は魔に堕ち、再びその力を増大させ、魔の気配を増やし、いずれ大魔王へと変化する。

それは数十年のこともあるし、数百年かかることもある。

が、必ずそれは起こる。

三国の首脳は、勇者と大魔王のこの秘密を知っていた。

大魔王アヤジャーガ・ジャギャアージャ（エクスダーキング）は先代の勇者だったのだ。

大魔王を倒すと同時に勇者も殺す。

戦略統括アリアガルド法国司祭ダムス・アマル・ドゥエスガ。
全軍司令タランジ王国第二王子マシュエル・ニーナウーナ・タランジ。
戦術参謀ガーランド帝国皇太子ジュギル・ナックス・ガーランド。

トップスリーの本当の使命はこれだった。

そしてそれを成すのは、最も勇者が心を許す時、許す人がやるしかない。

フルは三国の刺客だった。

それがフル自身の意思なのか、それとも洗脳でもされてそうなったのかはわからない。

ただ、アリアガルド法国の賢者であるフルは、世界の脅威となる大魔王にいずれ堕落する勇者は、滅すべき存在だと自ら考えた可能性はある。

世界を救う大義だ。

でも、フルの愛情は本物だったと信じたい。

いや、信じるに値するフルの愛をずっと感じていた。

ぼくへの愛よりも大義を選んだ。そう思いたい。

ぼくを油断させるために利用されたウィルは哀れだった。

彼も高位法術士だから、大義のために喜んで汚れ役を引き受けたのかもしれないけど。

ジャーガが三国に気をつけろと言った意味はこれだったのだろう。

ということは、ジャーガも三国に殺されかけたんだ。

が、大魔王となって世界に復讐を始めた。

扉を護っていた三魔王（ダークロード）の正体は、彼女の勇者パーティーなんだろう。

法術、剣闘、魔法をそれぞれ使っていたしな。

ということは、勇者ジャーガを殺そうとしたのはパーティーメンバー以外だったのだ。

それで失敗したので、今回はパーティーメンバーを利用したということだ。

ひとつわからないのは、ジャーガは女だ。だが、三魔王は、狼男は性別が分からなかったものの、人体標本と腐った内臓は明らかに女性だった。

女勇者は男だけのパーティーじゃないのか？

あの時聞いた古文書の約定とやら自体が嘘だったのかもしれないけれど。

ぼくは公式には殺されたことになったようだ。

ラヴィとアリスが目撃した以上、ぼくを殺したのはフルということになる。

フルは、ウィル同様一級反逆罪で断首されてしまったのだろうか。

今いる場所がどこなのかは全くわからなかった。

ずっと人の気配はない。

どこかに隔離されているのは間違いなかった。

超感覚でも、フル、ラヴィ、アリスがどうなったのかはわからな

かった。

声も、思念も捉えられなかった。

フルは処刑され、ラヴィ、アリスももうこの世にいないのかもしれなかった。

それからまた長い時間が経ったのか、それともすぐのことだったのか。

ぼくの意識は突然消えた。

後には、ただ、虚無。

第１１話　黒髪の少女・ミヤビ（前書き）

長いプロローグが終わって、ここから本編です。
前日譚のくせに長くなりすぎたので第１０話後半は設定語らせて巻いてしまいましたが、この話からはネチコクいく予定です。
エロなし回もあります。ごめんなさい。

よろしくお付き合いお願いします。

第11話　黒髪の少女・ミヤビ

「おか～さま～」
「はいはい。ミーちゃん、慌てて走っちゃだめよ。危ないからね」

お母様は目が見えないはずなのに、何でもお見通しです。
道のない林も草に足を取られたり、枝に頭を当てることもなくすたすた進みます。
時々立ち止まって、足の遅いわたしを待ってくれます。

お母様はイノシシの革で作ったマスクをいつも付けています。
鼻の先と口の周りだけに穴が開いているほかはつるんとした肌色の仮面。

なんでも、わたしがまだおなかにいるときに山賊に襲われたんですって。
その時の傷がひどくて、いつも顔を隠しているのだそうです。

おうちでもマスクを取らないので、実はわたしはお母様の素顔を知りません。
見ると気持ちが悪くなっちゃうからね、と言われています。

どんな顔でもお母様はお母様なのに。

それにお母様はマスクをしていてもとてもきれいです。
一束にくくられた長い金髪はキラキラと輝いていますし、腕や足も細く長く、背も高い。
肌も真っ白です。

え、わたし？
わたしの髪は黒いし、肌も黄色いのです。ちょっと残念。

今いる林は村からは少し離れた山の中です。
この林の間に少し開けた場所があって、そこがわたしの家です。
家の裏側、村とは反対側で山はまだ高くずっと続いていて、はるかに見える北の大山脈へと連なっていきます。
山の向こうがどうなっているのか、わたしは知りません。

お母様は、顔のこともあって、麓の村の近くには住みたくないようです。
村の人からも少し気味悪がられているようなところがあるように思います。

でも、村の人が家に来ないかというと、そんなことはありません。
なんと、お母様は薬の調合が出来るのです。
この林では、薬の材料が結構採れるのです。それは林のそばに住む一つの理由でもあります。

え？　他の人でも材料があれば薬は作れるんじゃないかって？
もちろんそうですが、お母様の薬はレシピ以上に良く効きます。

それには秘密があります。

お母様は、治癒系の魔法が使えるのです。
薬を調合する時に、治癒魔法を掛けて効能を強化するのです。

だから重い怪我や病気には、お母様の魔法薬が欠かせません。
時々、家族の方が薬を取りに来られます。

そして薬の代わりに魚や肉を置いていってくれます。
大半の人はお母様から薬を貰ったら、慌てたように帰っていきます。
やっぱり気味悪がられてるみたいです。
お母様とゆっくり話をして帰るのは、サスナさんとリーさんくらいです。

サスナさんはお母様より少し年上のほっそりした女性です。
娘さんが胸の病気で、その薬を月一くらいで取りに来られます。
お母様とは以前からのお知り合いみたいです。私が物心ついた頃には、もうちょくちょく来られていました。
時々、お母様のマスクを見つめて悲しそうな眼をします。

「ミヤビちゃん、最近ぐっと背、伸びたね。元気で何より」

自分の娘さんとの比較でしょうか。確かに私は風邪一つ引いたこともありません。

リーさんはがっちりしたおじ様です。浅黒い肌に白髪交じりの筋骨隆々たる偉丈夫ですが、左脚の膝から下がありません。
少し前の戦争で失ったとか。それで軍をやめ村に戻ってきたそうです。
隠居してるのかと思っていたら、シカやイノシシを捕って暮らしているそうです。
失った脚の代わりに硬いカーシーの枝をくくりつけているだけですが、自在に動けるのはさすがです。
でもよく膝を痛めて、軟膏を貰いに来ます。リーさんが来られるようになって1年くらいになるでしょうか。

お母様に無理をしすぎとたしなめられ「仕方ないだろ、猟しないと食っていけねーんだから」と悪態をつくのが定番のやり取りです。

時にはお母様が村に出ていくこともあります。動けないくらいの怪我や病気の方がいますから。

そして、お母様は治癒魔法以外にも使える魔法があります。

火をおこしたり、水を出したり、見えない壁を作ったり。

お母様曰く、治癒魔法以外は飲み水や料理や明り取りの足しになる程度であまり強くはないそうですが、それでも便利です。

川は村の反対側ですし、丘の上なので井戸もないですから。

畑を獣に荒らされないのもお母様の結界魔法のおかげですし。

時には火魔法で害獣を討伐されます。

そのお姿はめちゃくちゃ格好よいのです。戦いの女神みたいな感じです。

特に元戦士のリーさんには見ていただきたく、つい口が滑りそうになります。

でも秘密なのです。

お母様の魔法のことは私以外に誰も知りません。

火や水の魔法は人を直接傷つけることが出来ます。

治癒魔法も、使い方次第では相手を殺してしまうことも出来るそうです。

毒と薬は裏表、という格言のとおりなのです。

そんな力があることは、絶対に誰にも言ってはダメとお母様に教えられています。

裏の畑で採れる野菜や、薬代がわりの魚やお肉で、食事は結構贅沢です。
加えてお母様は料理上手。目が見えないのに盛り付けもきれいです。そして食べると本当に頬が落ちそうになります。幸福なのです。

お父様のことはわかりません。
お母様も何もおっしゃりません。
きっと、お母様が襲われた時に、殺されてしまったのでしょう。
私の黒い髪はお父様に似たのでしょうか。

物心ついた時からずっとお母様と二人きりで暮らしています。

私はミヤビ。

ラリル村のアズフルが娘、ミヤビ。
次の満月が来ると、6歳になります。

「お母様、見つけました、カーネルの若葉」
「よく見つけたわね。ミーちゃん、えらいえらい」

薬の元になるカーネルは背の高いクラスの茂みに隠れるように生えているので、見つけにくいのです。
えっへん。

でも、お母様はもっとすごい。
抱えたかごの中は、もうカーネルの若葉やモノシリックの根やファームの実でいっぱいです。

わたしも早く大きくなって、お母様みたいになりたい！

夕方になって、わたしのかごもようやくいっぱいになり家に戻ります。

わたしのかごの中身もほとんどお母様が見つけたんですけどね。

それは言わないお約束なのです！

夕食前に汗を流します。

土間にある大きいたらいにお湯がみるみる溜まっていきます。

お母様の魔法です。水魔法と火魔法を同時に使ってお湯にするそうです。

「魔法の力がもっと強ければ毎日お風呂にしたいんだけど、ごめんね、これが今は精いっぱい」

とお母様はおっしゃいますが、体を洗うことだけにお湯を使うなんて普通はしないそうです。

うちに来る村の人が言ってました。

雨が降ったときに庭で裸になって水浴びする程度だそうです。

水も薪も貴重品だと。

たしかに、サスナさんはともかくリーさんは結構臭います。

せめてうちに来られる前は、体をきれいにしていただきたいところです。

たらいの湯が半分くらい溜まると裸になり入ります。続いてお母様も服を脱いでたらいに入ります。

向かい合わせになります。
お母様のみぞおちあたりが今のわたしの目線です。
少し上には大きなおっぱいが揺れています。

おっぱいの先は、わずかにピンク色がかった輪があるだけでつるんとしています。
わたしの胸にはもう少し濃い色の輪と、つまようじの先みたいにとんがった乳首があります。
お母様の乳首は必要な時にだけ出てくるそうです。不思議です。
このおっぱいを飲んで育ったんだなあと思うと、なんだかドキドキしてきます。

お母様は私から見ても思わずうっとりするほど胸が大きくて、腰が細くて、お尻が締まっています。
視線を下にすると、形の良いおへその下のこんもりとした丘に金色の草むらがなびいています。

大人の毛です。
わたしにはいつ生えてくるのでしょうか。
今みたいに胸がぺったんこのままでは、まだまだでしょうけど。

「じゃあ、いくわよ」
「はい、お母様、お願いします」

目をつむると、細い糸のような水流が何本も上から降ってきます。
何もない空中からお湯が真っすぐ落ちてくるのは何度浴びても不思議です。

お母様の魔法のシャワーです。

シャワーはとても気持ちいいのです。

お湯に空気の泡を含ませるのがコツだそうです。お湯の糸は頭や体に当たって優しくはじけ、汚れをあっという間に洗い流してくれます。お母様のことだから、きっと清浄魔法も練り込んでいるのです。

さすがにお湯だけじゃ、いくら何でもこんなにきれいにならないでしょう。髪もサラサラになりますし。

しっかり汚れが落ちると、シャワーを止めて、お母様が私を優しくタオルで拭いてくれます。

うなじや背中、わきや股の下も。

くすぐったくて変な気持ちになります。

本当はわたしもお母様を拭いてあげたいのですが、背が届きません。

早く大きくなりたいです。

お風呂でもお母様は決してマスクを取りません。

蒸れないのかしら？　と心配になります。

着替えて、しばらくすると夕食です。

お母様の魔法は夜の明かりに、料理にと大活躍。

本当に便利です。わたしも魔法が使えればいいのに。

でも今日はちょっとだけお母様のお手伝いをしました。

野菜の皮をナイフで剥いただけですけど。

美味しいご飯が出来ました。
いただきまーす。

夕食の後、ベッドでお母様にいつものようにお話をお聞かせいただいていたら、いつの間にか眠っていました。

明日もまた、薬草を採りに出かけます。

おやすみなさい。

第12話　ドッチャ少年

それからしばらくして、お母様が村に向かいました。

月に一度、重い怪我や病気の人を診て回る日です。

症状はだんだん良くなったり、逆にだんだん悪くなったりするので、丘の上の家に来られない患者さんは出向いて確認する必要があるそうです。

状態に合わせた薬を調合しないと治りが悪かったり、最悪の場合症状を悪化させることもあるそうです。

薬が毒になる例です。

わたしはいつものようにお留守番です。

わたしはお母様にきつく言われているので、ひとりでこの家の周囲から出たことはありません。

魔法も使えず、体力もない私は、お母様が掛けた結界の外ではたちまち死んでしまうからです。

すぐそばの林にさえ、お母様と一緒でなければ行ってはダメなのです。

だから私はその日も部屋で薬草の名前や効用や調合手順を覚えて過ごしていました。

お母様お手製の治癒薬の辞典です。わたしのために書いてくださったのです。

そもそも、文字もお母様に習ったものです。

村の人は大半文字が読めないので、薬の飲み方の説明などはお母様が絵にして渡していらっしゃいます。
太陽のマークに〇が一つなら、朝一錠といった具合です。
わたしの知る限り、字が読めるのは軍にいたリーさん、サスナさん、村長さん一家ぐらいです。

あれ、普通の農家のサスナさんはどこで文字を覚えたのかしら？
わたし同様、お母様に習ったのでしょうか。

でも皆さん、文字は読めないけど算数は出来ます。
でないと収穫日の計算や物々交換のレートの決定とか出来ないですからね。
畑の測量や作物の目方計算などもやっちゃいます。

それはともかく。

カーネル、モノシリック、ライブラリ、コード、シェル……。

お昼、お母様に作っていただいたサンドウィッチを食べて、また薬草の名前を覚え始めたのですが、窓から差し込むお日様の光で部屋がポカポカして眠くなってきました。

うとうと。

うとうと。

バッカーン！

突然玄関が開く大きな音がしました。

机に突っ伏して寝ていたわたしはびっくぅと飛び起きました。

「な、なに？　なになに？」

「おっ、人の声。誰かいるんだな！」

低めですが、まだ若い声が返ってきました。

慌てて玄関に行くと、わたしよりも一回りほど大きい、真っ黒に日焼けした人がいました。

子ども。

たぶんこれは『男の子』。

山に子どもが来ることはなかったので、私はこの時初めて『男の子』を見ました。

リーさんほどでは全然ないですが、わたしよりははるかにがっちりした体つき。

肩幅も広く、手足も太く大きいです。

伸ばした茶色の髪を後ろで結わえています。

太い眉。ぎょろりとした目。大きな口。

うん、これは間違いなく『男の子』。

「うわ、妖精？」

「はい？」

「めっちゃ色白いじゃん。お前妖精だろ？」
「いや白くないです。それに妖精じゃありません」

肌が白いってのはお母様のことをいうのです。

「え、こんな細くて白い人間がいるのかよ！？　なんだよお前」
「細くも白くもありませんが、わたしはここにいるれっきとした人間です。といいますか、ここはわたしの家です。わたしはミヤビと申しますが、貴方はどちら様ですか？」
「あ、ごめんごめん。オレはドッチャ。道に迷ってたらさ、たまたまミヤビの家を見つけたんよ」

いきなり名前呼びですか。なれなれしい男の子です。

「ラリル村の人ですか？」
「ラリル村？　なんだそりゃ？」
「この近くの村。といいますか、ここも一応ラリル村です。ご存じありませんか？」
「ああ、そうか、このあたりに村があるのか。じゃあ今頃オレの仲間が交渉にいってるかもな。オレたちは隊商なんよ。キャラバン組んで旅しながら商売するんだ。わかる？　ミヤビ」

わかります。隊商のことはお母様に教わっています。
年に数回、馬車の集団が近くの街道を通るとか。
余分に出来た魔法薬を引き取ってもらうこともあるそうです。
貿易（トレード）、とお母様はおっしゃっていました。

「でよ、このへんに薬草が生えてるっていわれてよ、探しに来たんだけど」
「この先を３００歩ほど東に進めば林があります。そこで何種類か

採れますよ」
「えー、もうすぐそこなんだ。人がいたら案内してもらおうと思って来たのに」
「では、もうその場所はわかりましたね。野草ですから、誰が採っても問題ありません。どうぞ、いってらっしゃいませ」
「おいおい、つれねえなあ。オレ、探し回って疲れたんだ。ちょっと休ませてくれよ」

そういわれると、ドッチャの浅黒い肌は汗でびっしょりです。
初めて見る同年代にわたしも冷静ではなかったようです。観察は何より大事とお母様に言われているのに。

駄目ですね。

「なるほど。これは気がつかずに申し訳ありません。入ってそこの椅子にお掛けください」
「へへ、助かるぜ」
「今、お茶を淹れます」
「お茶？　飲み物か？」
「はい」

いくつかの薬草を煎じて飲む滋養茶。疲れが取れます。
もちろんレシピはお母様直伝です。
生水はお腹壊しますしね。

「あちーっ、でも、これ、うめえな！　これが『お茶』かあ」
「ドッチャさんはお茶は初めてなのですね」

私も向かいに座ってお茶を飲みます。

「おお、喉が渇いたらだいたいはクキをかじるからな。よくて水だ」
「茎を齧る……？」
「知らねーのか？　チューチューグサとか、ヒョロナガウリとか。あれはあれで青苦くてうまいぞ」
「そうですか。今度試してみます」
「それにしてもミヤビ、お前なんでそんな喋り方なんだ？　お母様とか、オレのこともドッチャさんとか」
「え？　普通では？」
「フツーじゃねえよ！　そんなの、オトナがトクベツな人としゃべるときのいい方だぞ」
「そうなのですか」

確かに村の人はドッチャみたいなくだけた話し方をします。

「まあいいや。ミヤビには似合ってるからさ」
「似合ってる？」
「その……。お前すっごくカワイイからさ、そういうテイネイでカシコイしゃべり方、ばっちりあってる」
「可愛い？」

きれいなのはお母様ですが、可愛いとは？

「きれいとは違うのですか？」
「さすがにまだ小さいからな！　でもミヤビ、お前大人になったらすっごくキレイになると思うぜ！」

なるほど、きれいの幼生体が可愛いなのですね。

「ありがとうございます。早く大人になる意義がまた一つ増えました。お母様のようにきれいになりたいです！」

「お母様？　ああ、かーちゃんか」
「カーと違います。わたしのお母様はアズフルです」
「は？　お前なにいってんの？　でもお前のかーちゃんビジンなのか。まあそうだろうなあ。そりゃいいなあ」

ドッチャはあらためて私の顔をしげしげと見ました。
遠慮が無さすぎです。
ちょっと恥ずかしくなってきました。

「素顔はわかりませんが、きれいですよ」
「かーちゃんの顔がわからないって、どういうことよ！　お前、いろいろ変わってるなあ」
「いつもマスクを着けていらっしゃるので。といいますか、ドッチャさん、そんなに見つめないでください」
「え、いいじゃん。ミヤビすっげーカワイイもん。ずっと見ていたい」
「え、ちょっと。ごめんなさい。そんなにそばに寄らないでいただけますか」

ドッチャは椅子ごとわたしのすぐ横に移動してきました。
酸っぱい臭いがします。

「で、そのかーちゃんは、どこ？」
「今は村にいます。それより、もうそろそろ落ち着かれましたでしょ。薬草を採りに行かないといけないのでしょう？　遅くなると叱られるのでは？」
「うん……。いや、うーん」

なんだか歯切れが悪いです。

「まだ何か困ったことがあるのですか？」
「うーん、ミヤビ、お前カワイイから、ホントのことという！」

ドッチャに手を取られ、そのまま抱きかかえられました。
発酵したような臭いが鼻をつきます。目も痛いです。

「え、なにを。やめてください」
「ミヤビ軽いなあ。じゃ、逃げるぞ！」
「逃げるってなんですか？　なぜ自分の家から逃げないといけないのですか？　ああっ、それよりお母様の言いつけで駄目です。結界の外に出てはいけないのです！」
「ここにいたら殺される！　あー、クソっ！　もういいや。オレたちが隊商ってのは、ウソだ」
「え？」

わたしを抱きかかえたままドッチャは家を飛び出してしまいました。丘をすごい勢いで登って行きます。

いったい何がどういうことなのでしょうか？

「あれが見えるか、ミヤビ。村はもうダメだ」

遠くで煙が何本も立ち上っていました。
ラリル村の方角です。

「隊商なんかじゃやねえんだ！　オレたちは山賊カガネ一家。この辺りの村はユタかって聞いたから、狩りに来たんだよ！　喰いもんとオンナをな！」
「ええっ！」

山賊！
お母様を襲った、あの山賊！

「丘の上にも家があるのが見えたから、オレが調べに行ってこいっていわれたんだよ。金目のものやきれいなオンナがいるかどうか見て来いってな。っていうか、テイよく村をオソう組から外されたんだけどな。オレにはウバったものの分け前はナシってわけだ！　くそっ！」
「ええ、なんですって！」
「だがミヤビ、安心しろ。お前はオレがマモってやる」
「ドッチャさんも山賊なら、全く安心できません！」
「オレは生きるためにしかたなくカガネ一家に加わったんだ。親が殺されたんだから、しかたなくなんだよ！　見捨てられて死ぬよりはマシだろ！」
「つまりドッチャさんは親を殺した相手の仲間になっていると、そういうことですか？」
「そうだよ。でもいつか逃げ出そうとずっと思ってた。それが今だ」
「なぜ今なのですか？」
「ミヤビに会ったからだよ！」
「理屈が超展開すぎてついていけません。意味が分かりません。いえ、それよりも、降ろしてください。ラリル村にはお母様がいるのです！」
「安心しろ、ビジンなら殺されない！」

お母様はきれいですが、顔がどうなのかはわたしにもわかりません。

「だからほっとけとおっしゃるのですか！　そんなわけには！」
「お前の方が危ないんだよ！　こんなかわいいミヤビをコワされるわけにはいかねーんだ！」

「壊す？　殺すではなくて？」
「ああ、ぜってーお前のまんこ、ガバガバのブチブチにコワされる！　おかしらはそういうシュミのヤツなんだよ！」
「まんこ？」
「まんこ知らないのかよ！　股の間の穴だよ！」
「！」

なるほど、まんこというのは性器、特に膣のことを指しているのですね。
ドッチャが言ってるのは、つまり強姦。これは貞操の危機です。

たしかに、陰茎を膣に挿入されるのは未熟な私には負担が大きいと思われます。
膣は産道にもなるので、大人になっていれば耐えられるのでしょうが。
それに膣には処女膜があります。
愛のない性交だと破瓜の痛みはとんでもないとお母様に教わりました。
ましてや強姦で処女喪失なんて、耐えられないでしょう。

性交は、愛した殿方と丁寧に体を重ねるものでなければならないとお母様がおっしゃっていました。
愛する男女にのみ許されるのが性交の快楽。そしてその結果、愛の結晶たる子供が生まれるのです、と。
互いの愛を引き出す房中術というのも教えていただきました。接吻や愛撫などのノウハウです。

なぜまだずっと先のことであろう性交について、今のわたしに詳細に教えるのだろうと不思議に思っていましたが、このような危機を想定されていたのですね。

なにが起こるのかを知っているのと知らないのとでは、リスク管理に天地の開きがあります。

さすがはお母様です！

それにしても殿方の陰茎とは、膣を破壊するほどの威力があるのですか。そのようなものが股についているとは、男性恐るべし、なのです。

たしかに、リーさんなどの体から推し量るに、相当大きくて堅そうです。

ついその姿を想像してしまいました。

ドッチャのはそうでもなさそうですが。

でも、ということはお母様の貞操の危機もまた現在進行形です。

村に山賊の本隊がいるのなら、お母様がまた襲われてしまいます。

輪姦！

そんな、おぞましい！

肌にチクっとした感覚がありました。

お母様の結界を抜けたのです。

お母様の言いつけを破ってしまいました！

あれ？

おかしいな。

ドッチャには、お母様の結界が効いていない？

なぜ？

第１３話　アズフルの怒り

「離してくださーーい！」

手足をバタバタさせますが、ドッチャはわたしを抱きかかえたまま山の奥へ奥へと進んでいきます。

本気でこのまま逃げるつもりのようです。

仕方ありません。暴力的なことは避けたかったのですが、このままお母様と離れ離れになるわけにはいきません。

思い切り右足を後ろに上げて、そのままブンと振り下ろしました。

狙いはドッチャの股間。

お尻側から足首がきれいに股倉をシュートしました。

ぐにょんと二つの丸いものを蹴りつぶす感覚。

「ぐぎょえええええっ！」

ドッチャはカエルが潰れたような悲鳴を上げ、私を抱えたままつんのめって転びました。

痛みで硬直したのです。

男性の急所、睾丸蹴り。

「おほおおおおおっ」

ドッチャが両手で股間を押さえてぴょんぴょん跳んでいるうちにわたしは逃げ出しました。

転んだ時にあちこち擦りむいたようで、服に血が点々とついていますが、それどころではありません。

早く家に戻り、対策を考えないと。

「このやろー！　ミヤビ、てめー！」

後ろでドッチャが悪態をついていますが、まだ痛むのか追いかけて来ません。この隙にとにかく家へ。

家にはいろんな道具があります。

山を駆け下りていくと、結界にぶつかりました。お母様の魔法です。

あれ？　入れない？

結界魔法は中からは出られますが、外からは入れないのでした。ということは、結界は有効に機能しているということです。どうやってドッチャは家まで来れたのでしょう？

しかしこれは困りました。家に入れないとなると、村に行くしかない？

でも、わたしが無策で村に行っても、山賊に捕まるだけでしょう。強姦コースまっしぐらです。

それは嫌です。

では、どうしたら？

結界の周囲を歩きながら考えていると、「おい」と声を掛けられ

ました。

そばにドッチャが立っていました。

「あ、もう回復されたのですか」

「まだイテエよ！　なんつーことを！　オレはお前を助けてやってるんだぜ！」

「お願いしているのに離してくれないからです。あまりああいう方法は取りたくはなかったのですが。でも、やむを得ずとはいえ暴力を使ったことは申し訳ないと思っています。ごめんなさい」

「チョーシ狂うやつだな！　ほら、さっさと逃げるぞ。見てみろ、もう村は大火事だ。イるもんゼンブかっさらったんで、家に火を着けて回ってやがる」

数本だった煙が、今は大きな火の手になっています。黒煙がもうもうと立ち上っています。

お母様や、リーさん、サスナさんたち村の人はどうなったのでしょうか。

胸が痛くなります。

あれ？

ちょっと待ってください。

これ、おかしい。

なぜ煙がまっすぐ上っているのかしら？

この季節、山から強い風が吹き降ろします。現に私がいるこの丘

では時折強い風が吹いています。

でも、黒煙は壁のようにまっすぐ空に伸びています。

まるで何かを隠すように。

「おい、早く。こっちにも仲間が来ちゃうぜ」

「いいえ、山賊のお仲間は来ないはずです」

「なにイってんだよ！　ほんとにヤバいんだよ！」

「お仲間は、ここには大したものがないと思ったから、子どものドッチャさんを寄こしたのでしょう？　村で必要なものを奪った以上、わたしの家まで襲う必要はありません。ドッチャさんがよほどの値打ちのものがあるという報告をすれば別ですが」

「オレが帰ってこなければ誰か見に来るって！」

「それもないはずです。ドッチャさんはお仲間に捨て駒にされたのです。獣も多い山の中の家です。誰かいるとしたら、手練れの猟師あたりが住んでいると考えるところでしょう。そこへドッチャさんを向かわせたというのは、お宝があればよし、仮にドッチャさんが返り討ちにあっても構わないという判断だと思われます。もしドッチャさんが帰ってこなければやはりこの家は危険だったということですから、お仲間が来るはずがありません」

「むむ……」

それに。

「そもそも、山賊が村を襲ったこと自体が嘘ですね」

「何イってるんだよ！　あれが見えないのか！」

「あの火事は幻です」

「なん、だと……」

「今、この山から強い風が吹き下りていますが、まったく煙がたなびいていません。視覚を狂わせる、幻術系の魔法ですね。障壁魔法

の応用です」

お母様も獣を避ける時に使っていました。幻術（イリュージョン）を。

「ちっ。勘のいい奴だな。これだから賢（さか）しい子どもは嫌いだよ！」

「ドッチャさん、その男の子の姿も幻術ですね」

「なんでわかった！？　オレの変化（へんげ）は完璧のはずだ！」

「臭いです。それは大人の男の人の臭い。体臭が濃すぎました」

「臭いだとぉ！　オレは臭かったのか！　そんな馬鹿げたことでバレたのか！？」

「ここに来る前にお風呂に入るべきでしたね。人間の臭覚は疲労しやすいので、自分の臭さに慣れてしまうのです」

「あー、もー、芝居はヤメだ！　無理やりにでも連れて行く！」

びゅんと光の矢が背後から降ってきて、わたしに掴みかかろうとしていたドッチャの足もとを穿ちました。

「うおっ！」

ドッチャが飛び退きます。

「お母様！」

すごい勢いでお母様が丘を駆け上がってきました。

わたしの体がキラキラと輝き、擦り傷が消えました。お母様の治癒魔法です。

「ミーちゃん、ごめんね。怖かったわね。もう大丈夫よ」

「お前、やはり正体を隠していたな！　魔法を使うとは！　アズフル！」

「娘を脅かした罪、許しません！　万死に値すると知りなさい！」
「ちっ！」

ドッチャの体がおぼろげになると、筋肉の盛り上がった青年が現れました。
リーさんをずっと若くしたような。
これがドッチャの正体なのでしょう。
太い眉と結わえた髪はそのままでしたが。

「エレメントマジック・バーニング！」

ドッチャから炎が伸び、お母様を襲います。
見た目戦士系なのに、ドッチャも魔法使いのようです。

「万象の伝わりを隔て森羅の理（ことわり）を離せしむ」

お母様の魔法障壁が光の壁となって炎をはじきます。さらにその平面の壁が折り紙のように折りたたまれ、炎を飲み込み霧散させます。

「かかったな！　もらったー！」

ドッチャはいつの間にか剣を握って間合いに跳び込んで来ていました。
魔法剣士だったようです。
そして炎魔法は囮。

お母様、危ない！

「加速（アクセレート）！」

お母様の姿が掻き消え、次の瞬間にはドッチャの頭を地面にめり込ませていました。

一瞬で空中へと移り、体落としのように叩きつけたのです。

お母様に抑え込まれたドッチャは今度は本当に潰れたカエルのようになって、ピクピクと震えるだけで、立ち上がることすら出来ません。

取りこぼした剣はお母様が蹴って遠くにやりました。

「このまま焼いて灰にするわ。何か言い残すことはあるかしら」

「お、おお、か、カンベン、し、して、くれ」

「駄目よ。最後に天国に行けるようテラスアリア様にお祈りなさい。得意でしょ？」

「ま、待て。待ってくれ……待ってください。ミヤビ、ミヤビ様を助けようとしたのは、ほ、本当です」

「私から娘を奪おうとしておいて？」

「ミヤビ様は、アズフル様と一緒にいては、いけないと」

「あなたはあそこの側の者ですよね。それで、助けるというのは？」

「儀式の準備が進んでいます。ミヤビ様が6歳になる夜に。それでミヤビ様は救われます」

「なるほど。まあそんなことは貴方から聞くまでもなく承知しているけれど。貴方、あそこに連れて行かれたら、娘はどうなると思いますか？」

「え？」

「助けるどころか、地獄が待っているのよ」

お母様の声が低く冷たくなりました。

「じゃあ話はおしまいね」

「え、なんで、オレ、……私は、知ってることを、ちゃんと、うぎゃあああああっ！」

お母様の腕から青い炎がわき上がり、ドッチャの顔を焼きました。

「あぎゃあああああああっつ！」

髪や肉が焦げる嫌な臭いがします。

でもお母様は、すぐに手を離しました。ドッチャは顔を押さえて転げまわります。

「娘の前だから、これ以上のことはやめておくわ。貴方ならその程度、自分で治せるでしょ」

しばらくドッチャはのたうちながら騒いでいましたが、突然立ち上がると猛ダッシュで逃げていきました。

たぶん痛みより生存本能が勝ったのでしょう。

「お母様！」

「ミーちゃん！　ごめんね！　怖かったでしょう！　お母さんも怖かったわ。結界の警報が3度も鳴ったもの。最初の警報で慌てて戻ってきたのに、間に合わなかったらどうしようかと」

お母様はわたしを抱きしめます。

いや、ものすごく間に合いました。村からここまで、普通の人なら数時間はかかります。

お母様を信じていました。

「村が襲われたのが嘘だと分かった時点で、お母様がお戻りになると思っていました。だから出来るだけ話を引き延ばして」

「さすがはミーちゃん。偉いわね」

お母様はとても強いです。今までも山でまれに遭遇する獣や魔獣を魔法で瞬殺していました。

最初の頃は驚きましたが、今ではきれいで強いお母様は素敵です。

それにしてもドッチャの魔法は弱かったのです。

余り強くないとおっしゃるお母様の火魔法の方がうんと強力でした。

魔法剣士などというどっちつかずだからでしょうか。

「でもお母様、いろいろわからないことが」

「そうね。こんなに直接的な接触があっては、もう黙ってはおけないわ。きちんとお話しないとね。でも、ここではなんだから、まずは家に入りましょう」

「はい、お母様」

「それにさっきから覗いている方もいますしね」

その時、何かが消える気配がしました。

別の誰かがこの一部始終を見ていたようです。

第１４話　魔人の素顔

お母様は、家の中のものを片っ端からストレージに収納していきました。
みるみる何もかもが無くなっていきます。

「お母様、いったい何をなさっていらっしゃるのですか？」
「いろいろ騒がしくなってきたし、ミーちゃんも大きくなってしっかりしたから、潮時だと思うの。ここを引き払うのよ」

お母様にしっかりしたって言われました！　やったー！

「それは、逃げだすということですか？」
「違うわ。争い事を極力避けるだけよ。敵が来るのがわかっていて、ミーちゃんを危険にさらすわけにはいかないでしょ？」
「わたしのせいですね。ごめんなさい。お母様」

やっぱりお母様に護っていただかないと駄目のようです。しょんぼり。

「ミーちゃんが謝ることではないわ。もともと、６歳になる前にここに残るか、別の場所に行くか決めないといけなかったの。ここはいいところだったのだけれど、残念ね」
「なぜ家ごと収納しないのですか？　その方が早いのでは？」
「この家はもともとここにあったものだから。それに家までなくなれば、引っ越したのが早く知れてしまうじゃない？」
「わたしに何かお手伝いすることはありませんか」
「大丈夫よ。ミーちゃん、ありがとう。もう終わったわ」

家の中は、空っぽになっていました。椅子もテーブルもなにもかも。

「では行くわよ。さっきの覗き屋さんが仕掛けてくる前に」

「どちらへ？」

「街道を西に行くと別の町があるのよ。ちょっと遠いけれど、そこでならゆっくりお話が出来ると思うわ。街道沿いの宿場町だから」

宿場町！

人がたくさんいるところですね。

裏庭に出ると、畑も土ごとごっそりなくなっていました。

お母様、徹底しています。

地面付近に光の輪が描かれ、その中から馬のいない馬車のような乗り物が出現しました。

馬車にしては背が低く、窓がスリットのようにしか空いていない、楔のように尖った形ですが。

「お母様、これは聖なる遺物（アーティファクト）ですね？」

「昔ダンジョン攻略中に見つけた魔導車（マジックビークル）よ。ミーちゃん、乗って」

お母様は凄腕の冒険者だったのでしょうか。

だとしても、納得ですが。

ドアが甲虫の羽のように斜め上に勝手に跳ね上がりました。

中は二人乗りでした。一人用の椅子が二つ横に並んでいます。お母様が左、わたしが右に隣り合って座ります。

ドアが閉まると、ギュウウンと唸るような低い音がしてきました。ぶんぶんぶんと振動も伝わってきます。

「魔導機関（マジックモーター）がちょっとうるさいけれど、我慢してね。出発！」

お母様が丸い舵輪を持ち、床のペダルを踏み込むと、後輪がきしむような音を上げたかと思ったら、体が椅子に押し付けられました。発車したのです。

舵輪はハンドル。ペダルはブレーキとアクセル。オートマティックミッション。悪路走行用のノーパンクタイヤ。傾斜装甲（スロープトアーマー）。ガルウィングドア。

この魔導車（マジックビークル）はモノコックボディの強力装甲車（M・S・V）タイプ。

あれ？　この知識はどこから？

お母様に教えていただいたことはないはず……です。

それにしてもお母様、目が見えなくても運転が上手です。悪路なのにカウンターを当てながらものすごいスピードで進んでいきます。

西に向きながら山を下り、ラリル村から離れたところで街道に出ました。そのまま街道を走るのかと思いきや、さらに南西に向かいます。

「お母様、どこに向かってらっしゃるのですか？」

「この先に渓谷があるの」

そういえば村の反対側には川があると聞いていました。わたしの

中では小川のイメージだったのですが、谷だったとは。

「街道を使わないのは？」

「この車、目立つでしょ。だから谷底を走るのよ」

なるほど、納得です。しかし、谷底に降りるって、どうやるんでしょう。まさか？

「ミーちゃん、そろそろ渓谷が近いわ。シートの左のボタンを押して」

細いベルトが数本シュッと繰り出し、わたしをシートに固定しました。ハーネスです。

「口をしっかり閉じておいてね。行くわよ！」

ビークルは崖から谷に飛び込み、ががががと壁を降りて、というか落ちていきます。

谷底に激突する直前、斜め上に車体が浮きました。

お母様が魔法障壁で傾斜した道を作ったのです。谷底に着地した時軽くバウンドしましたが、その程度でソフトランディング出来ました。

半分は魔法障壁、半分はこの車の性能とお母様の運転技術（ドラテク）でしょう。

そのまま谷底の砂利道を走りますが、しばらくしてお母様が車を停めました。

「お母様？」

「ごめんね、ミーちゃん。読まれていたわ。ほら、待ち伏せされてる」

前方に、川を塞ぐように壁がありました。
ちょっとしたダムです。

「土魔法（クレイ）……」

壁の前に兵士が一人現れました。あれは、リーさん!?

足には木の棒ではなく、鋼鉄の義足をつけています。

「悪いな。アズフル。逃がすわけにはいかないんだ」

リーさんの大きな声は、モーターがうなる車内にまで響きます。

お母様はただちにシフトをバックに入れ、タイヤを軋ませながら後退していきます。

「逃がさねえと言ってるだろ」

壁の裏から何十という馬に乗った騎兵が出てきました。後ろ向きのまま走るわたしたちを追いかけて来ます。
速いです。バック走行とはいえ、魔導車（マジックビークル）が追いつかれそうです。
足場の悪い川底ですが、手練れの騎兵たちです。

お母様がシフトをドライブに戻しました。河原の石を弾き飛ばしながら、騎兵に向かって車が唸りを上げてダッシュします。慌てて左右に分かれ道を開けますが、何人か落馬しました。

騎兵の群れを抜けると、土魔法（クレイ）の壁がグングン迫ってきます。ぶつけて押し通るのですか？　壁のすぐ前にリーさんがいますよ！
お母様！？

あわや衝突！　と思った瞬間、車がジャンプしました。傾斜カタパルト。お母様の魔法障壁です。
ビークルが放物線を描き壁を越えていきます。

「させるかよ！」

壁直前に立っていたリーさんが、両手で持った幅が太く長い巨大な剣を背中側に大きく反らしました。それは剣というより鋼鉄の厚い板のようです。

ぶん、とビークルに向かってその巨大な剣を振りかぶりました。

「ミーちゃん！」

お母様が叫んだと同時に、天井が吹っ飛び、ハーネスに固定されたままのわたしはシートごと宙へ飛び出していました。

緊急射出（ベイルアウト）。シートは座面の下から魔法の炎を噴射してぐんぐん高くなります。
高度ゼロ、速度ゼロでもドライバーが無事なゼロゼロ規格準拠なのでしょう。

真下で魔導車（マジックビークル）がリーさんの大剣により縦真っ二つになるのが見えました。

そして爆発！

リーさんの剣の腕はもの凄いです。片足なのは間違いありませんから、現役時代はどれほどであったのやら。

どこぞの魔法剣士とは比較になりません。

しかしお母様は！？

爆発の中から何本もの青い炎が龍のように飛び出しました。
そしてその炎を操っているのは無傷で飛び出してきたお母様。

どこぞの魔法剣士とは比較にならない高温高速の炎です。さすがはお母様！

しかし、そのお母様の炎の魔法をリーさんは大剣で右に左に斬り捨てていきます。やっぱり凄い剣技です。

わたしを乗せた射出シートは崖の上まで飛び出しかけたところで炎が停止しました。
最初はゆっくり、そして加速しながらひゅーんと谷底に落ちていきます。

これはまずいのでは？

シートの背中が開いて、何かの塊が飛び出すと、開いて大きな傘になりました。
降下速度がぐんと遅くなります。
パラシュートです。ちゃんとした射出装置で助かりました。

？　また、教えていただいていないはずの言葉が浮かびました。

ゆっくりと降りながら、お母様とリーさんの戦いを見つめます。
騎兵たちも戻ってきて二人を取り囲みます。

リーさんが手を出さないよう指示しているのでしょうか。騎兵は円陣を組んだまま距離を保ち、それ以上近寄りません。

お母様は加速して位置を高速に入れ替えながら炎の龍を次々と出現させます。
リーさんもあらゆる方向から撃ち出される超高速魔法に大剣で素早く対応していますが、すべてをさばききれず腕や脚、頭が焦げてきています。

お母様がかなり押しています。いい感じです！

やがて、赤、青、黄色の炎の龍が同時に出現し、三本が螺旋のようにねじれあってリーさんを正面から襲います。

リーさんは大剣に両手を添えて正眼に構え、螺旋龍を真正面で受け左右に斬り割きます。

半分になった螺旋龍は背後の土の壁にぶつかり、二つの大穴を開け、そこから壁が崩れていきました。

リーさんが構えた大剣に突如上空から雷が落ちました。

どっがらがっしゃーん！

お母様の雷魔法（ライトニング）です。

リーさんはぶすぶすと全身が焦げ、剣を持ったまま倒れました。

火魔法と雷魔法の同時詠唱。剣で螺旋龍を斬るのは織り込み済みだったのです。

お母様の作戦勝ちです。

リーさんが倒れたのを見て騎兵が一斉にお母様に襲い掛かりました。お母様は加速し高く跳び上がります。

わたしはその時衝撃と共にシートごと転がりました。谷底に着いたのです。

遅れてパラシュートが覆いかぶさってきましたが、ハーネスのスイッチを切って這い出しました。

お母様が空中から何本もの炎を竜巻のように渦を巻かせて騎兵を一気に薙ぎ払っているところでした。

お母様凄い！

これで全部やっつけた！

突然地面から土が盛り上がり、細長い槍のように伸びてお母様の股間を貫きました。

槍の先がお母様の口から出てきました。ごぼっと血の塊が溢れて落ちます。

土魔法！

お母様が！

串刺しに！

上を向いたまま、お母様がだらんと脱力しました。土の槍は細長い円錐形なので、体が裂けでもしない限り抜けず、下にも落ちません。

これは、串刺しの磔です。

慌てて駆け寄ろうとしましたが、誰かに手を引っ張られました。

後ろにいたのはサスナさん！

「サスナさん！　なぜここに！？　離してください！　お母様が！」

「駄目よ。今しかない。連れて行くよ！」

「お母様！」

そのまま抱え込まれました。なぜ誰も彼もがわたしをさらおうとするのでしょうか。

万力のような物凄い力です。抱えられた胴が内蔵破裂しそうなくらいです。

わたしを小脇に抱えたまま、サスナさんはまるで蜘蛛のように崖を登り始めました。

これまた、物凄いスピードです。

農家をやってると、筋力がこんなにつくのでしょうか。

お母様が、抱えられて壁を登るわたしに気がつきました。

「ミーちゃん！」

喉から石の槍が出ているのにやけに明瞭な発音でお母様が叫びました。
がん、と音がしてサスナさんが何かにぶつかりました。
見上げると、光の粒がサスナさんの頭から花火のように出ていました。魔法障壁の抵抗です。
でも、サスナさんは壁から落ちることも、気絶することもなく踏ん張っています。
多分サスナさんの頭上には物凄い圧力が掛かっているはずです。
「うぐっ！」
今度はお母様が苦悶の声を上げました。
慌てて視線をお母様に戻すと、騎兵たちが剣を槍に持ち替え、馬に乗ったままぐるりと取り囲んで下からお母様を突き上げていました。何十本もの槍が、傘の骨のようにお母様に突き刺さっています。
お母様の攻撃を受けても、騎兵も馬も生きていたのです。
お母様は手加減した？
なのに、なんてことを！
「お母様あああ！」
「大丈夫よ、ミーちゃん」
お母様のマスクが青白い炎に包まれ燃え上がり、灰になって消えました。
そして、お母様の素顔が露わになります。

それはそれは、美しいお顔でした。真っ白い、傷一つない肌。

ただ、普通の人と大きく異なっていたのは、その目が赤い眼球に金色の瞳だったこと。

ギロ、とお母様が騎兵たちを睨むと、みるみるお母様の全身が金色に輝く炎に包まれました。

服が燃え落ちますが、お母様はさらに炎を広げます。まるで翼のようです。

炎が大きく羽ばたくと、お母様を貫通した石の槍も、突き刺さった騎士たちの槍も、あっという間に炭化し砕けて消えました。

そして、自由になったお母様がわたしに向かって飛んできます。

「やはり悪魔だったのね！」

サスナさんが叫びました。

悪魔！？

お母様が、悪魔！

悪魔とは、これほどまでに美しいものなのでしょうか。

第１５話　共闘

「どおりゃあ！」

大きな声の主はリーさんです。

谷底から伸びる土で出来た踏み台に乗り、お母様を追撃してきます。

まるで自在に曲がるエスカレーターです。

あるいは土の波の上に立つサーフィン？

また、教えられていない単語が浮かびました。わたしはどうにかなってしまったのでしょうか。

それにしてもお母様の雷撃を受けても再起不能にならないとは。

騎兵同様手加減をなさったのか。

思うに、半分は鋼鉄の義足がアースとなって電流の大半が大地に流れたせいでしょう。

皮膚表面は焦げましたが、内部にはダメージが少なかったということですね。

リーさんはぶん、ぶんと大剣を振り回しお母様の行く手を阻みます。

お母様はわたしまで直進するのをあきらめ、空中で左右にロールして避けます。

その間にわたしを抱えたサスナさんはカニのように崖を横移動し

て、魔法障壁の端をかいくぐっていました。
いったん障害を抜けてしまえば、登るのは早い、早い。
ボルダリングの世界チャンピオンになれそうです。

って？　ボルタリングって、なんのことでしょう？

「待ちなさい、サスナさん！」
「余所見をするとはいい度胸だ！」

リーさんが土の踏み台を蹴って、お母様に跳びかかりました。
お母様の裸の胴を横薙ぎにします。

今、お母様は胸と下腹部が黄金の炎にくるまれています。そして背中からは同じく黄金の炎の翼が広がっています。
後は素肌です。

おなかの部分は形の良いおへそを含め裸を晒している状態です。
燃え上がれセクシークイーン！　ですね。
個人の感想ですが。

そのおなかに剣が届きました。わき腹からおへそに掛け深く切断され、血と腹膜に包まれた腸の一部が噴き出ます。

しかし、下腹部の黄金の炎が傷口を覆うと、すぐに塞がりました。
治癒魔法というより、これはもはや再生です。

リーさんは着地点まで伸びてきた土の踏み台にすっと降りました。
敵ながら息の合ったコンビネーションです。

「予想以上に厄介な奴だな！　とにかく足止めだ！」

リーさんがスロープを駆け下り、リーさんがいなくなった先端から何本もの細い土の槍がものすごいスピードで伸びていきました。

お母様に真っ直ぐ向かい、貫こうとしますが、翼を振ってローリングし余裕で避けます。

しかし槍もまた向きを変えて伸び続け、今度は四方に広がってお母様を追い詰めます。

お母様は加速して包囲を抜けました。

けれど、避けた先の崖から別の土の槍が次々に伸び、加速中のお母様を襲いました。

自ら突っ込むような形になり、槍は深くお母様の体を串刺しにしました。

谷底からのエスカレーターの槍は引っ掛けだったのです。

さらにその下からの槍も動きの止まったお母様へと伸びていきます。

ぶすぶすぶすと肉を貫き、お母様は壁と谷底から、十文字に完全に宙に縫い止められてしまいました。

「一団斉射！」

リーさんの号令です。

騎兵隊が今度は弓に替え、空中に固定されてしまったお母様へ射ち込んできました。

動かない的を外すはずもなく、全ての矢がお母様に突き刺さり、あっという間にハリネズミのようになります。

ばすっ！　ばすっ！　ばすっ！

刺さった矢の先端部（アローヘッド）がお母様の体内で爆発しました。火薬が仕込んであったようです。

爆発のたびにお母様が空中で狂ったダンスのような動きをします。肉が千切れ、腕が飛び、脚が粉砕され、肉片がぼたぼたと落ちてきました。

あの美しいお母様がぼろぼろに！

「再度斉射！」

さらに新たな弓矢がお母様を襲います。

爆発の中で胴体が千切れ、首がもげるのが見えました。体の芯を土の槍に深く縫われているため、粉々にならないと落ちて来ません。

それでもだんだんと谷底に落ちた肉塊が増えていき、その分お母様の体が小さくなっていきました。

やがて黄金に燃え上がる翼が消え、土の槍がシュッと壁と谷底に収納されるように消えました。

最後に残った胸の部分が槍から抜けてぼとんと落ちました。

穴だらけになったお母様のおっぱいでした。

その時、下向きのわたしの視界にも空が映りました。サスナさん

は間もなく崖を登り切るところです。

リーさんや騎兵たちは、剣や弓を構えたまま用心深くお母様だった肉片の山に近寄ります。

突如、その肉の山から黄金の炎がぎゅんと伸び、一人の騎兵の首に巻きつきました。そして肉片の全てが炎に包まれると、その騎兵のところに集まり、炎が人の形をとりました。

すぐに馬にまたがり騎兵を羽交い絞めしているお母様の姿になりました。

肉の山は消えてなくなっていました。

先ほどは槍を炭にした黄金の炎ですが、今は熱くないのでしょう。馬には腰の、騎士には胸の炎が直接当たっていますが、燃えたり熱がる様子がありません。

そもそもお母さま自身が火傷してないですし。

お母様は騎兵の兜をむしり取り捨てました。

その騎兵は、栗毛のショートヘアの若い女性でした。

お母様をまじかに見て、目を見開きます。

ええ、貴女もきれいなお顔ですが、お母様は桁違いですからね。

「貴女、一人だけ弓を射てなかったでしょ。土魔法の制御で手いっぱいだったのよねえ」

「トーラ！」

「うまく魔法の流れを隠蔽したわね、リーさん。土魔法の術者がわたしにもわからなかったわ。この魔法使いさん……トーラさんはあなたの娘さんね。本当は参加させたくなかったのでしょう？　こん

なに見事に隠すなんて。それにしても息がぴったりのはずだわ。親子揃って軍属とは、ご立派ね」
「アズフル、貴様……。その手を離せ！」
「私を討伐し、ミーちゃんを連行すればリーさんは士官に復帰、娘さんは特進というところかしら。偉い方々の考えそうなことだわ。リーさんはそんなことに乗せられるタイプじゃないと思っていたのに、残念」
「よい足を作っていただいた。その恩には報いねばならぬ」
「あらあら。私もいい薬を調合してあげたのに。その恩には報いなくてもいいの？」
「魔人に恩義は感じぬ」
「あ、差別反対」

お母様に半ばからかわれながらも、リーさんはじりじりと間合いを詰めています。騎兵隊もゆっくり位置を変え、お母様を囲うように移動していきます。

「手を離せと言っている！」
「貴方の娘さんには二度も串刺しにされたわ。死なないからといって、痛くないわけではないのよ。復元で随分魔力を消耗させられたし。ちょっとお返ししてみようかしら。ここから、ここまで。うふふ」

片腕で羽交い絞めにしながら、もう片方の手をトーラさんの股から顔まで撫でるようにします。
鎧の上からですけれど。

「娘から、手を離……し、てくれ。……頼む！　アズフル」
「随分虫のいいことね。リーさん、この状況で人質を手放すと思う？　でもリーさんは友達だから、頼まれたらしょうがないわね。特

別よ」

お母様がバンザイをしました。

咳き込みながらトーラさんが体を折り曲げます。
鎧の胸がお母様の腕の形にへしゃげていました。凄い力です。
肋骨の2、3本は折れているのではないでしょうか。

え？　谷底から遥か上にいるのになんでそんなに細かくわかるのかって？
わたしは目も耳もいいのです！

と言いたいところですが、お母様です。実況中継でわたしに伝えていらっしゃるのです。
観察は何より大切ですから。

「はい、娘さんを大切に！」

お母様はトーラさんを馬から引き剥がしてリーさんに投げました。
慌ててリーさんが剣を捨て両手でキャッチします。

その隙に翼を広げると、再び空中に舞いあがりました。
今度こそ、わたしの元にやって来られるようです。

「福音よ、聖なる柱となりてそのものに祝福を与えよ。漆黒の闇を払え四獣の咆哮！」

突如響き渡った詠唱と共に、４本の光の剣が天より飛来し、飛行するお母様を斬り裂きました。
両肩両太ももを切断され、切れた手足は落下しながら光の粒とな

って消滅しました。
お母様は切り口から大量に出血しつつも、手足を失った姿のままこちらに向かってきます。

お母様の表情に、はじめて焦りの色が見えました。

再生しない？　いや、出来ない？

「ガーランド兵ども！　魔人には聖なる力、光の魔法しかかなわねえ！」

見上げると崖の上に数名の青い法服姿の男女がいました。
叫んでいる声に聴き覚えがあります。

あれは、ドッチャ！

急にサスナさんが降りはじめました。いや、お母様の魔法障壁に押し下げられているのです。崖の岩を掴んでいる指がたちまち血で染まり、爪がバキバキと剥がれていきます。

「万象の伝わりを隔て森羅の理（ことわり）を離せしむ」

落下が止まりました。ドッチャがサスナさんの下に魔法障壁を展開したのです。しかしこれでは上下サンドイッチになってサスナさんがぺちゃんこになってしまうのでは！？

と、上からの圧力が消えました。お母様が魔法解除したのです。

サスナさんがふうと深呼吸します。

「タランジの草（グラス）。今のうちに上がってこい。ほら、破界は限りにあらず、輝く法にこそその望みを与えよ。大サービスだ」

ドッチャがサスナさんに強化魔法を掛けます。

その一方で。

「漆黒の闇を払え四獣の咆哮」
「立ち昇る芽吹きの宴よ太陽のもとに集い賜え」
「顕現せよ大いなる癒しの使者」

ほかの法服の男女が魔法を連続詠唱します。
お母様を光魔法で攻撃し近寄らせないようにしつつ、谷底の兵士たちを全体回復して光の加護を付与します。

「ガーランドどもも一時共闘でいいな！　このバケモノを片付けないと話が先に進まん！」

ドッチャのくせにお母様をバケモノ呼ばわりするとは！
一度はアズフル様、ミヤビ様と呼んだのに。
あの敬った言い方も、ただのその場しのぎだったのですね。これがドッチャの本性ですか！

といいますか、ドッチャはどこぞの魔法剣士、ではなくて、本業は法術士。
本当に、とことんフェイクをかます人です。

「てめえらに光の加護を与えた！　それなら魔人を殺せるぞ！」
「おお！」

騎兵が弓を番えました。

リーさんは気絶したトーラさんを抱いたまま何も言わず、お母様を見つめています。

サスナさんは崖を登りきりました。

法術士の一人が息を荒くしているサスナさんを魔法障壁で動けなくしました。

サスナさんは悪態をついていますが、どうにも出来ないようです。

わたしは女性の法術士に手を曳かれ、谷を背にして抱きしめられます。

見るなということなんでしょう。

しかし、首を捻じって、谷の方を見ます。

見ないわけにはいきません。

「斉射！」

リーさんに代わって騎兵の一人が号令を掛けました。騎兵の隊長なのでしょう。

光の加護のせいか、矢はさっきよりも高く飛び、手足を失ったお母様に雨あられと降り注ぎます。

頭や背に次々突き刺さる矢は、またお母様の中で爆発しますが、今度は吹き飛んだ箇所が光の粒となり消えていきます。

穴だらけのスポンジのような痛々しい姿になりながら、お母様はわたしに向かって飛ぶのをやめません。

「ミーちゃああーん！」

お母様が叫びます。何度も様々な魔法を繰り出しているのですが、法術士たちの魔法障壁ですべて打ち消されています。

崖の上の見えない壁が光を放っています。お母様の魔法が光の粒になって霧散しているのです。

「ミーちゃん！」

お母様がすぐそこまで近づいて来ました。苦悶の表情で無い腕を伸ばそうとしているのが分かります。

わたしも手を伸ばそうとした時、お母様との間にドッチャが割り込みました。

剣を上段に構えています。

魔法剣士の時に使っていた剣ではありません。

これもまた聖なる遺物（アーティファクト）。光属性が宿った祝福されし剣（エンブレスソード）です。

なぜかそのことが分かりました。

「アズフルよぉ。オレを殺さなかったのは、てめえの失敗だったな」

そういいながら、剣を振りかぶりました。

もう避けることも出来なかったのでしょう。何らの抵抗もなく、お母様の頭の先から股まで、正中線上を剣が通り抜けました。

お母様の美しい顔が、体が、血しぶきをあげて左右に分かれ、ただ、慣性でわたしの目の前に落ちて来ました。

瞳は開いたままでしたが、すぐに金色の光を失い、黒いガラス玉のようになりました。

「まあマジに殺されかけたら、光魔法でレジストするつもりだったけどなあ。魔人のくせに人を殺さないとは、いったいこいつはなんなんだ」

真っ二つにされたお母様の体が、みるみる光の粒になって消えていきます。

「お母様！　あああ！　あああああああ！」

あまりの衝撃にそれまで声も出せず、動くことも出来ずにいたわたしは、その時ようやく叫ぶことが出来ました。

涙がとめどなく溢れてきます。

お母様は消えました。

そして、お母様が死んだその日は、わたしの地獄が始まった日でもありました。

第１６話　第八境界へ

「魔核（コア）を回収する」

ドッチャが、お母様が消えた場所から金色に光る結晶を拾い上げました。

「やはり金色か。魔の濃度はほとんど上がっていない状態だったのか。それとも、人間に近い姿の魔は侵食されずに維持出来るのか？まあ、オレが考えることじゃないがな。とりあえず、抗魔結界檻」

別の法術士がストレージから虹色に輝く小さな籠を取り出しました。

それに注意が向いたすきに、女法術士の腕を振りほどいてドッチャにダッシュしました。

「お母様を、返しなさい！」

足を払われて、転ばされました。

勢いあまって危うく崖から落ちるところでしたが、ドッチャに靴で頭を踏まれ、止められました。

鼻血が出ました。とても痛いです。また涙が出そうになりましたが、我慢しました。

この男に、気持ちで負けるのは嫌です。

「ブレンダ！　ちゃんと捕まえておけ。情けは無用だ」

「はい」

ブレンダと呼ばれた女法術士に再び腕を取られ、今度は拘束魔法（バインド）で両腕を縛られました。バインドの端はブレンダさんが握っているので、まるで紐に繋がれた家畜です。

「最初からそうしておけよ。魔核（コア）は法都へ。バルグ、お前に任せる。この娘は予定通り第八境界に連れていく」

「二つともアリアガルドが持ち逃げかい」

サスナさんがふてくされたように言いました。

サスナさんもまだ魔法障壁で動けなくされたままです。

「たりめーだろ。タランジの草。あっちのガーランド兵同様、オレたちが来なかったらどうにもなってないだろ。今回はオレたちがいただきだ。おい、谷底の！　お前らも文句ないな！」

「ああ、勝手にしろ！」

リーさんが遥か下で返事しました。

「リーさん、サスナさん！　お母様が、お母様が！　どうしてこんなことに！　教えてください！」

わたしには、サスナさんもリーさんも顔を背け、答えてくれません。

「だから言ったろ。オレは助けに来たんだって。あの時素直にお前が一緒に来てりゃ、少なくともアズフルは死なずにすんだのによ。せっかく子どもの姿になってまで穏便に連れ出そうとしたのにさ」

「ドッチャさん、あなたがお母様を殺しておいて、そんなことをおっしゃるなんて！」

「事実そうだろ。お母様を殺したのは、オレじゃない、お前自身だ」

「う、うぐっ！」

涙がまた流れ出しました。
我慢が出来ませんでした。
こんな男の前で。

「じゃ、行くぜ、ミヤビ。泣きたいなら泣いたままでいいさ」

わたしはドッチャ達法術士に囲まれて山の方角へ連行されていきました。

「おい、わたしゃこのままか！」
「術者が一定以上の距離離れると魔法障壁は弱体化する。自力で解きな」

サスナさんに追いかけてこられたら困るのでしょう。

サスナさんはあきらめたのか、そのまま座り込んでいました。

◇◇◇

わたしは、狭い馬車に乗せられました。

バルグと呼ばれた法術士は一人、別の馬に乗って街道を走っていきました。

法都、という場所へ向かうのでしょう。

客車で、ドッチャとブレンダさんにはさまれるようにしてわたしは座っています。

今は物理的に手錠と足枷をされています。足枷は馬車の後ろ側の柱に繋がっています。

外で馬を操っているのは法術士のヒュイ。ドッチャがそう呼んでいました。

馬車は谷から山を登り、北の山脈の方へ向かっています。

第八境界というところへ行くのでしょう。

境界とはどういう意味なんでしょう？

移動中、無言ということはさすがにありません。

そもそもドッチャはどちらかといえば話し好きのようです。少し水を向けると、いろいろ喋りはじめました。

情報収集は大切です。

逃げる方法を考えるためにも。その機会を掴むためにも。

ただ、ドッチャは息をするように嘘を吐くので、その点は慎重に判定しないといけません。

「ガーランド、タランジ、アリアガルドというのは、何ですか？」

「なんだお前、エラく小賢しいとこあるのに、そういう基本的なこと知らねえのか？　まああの村はどこの国でもなく、勝手に人が集まった、地図にもないとこだからな。街道から外れてるし、領主もいねえし役人も来ねえし、税も納めてねえから、国のことを知らなくても仕方ないか」

「国というものは知ってます」

「へえ。これは失礼こきやした。概念は理解してるが実態はご存じねえってことか。じゃあお勉強の時間だ。ドッチャお兄さんの歴史

教室～。ぱちぱちぱち」

わたしも手錠のまま手首だけの拍手をしました。とりあえず乗っかります。

「この世界は唯一神が造ったってのは知ってるな。唯一神を信仰するのがアリア教。その総本山、大聖会を有するのがアリアガルド法国。つまりオレたちの国だ。ガーランドは唯一神に使えた神代（かみよ）の戦士の名前だ。その名を冠したのがガーランド帝国。タランジ王国は貴族政治の国だ。王国って言ってるが、貴族たちの領地の集合体だから、どっちかといえば連合国だな。王様が名目上連合国家の代表だ」

「サスナさんを草（グラス）と呼んでましたね。草って何ですか？」

「ああ、身分を隠して何年も敵地に住み密かに情報を収集する一人部隊（ワンマンセル）だ。あいつはあの村に6年ほど住んでたらしい」

なるほど、間諜（スパイ）ですね。

「娘さんがいたようですが」

「そうか。まあ本当の娘じゃないだろ。こぶ付きやもめの後妻にでも入ったんじゃないか。村になじむためにな」

「お母様を魔人と呼びましたね。お母様が魔人なら、わたしも魔人なんですか？」

「またド正面から核心をついてきたな。オレにもそりゃわからねえよ。それを調べるのが第八境界の仕事だ」

「隊長、それは極秘事項です」

ブレンダが慌てる。

「何を言ってやがるブレンダ。その極秘情報様そのものがお尋ねだ。

どうせ境界に着いたらそればっかり調べられるんだから、今教えてやっても別にどうということはねえよ」
「魔人の子は魔人ではない、かもしれないということですか？」
「そもそも魔の子どもなんて聞いたことねえよ。魔は、魔として生まれるものだからな。お前は魔人の子なんかじゃないかもな」

衝撃でした。

わたしが、お母様の子どもではない、かもしれない！？

「だいたいおめえアズフルにどこも似てねーじゃねえか。人間の子どもを拾って育ててた、ってほうがしっくりくる。まあそれでも驚きだけどな！　何で魔人が人間を育てるんだ！？　人間そっくりの振りをして」
「に、似てないのは、自覚してますが」

お母様の素顔はぞくぞくするほどの美貌でした。
逆立ちしても、私があんな美しい女性になるとは思えません。

魔法の力も、ましてや炎をまとい空を飛んだり、ばらばらになっても復活したり。
そんなこと、わたしに出来そうもありません。
転んだだけで血は出るし痛いし。

拾われた子ども。
そう考えるのが論理的です。

しかし。

「どうして、お母様ではなくて、わたしを連れて行こうとするので

すか？　ドッチャさんも、リーさんも、サスナさんも」
「オレも詳しくは知らねえよ。ガーランドやタランジがどこまで知っているのかもわからねえ。俺が言われたのは、未来のお前が世界を滅ぼす前に教化の必要がある、ということだけだ」
「隊長！　それこそ極秘です！」
「理由を知ってた方がおとなしく言うこと聞きそうだからな、この子どもは。頭がいいよ、こいつ。まだ5歳とは思えんくらい大人びた考え方をする。こんな子どもは、あいつだけで手いっぱいだってのによ！」

未来のわたしは、世界を滅ぼす？

この非力なわたしが？

そんなわけのわからない理由で、お母様は殺され、わたしは境界とやらに強制連行されるというのですか！？

「話は変わるけどよ、お前、あの谷間で面白いもんに乗ってたな」

なんだかムカムカしてきていますが、ドッチャの方から話を振ってきたなら乗らないわけにはいきません。

「魔導車（マジックビークル）のことですか」
「それそれ。あのガーランドの脳筋がぶっ壊したけどよ、あれ聖遺物（アーティファクト）だよな。オレの剣と同様」

祝福の剣。何が祝福なものですか。お母様を殺した憎しみの剣です。

「お母様はそうおっしゃっていました。クエストでドロップしたも

のだと」
「なんで魔人が冒険者みたいなことやってんだ？　しかし、ということはやっぱり他にもあるんだな？」
「はい、お母様のストレージに数多く収納されているようでした」
「おお！　バルグに魔核（コア）を持たせて正解だったな！　ストレージをサルベージ出来たら、聖なる遺物の正当な所有権を主張できる！」
正当な所有権者はお母様でしょうが。
「死んだ方の収納魔法の中身を回収できるのですか？」
「出来るさ。暗号鍵さえわかればな。術者が亡くなっても、亜空間がなくなるわけじゃない。アクセスさえ出来れば元のとおり取り出せる。収納魔法の乗っ取りはオレたちの得意とするところで……」
「隊長、喋りすぎです」
「おっと、こいつはマジで口が滑った。まあ滅多にやらないしな。あははは！」
たまにはやるんだ。
アイテムストレージには鍵があって、それさえ分かれば他人のアイテムを盗み放題ということですね。初めて知りました。
つまり収納魔法はハッキング可能。
覚えておきましょう。いずれ役に立つこともあるでしょう。
◇◇◇
日が暮れました。
この間、ヒュイとドッチャは御者を二回交代し、日が落ちる前に

干し肉とピクルスを馬車に乗りながら食べました。

両手を拘束されているわたしには、ブレンダさんが口まで運んでくれました。

ブレンダさんは基本的には優しい人のようです。

お母様の最期もわたしに見せないように気を配っていましたし。

光魔法で前方を照らしながら進んでいきます。

馬の体力が落ちてくると、治癒魔法と強化魔法を重ね掛けします。

休みなしで進むようです。

第八境界とやらに早く着かないといけないのでしょう。

家畜にまで魔法を惜しみなく使うところを見ると、なにかに追いつかれるのを恐れているような気もします。

リーさん？

サスナさん？

違いますね。何かもっと別なもの。

お母様が復活する？　いや、魔核（コア）を法都へ持っていったので、それもないでしょう。

私と同じような子どもがもう一人いる、とドッチャは言いました。

その子どもでしょうか？

しかし、こう休みなしだと、ちょっと困ったことが。

ドッチャやヒュイは走りながら客車の後ろで放出してるのですが、わたしとブレンダさんは出来ません。

ブレンダさんが言い出してくれるのを待っているのですが、まだ我慢出来るようです。

わたしはそろそろ我慢の限界なのです。

おしっこしたい！

第17話　馬車での排泄（前書き）

サブタイトルの通り、スカトロ回です。苦手な方はご注意ください。

第17話　馬車での排泄

「すみません、ドッチャさん」

今は御者はヒュイに代わっています。ドッチャが横にいます。

「馬車を止めていただけませんか？　花を摘みに行きたいのです」
「は？　この夜中にか？　馬鹿じゃないのか」
「隊長、花摘みとは排泄の美的表現です！」

ブレンダさんが翻訳してくれました。
ブレンダさんも我慢していたのは分かっていましたから、乗っかってきたのでしょう。

「しょんべんか！　だめだ。馬車は止めん。そこでやれ」
「客車をびしょびしょにしてもいいのですか！？」
「オレは気にしないぞ」
「やはり変態さんでしたか！」
「子どもがお漏らしするのはフツーじゃねえか。なーに恥ずかしがってる。そこで座ってパンツはいたままやっちまえよ」
「賢（さか）しい子どもは嫌いだとか言いながら、都合のいい時だけ子ども扱いですか！」
「……だから賢しい子どもは嫌いだよ」
「隊長、すみません、わたしも我慢の限界でして、少しの間馬車を止めていただきたく……」
「ブレンダてめえミヤビをダシに使うつもりだったな。でも止めん。お前もそこでやれ」
「嫌です！　すみません……。それがその、お……」

「はあ？　聞こえんなあ！」
「お……、お……、大きい方！　なんです……」
「ブレンダてめえクソかよ！　しかたねーなー！」

ようやく停めてくれる気に。

えっ？

「きゃ！」
「隊長！　これは！」

わたしとブレンダさんの体が浮きました。わたしは片足が柱に繋がれているので、片足を伸ばした斜めの状態で浮いています。

ドッチャの障壁魔法です。

さらに、ブレンダさんは膝を抱えられたM字に、わたしは繋がれていない方の足を上に引っ張られ、逆さになって股が上下に大きく開いた格好で、客車の外に二人並んで宙吊りにされました。

一瞬、暗い外に放り投げられたように感じましたが、浮いたまま馬車と連動して進んでいます。
でも、ものすごく不安です。
はっきり言って怖いです。

「そこでやれ。走りながら後ろに向かってひり出しゃ馬車が汚れんですむ」
「この格好で！？」
「隊長、あんまりです！」
「ブレンダ、最近お前生意気だからな。ついでにおしおきだ」

ブレンダさんの法衣が見えない手によってめくり上がり下着が引き下げられました。
わたしはワンピースの簡素な服なので、逆さにされた時にもう裾は捲れてしまっています。丸出しになっていたパンツがビリビリと破り捨てられました。
ドッチャの障壁魔法、相当に器用です。

って感心してる場合じゃないです。
わたしの目の下（実際は上）すぐ横にブレンダさんの太ももと黒い毛に覆われた股間があります。
夜の闇の中にほの白く見える、毛深く膨らんだ丘とその真ん中の鮮紅色の裂け目。

なるほど、性器などと無機質な名称より、まんこと呼ぶ方が確かにしっくりくる感じです。ブレンダさんの大人まんこ。

鮮紅色の裂け目のすぐ隣には皺の多いお尻の穴が呼吸しています。

いや、実際に呼吸はしてないでしょうが、そんな感じで膨らんだり窄んだりしてます。
大便を我慢しているからでしょう。

位置関係からすると、ブレンダさんは逆にわたしの一直線に広げられた股間を見下ろしている状態です。
大きな太ももで視界が遮られているので、ブレンダさんが実際どこを見ているのかはわからないのですが。

「いやあ、こんな格好でするのはいやあ！」

ブレンダさんが泣き出しました。真っ暗な闇の中で吊り上げられて、いい大人が下半身を恥ずかしくも剥き出しにされているのです。そりゃ泣きたくなるでしょう。

それにやたら寒いです。障壁のくせに風を全然防いでくれません。それに、ドッチャ自身を基準位置にした相対座標なのか、馬車と連動して上下に揺れ動きますし。

まあ、絶対座標なら揺れはしませんが、その場に置いてけぼりになりますから、そっちの方が困りますが。

「あっ、あっ、あっ」

ブレンダさんは風と振動に加え泣いてしまったことで便意をこらえられなくなったようです。

毛深い部分から、水が漏れ出しました。

はじめはちょろちょろと、そして細く立ち上り、すぐに堰を切ったように豪快に放物線を描きだしました。

ブレンダさんのオシッコです。

しぶきが太ももを濡らし、わたしの顔まで飛んで来ます。

同時に、肛門が三角に盛り上がり、内側から開いてピンク色の中身が見えました。

お尻の穴ってこんなに飛び出るものだったんですね。

「あああああっ」

そのピンクの中を内側から突き破るように、堅く黒いものが顔を

覗かせました。
何度か出たり引っ込んだりを繰り返しましたが、突然ずずずずと大きくせり出し、加速しながらむりむりむりっと全貌が現れます。
先端部分は固く黒く、半ばから赤黒くなり、後半部分は茶色い粘土の塊のような太く長い見事な一本糞。
ずぼん！　と音を立ててお尻からひり出され、地面にひゅーん、べちゃっと落ちました。
「ああーーっ！」
諦念のような、快感のような、達成感のような、なんともいえない声をブレンダさんが上げました。
尿も蛇口を締めるように止まっていきます。
でも、まだ肛門が山になったり引っ込んだりしています。
ずべっ。ずべっ。
何回か山になって、まだ固まっていないどろっとしたウンコを、痰を吐くように噴射しました。
腸壁にへばりついた残渣でしょう。
やがて、茶色い液体を数滴たらし、ブレンダさんの肛門は元のように閉じました。
ウンコの飛沫がお尻や太ももに点々と付いています。
わたしの顔にも飛沫が付着しました。臭いです。

大人の排尿と排便に、思わず見入ってしまいましたが、わたしも限界です。

しゅばあああっ。

わたしは手を拘束されているし、逆さ吊りだしでまったくコントロールが出来ないまま、オシッコを噴き出しました。

まずブレンダさんの法衣に引っ掛け、だんだん高くなってブレンダさんの顔にシャワーし、さらに真上に高く上がって噴水のように自分自身をびちゃびちゃにしました。

これでは、車の中でした方がましだったのでは……。

「ひどい！　オシッコまみれ！」

「ブレンダさん、わたしは、顔にウンコが飛んできたんですが」

「……見てたわね」

「不可抗力です」

「おまえら、せっかく空中便所にしてやったのに、きったねーな！　えんがちょ！」

ざっばーっと空から大水が降ってきました。

ドッチャの水魔法。

ブレンダさんもわたしもずぶ濡れになりましたが、オシッコやウンコは洗い流されたようです。臭くはなくなりました。

◇◇◇

まだ馬車は走っています。

あの後、客車に戻るとブレンダさんが魔法で温風を作り出し乾かしてくれました。
ご自身もぐっちょり濡れていましたからね。

排泄物を掛け合ったせいか、ブレンダさんと少し仲良くなったというか、ドッチャ憎しで団結したというか。

ブレンダさんに頭を預けて、いつのまにか寝てしまいました。
目を覚ますと、朝日が昇ろうとしていました。東の稜線が琥珀色に輝いています。

馬車はまだ走っていました。
わたしが起きると、ブレンダさんも目を覚まし、「おはよ」と言いながら伸びをしました。

ヒュイが向かいで寝ていました。寝ている顔を見てようやく気がつきましたが、ヒュイはかなり若いです。十代半ばくらい？

太陽が完全に顔を出したころ、そのヒュイも起きました。

それからすぐに御者交代。ドッチャがどっこいしょといいながら客車に入って腰かけます。

「間もなく到着だ。お前を引き渡したらオレたちの仕事は終わり。やれやれだ」
「第八境界、ですね」
「ああ、せっかくだから説明しといてやろう。そのくらいいいよな、ブレンダ」

「ご自由に。止めても勝手にしゃべるでしょう？　隊長」
「へへへ。わかってきたじゃないか。糞ひり出してしおらしくなったな」
「その話はご内密に！」
「くさい仲ってわけだ。まあいいや、境界ってのは、うーん、国境ってのはわかるか？」
「国と国との境ですね」
「おお。まあ実際は三国の間で国境がはっきりしている場所なんてごく一部だがな。森林とか山脈とかで地形的に分断されてる方が多い。お前の住んでた村も渓谷と山脈に挟まれたどこの国でもねえ場所だ」
「それは、わかります」

街道からも外れていましたし。

「境界ってのは、人類生存区域の果てだ」
「え？」
「この世界で最も強いのは、人間じゃねえ。魔だ。アズフルみたいな魔人とか、悪魔とか言われるのは特につええ。実際ガーランド兵なんかじゃどうにもならなかっただろ。単純な攻撃力や火力じゃ勝てねえ」

偉そうに言っていますが、ドッチャたち光魔法の法術士だって、お母様が消耗したところを４人がかりで不意打ちし、さらに騎馬兵たちと共闘してでしたから。

お母様が万全な状態だったら、ドッチャなどにやすやすと殺されることはなかったはずです。

「だからといって人類は魔にやられっぱなしかといえばそうじゃな

い。実際ちゃんと国はあるし、人も増えてる。なぜかわかるか？」
「魔が、国を作らないから」
「そうだ。よくわかってるな。いくら強くても奴らは単体だ。人間は一人一人は弱いが、国を作り、軍隊を作り、社会を作り、組織を強くする。それに過去の知識がある。一度負けても、それを記録に残し、研究し、対策を打ち立て、次には勝つ。社会と知恵。文明といってもいいだろう。これが人類が魔に負けない理由だ。そしてその最前線が境界だよ」
「人類と、魔の国境ということですか」
「そんなところだ。当然だが、魔相手にただの国境警備とはいかない。ヒジョーにヤバい、最もアブねえ場所だ。とはいえオレも境界の実情には詳しくないがな。知りたいとも思わねーし。ということで引き渡したらオレっちはさっさと回れ右して去る！」

人間と魔が接する場所。

お母様……。

でも、お母様が魔人なら、社会を作らないってことがあるのでしょうか？
わたしとお母様は親子の関係でした。
それも一つの社会ではないのでしょうか？

人間がまだ知らないだけで、魔も、組織化することがあるのではないのでしょうか？

……やがて、前方にそれが見えてきました。

山間にそびえる巨大なシルエット。

いや、高さよりもその長さ。
そびえるというよりも、横たわっている？

やがて山道の角度が変わり、朝日に輝く第八境界の全容が現れました。

それは金属で出来た超巨大な人工物。
山一つ分以上の大きさがあります。

こんな山間にどうやってこれだけのものを作り上げたのでしょうか。

これもまた聖なる遺物（アーティファクト）なのでしょうか。

脳内に『超弩級戦艦』という概念が浮かびました。戦艦？　超弩級？　この記憶はいったい？

いや、むしろこれは『宇宙戦艦』ではないでしょうか。
え、宇宙って？　何？

第１８話　セカンド

馬車が第八境界に近づきました。

間近で見る境界は幾何学的で巨大な構造物の集合体でした。

全体としては緩やかなカーブを描く横に長い楔形ですが、中央部分は山のように盛り上がり、高い塔のようになっています。小山の周辺には複雑な半球状、あるいは六角や八角の小屋のようなものが乱立し、無数のパイプがその間を走っています。比較的凸凹が少ない側面部分にも、ところどころ紡錘形の出っ張りや細かい穴、ヒンジなどが見えます。さらには長く伸びる翼のようなものがあちこちから突き出しています。

石ではなく、すべて鋼鉄のような重く硬い金属で出来ているようですが、既に黒く風化し、あちこちから苔や蔦や木が生え表面を覆っています。

いったいいつからここにあるものなのでしょうか。

境界の壁から突き出し、なかば地面に埋まった箱状の小屋の前で馬車が停まりました。

箱の一面がまず上下に開き、さらにその内側が左右に開口しました。

どちらもかなりの厚みのある鋼鉄の扉でしたが、勝手に動きました。中にも外にも人影がありません。

御者のヒュイは慣れているのか、ためらいもなく馬車ごと小屋に入ります。内側、外側の扉が閉まると外光が完全に遮断され暗くなりましたが、すぐに赤い明かりが点灯しました。

ごおーんと唸るような音が響くと、床がやや傾きました。
馬がいななきながら踏ん張ります。

床ごと斜めに上昇しているようです。

『やけに傾いて昇るエレベーターだな』。そんなフレーズが記憶に浮かびました。はて？

しばらく上昇が続きましたが、やがて、がごおんと響く鈍い音とともに停止しました。傾斜が元に戻ります。内側、外側の扉が開くとそこは第一艦橋……。

ではなく、カーブしながら続く長い通路でした。

通路の明かりは弱く薄暗いですが、床に矢印が白く浮き上がって見えます。矢印自体が発光しているのです。よく見れば、床はぎざぎざにカットされた鋼板が何枚も噛みあって続いています。

思うにこれは本来通路自体が動く構造だったようですが、壊れて止まっているようです。

なぜそう思えたのかは自分にもわかりませんが。

馬車はこの暗い通路を進んでいきます。

馬車ごと中に入ったのはなぜだろうと思っていたのですが、インフラが壊れてるからだったのですね。これ、徒歩だったら大変です。いったいどのくらい道が続いているのでしょうか。

ところどころに分岐がありますが、光る矢印が現れるので、その

方向へ進みます。
運搬装置は壊れているけど、方向指示器は正常に作動している。
そんなところでしょうか。

やがて、天井の高い場所に出ました。大きな扉があります。
馬車がその前で停車しました。
その大きな扉の隅に人ひとり分くらいの扉があり、それがこちら側に開きました。ごく普通の扉でした。
もともとの聖なる遺物（アーティファクト）ではなく、後付けのもののようです。
分厚い鋼鉄製ではなく、丘の上の家にもあったような木で出来た扉でしたから。

濃い藍色の法衣をまとった精悍な顔立ちの男の人が中から現れました。

ドッチャ、ブレンダさんが客車から降りました。
ヒュイは馬留がないので、御者台に乗り手綱を曳いたままです。
私も足枷がそのままなので、客車に残されています。

「ドッチャ、ご苦労だった。対象は中にいるのだな」
「境界司政官御自らのお出迎え、ありがたく存じます」
「堅い挨拶はいい。まずは検分だ」

ドッチャが膝を下り礼をしました。ブレンダさんも続きます。御者台のヒュイは首を垂れただけですが。

「これを対象の首に。付けたら拘束を解いてここへ」

境界司政官と呼ばれた男が、ドッチャに首枷を渡しました。金属でできた太めのネックバンドです。

「承知」

ドッチャが今度はブレンダさんに渡しました。ブレンダさんが首枷を持って馬車に戻ります。

無言で、わたしの首に枷を掛けました。開いていた半円が閉じられ、首枷からピーという音がしました。

「これは特殊な首枷よ。魔法が仕込んであるわ。逃げようとしたり、反逆しようとしたら、爆発するから気を付けて」

耳元でこっそりそういうと、元々の手錠と足枷が外されました。

わたしはブレンダさんに抱えられるようにして馬車から出ました。

馬車の中の時より自由になりましたが、さっきの警告は本当でしょう。

わたしはブレンダさんに押されるままにおとなしく境界司政官の前まで進みました。

「ほお、聞いた通りの美形だな。こいつの母親と自称する魔も相当の美人だったようだが」

「司政官殿。遠隔鏡で見ておられたのでしょう？　一部始終」

「座標接続以降は観察はしていたがな。昔はもっとはっきり映っていたそうだが、今ではぼんやりだ。輪郭程度しか分からぬ」

家の結界の前で感じた、見られていた感覚。あれはこの男なのでしょうか？

「そいつは残念でしたな。たしかにとんでもない美人でしたよ。人間じゃないのがもったいないくらいでしたね」

「ドッチャ、貴様のことだから魔人相手でも見境いがないのかと思ったが、案外堅かったのだな」
「よしてくださいよ、司政官殿。あんなのに突っ込んだら、一発で魔に堕ちてしまいます。しかし、真っ二つにした時、奴の恥骨をぶった斬った感触は、なかなかのもんでしたぜ」

ぎりっと、私の胸に黒い怒りの火が灯りました。

「それでこそドッチャだ。相変わらずいい趣味だな。だが、魔核は黄金色のままだったのだろう？」
「何もかもご存知というわけですか。オレにはそこんとこがさっぱりわかりません。法都のアカデミアがなにがしかの結論を出すでしょうがな。意地でも」
「いくつかの仮説は既にあるようだ。魔核の実物があれば検証は可能だろう」
「アカデミアらしく、学術的な研究ということでしょうな」
「ふん。いずれにせよ、ここはここのやり方で調べるしかないのだ。対象を、丁寧に、まんべんなく、な」

そう言いながら、司政官はわたしを舐めるように見ました。

「そうだ。魔が使っていた聖なる遺物（アーティファクト）は完動品のようだったな」
「魔導車（マジックビークル）ですな。あれはもったいなかった。ガーランドの脳筋には価値も何もあったもんじゃない」
「魔のストレージには未知の遺物が残っていそうだな」
「それはそうですが。術者はもう死んでおるゆえ、鍵が分かりません」
「ふっ。それはそうだな。魔核の固有ナンバーをアカデミアが突き止めるまで待つか」
「それがよろしいかと」

「有益なものばかりとは限らんしな。邪妖精などの凶悪な眷属がおるかもしれん」
「ご、ご冗談を」

ドッチャは平静を装っていますが、体臭が濃くなりました。
案外臆病？

「ふむ」
「あっ」

突然司政官はわたしの股の中に手を入れてきました。
二人の話に気を取られていたわたしは、全く無防備でした。

「ほう、準備がいいな。下着をつけていないのか」

わたしの股間全体を手で握り、割れ目を指で撫でます。

「ううっ」

逆らったら首が爆発します。私はおとなしく触られるままにするしかありませんでした。

「触った感触はただの人間の子どもだな。まあ、これからじっくり開発し、徹底的に調査する。よし、現認した。ドッチャ、貴様はもういいぞ」
「では、確かに引き渡しましたぜ」
「受領報告書は大聖会に送っておく」
「頼みますぜ。オレたちの臨時ボーナスが掛かってるんですから」
「ああ、分かっている。貴様たちは有能だ。大事にする。安心しろ」

わたしは司政官に連れられ、扉の内側に入りました。ドッチャたちは来た道を戻っていったのでしょうが、扉の向こうのことはもうわかりません。

扉の内側には所狭しと数多くの機械が並べられていました。

内側はさらに暗く、目が慣れるのに時間がかかりました。

並べられた機械で一番多いのは大きなガラスのシリンダーです。中には大小の肉のようなものが入っています。なにかの標本でしょうか。

次に可動式の椅子。その上には照明や測定装置のような機械がかぶさっています。

倒すとベッドにもなるようです。

後は大きな万力やクロス型の柱や棒で組まれた立方体など、何に使うのかよくわからないものが多数。

わたしは、司政官に肩を掴まれ、そんな機械の立ち並ぶ部屋のさらに奥へ連れていかれました。

十数人の男女が立って待っていました。

全員、司政官と同じ濃い藍色の法衣姿です。ドッチャたちは青い法衣でしたが、境界勤務の制服なのでしょうか。

「被検体が到着した。コード９９９００２だ。以後、セカンドと呼称する」

「わたしはミヤビです！」

「テストプログラムは予定どおり明日からだ。エルザ、カデナ。セ

カンドの専属トレーナーのお前たちは、今日中にガイダンスを終わらせろ。日常プログラムはいつものとおりでよい」

「「はい、司政官殿」」

全スルー！

エルザさんとカデナさんという女性は、それぞれわたしの首枷に触れました。

ちくっとした魔法の痛みを感じましたから、枷の制御が二人に移されたのでしょう。

他の男女はわたしをじっと見ていました。誰の表情も読めません。人を見るというより、道具か何かを見るような目でした。

「では各自仕事に戻れ。エルザ、カデナ。セカンドは朝食がまだだ。着替えさせたら、食わせてやれ」

あら？　司政官、意外にいい人？

第19話　レギオン

エルザさん、カデナさんの二人の女性に連れられ、小部屋に入りました。

赤髪のロングヘアがエルザさん、金色のショートヘアがカデナさんです。

どちらも、ブレンダさんと同年代か、少し若く見えます。

部屋の三方は壁にぎっしりロッカーが立っており、真ん中に背もたれのない長椅子がひとつ置いてあります。それでほぼ部屋は一杯です。狭い部屋です。

エルザさんがロッカーの一つを開けると、白い簡素な服を取り出しました。家から着てきたワンピースを脱がされ、着替えさせられます。

着替える際に、二人がかりで全身を濡れタオルのようなもので拭かれました。

やけにスースーします。アルコール？

「ほんと、普通の人間の子どもみたいね」

「毛も全然生えてないのね」

「しいて言えば、きれいすぎる。ほくろひとつないわ。どこにも」

二人にわきの下やお尻をじろじろ見られました。女同士とはいえ、恥ずかしいです。

着替えた白い服も、大概でした。一枚の布の真ん中に穴を開け、

そこに首を通しただけです。
固定は脇で一か所紐を縛るだけ。
下着をつけていないので、スース―します。

あれですね。バイオ◯ザードのラストでミ◯・ジョ◯ヴィッチが着せられていた病院服。
毛が見えたあれです。

ん？

胸元と背中にバーコードで番号がプリントされています。
９９９００２。

バーコードってなんでしょう？

「以後はそれがあなたの制服よ。セカンド。ロッカーの場所も覚えておいてね」

ロッカー位置は左から2番目。覚えました。

「ではまずは朝食ね。こっちよ」
「あの、その服は？」

カデナさんが着てきたワンピースを持ったままです。

「これは焼却処分よ」

えっ。

おうちの最後の思い出なのに。

でも、逆らえません。首を爆破されて死ぬのは怖いです。

私は黙ってついていきました。

また別の狭い部屋に入れられました。今度はわたし一人です。中に入ると扉はロックされました。

カデナさん、エルザさんは隣の部屋に入りました。部屋の間はガラスで仕切られているので、お互い部屋の様子は見えるようです。ハーフミラーではないようです。

わたしの部屋から二人が見えますから。

食堂のようなところを想像していたのですが、食事は二人に見られながらひとりで取るということなのでしょう。

『横の扉が自動でせり出すわ。それが配膳装置兼テーブルだから、そこに椅子を持って行って食べなさい』

天井に埋め込まれたスピーカーからエルザさんの指示が聞こえました。

厨房からリフトで食事をこの個室へ運ぶようです。

なかなか凝った作りです。

チーンという聞きなれた音とともに、壁と一体化していた引き出しがすーっとスライドしてきました。

食事です！

なんだかんだ言ってお腹がすいていたのです！

わーい！

って、これは……。

「あの、これを食べるのですか？」

『そうよ。あなたたちの大好物のはずだけど』

「いや、これは……。このままではいくら何でも。食べたらお腹を壊します！」

壁の穴から出てきたもの。トレーに乗せられた金属製の丸い皿に山盛りになっていたのは、ピンク色の生肉のミンチでした。

しかも内臓や骨の髄も一緒に刻んであるらしく、刺激を伴うかなりの臭みがあります。

色からすると古いものではないようですが。

思うに、この臭いが駄目なので二人は隣の部屋に逃げたのですね。

お母様は山で仕留めた獣の肉もさばいたりされていたので、わたしも獣臭や内臓臭には慣れていると思っていましたが、目の前に出されると強烈です。鼻が痛くなってきました。

「火、火を。せめて火を通してくださいませんか！」

『火？　料理しろっていうこと？　ちょっと待って』

二人は相談を始めました。

『司政官に確認するわ。そのままでいなさい』

この皿もそのままですか！　身体に臭いが染みつきそうです！

壁の電話でどこかと通話しています。内線電話が生きているので

しょう。
　といいますか、この遺物の中でまだ設備が稼働していた区画を境界として再利用しているのでしょう。
　ん？　電話？
『了解が取れたわ。今日は火を加えるけど、徐々に慣れなさい。あなたは９９９側なんだから』
　なんですか９９９側って！
　６６６なら悪魔の子ですが。
　あっ、悪魔の子かどうかわからないから逆にして９９９？
　って６６６が悪魔の子って？
　……もういいです。いちいち気にしないことにしましょう。
　お母様がわたしの頭に何か細工をされたのかもしれませんね。
　ということで、加熱していただけるということなので、また引き出しトレーが収納されるのかと思ってたら、エルザさんが火魔法を飛ばして燃やしました。
　なんと即物的な。ひえっ。皿の上が火事に！
　すぐに火が消え、ミンチは程よく炒たまりました。
　味付けはされていませんが、贅沢は言えません。
　お皿も熱々になってます。気を付けて戴きましょう。
　あれ？

「スプーンもフォークもありませんが、どうやって食べたらいいのでしょうか？」

『そんなものはないわよ。手づかみで食べなさい』

「え、手づかみですか」

行儀が悪いし、不衛生な気がしますが、無いものは仕方がありません。

ぽろぽろ熱々のミンチを手ですくって食べます。あちちち。

……まずい。

塩などの調味料を使っていませんし、そもそもこの肉自体の味が独特です。内臓や骨髄の苦みとえぐみが相当きついです。

何の肉なんでしょう？

といろいろハードルが多かったものの、何とか食べきりました。

でも、これからずっとこんな食事のようです。

慣れないといけません。

身体が衰弱してしまったら、逃げようにも逃げられません。

方法もなにも今は全く思いつきませんが、何とかしてここを生きて抜け出し、法都に持っていかれたお母様の魔核（コア）を取り戻す。

お母様の復活をわたしは信じています。

あれだけ強く美しいお母様が、そう簡単に完全消滅するなんてことはない！　と。

だから泥をすすっても生き延びるのです。
実際は臭い肉ですが。
『施設の中を案内するわ。扉前に立ちなさい』
扉の前に立たせておくのはこの部屋に入りたくないからでしょう。
臭いですからね。

◇◇◇

前をエルザさん、後ろをカデナさんに挟まれて境界内部を見学して回ります。
「最初に一番奥まで案内するわ」
道を曲がるときなど二人が手を繋いでくれます。
ぬくもりに、ちょっとほっとします。
『カテゴリー・レサ　飼育室』
その大きな部屋には大小の魔法檻がおかれ、一籠に一匹の魔物が囚われていました。
ざっと２０匹ぐらいでしょうか。
あまり強そうな気配はありません。一番大きなものでも人間くらいで、小さいものは４０センチくらいの魔物もいます。籠の中でおとなしくしています。私たちが近寄っても吠えもしません。
それぞれ、首枷をしています。首がはっきりしない魔物は胴枷に

なったりもしていますが。

「カテゴリー・レサってなんですか？」

「クラス１１１。使い魔などと俗称される最弱級の魔物よ。大聖会の命により、境界では魔物のランクを整理しているの。ここでは魔物のリポップを早める試みを行っているけれど、別の部屋で魔物の強さを判定したりしているわ。最終的には魔に属するもの全てを学術的に分類する計画よ」

エルザさんが答えてくれました。

魔物データベース。

なるほど、敵の情報が正確であればあるほど、勝利の確率は上がります。

それにしても魔物の繁殖（ブリード）がもう出来ているとは。

「ここの魔物はおとなしいですね」

「再発生（リポップ）する度に人間の命令を聞くように意識を改変しているの。まだ完全に支配するには至っていないけど、凶暴性はだいぶん失われたわ。ここまで来るのに何世代繰り返したか、わたしも知らないくらいよ」

「リポップを繰り返すって……」

「魔物は死んでも勝手に復活するのよ。クラス１１１なら魔の気配さえ十分なら3日程度で再発生するわ。再生室に周囲からくみ上げた魔の気配を充填してるの。ああ、ちょうど1匹リポップするわ。見ればわかる」

再生室との仕切りは透明なガラスです。急いでそちらに寄りました。

円筒状の部屋には確かに魔の気配が充満しているようです。その魔の気配が魔物の形に集まっていくのが見えます。

天井にアンテナのようなものがあります。あれが意識をコントロールする術具なのでしょう。

しばらくすると、緑色の皮膚を持つ体躯のねじれた魔物が急に現れました。

これがリポップ。

たしかに、魔は魔として現れるようです。どう見ても赤ちゃんや子どもではありません。

魔人の子どもなんていない……。

「この再生室にリポップポイントを固定するのも大変だったそうよ。古いダンジョンコアを使ったらしいけど。わたしたちがここに赴任する何年も前の話ね」

聞いていない事にもエルザさんは答えてくれます。ドッチャ同様、話し好きなのかもしれません。

強い魔物は再発生に時間が掛かる。おそらく魔の気配も大量に必要なのでしょう。

強い魔物が沢山いるダンジョンに魔核を持ち込めば、お母様の復活も可能かもしれません。

「じゃあ、次は訓練室」

訓練室はバスケットコートぐらいの部屋でした。

ええ、もうセルフ突っ込みはしません。
そういう知識がなぜかあるのです。

赤いワニのような魔物がテストをしているところでした。前方の柱に括り付けられた羽のある魔物めがけて口から火を拭いています。的になっている魔物は死体でした。リポップする間、訓練材料として使うのでしょう。

3回目で死体は完全に炭になりました。
横にいる法術士がワニの頭を撫でながら、バケツの中の肉を口に流し込みます。
ワニは尻尾を振りながらバクバクと咀嚼しています。

ああ。イルカショーのトレーナーみたいなものですね。

「ああやって調教しているのだけど、まだ事故はあるわ。クラス11ですら、完全馴致は難しいの」
「魔物を調教して、一体どうするんですか？」
「一つはさっき言ったように調教訓練を通じて魔物の情報を整理分類するの。もう一つは、魔物の戦力化」
「魔物と魔物を戦わせるということですか？」
「そういうこと。十分に意識改変し調教出来れば、魔に対抗するのにこれ以上の戦力はないわ。魔物の軍隊ね。第一、人間に被害が出ない」

なるほど。
魔は、そもそも社会を作らない。仲間意識なんてない。倫理も秩序もない。獲物の取り合いで魔同士が戦うなんてよくあること。

魔をコントロールして魔と戦わせるアイデアは、確かに効率がい

いです。

魔物（レギオン）の軍団。

それが出来れば、ですけれど。

「今は火炎の威力を調べるめに死体を使ったけど、ここではある程度訓練できた魔物同士をトレーナーが戦わせているわ。死んでもまたリポップするし、やられ方を研究して再生の際にチューニングもするの。だから、魔物はだんだん強くなるし、いろんな技も使えるようになる。中にはリポップの際にクラス２２１に進化する魔物もいるのよ」

それってなんてポケ○ンバトル！？

第２０話　セックス

『器官研究室』

「ここでは魔族の臓器を解剖し構造を調べているわ。特に魔蓄器を詳しく調べてる」

「魔蓄器？」

「魔の気配を蓄積する器官よ。魔のタイプによって違うのだけど、魔肝臓とか魔肺とか魔甲状腺とかあるわ」

昔の漫画雑誌の口絵に載っていた怪獣の解説みたいですね。

あ、この感想に突っ込まないでください。

シリンダーの中で内蔵がうごめいています。生きてる。

「魔は生命力が高いから、生体研究はしやすいわ。死んでもリポップするから、対照実験も容易だし」

「生きたまま解剖しているということですか」

「さすがに暴れると怖いから、麻痺（パラライズ）させているけどね」

「臓器から再生することはないのですか」

お母様はばらばらの状態から一瞬で復活していました。

「シリンダーの中の液体に魔の気配の遮断効果があるわ。あまり濃いと魔細胞自体が死んでしまうから、調合が難しいけど、今では魔の種類ごとの適正濃度について大体のデータが取れてる」

「なるほど……」

第八境界での対魔の知財は大したもののようです。

『魔族解剖室』

「ここはその名のとおりよ。魔族を解剖して全体の構造を調査したり、器官ごとに分けて研究室用の標本を作ったりしているわ」

手術中でしたので、中には入れずガラス越しに覗きました。

法衣ではなく、白い滅菌服のようなものを着た人たちが手術台の回りにいました。

無影灯の下に、白く大きなブタ顔の魔物が眠っています。

お腹を大きく広げられ、内臓を腑分けして取り出しているようでした。

人が多くて手元までは良く見えません。

「たくさんの方がいらっしゃいますね」

「魔族の解剖には免許が必要なの。半分以上は勉強中の学生よ。今執刀しているバージェ先生は第一人者だしね」

インターンですね。

バージェ先生は顔の色が左右で違うニヒルな印象の中年男性でした。

B・J（バージェ）？

『適合調整室』

「ここは第八境界でも特殊な位置づけの場所になっているわ」

「特殊……」

適合調整という言葉から、とても嫌な感じを受けました。

「あああああああーーーーっ！」

「うぐふぅううふぅ！！」

「げえええげげえええぇぇぇげげぇぇえええええ」

扉を開けた途端、悲鳴とも怒号ともつかない声がこだまのように響きました。

左右にいくつかの檻が並んだ通路になっていました。手前の方は空です。

うめき声にどきどきしながら、奥に進みます。

一番奥の檻に入れらていたのは、人間。

首枷のほかは全裸の若い男女が一つの檻にまとめて入っていました。女3、男2人。

頭を抱えたり、おなかを押さえたりしながら床をゴロゴロとのたうちうめいています。

これは……？

「魔蓄器を移植した人間よ」

「なんですって」

「彼らは元政治犯よ。恩赦と引き換えに実験に自主的に参加しているわ」

「恩赦って、今も牢屋の中ではないですか」

「死刑囚だからね。生きてるだけでマシなのよ」

「それでも、なぜこんなことを」

「魔蓄器が定着すれば、魔の力を使えるようになる。それは、魔物軍団とはまた別の、対魔の戦力になるわ。まあ、今はまだ、ごらんのとおりだけどね」

よく見れば、女性なのにすね毛がやけに濃かったり、男性の肌の色が赤黒くなっていたり、多少、魔の特徴が表れています。

拒絶反応がきついのでしょうが、まったく定着していないというわけではないようです。

「でも、この実験で人間の魔化が成功したら、まずいんじゃないですか。彼らは政治犯なんでしょう？」

「そこは首枷もあるし、移植手術の際に意識コントロールもしっかりやっているわ」

なるほど。

相当に非人道的であることは理解しました。

魔族だけならず、人間も強化のための素材（マテリアル）扱いです。

みんなが、わたしをモノのように見つめていた理由がわかりました。

わたしも、ここではただのマテリアルということなのでしょうね。

突然、赤黒い肌の男性が吠えながら一人の女性に掴みかかりました。

危ない！

「大丈夫。いつもの発作よ」

赤黒い肌の男性は女性の腰を掴み、うつぶせのまま持ち上げました。女性も何か大声で叫びますが、意味が聞き取れません。

男性の股間から太く長い陰茎が屹立していました。

って、あれが大人の陰茎!?

えええええええ。あんなの無理無理無理ーーーーーー!!!!!!です。

亀頭は赤黒くてらてらと光っているし、陰茎には血管が浮き出てどくどくしてるし、先端からだらだらと半透明な粘液出してるし。

これが本物の陰茎!　いやこれは大人ちんぽと呼ぶ方がまさしくしっくりきます!

凶悪です。山賊強姦の時の想像以上です。えげつないです。

あんなの、わたしの股間からのど元まであるじゃないですか――――!

お母様は、しっかりと愛撫して男性のものを限界まで奮い立たせてから挿入するのですよとおっしゃいましたが、こんなに大きくしたら膣が破壊されてしまいます!　そりゃ自滅行為です!

男性が女性の首筋や肩を噛みます。歯形がついて血が出てきてますが、これが房中術でお聞きした甘噛みというものでしょうか。

なんか違うような気がします。

さらに背後から女性のやや垂れた乳房を鷲掴みにし、ぎちぎちと揉み、引っ張ります。

これが胸への愛撫なのでしょうか。

なんか違うような気がします。

でも、女性の咆哮に若干甘さが混じってきたような気もします。赤い乳首が、びんびんに立って長く太くなりました。わたしの小指くらいはありそうです。

お尻も開いて、毛だらけの谷間がむき出しになりました。ブレンダさんよりずっと濃いです。魔の影響でしょうか。

その真ん中に、真っ赤なバラが開きました。彼女の大人まんこです。剛毛に縁どられた幾層にも重なった小陰唇が花びらのように大きくほころび、中心から汁をだらりと垂らします。

この通路まで、甘酸っぱい匂いが漂ってきました。なんだかドキドキする匂いです。お股や胸の先がきゅんとなりました。

男性はお尻の割れ目に顔をうずめました。女性の大きく開いたまんこを舐めているようです。

女性の声が明らかに甘く高くなりました。

時々キーとかヒーとかいう声が混ざるのは、陰核をちゅうちゅう吸われているようです。

途中で目に入りましたが、女性のクリトリスは乳首同様かなり長いものでした。

もう一人の男性が、これまた突然低く唸りながら立ち上がりました。この人の陰茎はまだ勃起しきってないようで、斜め下を向いてぶらぶらしています。

そのまま、別の女性に近づきます。女性の髪を掴むと、上半身を持ち上げ、顔を股間に当てました。

女性は抗議するように少し呻きましたが、すぐに陰茎を口に含みました。

口淫（フェラチオ）。

いや、男性が頭を持って強制的に前後に振っているので、イラマチオです。

ばんばんばんばん。

顔面と鼠蹊部が音を立ててぶつかっています。痛くないのでしょうか。

腰から離した時に口の中から出てくる陰茎がだんだん太くなってきました。

ぼんと女性を突き離すと、おへそにつきそうなくらい固く長く勃起していました。

二本目の大人ちんぽです。

女性は口の端からよだれを垂らしながら、上目遣いに見ています。その眼は、やや赤色に染まっていました。

お母様の赤い目と金色の瞳を思い出し、胸の奥が少しちくりとしました。

男性は、女性の腰を持つと、そのまま高く持ち上げ、腰に落しました。

ずにゅううっと剛直ちんぽが膣に刺さり、その全長が一息でまんこに突入しました。

「おごおおおっ！」

「はぎゃあああっ！」

怪獣大決戦のような声を上げて、激しいセックスが始まりました。
これは、駅弁ファックですね。
パワフルな男性にしかできないと言われる体位です。
腕と腰の力で女性を持ち上げ高速ピストンしています。

最初の男女もセックスを始めました。
こちらは男性がクンニリングスをやめると立ち上がり、そのまま後ろから繋がりました。後背位（バック）です。獣の交尾の体位ですね。

「うぎょおおおぉぉぉ！」
「うえええええぇぇぇぇ！」

こちらも南海の大決戦のような有様です。

ぱんぱんぱんぱんぱん！

男性が女性の尻に打ち付ける音がリズミカルに響きます。

わたしの手を曳いているカデナさんの手がしっとり汗ばんできました。
エルザさんの呼吸も少し荒くなっています。
性交をまじかに見て、やや興奮しているようです。

一人残った女性は、あいかわらず頭を抱えながら床をのたうっていました。

周りで二組が激しいセックスをしているので、かなりシュールな光景です。

「男性はほかの人のセックスの影響を受けるようですが、女性はそ

うでもないのですか？」
「まだはっきりとは解明されていないんだけど、魔蓄器を移植すると性ホルモンに影響が出るみたいなの。酵素受容体の変質が認められているわ。確実なのは、妊娠しにくくなること。今まで移植手術を受けた後に妊娠した例はないわ」
「なぜ男女の人数があっていないのですか？」
「男性が異常にタフになるから。というのもあるけど、被験者不足が実情ね。政治犯の死刑囚ってそもそもそんなにいないのよ。だから、別の調達方法を検討してるんだけど、それはそれで問題があって。適合さえ成功すれば、リポップを利用して増やせるんだけどね。まだそこまでには至っていないわ」

とエルザさんも説明しながら、目線はセックスしている男女から離しません。
カデナさんも同じく見入っています。

体位を変え、互いを噛み、舐め、いろんなところを揉みあいながら、さて、何分経ったのか。

男性二人はほぼ同時に「でででるるるるるるるるるう！！」と絶叫を上げ、腰を震わせながら膣奥に射精しました。

ドブッシャーと、くぐもった噴射音が聞こえました。

カップル二組はへたり込み、やがてつながったままの膣から精液がぶしゅるるんと噴き出してきました。
陰茎が萎えてきて、隙間が空いたのです。

しばらくはあはあと４人は息を荒げていましたが、また女性二人は頭やお腹を抱えて呻きのたうち始めました。

男性二人は余っていた女性に這いより、一人は胸、一人は股を舐めはじめました。

二人がかりで犯すようです。

男性に愛撫され始めた3人目の女性は、苦痛にのたうつのをやめ、一人にキスをし、別の一人に股を開き、ほころびはじめた性器の全貌を晒しました。

二戦目の開幕です。

「性欲、睡眠欲、食欲が満たされている時は拒絶反応がおさまるみたいなの。魔は、より本能に忠実なのかもしれない。だから魔との一体化の際には、人間の理性が邪魔なのではないか、と考えられているわ」

はい、それ、知ってます。デビ〇マン、読みました。

「3Pも参考になるけど、そろそろ次の部屋に行くわ」

「はい」

歩き出して気がついたのですが、下着を穿いていない私のお股から、透明なしずくがつーと垂れていました。

第２１話　ミンチ肉の正体

『飼料用双脚豚舎』

そうプレートに書かれた鉄柵の前を通りました。かなり大きなスペースのようです。
養豚場に似ているように思いました。
あのミンチの元を飼育しているのでしょう。

「ここは今はいいわ。次へ行きましょう」
「いえ、見せていただけますか」

わたしはエルザさんと手をつないだまま立ち止まりました。
何となく、想像がついてしまいました。
この奥で飼育されている家畜の正体。

生暖かい空気に乗ってやってくる奥からの臭気。かすかに聞こえる声。
そして双脚豚という名称。

見ないわけにはいかないと思いました。
泥をすすってでも生き延びると誓ったうえは。
想像どおりであったとしても。

エルザさんとカデナさんが顔を見合わせます。

「まあいいわ。いずれ知ることだし。今知っても早いということはないわね」

大きな鉄柵は二重になっていました。交互に開け閉めして中に入ります。

柵で出来た通路が続きます。適合調整室や魔物の飼育室にも似ていますが、もっと大規模です。

柵自体は檻と違って大人の身長程度までで上は開いていますので、若干開放的でもあります。

角を曲がると照明が明るくなりました。

いくつかの大きな柵の中に、その家畜は何匹もがまとめられて飼われていました。

いや、家畜といっていいんでしょうか。

匹と数えていいんでしょうか。

ピンク色の肌を持つ彼らは、どうみても人間の子どもでした。

裸で片隅に何人もが寄り集まって、おまんじゅうのように固まっています。

わたしたちが近づくと。寄り集まったまま近づいて来ます。

ぴー、ぴー、とこちらを見つめて鳴いています。

餌が欲しいのでしょうか。

そんな柵がいくつもあります。

一柵に２０人程度ですから、ここにいるのはざっと１００人以上だと思われます。

無邪気に裸でおしくらまんじゅうしている園児たちのようにも見えますが、そんな微笑ましい光景では決してありません。

「この子達が、飼料……？　私が食べたミンチ肉、なのですか」
「いや、さっき食べたのはもっと奥の柵にいる経産双脚豚よ。子どもを産めなくなったから潰してミンチにしたのよ」
「やっぱり人間を食べさせたのですか！　それが大聖会に属する方の仕業ですか！」
「そういうと思ったけど、これ、人間じゃないわ」
「え？」
「適合実験の途中でたまたま生み出されたのが双脚豚なのよ」

エルザさんの説明は大聖会の聖職者らしく、神や悪魔の話にちょくちょくずれて回りくどかったので、要約します。用語もわかりやすく置き換えています。

人間に魔の臓器は定着しにくいですが、逆に魔は人間を簡単に侵食します。
たとえば、魔の雌と人間の男性がセックスしたら、その男性は時を置かず魔に変容します。逆に魔の方が人間になることはありません。

ドッチャがお母様としなかった云々と司政官にからかわれたのは、これが理由です。

適合実験の初期に様々なパターンのアプローチがなされました。その一つに、人間の精子と魔細胞の交配というものがありました。

培養器内の複数の人間の男性から採取した精液の塊に1個の魔細胞を加えたところ、すべての精子が魔細胞に侵食されて取り込まれ、爆発的に増殖しました。
魔細胞が勝手に減数分裂しだし、精子が魔細胞を卵細胞と誤認、

多精拒否機能はそもそも魔細胞にはないため次々にゲノム結合していったのです。結果、なんと数億という一卵性多胚となりました。

しかし、胚の大半は成長途中で消滅、他の胚にゲノム混合されていき、やがて生き延びた胚が分離して３０体ほどの赤黒い胎児に進化しました。その後も培養器内でどんどん成長し、しかもその成長速度は人間の十数倍というものでした。

２週間程度で培養器にはおさまらなくなった彼ら。

ヒトゲノムを多重に取り込んだためか、形こそほぼ人間の幼児の男女でしたが、肌の色は元の魔の赤黒い肌と人間の白い肌のブチという特徴的なものでした。

そして知性はなく、魔の力も体力もありませんでした。レギオンとしては失敗作でした。が、彼らの成育実験は打ち切られることなく、その後も続けられました。

成長速度が異常に早く、消化器官は丈夫なのか何でも食べる雑食で、１年もしないうちに成人の姿となりました。

男と女は念のために別の檻に入れていたのですが、そうすると共食いを始めました。

ある朝、数人が喰われて骨になっていました。

リポップが期待されましたが、再発生はしませんでした。

そもそも胚から発生している時点で魔とは異なるのですから、当たり前といえば当たり前なのでしょうが。

次に、男女をつがいにしてみると、すぐ性交を始めました。魔蓄器移植者同様、本能に支配されていました。

あっという間に女のおなかが膨らみ、三つ子や四つ子、五つ子など、いずれも多胎出産となりました。

魔蓄器を移植された女性は全く妊娠しなくなるのに、どういうわけか彼らは逆に繁殖力旺盛でした。

こうして生まれた第二世代には全く人間の肌の色をしている子どもが何人かいました。

知性の獲得や魔の力の発現をしばらく追跡調査しましたが、この点では第一世代よりもさらに低下していました。

自力で立つことも出来ない虚弱な子供もいました。が、病気に対する抵抗は強く、成長速度そのものはさらに早くなりました。

何世代か交配を繰り返すうちに、3年から5年で老衰死すること。肉質は人間とほぼ同じで、魔族の飼育用飼料として最も適していること。知性は成人しても獲得しないこと。病気になりにくいこと。餌は何でもいいが、動物性のものの方が魔族の飼料にするにはよいこと。などがわかってきました。

また良い肉質の子を多産する母体の研究なども進み、餌はB級、C級肉質のものや老齢化した双脚豚を潰して共食いさせれば事足りたので、今ではこうして双脚豚牧場として安定生産出来るようになりました。

……ということらしいです。

「でも、それじゃやっぱり元は人間じゃないですか！」

「精液は人間じゃないでしょ。大元の細胞自体は魔のモノなんだし。人間に見えるだけの家畜よ。親や兄弟でも美味しそうに食べるしね」

確かに精液は人間じゃないですが、エルザさんもカデナさんも元はお父様の精液でしょうに。
どこかでみんなの倫理観がおかしくなっています。

まあそうじゃなきゃ、魔をトレーニングしたり、人間と魔を合体させたりなんてことは出来ないのでしょうが。

ああ、そうか。適合調整の検体不足の解消策って。

「この双脚豚を、魔蓄器の移植にも使おうとしているのですね？」
「このままじゃ無理だけどね。今、戻し交配の実験を進めている。何世代も先祖返りさせる研究よ。圧倒的な成長力を保ったまま、人間と同じレベルの知性を取り戻せないか。もし先祖返りできれば、適合実験の被検体不足は解消されるわ」

それって、やっぱり、人間じゃないですか。

わたしはそれを言えませんでした。だって、わたしも双脚豚を食べてしまったし、これからも食べるのですから。
わたしもどこかおかしくなってしまっているようです。

「時間を取られたわ。次が最後。というか、最初の部屋に戻るんだけどね。そしてそこが貴女の明日からの仕事場よ」

双脚豚の子どもたちが去るわたしたちを柵の端まで四つん這いで追いかけて来、ぴー、ぴーと鳴いていました。
四つん這いなのは運動能力が低いせいでしょうが、家畜として育てられ、人間になついているのでしょう。

子ども双脚豚が脇にどいたので、奥の柵に成人双脚豚の男女が寝ているのが見えました。
自重を支えきれないのでしょう。
みんな丸々と太っていますから。

喰われるために生を受ける人間。
産んだ子供を餌として魔に食べられる、その事実すら理解できない知性のない母親。その経産双脚豚を食べたわたし。

ここは地獄です。

『雌魔族実験棟』

最初の部屋に戻ってきました。

雌魔族？

到着した時よりも人の数は減っています。各自の持ち場に戻ったのでしょうか。
それでも、今までの部屋の中で一番たくさんの人数がいました。

「おお、戻ってきたなセカンド」
「この実験棟の責任者、主任技師長よ」
「主任技師長。ミ、……いえ、セカンドです」
「ふむ。主任でいいぞ。エルザ、カデナ、ここのことは俺から話そう。ここはその名のとおり、雌の魔族を検体として実験している。目標は、魔に子どもを産ませることだ」
「え？」

魔は魔として生まれる。子どもなんていない。そのはずでは？

「そんなことありえないって顔をしているな。だが、実はたった一例だけ、魔が子どもを産んだことがあるんだ。しかもこの第八境界でな」

「えっ」

では、わたしもお母様の子どもである可能性が！

「魔の子どもは無垢だった。きちんと教育し、育成すれば、人類の味方となりうる可能性があったのだ。だが、その母親も子どもも失われてしまった。ここではその再現に取り組んでいる。境界の失態だから、魔の出産については今は極秘となっている。再現性にめどがついた時点で公表する予定だ」

「そうですか。でも、どうやって魔に子どもを産ませるのですか？」

「そんなの決まっている。奴らは本能で生きている。だから、本能を刺激するのだよ。性欲そのものをな」

しかし疑問があります。

「子どもを産む必要のない魔に性欲があるのでしょうか？」

「魔に生殖器はある。進化の中で失われなかったということは、無意味な器官ではないだろう。それに性欲そのものは確認されている。破壊衝動と一体化してはいるがね。雄の魔物はよく人間の女を犯す。それは孕ませるというよりは、性的に破壊して喜んでいるという側面の方が強い。雌もそうだ。人間の男をたぶらかし、射精したところを喰らう。それ自体が楽しいんだろう。裏返せば、性衝動が単純で稚拙なんだ。だから、入念に性的刺激を与える実験をしている」

なんかものすごく嫌な気がしてきました。

「ええと、この部屋にあるいろんな器具って……」
「そうだ。幾多の雌魔族を性的に興奮させたガジェットの数々だ。相当数の実験を積み重ねてブラッシュアップしている。イキ狂って死んだ雌もいるぞ。すぐリポップさせてまたイキ狂わせる。連続アクメ昇天だ。どうだ。すごいだろう」
「あのう、ここがわたしの仕事場って言われたんですが、それって……」
「ああ、セカンド、お前は明日からイキ狂うのが仕事だ！」
ですよねーーー！
じゃないですーーーーー！！！
わたしまだ5歳なんですよ！　思考が大人なのは自覚してますけど！
イキ狂うってどういうこと！
「まあ徐々に慣らしていくから安心しろ。それに、お前が本当に魔なのか、ただの人間なのか。まずそれを調べねばならぬ。話はそれからだ」
よかった。
いきなりアクメ昇天とか。どうしようかと思いました。
「午後、お前の先輩が実験を受ける。見ていくといい」
え？
先輩？

そういえばわたしはセカンドです。
ファーストさんがいるのでしょうか？

第２２話　魔族責め

例の食事室で昼食です。
エルザさん、カデナさんは隣の部屋でガラス越しにわたしを監視しています。

また、双脚豚のミンチです。内臓を減らして戴いたのと、塩で味付けして軽く炒めて戴いたのとで格段に食べやすくなりました。スプーンもついていました。

境界の方々は、本質的には優しいいい人たちなのかもしれません。職務に真面目過ぎて倫理性がちょっと壊れているだけで。

朝食べた経産双脚豚よりも柔らかくてジューシーです。これなら、高級な豚肉といっていいでしょう。
多分これ、子どもの肉ですよね……。

命をいただきます。
心の中で泣きました。

食べ終わると、雌魔族実験棟に戻ります。

「来たな。ちょうど始まったところだ」

主任がにこやかに迎えてくれました。
その笑顔が怖いです。

実験棟の中ほどにあるＸ型の柱に、一匹の雌の魔族が縛られてい

ました。ちょうど人間と同じくらいのサイズですが、腕が蝙蝠のように翼状になっており、膝が逆間接になった鳥脚でした。膝から下は鱗が覆っています。

手足の爪は鋭く伸びて……いたようですが、半ばで切落とされて丸く削られていました。

牙もあったようですが、こちらも折られています。

どうやら、手足の腱も切られて動かせなくなっているようです。

魔物は傷の再生も早いはずですが、遮断液か何かで阻害しているのでしょう。

無力化済みということです。

魔族は整った顔立ちをしていますが、威嚇するように周囲をにらんでいるのでさすがに美しいとは言えません。

赤黒い髪の毛は肩までの長さで大きくカールしています。

そして例によって首枷はしっかり。

胴体部はやや青白いほかはおおむね人間と同じで、盛り上がった二つの乳房、細く絞まった腹、ぐっと張り出した腰つきは、お母様ほどではありませんがなかなか見ごたえのあるプロポーションです。

両手両足をX字に上下左右に引き伸ばされているので、赤い毛に覆われた陰部が剥き出しです。

陰毛の奥には、たしかに人間のような女性器があるようです。

頭や心臓、脇などに多数の細いコードがテープで着けられています。

周囲には画面を見つめる技師多数。

バイタルをモニターしているのでしょうか。

「被検体はコード１１６００４。レサ・ワービー・ナンバーフォーだ。ワービーは飛行タイプの魔族で、雌型しかいないといわれている。単性生殖の実験には最適なんだ」
「ナンバーワンからスリーは失敗ですか？」
「いや、リポップ履歴だよ。こいつは捕獲後３回目のよみがえりだ。リポップ０が００１だからな」

やっぱり実験に失敗して殺してるんじゃないですか。

あれ、でもそのコード体系だと、わたしは一度死んでリポップしたことに？

「セカンドはリポップカウントじゃないわよ。９９９型は特殊だからね」

横のエルザさんが教えてくれました。ですよねー！
死んだ記憶ないし！

実は、この時のわたしの突っ込みは結構核心をついていたのですが、それはまだ先のお話。

Ｘ型の柱の左右にロボットアームが天井から降りてきました。
少し離れた場所のコンソール席に技師がつき、グローブ状のデバイスを着用しました。
技師たちが腕や指を動かすと、ワービーの左右のロボットアームがシンクロしてシャー、シャーとスムーズに動きます。
なるほど、これで安全に魔族に触れられるのですね。

ワービーを固定するのに、ドッチャみたいに魔法障壁で器用に拘

束したのかと思っていましたが、これなら魔法に熟達してなくても可能です。

そしてこれから行われる実験も。

「我が第八境界が誇る聖なる遺物（アーティファクト）の一つ、ゴレムだ。ちなみに山を崩したり出来るとてつもなく大きなものから、細胞を加工するぐらいとんでもなく細かなものまで、各サイズ揃っているぞ」

パワーショベルからロボットアーム、マイクロサージェリーシステムまでまとめてゴレムと呼んでいるようですね。

まあ、どれもロボット（ゴーレム）といえばロボット（ゴーレム）かもしれません。

双脚豚が生まれるに至った受精実験にもゴレムを使ったのでしょう。

左右のロボットアームはレーザーメスを展開し、ワービーの上腕部を深く裂きました。

そして長い鉗子をその傷口に伸ばし、太い繊維を中から引き出しました。

運動神経です。

翼を動かすために発達した神経を剥き出しにされワービーが口から泡を吹いてふーふーわめきます。空気に触れるだけで痛そうです。

「魔物を飼いならすコツは、まず恐怖だ。絶対に勝てない相手だと心底理解させる。少しでも逆らったら殺されるとな。決してこちらの弱みや優しさを見せちゃダメだ。圧倒的強者として畏怖の対象となるのだ。絶対服従を魔族に叩き込む」

太い神経に針を突き刺しました。高周波の電磁パルスを送り込んでいるようです。きーーんという音がします。
腱を切られている腕がバタバタと動きます。筋肉が勝手に収縮しているのでしょう。

ワービーがよだれを垂らしながらがくがくと首を振っています。よほどの苦痛なのでしょう。
モニターを見つめる技師の一人が合図しました。

さらにグローブをはめた技師が二人加わり、床から別のロボットアームがせり出してきました。

ああ、これは単なるロボットアームではなく、マスタースレイブ操作による遠隔手術機ですね。

太ももを切開し、神経束を引きずり出しました。同じように針で電気刺激します。

両手両足を責められ、姿がぶれて見えるほど頭や胴体を高速でがくがくがくがく震わせます。

人間ならとうに失神している場面でしょうが、無駄な高い体力が、気を失うことを許しません。
そういえば、失禁もしませんね。
魔は排泄しないのでしょうか。

しかしそれでも、２０分ほど経ったでしょうか。突然ワービーは動きを止めました。
表情が弛緩し、口からだらりと舌を垂らし、眼球は左右別々の方向を向いていました。

とうとう気絶したのです。

４本のゴレムは神経を戻し傷口を直ちに縫合しました。腱は切ったままのようです。

この遠隔手術機があるのなら、別の部屋で行われていた魔物の解剖も簡単なのではないかと思いましたが、予算の掛け方が違うのでしょうね。

マスター側で操作するのには外科の免許が必要でしょうし。それは自分の手で覚えなくてはいけないのでしょう。

がんばれＢ・Ｊ先生。

４本のロボットアームは大きく位置を変え、ワービーの口腔、両乳房、性器に電気針を突き刺しました。

口の中は舌の根本、乳房は山の半分くらいの位置で上から下に串刺しに、性器は陰核を貫いたようです。

一気に電気刺激が与えられました。

「おごおおおおおぉぉぉぉぉ」

ワービーが再び意識を取り戻しました。

ブーンと低い音が聞こえています。今度は低周波パルスです。

舌が、乳首が、陰部がパルスによりふるふるとバイブレーションしています。

ワービーの声は舌の根をピン打ちされているのでくぐもってはっきりしませんが、甘い声が混じっているようにも思えます。

「絶対服従からの絶対愛撫。これで魔族は落ちる。強者への性欲の虜となり絶頂に至るのだ」

主任は真面目に語りますが、やはりどこかおかしくなっているようです。

なんですか絶対愛撫って。

「うぶぶぶぶぶ」

ワービーの顔が紅潮しています。

モニターの技師がまた合図しました。

ゴレム側のコンソールに技師がもう二人増え、ロボットアームがまた2本床から出てきました。

このゴレムの数は自慢するだけのことはあります。

でもこのゴレムは他の4本と違って細く、触手の様に動く蛇腹でした。

そして先端には陰茎がついています。

張型（ディルド）ではなく、本物の陰茎。

睾丸もぶら下がっています。

「これは聖なる遺物（アーティファクト）ではない。ここで開発したフレキシブルシャフトだよ。先端に取り付けているのは、双脚豚のペニスを培養したものだ」

「生きてるんですか」

「栄養も血液の循環もないから1、2時間で死んでしまうがね。だからペニス部分は簡単に交換出来る仕様になってる。メス堕ち実験には十分だ。特にデカいのを選んでるしな。ほら、入るぞゴレムペ

ニーが」

ゴレムペニーって……。

そのネーミングセンスは．いかがなものでしょうか。

1本の蛇腹がしなり、ゴレムペニーがワービーの性器にめりめりと挿入されるところを見てしまいました。

細い溝がこじ開けられ、小陰唇を捲りながら胎内に姿を消していきます。

性器全体が丸く開き、針の刺さったままのクリトリスが押し出されて剥き出しになりペニーの上で震えています。

「うぶううぶううううぶぶぶうう」

シャフトがグネグネとうごめき、ゴレムペニーが立体的に抜き差しされます。

針での電気愛撫は続けられたままの強制交尾ですが、ワービーは感じているようです。

周囲で測定している技師の動きもあわただしくなってきました。

さらにもう1本のゴレムペニーが膣に挿入されました。ダブルペニスファック。

ずっこずっこと交互にワービーを貫きます。あるいはグルグルと二本が同方向に回転したり、左右に大きく開いたり。

ワービーの膣はどんどん広げられていきます。括約筋が駄目になって開きっぱなしになるんじゃないでしょうか。女性の性器を何だと思っているのでしょうか。

って、エルザさんもカデナさんも食い入るように実験を見ていま
す。
わたしも目を逸らせませんが。
「お、お、お、お、お、お、ご、ご、ごごご」
ワービーの喘ぎが早くなってきました。
モニターを見つめる技師が合図しました。
ハービーの股間前に漏斗状の装置がせりあがります。
「ごごごごごごおおごおおおごごおごごお」
ぶしゅうううっ！
ワービーの膣から白濁液が噴射され、漏斗に吸われていきました。
まるで尿失禁ですが、明らかに膣からでした。
膣液なのか子宮液なのかわかりませんが、魔族は絶頂するとほんとに潮吹きするようです。
ＡＶだとただの尿なのに。
それはともかく。
「各シリンダーに分離吸入」
「細胞増殖酵素（セルブースター）投入」
「走査顕微鏡にセット」
「卵細胞確認」
「シリンダー1、増殖を認めず」
「シリンダー2、増殖を認めず」

……。

モニター班が慌ただしく白濁液の標本を操作していましたが、どうやら実験は失敗したようです。

ワービーはまた気絶していました。白目を剥き鼻の下を伸ばしてだらしなく口を開けたまま。

アヘ顔です。

アクメ昇天ですね。

そのままゴレムによりX型の柱との拘束を解かれ、可動式の檻に入れられると搬送されていきました。飼育室に戻されたのでしょう。

飼育室の魔物はやけにおとなしいなと思いましたが、ワービーみたいに腱を切られて動けなくされていたのも多いのでしょうね。

「ううむ。今回も卵細胞の確認どまりか。ワービーは卵生か卵胎生だと思うから、卵まで成長してくれれば望みが出てくるのだがなあ」

ワービーは卵で生まれるのですね。

そういえば、ほとんど人間の姿でしたが、おへそがありませんでした。つるんとしたお腹でした。

あっ！　お母様にはおへそがありました。

ということは！！

「まあ今日のはセカンドへのオリエンテーリングみたいなもんだからな。明日からしっかりやれよ！」

がははははと主任は朗らかに笑いました。

え、ちょっと待ってください。

わたしまだ6歳にもなってないんですよ。

それに、初潮も来てないんですよ！

第２３話　尿検査（前書き）

サブタイトルのとおりです。
苦手な方はご注意。

第２３話　尿検査

「あのう」

わたしは、手を繋いでいるエルザさんにこっそり声を掛けました。

「お花を摘みに行きたいのですが」

「ああ、そうね。そろそろ催してくるわよね。で、大きい方？　小さい方？」

いやそんなはっきりと。

「ち、小さい方です……」

「主任ーーー。セカンドが排尿するそうです」

「おお、これは手間が省けたな！」

なに大声で知らせているのですか！？

え？　え？

どやどやとわたしの回りに人が集まってきました。

細いシリコンチューブや真空になったパック、サージカルテープや漏斗、ビーカーなどをそれぞれ持って。

これって。

「今日のうちにサンプル採っておきたかったんだよ。そっちから申し出てくれるとは助かる」

やっぱりーーー！
でもちょっと待ってください。ここでするんですか。皆さんが見ている前で！

「あのっ、検尿が大事なのはわかりますがっ。せめてお手洗いで採取させてくださいっ！」
「いや、本物かどうかわからないからな。直接サンプルを採る」

どこぞのドーピング検査みたいなことを！
わたしは逃げ出そうとしましたが、エルザさんに「爆発」と囁かれてしまいました。

この悪魔！

そして多勢に無勢。私は歯科の診察椅子のようなリクライニングシートに固定され、白衣の横紐をあっさりほどかれると、ペロンと前側の布をめくられました。
穴から頭を抜いてシートの後ろに垂らされた白衣は、新幹線の椅子のシーツみたいになりました。
いや、白衣はどうでもいいです。

というわけで私はあっという間に全裸で椅子に固定されてしまいました。

「ふむ。まだ我慢できるか？」

主任が聞きますが、我慢できるのならお手洗いを頼んでいません。
それに裸になったので寒いです。布一枚でも違うものですね。
と冷静に分析している場合じゃないです。

「いや、もう、漏れそうです……」
「そうか。せっかくだからもうちょい観察させてもらおうかと思ったが、尿の採取が優先だ。各自セッティング！」

お尻の下に給水シートが敷かれ、さらに床にも敷かれました。その上に広口ビーカー、シリコンチューブが接続された漏斗が置かれました。

足を固定したバーが左右にスライドし、わたしの股間が強制的に広げられていきます。

「え、こんな、はずかしい」

剥き出しになった股間を狙って何台もの上下左右にカメラが固定されました。

「高精細カメラ接続完了」
「サーマルスコープ接続完了」
「核磁気共鳴カメラ接続完了」
「ハイスピードカメラ接続完了」

さらに胸や手首にセンサーが取り付けられます。

「バイタルモニター接続完了」
「よし、構え！」

いつの間にか股間に合ったロボットアームが漏斗を掴み、集音マイクのようにわたしの股間に広口を向け、寄ってきます。

漏斗から伸びたシリコンチューブは真空パックに繋がり、その真

空パックはビーカーの中のお湯に浸かっていました。

「ビーカー水温摂氏３６．５度。オーケーです」

「よし、全モニター記録開始！　セカンド、いつでもいいぞ！」

いやですーーーー！

録画されながら、モニターされながら、何人もに凝視されながら、おしっこするなんてーーーー！

いやーーーー！！！！！

シャー。

バシャバシャバシャ。

限界まで来ていた膀胱はわたしの願いなど聞き入れず、無慈悲に決壊しました。

あああああ。

おしっこが勢いよく漏斗に当たって跳ね散っています。

床に敷かれた給水シートがいい仕事をしてくれています。

漏斗を支えるロボットアームが点々と濡れています。これ、錆びないかしら。

大半の尿はチューブを通って真空パックに溜まり、ビーカーの中で黄金色に膨らませ始めました。

昨夜ブレンダさんに引っ掛けたこととといい、もう私は秘めやかな

排泄が出来なくなったのでしょうか。
お手洗いがこんなに恋しくなる日が来るとは思いませんでした。

やがて。

ああ、出し切っちゃった。

ぴゅっ、ぴゅっと最後に数滴を飛ばすと、尿意がおさまりました。

「録画確認！」
「オーケーです」
「露出、問題ありません」
「バッチリです！」
「全て大丈夫です」
「ようし、サンプルはビーカーに入れたまま研究室で分析。記録データはいつものとおり共有ストレージで各自精査。気がついたことがあれば何でも報告してくれ。いや、セカンド用のノートは用意出来てるな」
「はい、Z：フォルダに作成済みです」
「メモはノートに上げてくれ。その方がはかどる。明日は忙しくなりそうだからな！　今日は残業なしのつもりで集中してやろう！」
「「「はい！　主任！」」」

なんだかイントラがよく整備されたホワイト企業みたいな話をしていますが。

それってみんなでわたしのおしっこ詳しく調べるってことですよね。
録画した映像も共有してガン見するってことですよね。

セカンドレイプというかリベンジポルノというか。

やめてーーー！
わたしの人権、守ってーーー！

「エルザ、カデナ。股を消毒して服を着せてやれ。拘束ももういい」
「はい、主任」

「セカンドも夜どおし運ばれてきたんだ。もう疲れているだろう。夜食まで個室で休ませてやれ」

やっぱり主任はいい人なのですね。

「だが、排便の時はすぐ連れてくるように。ここでサンプルを採る」

前言撤回！

◇◇◇

「糸引いてたわよ。感じちゃった？」

エルザさんがからかいます。
さっきお股を拭かれたとき、透明な粘液が出てるのを指摘されたのです。

「生理現象です」
「おしっこだけにね」

５歳児いじめて何が楽しいんですかっ！

「ここよ」

カデナさんが指さしました。

ここは飼育室のさらに奥。鉄扉に仕切られたそこは、格子扉の独房でした。

三畳間ぐらいの狭い部屋にベッドと小さなテーブルだけが置いてあります。

小ぎれいにしていますが、扉以外はモルタル仕上げで、床は奥の角に向かってやや傾き、端には丸い排水溝がありました。

窓はありません。

格子のプレートに９９９００２と書かれていました。

「夜は特段の指示がなければここで寝る。朝晩はわたしたちが同行するわ。朝、白衣をロッカー室で新しいものに着替えなさい。夜はそのまま寝るということよ。今日はまだ早いから、夕食の時に迎えに来るわ。わかったわね」

「はい、わかりました」

「ここの扉は魔法セキュリティが掛かっているわ。逃げようとしてもすぐ警報が鳴る。まあ、この扉のロックを解除するのは無理だろうけど、念のために言っておくわ。それに、その首枷で境界内のどこにいるかは分かるから隠れても無駄よ。遠隔で首枷を爆破することも出来るから、本当に逆らっては駄目よ。融通効かない当直の時もあるから、有無を言わせずドカン、てなるかもよ」

「は、はい、わかりました！」

「よろしい。では入って。この部屋の中では何をしていてもいいけど、監視されてるからほどほどにね」

なにがほどほどなんですかーーー！
一人エッチとかしませんよ！

格子の鍵をかけると、二人は去っていきました。

ベッドに腰かけて、考えます。
ベッドはふわふわとはいきませんが、そこそこ清潔なものです。
待遇はそんなに悪くないです。
自由がないことを除けば。

しかし、メスイキ実験とは。
本当にあのワービーみたいなことをされてしまうのでしょうか。
子どもなのに。

いや、双脚豚の子どもをミンチにして料理する人たちです。
わたしはただの検体。セカンドです。

職務に忠実な彼らは、ためらいなくやるでしょう。

わたしのあそこはどうなるのでしょう。ゴレムペニーが入るはずがありません。
股から裂けて死んでしまいます。

お母様。

谷底でのお母様の戦いを思い出します。お母様も石の槍に串刺しにされていました。
ひどい戦いでした。

そうだ。お母様は何とおっしゃっいましたか？

『6歳になる前に決めないと』

ドッチャも6歳の夜の儀式がどうとか言ってましたね。

今日は何日でしたっけ。

昨日で一晩経ちましたから、満月まではあと5日。

5日後に何かが起こる？

ドッチャの言う儀式とはここでの実験のことでしょう。第八境界の実体をドッチャは詳しく知らないようでしたから、実験のことを儀式だと勘違いしたに過ぎないのでしょう。

ですが、わたしが6歳になる時が、なにかのチャンスになりそうです。

それまで、何とかして生き延びないといけません。

わたしは右手をお股に差し入れました。

性器を触ります。

消毒布で拭かれて乾いたわたしの性器。

ちょっとほぐすように揉んでみますが、気持ちよくはなりません。

ワービーの広げられた膣。

適合実験の男女のセックス。

ブレンダさんの大人まんこ。

脳裏に思い出しますが、わたしの性器が濡れることはありませんでした。
まだわたしが性的に未熟だからでしょう。
あるいは、刺激が強すぎて感覚が麻痺してしまったのかもしれません。
ベッドに横になって、ぺたんこの胸を揉んでみたりお尻の穴を突いたりしてみましたが、やがてうとうととして、気がつけば寝ていました。
主任が言うように、相当疲れていたようです。

◇◇◇

「……なさい。セカンド」
うん？
「起きなさい、セカンド」
はっ。
格子扉の向こうにエルザさんとカデナさんが立ってこっちを見ていました。
わたしは、といえば、白衣をめくりあげて右手を股間に、左手を胸に当ててベッドであおむけに寝ていました。

あのまま眠ったんでした！

ばっと白衣を戻します。

「あららー。だから監視されてるて言ったのに」

「いや、あの、これはっ、その。試しにというか慣れとこうというか」

「気の早いことねえ。さすが９９９側ね」

「ううーーー。イジめないでください――」

「あら」

カデナさんが冷たく言いました。

「明日から、徹底的にいじめられるのよ。徹底的にね」

怖いです。

「さて、夕食よ」

また個室でガラス越しに見られながらの食事です。

夕食はミンチではなく、胸肉のソテーでした。

ちゃんと味付けられていますが、形がある分、より生々しいです。

ナイフとフォークで切り分けながらいただきました。

明日のことは考えない。

今日を生き延びることを考えましょう。

第２４話　便検査

夕食を終えて独房に戻る時、まだ雌魔族実験棟の方から話し声がしていました。

結局残業になったようです。
勤勉な人たち。

変態さんですが。

独房の格子扉のロックがかかると、照明も暗くなりました。
連動しているのでしょうか。

することがありません。体を休めましょう。
明日は、嬲られる体です。清い体も今日までです。

お母様、どうやら私の初めては愛する男性とではなさそうです。
ごめんなさい。

人間とですらないかも。ゴレムペニー……。双脚豚……。

まだ恋も知らないのに。
同年代男子を見たのだって、偽ドッチャだけです。
悲しすぎます。

わたしはやがて眠っていました。
頬に一筋涙を垂らしながら。

……うっ。

目が覚めました。まだ真っ暗です。

いや窓がないから、明かりが点かないと昼間でも真っ暗でしょうが、格子扉の向こうの通路も照明が落ちているということは、夜中なんでしょう。

あ、まずいです。

ベッドにボタンがあったはず。

手探りすると、コードが手の甲に当たりました。

ナースコールならぬトレーナーコール。

何かあったらこれを押せと言われていました。

この部屋にはありません。

お手洗いが。

便意が。

我慢できません。

これは緊急事態です！

ボタンを押すと、すぐに何人かが集まってきました。照明が点きます。

あれ？　エルザさんカデナさんじゃない？

雌魔族実験棟の技師たち。男性が４人も？

「大便か！」
「はひっ！？」
「大便だな！」
「う、うえええ？」
「大便をするんだな、と聞いている！」
「は、はい。したい……です……」
「よし、緊急だ！　拘束シートに乗せて運ぶ。直ちにこの椅子に座れ！」
「は、はい」
「エルザたちは着替えで遅れている。だからといって逃げようとかは思うな。主任もその首枷の権限を持っているからな」

いや、逃げるなんて考える余裕はありません。お手洗いへ早く、早くお願いします！

「固定完了！」
「ただちに実験棟に移動！」

ええええ！　お手洗いは！

あっ、そういえば『ここでサンプルを採る』って。

「すでに計測装置はセットできています。後はシートを運んで接続するだけです！」
「急げ！」

男性４人に椅子ごとごろごろ押されて実験棟に連れていかれます。

このシート、キャスターがついているのですが、ダンパーはないので振動が直に伝わってきます。

あ、駄目。そんなガタガタしたら！　漏れてしまいますぅ！

何とかちびらずに実験棟にたどり着きました。けど、なんでこんなに人がいるのですか！？

昼間より増えてませんか？

主任がにこやかな笑顔で仁王立ちしています。

その前まで運ばれました。

椅子が固定されると周囲でてきぱきと技師たちが器具をセットします。

股下にはまた吸収シートと、大きなおまる。

そして録画用のカメラ。

なんとなくそうかなーと思っていましたが、これってそういうことですよね。

やっぱりここの人たちは変態さん！

「ガススコープと臭気センサーも用意したぞ。これで完璧だ！」

主任、何を準備してるんですかあ！

「遅れました！　主任！」

「エルザ、カデナ。間に合ったな。これから脱糞だ」

脱糞言わないで下さい！

ってかやっぱりここでみんなに見られながら排泄するのですね。

わたしがウンコするとこ、みんなでガン見するのですね！

いやあああああ！

また白衣を新幹線シートのシーツ状態にされます。

背もたれがリクライニングしていき、足を固定しているバーが膝のところでぐいと曲がって、かつ左右に開いていきます。

お尻の下のシート部分が背中側にスライドして収納されていきます。

こ、このポーズは。

そうです。子どもにオシッコさせるときのシーシー姿勢。

別名ブレンダさんポーズ！

肛門位置が斜め前下方４５度に固定されました。

必然的のその上のわたしの性器はほぼ真正面を向いています。

大きく開いた足の真ん中で、室内の全員に余すところなく晒す格好です。

ブレンダさんの時は真っ暗で、前で見ている人もいませんでしたが、それでもブレンダさんは羞恥で泣いていました。

わたしは無影灯の下で、何も隠さず股間を開陳しています。

乙女の屈辱です。

などと冷静に考えてる場合ではありません、というか既にそんな余裕はありません。

便意、限界！

「はあ、はあ、あっ。ああ……、み、見ないでく、ださい……」

「だが断る」

「ああっ、ダメです、ああ、はっ、はあああっ！」

「ははははは、出し尽くせ！」

「ダメです、ダメです。わたしは、もう……！」

ショックカ○ンに撃たれた宇宙空母のように、おしりの穴が開いていくのが分かります。

きっとブレンダさん同様、小山のように盛り上がり、先端がめくれてきているはずです。

あんなの見なければよかった。

なまじ光景が目に浮かぶだけに、より恥ずかしいです。

ぷすーーーー。

ガスが出ました。

われながら臭います。

え、主任。鼻の穴を広げてガスを吸い込んでいます。

他にも何人もが吸ってます。

何してるんですかーーーー！
やめてー！
かがないでーーー！

ガスが抜ければ残るは本体のみです。わたしを羞恥のどん底に突き落としながらずずずずと肛門を通過していく感覚がきます。

「おお、うんこが出てきたぞセカンド！　ほかほかだ！　１０センチ。１５センチ。まだ切れないな。いいぞ、がんばれ！」

主任が喜んで叫びます。なんで実況してるんですか！

ぼとん。

たぶん２０センチくらいで一度肛門が締まり便が切れおまるに落下しました。

ブレンダさんは一本糞でしたが、子どものわたしはそんなに続けていきめません。

「前半部出たぞ。回収班！」
「はっ！」

数名がおまるを新品に交換しわたしの便が入った方をどこかに持っていきます。

あなたたちもまじまじとうんこを見ないで！　臭いもかがないで！

「ちょっと待て。解析装置にかける前にここに」

呼ばれて、便を持って行こうとした係が主任のそばまで戻り、お

まるを捧げるようにしました。

「うむ」

主任はおまるの中におもむろに右手を突っ込み、便を指先ですくいました。

ええええ！

その便を左手の甲に塗りました。そしてクンクンと臭います。

ちょっと待って！　もうやめてーーー！

しかし私はそれ以上恥ずかしがっていることは出来ず、腰に落雷にも似た衝撃を感じました。

便意の波パート2。

後半戦です。

「あああああああ」

我慢できずに声を出してしまいました。はしたないです。

また肛門がカルデラになります。もうやだ。

ずばっ！

おしりの穴がやや緩んでいたのか、後半部分はロケットのように勢いよく出ていきました。

べちょっとおまるにぶつかってへばりつく音が響きます。

でもまだ残便感があります。

ぶっ。ぶっ。

残りは細かい塊を何度もひり出す格好になりました。

腹筋が弱いので、大人みたいに一気には出し切れないのです。

ほんともうやだあああああ。

それでも、やがてお腹の中のものを全て吐き出しました。

便意がおさまり、おしりの穴が閉じていく感覚がありました。

2個目のおまるはまだ下にあります。臭いが立ち昇ってきます。

「ふむ」

「いかがですか主任」

「痒みもないし、赤くもなっていない。パッチテストは問題ないようだ」

左手の甲を見てそういうと、また右手をおまるに突っ込みました。

そして指先でわたしのうんこを掬い、そのまま口に運びました。

ぱくん。

えええええええええ！！！！！

この人、うんこ食べた！

わたしのうんこ、食べた！

「ふむ、やはりな。苦味はあるが、刺激は少ない。予想どおりだ」

なにを言ってるんですかこの人は！

「第2弾も解析班に回せ。こりゃ眠れんぞ！」

エルザさんが消毒布でおしりを拭いてくれました。

恥ずかしさはもう限界を超えていたので、拭かれるがままです。

「よし、腸スコープ挿入。排便直後の大腸を観察する」

え？

数人の技師が細長くしなった黒いコードを持ってきました。

先端部分にはＬＥＤライトとＣＣＤカメラ！

技師らは手際よくわたしの肛門にジェルを塗ると、指先で広げてコードを挿入しました。

あああ！

そんな！　深い！

「はい、深呼吸して、リラックスしてねー。緊張すると、腸が閉じてかえって痛いからねー。はい脱力ー」

技師が声を優しく声を掛けますが、わたしはそれどころではないです！

お母様、処女はおしりを先に内視鏡に捧げてしまいました！

「あっ、痛っ。痛いです」
「ちょうどカーブしてるところだからねー。はい抜けたー。はい奥へ行くわよー。息吐いてー。はいそこで止めてー。いいわよー。もう少しよー」

オネエ言葉になっていますが、中年のおじさん技師です。
優しい声掛けあるあるですが、気にする余裕はありません。

「あっ、ツっ」
「はい一番奥まで来たー。よく頑張ったわね。後は抜いていくだけだから、楽になるわよ」
「何か異常を見つけたら拡大して録画してくれ」
「主任、承知しております」

モニターのひとつに私の大腸の中が映っていました。

ピンク色でぬめぬめしていてひだだらけで、なんか卑猥です。
うねうねと蠢いていますし。

排便した直後だからか、きれいなもんです。
抜かれる時は腸的には順方向なので、確かに少し楽です。モニターを見つめる余裕がありました。

「奇麗なもんだ」

主任がモニターを見ながらつぶやきました。

「排便直後で、大腸の中がこんなに奇麗なわけはないんだ。一体これはどういうことなんだ」

どういうことなのかはこっちが聞きたいです！

主任、まずはその手を洗ってください！　まだうんこ付いたままじゃないですか！

第25話　ミヤビの謎

わたしは腸カメラを抜かれると、独房で休むよう主任に言われました。

「今夜は夜通しだ！　眠れんぞ！」

主任は嬉しそうに技師らに発破をかけていました。

残業なしで帰るんじゃなかったんですか？

そんなにわたしのうんこを調べたいんですか？

どういうことなんでしょう。キレイすぎるとつぶやいていましたし。

しかし、連続公開排泄でわたしのこころはズタボロです。ベッドに横になると、すぐに気を失うようにして眠ってしまいました。

◇◇◇

翌朝。

例の個室での朝食はミンチと野菜の炒めものでした。だんだん普通の食事っぽくなってきます。

それにコップ一杯の水と、錠剤。

「この薬はなんでしょうか？」

『痛みを和らげる薬よ』

エルザさんがガラス越しに教えてくれます。
そんなのを飲めということは、いよいよですね。さようならわたしの処女。

食事が終わると雌魔族実験棟に入ります。

朝早くだというのに、大勢の人が忙しそうに右往左往しています。
エルザさん、カデナさんが主任を見つけて私を傍に連れて行きました。
主任も忙しそうですが、わたしを見て快活に笑いました。
目の下にくっきりクマが出来ていますが。

「よし、来たな。セカンド、まずは身体測定だ。おおい、測定班！」
「「「はっ！」」」

屈強な男性４人が集まりました。
見れば、深夜にわたしを椅子で運んだ人たちみたいです。

わたしは一本の柱状になっている器具の前に立たされました。身長と体重を一度に測る機械のようです。

「バスト・ウエスト・ヒップも同時に測れる。体脂肪や筋肉量もな」

技師が機械を操作すると、レーザー光がわたしをスキャンしました。非接触非破壊型の検査機でした。

「こっちの暗室で透過検査を行う」

レントゲンですね。

４人の技師たちも目の下にクマを作っていました。

「皆さん徹夜ですか？」

「そうだよ。昨日は早く帰れると思ってたんだが、お前のせいだよ」

「え？」

「尿検査だよ。その結果を見て、大騒ぎになった。その上今度は便の検査だ。実験棟のスタッフ総出で解析を進めているが、まだ終わっていない」

「え？　そんなに変だったんですか？」

わたし、もしかして重い病気？

「詳しくは主任から聞いてくれ。俺たちは自分の担当部分の結果しか知らない。総合的に判断するのは主任だからな」

ようやく一段落したのか、エルザさんとカデナさんに主任の席まで連れていかれたのはもうお昼前でした。

主任席には複数のモニターがありました。

「うむ。身体測定の結果も予想どおりだったな」

わたしは主任の傍の拘束シートに座らされ、その後ろにエルザさんたちが立っています。

「これを見てくれ。セカンドの顔を正面からセンサーで撮影した画像だ。収差による歪みは補正してある」

主任がパッドを操作し、画像を真ん中で二分割しました。そして片方を半透明にし、左右反転します。

「左半分と右半分を重ねてみる。すると……」

完全に重なりました。

「え？　これがどうしたんですか？」

「完全に左右対称な人間は存在しない。ぱっと見は対称に見えても必ずどこかしら違っているのだ。いや、そのはずだった。しかし、セカンドの左右はこのとおり完璧に重なる」

そういえばそんな話を何かで読んだような。

「元々は昨夜の尿検査だ。本来はマイクロプローブを膀胱に挿入して採取したかったんだが、我慢できないと言ったからな。漏斗で採取するなんてことになった。あの方法だとどうしても雑菌でアンモニアが増加する。はずだった」

また、はずだった？

「そもそも何で尿をするかわかるか？　もちろん体内の水分バランスや電解質濃度の維持、死んだ血液細胞の除去など様々な役割がある。だが、本来生命活動に必須のはずの水分を大量に消費してまで尿をするのは、たんぱく質合成時に発生する過剰な窒素、すなわちアンモニアの排除のためだ」

そうなんですね。これは例の知識にもありません。初耳です。

「アンモニアは猛毒だからそのままでは体内に置いておけない。尿酸、そして尿素とより無害な化合物に変える必要がある。尿素を体内で保存するためには大量の水が必要なんだ。もちろんその水の大半は腎臓で再吸収されるが、それでも膀胱に貯めて置ける濃度まで希釈するためには一定量の水が必要だ。それが尿だ」

おお、なんかすごい科学講義です。さすが聖なる遺物（アーティファクト）を使いこなすだけのことはあります。

「ところが、このグラフを見ろ。アンモニアはおろか、尿酸も尿素も、そしてクレアチニン、アミノ酸、リン、硫酸塩、シュウ酸もゼロだ。血球もビリルビンもウロブリノーゲンもケトン体もグルコースもゼロだ。重い代謝異常でもなきゃこんなことはありえない。というかこんな奴がいたらそいつは死人だ」

なんか無茶苦茶言われているような気がしてきましたが、主任の驚きは伝わってきました。

「一方でナトリウム、カリウム、カルシウムは正常値だ。つまり、エネルギー代謝はしているし、水分調節もしている」

エルザさん、カデナさんも黙って聞いています。彼女らも初めて聞くのでしょう。

「便も調べた。大便ってそもそもなんなのか知ってるか？」

「食事を消化した残りかす？　ですか？」

「それは便の約５パーセントにすぎない。６０パーセントは水分、２０パーセントは死んだ体細胞、１５パーセントは腸内細菌で出来ている。だから全く食事をしなくても、便は出る。飢饉のときに腹を膨らませて死んでることが多いのは、体細胞をエネルギーに変え

て命を繋ごうとするからだ。死んだ体細胞が便となってどんどん溜るが、排泄する体力すらなくそのまま死ぬ。糞袋になって死ぬんだ」

なんか語り口が怖いです。主任の実体験でしょうか。

「が、セカンドの便はまさしく水分と食事の残りかすだけだ。食品についていた細菌が便を発酵させてガスが出来ていたが、腸内細菌自体は見当たらない。あれ、そのまま食っても大丈夫だぞ」

それで味見を。いやいやいや、うんこ食べるって、頭おかしいでしょ！

あ、そうでもないか。かばとかうんこを子供に食べさせるというし、昆虫にも多いですね。

「これらの事実から可能性があるとしたら、セカンド、お前は人工的に造られた存在だ。有機エネルギーで動くゴレムだ。だから、細胞を合成することがない。よって生物代謝自体がないから同化する時の余剰物が発生しない。人造人間。機械だ！」

人造人間機械だー！？

ギターを持ってサイドカー乗り回すジージャンの人ですか！

笛の音で苦しむ人ですか！

でもあの人、左右非対称じゃないですか！

「と、今朝ほどは考えたんだが、透過検査の結果は骨格も筋肉も内臓も全て備えた人間そのものだ。心臓が真ん中にある、ということもなかった。左右の重量バランスは完璧にフィフティーフィフティーになってたけどな。それにゴレムなら成長しない。セカンドが歳

を重ね成長している事実は何年も前から確認済みだ」
「では、やはり悪魔なのでは？　主任」

それまで黙っていたエルザさんが口を開きました。

「いや、悪魔ではない。奴らは生まれながらに汚染されている。セカンドはその真逆の存在だ。生まれながらに完璧に清浄なんだ」
「では、まさか」
「それ以上は言うな、エルザ。そしてそんなことはありえない。セカンドは魔人が育てた子どもなのだから」

ちょっとこんがらがってきました。

ええと、つまり、生物が新陳代謝してたらいろんな残りかすが出る。ですが、わたしには、エネルギーを生み出してる痕跡はあるけれど、細胞を造ったりしてる痕跡がないってことですね。

「あの、それって、超効率よく新陳代謝してるってことじゃないでしょうか？　完全燃焼的な感じで」
「新陳代謝すらしていないんだよ。古い細胞のカスがない。セカンド、いつ体を拭いた？」
「シャワーしたのは3日前です」
「シャワー！」
「あんな田舎の村にお風呂があったの！」

エルザさんとカデナさんが驚きます。ええ、喰いつくとこ、そこですかあ？

「ちょっと腕を擦ってみろ」

いわれるままに軽くごしごししてみます。

「垢が出ない……」

カデナさんがまじまじと確認します。

「細胞が死なない。まるで細胞増殖酵素（セルブースター）を投与したみたいだな」

「細胞増殖酵素（セルブースター）？」

あっ、昨日ワービーからの採取物に投入した薬品ですね。

いや、それ以前に似たような名前をどこかで……。

「ああ、双脚豚が成長する際に働いている酵素だ。生物実験には便利な代物なので、分離精製して既に試薬化している。濃度によっては古い細胞が死滅せずに無限に増殖していく。それみたいだな、と思ってな」

へえ、まるでガン細胞みたいですね。

え？　ガン細胞？

痛っ！

脳の芯の方でチクリとした痛みを感じました。

この知識は？　いや、この記憶は？

「しかし、全く異物を生じさせずに同化成長する完全生物か。その線は確かにあり得る……。ふむ、実験方針を決めたぞ！　ひとまず司政官殿にご了承を戴いてくる」

そういうと、主任は実験棟を出ていきました。

「あんた、シャワーって言ったわよね」

エルザさんが睨みます。

わたしはシートに固定されているので、避けようがありません。

「どういうことよ。それ」

「え、お母様が魔法で、お湯を」

魔法のシャワーについて簡単に説明しました。

「魔法で湯を作ってシャワーにして浴びてたって？　おまけに清浄魔法で汚れもすっきりですって！」

「あんたの親、そんな天才魔法使いだったの？」

え？　天才？

「魔術の複数同時起動に４０度前後の温度という精緻なコントロール。しかも細い水流を何本も生み出すなんて。大賢者レベルの魔法使いよ」

「魔人って、凄いのね」

「大体、魔法をそんな日常生活に使うなんて。魔力が無尽蔵でもなきゃ出来ない発想だわ。信じられない」

お母様は治癒魔法以外は弱いっておっしゃっていましたが、あれは謙遜？

ならば、あの青い炎の竜が弱いようには見えなかったのは、当た

り前ですね。

大魔法使いだったのですね！　お母様！

第２５話　ミヤビの謎（後書き）

尿の説明にはフィクションを混ぜています。
ご注意ください。

第２６話　乳房切開

主任がおらず、ほかの技師たちは分析が忙しいため、他にすることもなく、エルザさん、カデナさんとの雑談タイムになりました。

「ドッチャ？　ああ知ってるわよ。青色の割には汚れ仕事が得意なので重宝されているわ」

「アリアガルド法国の基本色は唯一神のシンボルである青よ。法術士や賢者と呼ばれ、大聖会の聖職者でもあるわ。境界の法服が濃い藍色なのは、聖なる遺物（アーティファクト）の技師だから。もちろん大聖会に属しているし、法術士の資格を持つ人が大半だけど、それ以上に技術職、研究職なの」

「大聖会の中でも大司祭様や大賢者様は、白い法衣をお召しになるわ」

「ブレンダ？　ヒュイ？　バルグ？　その人たちは知らないわ。ドッチャは有名だけど。ここにも何度か来てるし。魔物を捕まえて連れてくるのよ」

「わたしは光‐治癒魔法系統、カデナは風‐加護魔法系統の法術士よ。法国で法術士になるには治癒系か加護系は必須なの。さらに第二法術としてほかの系統の魔法もマスターする必要があるわ。三系統以上をマスターすれば、高位法術士。四系統以上で全体魔法等の高位魔法が使えれば賢者の資格を得るわ。それ以上の大賢者や司祭は個別に判定される。これが出来たら大賢者、というような基準はない超ハイレベルな肩書よ」

「あなたの母親魔人は、治癒、加護、雷、風、水、火の６系統の高位魔法を使ったから資格としては賢者以上なのは間違いないわ。魔人だけど」

魔法は法理高等学園や法理大学などの学校で学ぶそうです。
エルザさんもカデナさんも法理高等学園の出身で二級法術士だそうです。
一級を取るには大学に行かないといけないそうで。
大学に行こうとすると学力的にも経済的にも大変だそうです。

へえ。

と取りとめもなくお話をしていると、主任が戻ってきました。

「よし、実験棟スタッフ全員集合！」

エルザさんとカデナさんは実験棟のスタッフではないので、わたしの横に立っていますが、他のメンバーは主任を中心に集まりました。

「セカンドの実験方針を伝える。現状のままではメス奴隷化は難しい。というよりも不可能だ。そのため、強制的に堕天（フォーリンダウン）させる」

堕天？

「魔蓄器の移植手術を行う。器官研究室、適合調整室の各スタッフとはすでに司政官殿を通じ連携済みだ。まもなく魔蓄器がこちらに届く。ゴレム手術器の出番だ。頼むぞ」

「「「はいっ！」」」

数人が返事をしました。マイクロサージェリーシステムの技師たちでしょう。

でもちょっと待ってください。

魔蓄器を移植するって。適合調整室で呻いていた人たちみたいになるってことですよね！

欲望を吐きだす時だけ痛みから解放されるという、非人道的な実験！

子どもも出来なくなるんですよね……。

「各スタッフ準備。セカンドのシートを水平に寝かせて手術台モードに。魔蓄器は乳腺型だ。術式は両乳輪縁からの挿入法とする。局部麻酔とするが、効果が期待できない場合でも手術は中止しない。よって、四肢に加え、頸部と腹部の固定も強とする。手術について何か質問はあるか」

「等張電解質輸液はいかがしますか」

「必要ない」

「胸部手術ですので、心臓バイタルが難しいですが」

「手首のみのモニターで良い」

「術後の保護はいかがしますか」

「ゴレム手術器の縫合は万全だが、念のため明日まで乳輪部にサージカルテープを貼っておいてくれ。明朝には剥がしてよい」

「了解です」

「他にないな。フィルムシェルターを張る。陽圧にして滅菌開始。セカンドのシートをここに。白衣を脱がして局部消毒」

わたしは天井の無影灯のぐるりを囲んだ透明フィルムの円柱の中に入れられました。

この場所で手術が始まるようです。

ゴレム手術器がセットされます。

エルザさんカデナさんに白衣を取り去られ、全裸になりました。

胸を消毒布で拭かれます。刺激で乳首がぴょこんと立ちました。

きびきびとした仕事ぶりです……、って、いやいや、ほんとにち

ょっと待ってください。

「わたしはなんの説明もなくいきなり手術されるんですか！？　人権侵害です！」

「セカンドに人権はないよ。拒否も出来ない。説明は、そうだな。お前の体ならうまく定着するんじゃないかと思ってな」

「そんなざっくりした説明をされても！　拒絶反応で苦しむだけじゃないんですか！」

「魔乳腺を選んだからな。うまくいけば、おっぱいが大きくなるぞ。いいじゃないか。デカ乳。万一失敗しても、切除は簡単だ。乳房が無くても死ぬことはない。だから、大丈夫だ」

なんで5歳で豊胸手術しないといけないんですか！

偽乳反対！

それにロリはぺったん派が主流です！

ロリ巨乳は少数派です！（※個人の感想です）

でもって失敗したら乳房切除ですって！！

女性をなんだと思っているのですか！

昨日のワービーのゴレムペニー責めを思い出しました。この人たち、検体を女性だなんてそもそも思ってないんでしょうね……。

モニターが接続され、ゴレム手術器が初期位置に固定されました。シリンダーに薬液と共に入ったブドウの房のような器官がゴレムにセットされました。

魔蓄器。

魔族の乳腺です。赤黒いカエルの卵のようなそれはぶるぶると蠢いています。生きています。

実に不気味です。

あれを体内に入れられてしまうのです。おぞましいです。

フィルムシェルターから私以外の全員が外に出、気圧が高まるのを感じました。

「滅菌開始」

無影灯が光を照射します。光魔法の一種でしょうか。

「深層書き込み」

また無影灯から何かが放射されます。移植手術の時に行う意識コントロールでしょう。

でも、わたしは特に何も感じませんでした。

命令に反しようとしたら発動する、催眠暗示みたいなものなのでしょうか。

「局部麻酔」

ゴレム手術器の数多くの小型アームの一つが動き出しました。先端部が注射器になっています。

両の乳輪のすぐ下に注射を打たれました。敏感な場所だけにかなり痛いです。

「脈拍上昇」

「麻酔状態確認」

注射ではなく針だけをつけたアームでわたしの胸をつつきます。痛いです。

「麻酔が効いていないようです」

「やはりか。セカンドの生体抗壁を突破できないようだ。仕方がない、このまま続行する」

主任、このまま続行って。

麻酔なしで手術されるんですか！

しかし、体はベッドに固定されていて、指先程度しか動かせません。

メスと鉗子アームが複数起動してわたしに迫ってきます。こ、怖い。

思わず目をつむりました。

次の瞬間、胸の先から激痛が襲いました。

「あああああああああ！　いたいいたいいたいいたいいったいいいいい！！」

見てしまいました。

わたしの乳首が、乳輪の円周下側3分の2ほどが切開され、鉗子で持ち上げられているところを。

そして別のメスと鉗子がその穴から潜り込み、裏側から胸の筋肉から皮膚と脂肪を剥がしているところを。

黄色い脂肪と赤い筋肉がジュレのようにふるふると震えています。

さくさく。さくさく。

思った以上に血は出ていません。レーザーメスでしょうか。

しかし、麻酔なしで裂かれるわたしは脳が沸騰するような激痛に襲われています。

両胸の先端から波が全身に伝わります。

いや、痛みの津波です。

わたしは嵐に翻弄される藻屑のように吹き飛び、沈み、跳ね、打ち付けられます。

全身の筋肉が硬直し、縛りつけているベルトを引き千切ろうとしますが、びくともしません。

拘束シートは魔族の筋力にも対抗できる強度です。

５歳児の力でどうにかなるものではありません。

逆に、テンションがかかるとより締まっていく構造になっているようで、わたしをぎりぎりとベッドに押し付けます。

冷や汗が全身から噴き出ます。

怪鳥の鳴き声のような轟きが聞こえます。

わたしの声でした。

気が狂わないのが不思議です。

喉がちぎれるくらい叫んでいました。

乳首を持ち上げた穴に、赤黒いぶつぶつした魔蓄器が詰め込まれました。

穴をずるりとくぐり、胸の中でどろんとした感触が広がります。

その分わたしの平坦な胸がやや膨らみます。

ゴレムが本来のわたしの乳腺と魔乳腺を皮膚の上から揉んで馴染ませていきます。

そのたびに頭が真っ白になるようなショックが襲います。

胸をトンカチで殴り潰されているような激痛です。

わたしは血の涙を流しているのではないでしょうか。

目の前が真っ赤です。

魔乳腺と、乳首の裏から伸びているわたしの乳管とをレーザーで焼いて繋げました。

熱い熱い熱い！

何か取り返しのつかないものが、乳管を逆流して体の中に巡っていきます。

体内を無数の小さな虫が這いまわるようなぞわぞわした感覚。

ようやく胸の穴から器具が抜かれ、乳輪の端を鉗子で引っ張られ、穴の蓋として戻され、医療用接着剤で貼り付けられました。

切開面に浸潤してくる液で乳首が熱で焙られたように思えます。

そして乳首を隠すように、テープが貼られました。

片側2枚、バッテンの形に。

ようやく終わりのようです。

わたしは、既によだれを垂らした姿でひくひくと震えているだけ

でした。重ね掛けされる刺激に失神寸前でした。

幸い深夜に採便をされたので、失禁はしていないようでした。

吹き荒れる嵐のような激痛の猛攻は収まりました。

が、胸の内のじんじんとした鈍痛は続いています。

「手術終了！　エリザ、カデナ、滅菌しシェルター内に入ってセカンドの顔を拭いてやれ。しばらくこのまま様子を見る。バイタルと、拒絶反応の有無に特に注意」

主任のその声を最後に、わたしは完全に意識を失いました。

第27話　ロリ爆乳

ひゅー。
ごー。

洞窟を抜ける風のような音が聞こえます。

それが自分の呼吸の音だと気づくのには少々時間がかかりました。

意識がぼんやりと戻ってきます。

目に映ったのはビニールを背景にした無影灯。

『知らない天井だ……』

やってみたかったリアクションあるあるですが、ほんとにこの時はそう思いました。

記憶が混濁していたようです。

夢の中のように体が重く、粘性の高い液体に囚われているような感覚。

……。

はっ！

気がつきました。

胸には相変わらず鈍痛があります。

が、我慢出来ないということはない程度。

自分の胸を見下ろしました。

ベッド化したシートで拘束されて寝ているのは相変わらずですから、第三者的には顔を上げて前を見てる感じですが。

ふくらみの上のバッテンがまず目に入りました。傷口をカバーしているサージカルテープです。

なぜかピンク色ですが、それはまあいいでしょう。

胸の肌の色も、やや赤くなっているくらいで普通です。あの赤黒い器官の色に染まっていたらどうしようと思いましたが、そんなことはないようです。

しかし。

これは。

わたしの胸が、山のように盛り上がっていました。下半身が完全に遮断されて見えません。

乳腺を移植した分だけじゃないです。手術の時は慎ましく膨らんだ程度だったはずです。

そんなレベルではありません。これは、このサイズは、巨乳を超

えて、もはや爆乳じゃないですか！

ロリ爆乳！

なんですかこれ！！

「主任、セカンドが覚醒しました」
「バイタル急上昇。血圧高位域に。いや、一時的なもののようです。徐々に低下中」
「心拍安定」
「拒絶反応、ありません」
「やった！」
「成功だ！」

フィルムシェルターの外で歓声が沸きました。
男女が抱き合って喜んでいるのが見えます。

人をロリ爆乳にしておいて、何が成功よ！
馬鹿なの？
死ぬの？

あれ？

思考パターンが乱暴になっているような。

「しかしあの胸はなんだ」

主任も疑問を口にします。
てか、張本人のあんたが何言ってるのよ！

うん？　やっぱり若干粗暴になっていますね。

「あの膨らみは変だ。大きすぎる」
「魔の気配を吸収しているのではありませんか？」
「確かにこの境界付近は魔の気配が他所よりも高いが、フィルムシェルター内は光魔法で滅菌しているんだぞ。気配を取り込めるはずはない」
「では、解剖しますか？」
「成功したばかりの融合体だ。そんなことが出来るか。セカンドの体力が戻ったら透過センサーで調べる」

何人かの技師があくびをし始めました。
移植手術が成功して緊張の糸が切れたのでしょうか。

皆さん徹夜のようですし。

「そうか。もう昼を随分過ぎているな。よし、半舷休息にしよう。各班境界コード奇数の者は今から3時間休め。3時間後に偶数の者と交代する。エルザ、カデナはセカンドについてやれ。拘束を解いて白衣を着せて構わん」
「「「了解！」」」

実験棟の半数がぞろぞろと出ていきました。中にはハイタッチしながら出ていく人もいます。
嬉しさを隠せないようです。

フィルムシェルターの中にエルザさん、カデナさんが入ってきました。
マスクと手袋をしています。

二人がシートのスイッチをいくつか操作すると、拘束バンドが外れてシート内に収納されました。
ベッドのリクライニングも戻され、少し背もたれを傾けた椅子の形に変形します。

わたしは座ったままでした。

「どう、具合は？」
「胸が痛いです。重ーい感じです」
「そりゃそれだけ大きくなったら重いでしょ」
「いや、そういう意味ではなく、鈍痛的な」
「でも、ほんと大きいわね。大人でもそんなに大きい人滅多にいないわよ」

といいながらエルザさんは自分の胸を見下ろします。
確かにエルザさんより大きそうです。
スレンダーなカデナさんよりは確実に大きいですが、カデナさんは大きさに触れません。

お母様よりは小さいかな？
でもからだのサイズが違うので、全身に占めるおっぱいのシェアは異常に大きいです。

まさにおっぱい星人！
あはははは！

って笑いごとではありません……。

「頭が痛かったり、吐き気などは、無い？」
「頭はまだ記憶がはっきりしないところがありますが、痛みや吐き

気はないです。カデナさん」
「魔蓄器の拒絶反応はないのね」
「なぜうまくいったのかしら？」
「いや、それ、わたしに尋ねられても」
知らんがな。
あれ、やっぱり粗野に。
「エネルギーの代謝だけがあって、細胞合成の代謝がないからだ。いや、後半はないのか、完全合成しているのか、ほかの理由なのかは今はまだわからないから、細胞合成過程が隔離されていると言おう」
わたしたちの会話を聞いて、主任がシェルターの向こうから話しかけました。
遮断というか、ブラックボックスですね。エネルギーを作る『異化』は普通の人間と同様ですが、細胞等を合成する『同化』は閉じた環境で行われているという意味ですね。
「魔蓄器の機能はエネルギー代謝だが、また細胞合成も行う。魔蓄器自体の新陳代謝が必要だからな。人間に移植して拒絶反応が起こるのは、両方の細胞の新陳代謝の際に物質交換が行われるからだ。だが、セカンドは合成過程が独立している。したがって、拒絶反応が起きない」
閉じた環境は魔に汚染されないということですね。
でも、それでは。

「でもそれでは、セカンドは魔蓄器を使えないのでは。移植する意味がないのではありませんか？」

カデナさんも同じ疑問を持ったようです。

「合成過程が独立しているだけで、器官の取り込みや神経の接続、体液交換を行わないわけではない。たとえていうなら、化合物ではなく混合物だ。異質同体だな」

「異質同体……」

嵌合体（かんごうたい）とも言いますね。キメラです。

植物の接ぎ木が典型例です。遺伝情報が混合した生物は動物にもしばしば見られます。

魔とのキメラですか。なるほど。考えましたね。

さすが主任。

と言うとでも思ったか！　勝手に人をぬえみたいにしやがって――！

自由になったらてめーのケツの穴カメラぶち込んでガタガタいわしたるー！

覚悟しとけやっ！

あれ？

いけないいけない。

ホントに口が悪くなってます。まだ頭で考えているだけですが。

お母様に叱られてしまいます。

「なんか顔が赤くなっているわよ、セカンド。大丈夫？」

「なんでもありません、エルザさん……」

カデナさんが新しい白衣を用意していました。

「着る？　セカンド」

そういえば首枷以外まだ全裸でした。いえ、胸にバッテン絆創膏付けてますから全裸ではありませんが、余計に恥ずかしい格好です。

「着ます！」

ですが、胸が爆乳になったので、貫頭衣をかぶると、前の布が全然足りませんでした。

胸の先から垂れた布は、せいぜいおへその上ぐらいまでしかなく、肝心なところが隠せていません。

おまけに脇の紐も届かず結べません。

「ありゃ。これじゃあ意味ないわね」

「大人用じゃ逆に丈が長すぎるし」

「特注で作るにしても2、3日はかかるわよ。どうしましょう」

「仕方ないわね。幸い上は絆創膏で隠れているし、今日のところは……」

カデナさんは白衣をひものところで二つ折りにすると、短い方を

くるくると撚り合わせ始めました。
そして後ろから私の腰に、ひもを帯のように巻き、より合わせた方を外側にして股の下をくぐらせました。
腰ひもと撚り合わせた布を結び、内側の長い布を外に垂らすと……。

うん、これはふんどし。

わたしはピンクのバッテンおっぱいを晒し白いふんどしを締めた姿となりました。

なんという破廉恥な格好！

ただ、撚った布がおしりの溝にフィットして、キリリと締まった感じは悪くはないのですが。
首の穴が股下にあるので、そこだけ内側の状態が見えるのがまたなんとも……。

しかし、なんかもうあまりにも言い訳出来ないくらいの特殊性癖なコスチュームではないでしょうか。
ただでさえロリ爆乳という変態属性になったのに。

「いやあ、よく似合ってるわ！」
「ほんと、なんかトーヨー的で可愛いわよ！」
「特注なんかしないでずっとこれでいいんじゃない？」

いやですーーーーー！！！！！

「ほう、セカンド、もう立って大丈夫か」
「はい、痛みはずいぶん引きました」

主任、そんなにまじまじと見ないで下さい。このアホみたいな恰好。

「もうフィルムシェルターから出ていいだろう。いったん食事を与えてやれ。経口が無理ならリンゲルでもいいが」

「いえ、食べます。食べられます」

やけにお腹がすいてきました。点滴（リンゲル）ではお腹が膨れません。

「エルザ、カデナ、食事について行ってやれ。セカンド、念のため言っておくが、魔蓄器を得たとはいえそれはワービーのものだ。コード１１６程度の魔の力では首枷は取れん。無駄なことをして首をドカンとさせるなよ」

「わかっています」

頭の中で悪態をついていたのがバレたのでしょうか？

そんなことは、ないか。

また個室で遅めのお昼をいただきます。

今日は双脚豚のホルモンと野菜の炒め物ですね。

ＸＯ醤の香りが食欲をそそります。

なんだかいつもよりおいしいです。

ガラス窓の向こうでエルザさんたちも何か食べてます。気絶していたのでわかりませんでしたが、彼女たちもお昼を食べてなかったのですね。

ハンバーガーのようです。

「エルザさん、カデナさん、そのお肉って」

『双脚豚のパテサンドよ』

ハンバーガーとはいわないのですね。

って？　ハンバーガー？

ミンチを整形して焼いたものはパテだし、バンズではさんでいるのだからパテサンドですよね。

なんですぐハンバーガーなんて単語が浮かんだのかしら？

いやいや、もうこの件は終わっておきましょう。お母様が何かした、という結論になったはずです。

「人間も双脚豚を食べるのですか？」

『ここでは貴重なたんぱく源だからね。でも人間が食べていい部位は決まってるの。内臓とか骨髄とかを食べると病気になるって言われているわ』

プリオン。

クロイツフェルト・ヤコブ病。あるいはクールー病。

そんなところですね。脳とか食べたら一発でアウトなんでしょう。

わたしには最初から内臓を混ぜていましたね。

やはり人間ではない扱いだったのですね。

今では、同化が閉じている時点で普通の人間ではないという事実は、わたしも理解しています。

お母様が拾った人間の子を育てていた、という線は消えました。

が、わたしは、お母様の本当の子どもなのでしょうか？

魔人の子なのでしょうか？

それとも、またなにか別の存在なのでしょうか？

第２８話　はじめての戦い

食事を終えて実験棟に戻りました。

まだ半分の人は休憩しているので、なんとなく閑散としています。人の数が少ないだけで、それぞれの方は忙しそうにしていますが。

「戻ったな。透過センサーにて魔蓄器の定着を確認する。撮影室に入れ」

主任は休んでいないので、ますます目の下が濃くなっています。ワーカホリックですね。

小さな部屋に入ります。四角いパネル状の透過センサーがあります。その正面に立ちました。

『ハイ撮影しますー。息を吸ってー、止めてー、はいそのままー』

隣の部屋から技師が指示します。

『ハイ終わりましたー。次は横を向いてくださいー』

言われるままにします。

『ハイ、撮影は以上ですー。外に出てくださいー』

外に出ると、既に主任たち数名がモニターを見ていました。

口々につぶやいています。

「これは……」

「魔蓄器が、逆に……」

「人が魔を侵食している？」

「そんな、こんな事象はありえない……」

技師越しにモニターを眺めると、わたしの胸の中身がカラーで映し出されていました。

透過センサーはレントゲンとは違って、色彩まで映し出すようです。リアルです。

ちょっと恥ずかしい乙女の中身。

それはともかく。

ピンク色の房が多数ある中に、一つだけ、赤黒い乳腺が周りの房と同じピンク色に半ばまで変色していました。

一方、乳管を通してほかの乳腺や乳首に赤黒い色が斑点のように薄く浸透していますが、本当にわずかな色です。薄いほくろみたいです。

半分赤黒い乳腺が移植された魔蓄器でしょう。

しかし、これでは、魔蓄器が周りを侵食しているというより、魔蓄器がわたしの細胞に吸収されつつあるように見えます。

「……間違いない。セカンドの細胞が魔蓄器を取り込んでいる。しかも同化して、ヒト化が起こっているようだ。しかし、なぜだ？セカンドの生物代謝は閉鎖系ではなかったのか？」

人が魔に染まることはあっても、魔が人に染まることはない。

それがこの世界の常識でした。

主任は、わたしの細胞が閉じているため、魔細胞に侵されず、混合状態で共存すると考え、移植実験を決行しました。

それ自体が常識を覆す発想でしたが、現実は主任の発想をも超越していた、ということになります。

「なんということだ。一体セカンドの細胞は、何なんだ！」

主任が頭を抱えてモニターを見つめています。

常識が覆るどころが引き飛んでしまい、主任や技師たちが動揺しているのはわかります。

わかりますが。

「これって、わたしどうなるんですか？」

「う、うむ、セカンド、そうだな。落ち着けみんな」

いやまずあんたが落ち着け。水飲むか？　いや、ここにはペットボトルはないか。

「よし、次善の策を考えよう。まずは、変質しつつある魔蓄器の機能の確認が必要だ。飼育室主任に連絡。再生室を借りる。測定班で段取りを着けろ。俺は司政官殿に状況を報告してくる。ここから先は未知の領域だ。皆、心して掛かれ！」

移植定着成功の喜びムードから一転、実験棟は緊張感に包まれはじめました。

◇◇◇

飼育室に連れられてきました。
檻に入れられた魔族の脇を通り、魔の気配が充填された再生室のそばに立ちます。
飼育室のスタッフも一緒に集まってきました。
実験棟のスタッフと合わせて、結構な人数になりました。

「セカンドをここでモニターする」

主任はすでに司政官への報告を済ませ、戻ってきています。
わたしは、膨らんだ乳房にジェルを塗られ、吸盤状の計測装置をいくつかつけられました。手首にもリングがつけられ、胸の装置とコードが繋がれます。
これでデータを発信するのでしょう。

タブレットのような携帯端末を実験棟スタッフは持ってきています。受信機ですね。

「バルーチャ主任。後1時間少しで昨日死んだコード112がリポップする予定だ。それまでだぞ。気を付けてくれ」

飼育室のスタッフの一人が主任に念押ししました。このタイムスケジュールは飼育室に来る前に知らされています。

バルーチャ？
ああ、実験棟の主任はバルーチャという名前なのですね。
今まで誰も名前を呼ばなかったですから、はじめて知りました。

「ああ、承知しているイギル主任。そっちに迷惑はかけない」
「頼むぞ。だがいざとなれば言ってくれ。セカンドの研究の方が重要な意義がある」
「謙遜はよせよ。お前のおかげで充分な量の魔蓄器が手に入って、今の実験が進んでいるんだから」
「ふふふ。まあ今日のは貸しにしておくよ。いつか返してくれ」
「わかった」

主任同志は仲が良いようですね。縦割りじゃない、風通しの良い組織のようです。

やってることは鬼畜ですが。ほんとに。

「よし、セカンドを再生室に入れろ」

二重扉……、エアロックが交互に開き、わたしは再生室の中に一人で入りました。床が腐葉土のようにぐずぐすになっています。温度も湿度も高く、不快です。

空気が濃厚です。それに臭い。

『モニターに反応。魔蓄器が活性化を始めました』
『ゲイン急上昇。立ち上がりが早いです。コード１１６オリジナルの１．２。いや、１．５、えっ、２．０を超えました』
『バイタルは安定。続行しますか』
『もちろん続行だ。サーキットの形成はどうか』
『魔法回路（マジックサーキット）、ありません』
『そうか、引き続きモニター。各自、異常を見逃すな』

外で主任たちがタブレットを確認しています。

わたしはこの部屋が不快なほかは、特段の違和感を感じませんでした。

胸が熱くなるとか、光るとか、なんか気持ちよくなるとか。

なんとなくそんなことを予想していたのですが、いささか拍子抜けです。

『ゲインは3．26で安定』

『クラス221レベルか……』

『やはりマジックサーキット、ありません』

『原初テキストはどうか』

『テキストもレイアウトも、ありません』

『ふむ、ここまでか。魔蓄器の機能は正常、というか3倍以上に性能アップしている。確認実験は終わりだ。セカンドを再生室から出せ』

その時、再生室の一点に魔の気配が集まるのが見えました。黒い粒子が蠢き、影のようになにかの形をとっていきます。

これは昨日見ました。

リポップ。

『いかん！　リポップだ！』

『なぜこんなに早まる！？』

『魔の気配を強制排出！　早く！』

『そうか、性能が向上した魔蓄器が魔の気配を圧縮したから！』

『間に合いません！　出現します！』

『意識コントロール最大出力！』

『いやだめだ！　セカンドの脳まで焼ける！　それはやめろ！　イ

ギル！』
『ぐっ、わかった』
外で技師たちが緊急対応している間にも、影は魔物の形をとりました。
コード１１２。
レサ・オルガ。
白いブタ顔の大型の魔物。筋肉と脂肪の塊のような、太い手足と大きな胴体を持つヒト型の魔。
昨日Ｂ．Ｊ先生に解剖されていた魔物です。
わたしの目の前にそいつは姿を現し、ずしんと床を踏みしめて立ちあがりました。
わたしを体の割にやけに小さな赤い目でじろりと見ると、長い舌でベロンと口の周りを舐めました。
股間の長い性器がグンと鎌首を持ち上げます。
陰茎の中ほどで皮がむけており、長い亀頭はドリルのように捻じれています。
白ブタですが、ドリルは真っ赤です。てらてらしています。
泡立った粘液が尿道口からぽたぽた垂れ始めました。
この魔物、わたしを見て欲情しているようです。
ロリコンさんですね。ブタのくせに。

あっ。

今、爆乳まるだしでしかもふんどし姿でした。
もしかしたら、誘ってると思われたのかしら。

また、舌をべろべろと突きだし舐めるような動きをします。

ばっきゃろ！　好きでこんなカッコしてんじゃねえよ！　てめーみたいなブタなんざ、願いさげだーーー！！

おとい来やがれっ！

『１１２出現！　あれっ首枷は！？』
『リポップ直後だ。付いてるはずがない』
『あれ、後で付けてたのか……』
『バルーチャ、かまわん。魔法で１１２を無力化しろ！　セカンドを守れ！』
『すまんイギル！　狙撃系の攻撃魔法が使える者は、ただちに１１２を討て！』

しーん。

『しまった！　全員範囲攻撃系か！　俺もそうだ！』

なんということでしょう。
もはやコントです。

レサ・オルガは狭い再生室の中で私を追いかけ始めました。慌てて逃げます。
普段より何となく体が軽く、オルガの動きが鈍重なこともあって

何とか捕まるのを避けています。

『障壁魔法展開！　１１２を確保せよ』
『セカンドと１１２の距離が近すぎます』
『しかもこう動き回られては』

再生室はさほど広くはありません。わたしはすぐにガラスの壁まで追い込まれました。
オルガは退路のないわたしをにやにやしながら両手で捕まえようとします。

わたしは身をかがめ、四つん這いになって、股の間を潜り抜けました。
普段は垂れた陰茎が邪魔をする空間ですが、勃起しているので隙間が空いていました。

『くそ、せめて一級法術士がいれば』
『一級取れてたら、技師じゃなくて高位法術士を目指しますよ』
『そりゃそうだ』

主任、悠長に雑談している場合じゃないでしょ！

『私たちが突入します』
『エルザ、カデナ、危険だ』
『いえ、私たちはセカンドのトレーナーです。検体を守るのはトレーナーの使命です！』
『だが、中は魔の気配でいっぱいだ。普通の人間が入ったら、魔に侵される恐れがあるぞ』
『その点は大丈夫だ。既に魔の気配は強制排気出来ている』
『加護魔法を！』

『立ち昇る芽吹きの宴よ太陽のもとに集い賜え。立ち昇る芽吹きの宴よ太陽のもとに集い賜え』

カデナさんが2回詠唱したのは二人分の光の加護が必要だからです。

魔法を全体化出来ないからですね。

１０人いたら１０回唱えないといけません。

全体魔法が高位魔法といわれるだけのことはあります。

『行きます！』

『すまん！』

エアロックから二人が再生室に突入してきました。

一瞬オルガが二人を見ましたが、すぐにまたわたしを追いかけ始めます。

「こいつ、私たちよりセカンドが魅力があるっていうの！？」

「胸かしら」

「絶対殺す！」

カデナさんが本気です。

二人は腰から短い杖（ワンド）を取り出しました。オルガに迫ります。

「三賢者の伝えし福音は今ここに来たれり。あまねく光を万物に示したまえ！」

「見えざる手の中にて安らかなる流れを知れ。一陣の風よ涼やかに舞いたまえ！」

エルザさんの光魔法とカデナさんの風魔法がワンドからオルガに放たれます。
光魔法でオルガの背中が焼け、風魔法でバランスを崩しひっくり返りました。

「エルザさん、カデナさん！」
「セカンド、早くこっちへ！」

こけているオルガの脇をすり抜け、二人の元に駆け込みました。

「もう大丈夫よ」
「まかせて」

二人がわたしに微笑みました。
まるで、人間に対してのように。マテリアルに対してではなく。

エルザさん！　カデナさん！

オルガが起き上がり、痛みを与えられた怒りをあらわにしわたしたちに突進してきます。

「いくわよカデナ」
「ええ、よくってよエルザ」

わたしの前に並んで立った二人は、ワンドをクロスして詠唱しました。

ん？　重ねる必要、あるのかしら？

「「万象の伝わりを隔て森羅の理（ことわり）を離せしむ」」

ユニゾンでダブル魔法障壁！

キラキラと輝く魔法の壁が前面に出現します。
それに自らぶつかっていく格好になったオルガ。

自滅です。
二人の勝ちです！

パ、パリーン。

えっ。

二重の魔法障壁はほとんど抵抗なく砕かれ、さらにオルガが腕を左右に振り回しました。

ぶん！　どっ！

ぶん！　がずん！

目の前から、エルザさんとカデナさんが消えました。

えっ？

慌てて後ろを見ると、再生室のガラス窓に二人が背中を向けてへばりついていました。
まるで潰れた蠅のように。

そしてその直後、赤い血をガラス面にべったりと残しながらずる

ずると落ちて、二人は床で動かなくなりました。

血のペイント越しに、ガラスの向こう側に見える大勢の技師たち。
全員顔が真っ青です。

……技師たちには、吹き飛び潰れた二人の状態がはっきり見えていたはずです。

なんてことを。
なんてことを。

なんてことをしやがる！　てめー！

勃起したドリルちんぽを腹にびたびたバチのように打ち付けながら、ニマニマと笑みを浮かべてオルガが近づいてきます。

わたしを犯して喰らう。
魔の雄の本能のままの行動です。

こいつは、許すことは出来ません。

ダチになれそうだったネエちゃんらをよくも殺したな！
地獄で後悔するがいい！

「死ね」

わたしははっきりそう宣告しました。

次の瞬間、オルガの頭部が風船のようにはじけ飛びました。

第２９話　司政官、動く

しかし、レサ・オルガは止まりません。
頭を失ったのに、まだドリルちんぽをびたびたさせながら迫ってきます。
魔物の生命力恐るべし。

わたしは内心焦っていました。怒りに燃える闘志をぶつけたのですが、頭部しか砕けなかったのは誤算です。全身潰すつもりだったのに。

しかしまだ絶望に沈むわけには。
恐怖を払って、行け、わたし！
巨大な敵を、討てよ！

怒りをこの手に！
わたしのこの拳が真っ赤に燃える！

迫るオルガに対しこちらもフロントステップで近づき、ワンツーパンチ！
はい、ちょうど身長的な位置で股間の陰嚢を左右きれいに捕えました。

ぶら下がったパンチングボールです。

オルガと私の両方のスピードにより、合成ベクトルはかなりのものでした。

袋の中の睾丸がぐにょんと潰れる感触がありました。
ついでに追加でネコパンチ！
おらおらおら！

「ひゅごーーー！」

オルガの首の気道からガスが漏れました。
口がついていれば悲鳴になったのでしょう。

脳がないのに痛みを感じるのは……、脳がないのに動いてもいるから、どこかにかわりになるものがあるのです。

オルガは両手で股座（またぐら）を抱えて横倒しになりました。
どどーんと大きな音がしますが、腐葉土がクッションになってるので大したダメージはなさそうです。
のたうち苦しんでいるオルガの腹に乗っかり、四つん這いの姿勢で勃起ちんぽの根元に噛みつきました。
そのまま怒りに任せて食い破ります。

5歳児の犬歯舐めんな！

「おひゅー！　おおおひゅーー！」

オルガの気道からまたガスが出ます。
構わずがぶがぶと噛みます。あら？　意外とおいしい。ブタだけに。

皮さえ破ってしまえば中身は血液で充填された海綿体にすぎません。ホヤみたいなものです。
すぐに直径の半ばまで齧りとると、出来た裂け目に両手を突っ込

みました。
そもまま力任せに裂け目を広げます。ぶちぶちぶちっと組織がちぎれる音がします。

「おひゅーーー！　おひゅーーー！」

鼠径部を押さえていたうち右手だけを振り回して、わたしを捕まえようとします。
目がないので触感だけでわたしを探りますが、わたしもちんぽを中心にしたピポットターンでくるくる回り左右に避けます。

「おおおひゅひゅひゅ！」

癇癪を起し両手で私を引きはがそうとします。
これを待っていました。

わたしはドリルちんぽのカリを両手でぎゅっと握りしめました。
ドリル自体がうまく引っ掛かりになっているので手が滑りにくいです。
メスを責める構造があだになりましたね。

オルガがわたしの胴を両手で捕まえ、そのまま放り投げようと持ち上げました。

わたしはちんぽを離しません！
勝利を掴めと轟き叫ぶ！！

結果。

ぶちぶちぶちぃ！

ドリルちんぽが根元の裂け目部分からきれいにちぎれて取れました。

「ひひょひょーーーー！！！！」

オルガはわたしを投げるどころではなく、また股間に手を入れてうずくまりました。

自由になったわたしは空中から半回転して華麗に着地しました。

あれ、わたし、運動はあまり得意じゃなかったはずなのに？

手に持ったままのドリルちんぽがびくびくっと痙攣しました。

「わ」

慌てて投げ捨てると、空中で射精し、ぼとんと落ちました。

わたしの顔に精液を思いっきりひっかけて。

きったねー！

と、みるみるちんぽが黒くなり、オルガの本体も同様に黒いしみに染まり、すぐに黒い粒子となって消えました。

オルガが死んだのです。

ああ、第2の脳はちんぽかキンタマにあったのですね。

オスは股間で考える、的な。

あれ？

急に体が重くなってきました。
どっと冷や汗も出てきます。

疲れたから？

魔物の肉を食べたから？

魔物の精液を浴びたから？

よくわかりませんが、立ってられません。

腐葉土に倒れ込んだ私の目に、エアロックが開き、主任たちが再生室に入ってくるのが見えました。

もう、これ以上は……。目が勝手に閉じて……。

そして私はまた意識を失いました。

◇◇◇

「それにしても、ここがアリアガルド領で良かったな」

実験棟で、主任に声を掛けられているのはエルザさんとカデナさん。

二人とも医療用ベッドで私のと同じ白衣を着て横になっています。
あの白衣は別に特別でもなんでもなかったのですね。ただの備品の病院着でした。

デザインした人は変態さんでしょうが。

二人は、誰もが即死したと思ったくらいひどい状態でしたが、光の加護のおかげでまだ息がありました。

ここのスタッフの多くがアリアガルド法術の基本である治癒魔法を取得していました。

当然といえば当然ですが。

そして、リレー形式で交代し、昼夜を問わず治癒をかけ続け、二人の命を繋ぎ止めたのです。

あれから丸一日経っています。

わたしの実験は中断され、二人の治療に全力が注がれていました。

メンバーを大事にする組織なのですね。

行っていることはともかく。

そして先程、二人はようやく意識を取り戻したのでした。

「申し訳ありません。お手数をお掛けしました」

「お恥ずかしい限りです。結局何の役にも立てず……」

「いや、俺たちも何の役にも立たなかった。コード１１２を倒したのはセカンド自身だしな」

「え？」

「それはどういう？」

わたしがオルガを倒した時二人は瀕死状態でしたから知らないのです。

主任が二人に説明しました。

「それで、あのような」

「うむ。魔法封じの装具を着けている」

そうです。わたしは革の目隠しとさるぐつわ、耳栓をされています。さるぐつわは口のところにOの形の金属の筒があり、それをのどまで挿入されて口を開きっぱなしにされています。

その状態で拘束シートに手足と胴を縛られています。

まだ服は出来ておらず、胸のばってん絆創膏は剥がされたものの、上半身は完全な裸でふんどし一丁で黒革のボンテージ姿というます恥ずかしい格好です。

首枷もそのままですし。

目と耳が聞こえないのになんで今このように実況出来ているかというと、なぜなんでしょう。

そうしないと一人称が続かないから？

いえいえ、そんなメタな話ではなくて、なぜかわかるのです。

超感覚的な？

「しかしな、セカンドが力を使った際まったく詠唱をしていなかった。魔法事故発生時の事業継続計画に基づき魔法封じを施しているが、実効性は疑問だ」

「無詠唱魔法、ですか？」

「それは考えられる。が、魔法回路（マジックサーキット）の形成が無いのは確認していた。そもそも魔法ではないのではないか、と俺は思っている」

「もう調べておられるのでは？」
「いや。お前たちの蘇生を優先していたし、方針がまだな。もうお前たちも大丈夫そうだし、俺は司政官殿のところに行く。指示を仰がねばならん」
「重ね重ね申し訳ありません。業務の邪魔をしてしまいました」
「仕事で返してくれればいい」
「「はい！」」

いい上司と部下ですね。

鬼畜ですが。

わたしはといえば、昨日気がつけばこの姿で、お腹が減ればぽっかり開いた口から流動食を流し込まれ、排泄は膀胱に挿入されたマイクロプローブと肛門に差し込まれたバキュームチューブで吸い出されています。
もちろん排泄物は研究材料として皆さんが分担して解析中です。
また胸には吸盤センサーが取り付けられ、ずっと経過観察されています。

オルガとの戦いの後、おっぱいが少し小さくなりました。
これはそう思うというような話ではなく、センサーでの計測ですから間違いありません。

爆乳であることには違いありませんが。

このまま縮んで元に戻らないかしら。ロリ偽乳、絶対反対！

寝るのもこの姿勢のままですから、だんだん腰が痛くなってきました。

首枷はそのままだし、オルガを倒した力をどうやって出したのか自分でもよくわからないので、抵抗することも出来ずにいます。

どうしたものでしょうか。

……。

夕方になって、主任が戻ってきました。

「セカンドを司政官殿の部屋に連れていく」

わたしに言ったのではありません。わたしは聞こえてないはずなので、部屋のスタッフにそう告げたのでした。

トレーナーのエルザさんたちは負傷中なので、実験棟で寝たまま残されました。

◇◇◇

司政官の部屋はアンティークな造りでいかにも執政者の部屋という感じでした。

目が見えないのにわかるのはなぜでしょう。

「随分体つきが変わったな」

「はい、打ち合わせどおり乳腺型の魔蓄器を移植したところ、このように膨張いたしました」

「ふむ。昨日のコード１１２との戦闘の記録には目を通した。約束

の日まであと3日だが、すでに片鱗があるようだ」
「その、約束の日、儀式について詳細は教えていただけないのでしょうか」
「実は私も詳しくは聞かされていないのだよ。すまんな。バルーチャ主任」
「境界の司政官殿にもですか。大聖会は一体どういうおつもりなのですか？」
「これだけは伝えておこう。明後日の夜までに大聖会から賢者殿が来られることになっている。儀式はその方が執り行われる」
「なんと。我らには下準備だけさせて、果実はもぎ取るということですか」
「滅多なことを言うのではない。我らとて法国のためにあるのだ。境界も賢者もない」
「失礼いたしました。つい」
「わかっておる。エルザとカデナの件もあるしな。わたしに言えばよかったものを」
「いえ、高位法術士でもあらせられる司政官殿のお手を煩わせるわけには」

司政官は高位法術士だったのですね。
それならオルガも仕留められたでしょうし、エルザさんたちの治癒も早かったのに。

しかし、主任が司政官にお願いするわけには、確かに出来ませんよね。

係長が失敗したからといって、社長に何とかしてくださいとは言えません。

わたしも、あったなあ。

客注商品を間違えて別のお客様に販売してしまい、大慌てで別の店から融通つけてもらいましたっけ。
後で店長にこっぴどく叱られましたけど。

……？

この記憶は、何？

「いずれにしても堕天自体はうまくいったのだ。躊躇はしておれん」
「ではついにメス堕ちを敢行するのですか」
「うむ、ここから先はわし自らが行う」
「いや、それでは」
「これ以上お前たちを危険にさらすわけにはいかん。しかも時間がない。となれば、わしがやるしかなかろう」
「司政官殿！」
「それにわしの失敗は、わしだけが罪をかぶればよいからな。万一の時、お前たちに類が及ばん」
「し、司政官殿……！！！」

最後は涙声になっていました。
主任も司政官も、部下、上司思いのいい人たちですね。

やってることは最低ですがっ！

第３０話　フレンチ・キス

主任が司政官室を退出しました。

「では下がれ」

「はっ」

室内が魔法障壁で覆われました。前後左右上下、六面全てを一瞬で立体包囲しました。

「万象の伝わりを隔て森羅の理（ことわり）を離せしむ」

まったく外の音が聞こえなくなり、隙間風も感じなくなりました。

完全に外界と遮断されています。

耳栓してるからだろ、という突っ込みはおいといてください。

「立ち昇る芽吹きの宴よ太陽のもとに集い賜え」

光の加護です。マスク越しにさえキラキラした輝きを感じます。

カデナさんがオルガ戦の時に掛けた加護とは桁違いの圧力です。

「導かれし守護の法よ彼の者に顕（あらわ）せ」

神聖なる防禦魔法。光の加護との重ね掛けで魔に対しては絶対防御に近い守備力です。

さすがは高位法術士ですが、一体何をする気なのでしょう。

って、ナニですよね。

メス堕ちさせるとはっきり言ってましたし。

司政官は、リーさんをもっとかっこよくしたような渋いおじさんだから、まだましですね。

白ブタのドリルちんぽやゴレムペニーに破られちゃうよりは。

それに、謎の儀式のためにはわたしがメス堕ちしていないといけないようです。

何が起こるのかを確かめるためにも、そして生き延びてお母様を復活させるためにも、今日の屈辱にはあえて耐えねばなりません。

ですよね、艦長！

間違えた！　お母様！

司政官が近づいてきます。

目隠しと耳栓が取り外されました。

まぶしいです。

瞳孔が明るさに慣れるのに少し掛かりました。

「ふむ。幼いが、やはり美形だな。瞳は……正常だな」

といいながらさるぐつわも外します。

喉から金属の円筒が抜けれるとき、ごぼっと大量のよだれが垂れてしまいました。

のどから胸に垂れて、巨大な乳房の間で池のように溜まりました。

「ふむ、喋れるか？」

よだれを拭いてもくれないまま質問されます。自分のよだれだけど、汚いじゃないですか。

でも反抗したらドカンです。ここはおとなしくしていましょう。

「はい、顎がだるいですが、話せます」

「ふむ。では、基本聞いていてくれ。何かわからないことがあれば質問してよい。今からお前を犯す」

そうですよね。わかっています。

わたしは黙っていることにしました。質問するところではありませんから。

「すでにお前も知らされているとおり、われらの最終目標は魔に対抗しうる威力を有する軍隊を作ることだ。法国ではいくつかのアプローチ、例えばすでにある法国の兵力である法術軍の強化・拡大や、聖なる遺物（アーティファクト）を再生する遺物兵器開発などが並行して行われている。大聖会では異世界召喚術による勇者システムの開発を行っていると聞く。ここ、第八境界では魔の力を利用し軍団化する実証実験を進めていた。人間に魔の力を取り込む魔人化実験。魔物を飼いならし戦力とするマモン・トレーナー実験。魔物に無垢なる子どもを産ませ育成するマモン・ブリーダー実験。いずれも技術的なブレイクスルーがなく、研究は停滞していた」

あれ？　ここで魔が子どもを産んだことがあるのではなかったでしたっけ？

ブリーダー計画は成功したのでは？

「だが、ある日、妊娠した魔族がここに現れたのだ。我々は色めき立った。魔は子を宿し、出産する。その貴重なサンプルが向こうから来たのだ」

ああ、ここで妊娠・出産させたわけではなかったのですか。

それではブリーダー計画は成功とはいえませんね。

「今この境界で、その光景を見たものはわしのほかは数名しか残っておらん。あれは極めて神秘的な光景だった。ちょうど１０年前。満月の夜だった。」

そりゃ、出産って神秘的だと思いますよ。でも、聖職者が『神秘的』とまでいうんですから、きっと違う意味なんでしょうね。

「あの魔族、いや、魔人もお前やお前の母親同様、大変な美形だった。魔人でなければ国が傾いたかもしれん。魔人はわれらと意思疎通が出来る知性を持っていた。そこで、われらは魔人と取引をしたのだ。出産し、子どもを育てる場所を提供する代わりに、こちらの指示命令に従うことをな」

なるほど。赤ちゃんを人質にしていれば魔人を自由に出来るし、いずれ魔人の子が大人になれば、軍団の貴重な戦力とすることも出来る。どう転んでも法国の戦力アップは間違いなしですね。

そして魔人は安全に子育てが出来ると。

ウインウインじゃないですか。

「やつは生まれた赤ん坊に乳を与えた。その姿は微笑ましくもあったが、しかし魔人の乳、魔乳だ。赤ん坊はいかにも普通の人間のように見えたが、魔乳を飲んで育つものが人間であるはずがない」

わたしもお母様の乳を飲んで育ちました。そういえば、わたしはお母様に抱きしめられたり、体を洗ったりしていただきましたが、平気でした。魔に侵食されたりすることはなかったはずです。

それは魔だから？　いえ、魔と交わらない特殊体質だから？

「魔人はずっと協力的だった。多くの検査や実験を引き受け、時には周辺の魔物の討伐や捕獲にも役立ってくれた。しばらくするとスタッフと冗談すら交わすほど打ち解けた」

そこまで話すと、司政官の表情が一気に険しくなりました。

「だがしかし、半年後、魔人は赤ん坊とともに消えた。その時にこの境界は大ダメージを受けたのだ。実験棟の大半が破壊され、貴重な研究者や技師が大勢殺された。特にその魔人と赤ん坊についてのデータはすべて破壊され消された。わしはその時たまたま外にいたので助かった一人だ」

なんということでしょう。

「お前の母親を連れてこず、ドッチャに始末させたのもそのためだ。魔人はけっしてあなどれない。恐るべき力を持っている。境界内に入れたが最後、また惨劇が起こるのは必至だ」

でも、その魔人とお母様は違うのでは！？

「だからわしはお前がいかに人間のように見えても、人間だとは認めない。すでに魔蓄器の定着はなった。後は徹底的に洗脳し、そして安定して多数の子を産ませることだ。そのためにお前をメス堕ちさせる」

「あのっ、わたし初潮がまだなんですがっ！」

ここは突っ込みどころでしょう。これで踏みとどまってくれればいいのですが。

司政官の無念や恨みはわからないではないですが、わたしをはけ口にされても困ります！

「知っているか。卵子の元となる卵原細胞は一生増えないのだ。生まれた時がおよそ２００万個と一番多く、生理が始まる頃には２０万個程度に、思春期には２万個程度とどんどん減っていく。だから今がピークなのだ！」

「えええええ！」

拘束シートがリクライニングしてベッドに変形しました。手足を拘束しているバーが広がり、わたしは大の字姿になりました。

胸に溜っていた唾液がドロリと左右にこぼれて、上半身がてらてらになりました。

司政官が法着を脱ぎ捨てて近寄ります。まだ下半身には下着をつけていますが、ばっちりテントを張っています。

このロリコンが！

「セックスしたら魔に侵食されるんじゃないんですかっ！」

何とかしてやめさせようと思いますが。

「ふん、わしは加護魔法には自信がある。ドッチャのような軟弱とは違うのだよ」

そういえばこの人到着した時いきなり私のあそこを掴んでました。

無駄な抵抗でした！

「男を受け入れるのは初めてだろう？　抵抗するより、快楽を享受する方が痛みが少ないぞ」

それ、メスイキしろってことですよね！

と言いつつ、司政官はわたしのふんどしをするするとほどき始めました。

「ふむ、少し赤くなっているな」

剥き出しになった私の性器を指で開いて覗きます。

尿道と肛門にずっと管を挿入されていたからでしょう。ちょっとヒリヒリしていますし。

「なるほど、未熟な膣だ。ほぐさないと入らないな」

親指で膣の下を押し下げ、穴の中を剥くようにします。性器全体が縦に伸びます。

「ふむ。濡れてはいるな。多少は期待しているようだな」

司政官は親指と人差し指をくっつけたり離したりして付着したわたしの液の糸をねばねばと伸ばします。

濡れてるのは期待しているからじゃないです諦めてるだけです！

たしかに、白ブタやゴレムよりはマシって思いましたけど！

おじ様趣味はないんですけど、今のところおじ様にしか出会ってないので、その中では司政官はかっこいい方だとも思っていますけど！

「ふぃっ！」

急に変な声が出ました。

司政官がわたしの乳首を口に含んだのです。

爆乳の先端にある、不釣り合いに小さな尖りを。

ちゅ、ちゅ。

強く吸います。

べろべろ。

舌をローリングさせます。

ばばばばばっ

空いている乳首を指を開いた手を高速平行移動させて刺激します。

人差し指、中指、薬指が左右に通過しながら尖りを擦る感じです。

そして、口を付けている方は、ちゅ、ちゅ、べろ、べろ、ちゅ、ちゅ。

昨日は筆舌に尽くしがたい激痛が全身を駆け抜けた震源地でしたが、今は背筋がぶるぶるするような恥ずかしくも切ない刺激が、同じ場所から同心円のように体に広がります。

「あ、ああ」

思わず知らず、甘い声が出てしまいました。

空いている片手で、口に含んでいる方の乳房の根を揉みます。

根っこをぎゅっと絞られると、その分乳首側に肉が移動して膨らみ、ますます司政官の口の中に多くの部分が吸い込まれます。

移植後の痛みはもうありません。

揉まれるおっぱいは、ただ熱く、じっとりと熱を帯びてきます。

「ひっ！」

胸の先を歯で噛まれました。

でも、さほど痛くはありません。むしろ甘さの中に痛みが少し混じることで、より気持ちがいいです。

これが、『甘噛み』……。

唇が離れ、入れ替わりに指で乳首を摘まれ伸ばされながら、こんどは反対側の乳首を吸われました。

また吸われ、舌で翻弄され、快感の波が襲います。

連続する刺激が少し怖くなってきたわたしは、反射的に司政官の下から逃げようとしますが、がっちり胴体も拘束されているので、動くに動けません。

司政官の舌はそんなわたしをいたぶるように、乳首から乳房のふもとへと下り、脇の下をぺろぺろと舐めはじめました。

くすぐったい！
けど、これは……。

大の字に引き延ばされた脇を舐められるのはくすぐったさが先行しましたが、しばらくするとおしっこを我慢しているような不思議な感覚が生じてきました。

あ、これはこれで、気持ちいい……。

「あはっ、うふ……ん」

ため息のような、誘うような声を出してしまいました。

脇を舐められて感じる変態さんになってしまったのですね、わたしは。

司政官の唇が脇から喉を登り、顎を経て、わたしの口に到達しました。
唇が重なります。

……キス！　わたしのファースト・キス！

はむはむとわたしの唇を摘むように司政官の口が動きます。
そして舌が、わたしの唇を割り、歯の間を抜けて、舌に絡まります。

ああっ！

口をふさがれているので声こそ出ませんでしたが、舌から電気のような刺激が全身を駆け巡りました。

もっとこの刺激が欲しくて、司政官の下に自分の舌を絡めていきます。
軟体動物が交尾しているような舌同士の動き。

あああ、これ、気持ちいい！

これが大人のキスなのですね。お母様がフレンチ・キスとおっしゃていたあの前戯。

司政官が上なので、彼の唾液がわたしにどくどくと流れ込みます。
それすらなんだか気持ちいい。
キス、恐るべしです。

第３０話　フレンチ・キス（後書き）

すみません。今回で破瓜までいっちゃおうと思っていたのですが、司政官のトークで思いのほか文字数を取ってしまいました。
続きは明日に！
ごめんなさーーい！

第３１話　破瓜

口の中を司政官の舌で舐められながら、両方の胸を揉みしだかれます。

んふ、ふ、ふ。

口を塞がれているので鼻息が荒くなります。はしたないと叱られてしまいそうです。

「あはあ、はあ」

司政官が唇を離しました。そのままわたしの鼻の頭をついばみ、鼻梁を舌でつつつと舐め上げ、前髪を上げて額にキスします。

あ、これ、気持ちいい。

「あ、ああん」

声を我慢できません。息を吐くたびに漏れてしまいます。

また司政官は体を下げ、わたしの乳首を舐めます。右、左。

胸を手で揉まれながら乳首を吸われると、胸から腰に電流が走り、足の指先がピンとなります。

なんでこんなに気持ちがいいの？

司政官の口は乳首にとどまらず、乳房のふくらみを辿って腹部へ

と下がっていきます。
大きな乳房の下の薄い皮膚越しにわたしの肋骨をさわさわと舌で舐めます。
くすぐったいのに気持ちがいいです。
体が熱くなります。

司政官の舌はおへそを捉えました。舌先をとがらせ、おへその奥をちょんちょんと突っつきます。ああこれもくすぐった気持ちいい！

べろん。

舌でおへその穴が埋まりました。そのまま前後左右に穴全体を舐め上げられます。内臓までびくびくします。
その間も両手で爆乳を揉み、こね、先端を摘みます。ああん。

司政官の舌はおへそから下に動き出しました。正中線をなぞり、股間へと向かいます。

あああ、とうとう。性器を舐められてしまうのですね。
未熟で無垢な5歳児の性器を。

舌は恥骨のふくらみを越え鼠蹊部へと侵入しました。割れ目の始まり、クリトリスの根をすっと舐めると、しかしそのまま下に降りずに右にずれました。

大きく開いているので、股間にくっきり浮かんでいる腱を舐め、また中央に寄ってお尻の穴に近づきます。しかしお尻の穴にも膣にも触れず、会陰部、すなわち蟻の門渡りを横断して左側を舐めます。

わざとじらしているのです。

時計回りに回りながら、決してその中心を攻めようとはしません。
距離を置いて、偵察するように周辺をちろちろねぶねぶと舐めます。

ああああ。じれったい……。

鼠蹊部の腱がぷるぷると震えます。

「あっ！」

おしりの穴をつつかれました。
舌先をすぼめて、こじ開けてきます。
かと思うと、周りのひだを1本1本伸ばすように舐めてきます。

ちょっと腫れて赤くなっているので、唾液が肛門にしみ、痛みが退いていきます。

あ、これ、恥ずかしいけど気持ちいい。

でも、ベッドにべったり拘束されているので、角度的に股間が邪魔をして司政官の顔が入りきらないので、舌先で舐られるだけです。

ああ、もどかしい。

ウィーン。

足を固定しているバーが膝で少し折れ、足先が持ち上げられました。
司政官もやりにくいと思ったのでしょう。

M字開脚でやや足を持ち上げた格好です。おしりの穴が上を向きます。

おしりの穴に顔を埋めてきます。唇で肛門をちゅうちゅうとべったり吸われます。ああ、来た。

おしりの割れ目全部で司政官の顔を覆います。鼻の頭がわたしの膣口をちょんちょんと刺激します。

でもそれは軽い事故みたいなもの。それ以上は決して攻めて来ません。

なまじ軽く前に刺激を受けながら、後ろを全開で嬲られて、わたしは不完全燃焼のまま快楽の階段を無理やり登らされていきます。

ああああ！

どうしてまんこを舐めてくれないの！

目の前にあるのに！

クリトリスをこんなに勃起させて待っているのに！

性器が蜜であふれているのを自覚していました。

ああ、もう。

ああ、もう！

ずるっと、陰核を覆う皮膚、クリトリスフードが剥かれました。

びんびんに固くなっていたので、剥けやすくなっていたのでしょう。

わたしはクリトリスの全貌を初めて外気にさらしました。

ぴくぴくと蠢いているのが、おしりが少し持ち上がったため自分からも見えます。

割れ目の始まりにぴょこんと立っているピンクの尖り。

司政官の太い指がそれを覆っていた皮をめくりあげています。

ちょん。

クリトリスの先を舌先でつつかれました。

電撃が、今までで一番強い電撃がその小さな器官からわたしの全身を貫きました。

司政官の舌、なんでこんなに気持ちがいいの。

わたしはおかしくなってしまったのでしょうか。

はぐはぐ。

クリトリスの全てを口に含まれました。

甘噛みされます。

「はうわっ！」

駄目です。もう気持ちよすぎて、降参です。無理です。これ以上は脳が焼けてしまいます。

れろれろれろ。

舌で引っ掛けるようにして小さなクリを先から、付け根から、前から、横から舐られます。

「あはっ！」
「ひっ！」
「う！」
「あああ！」

悲鳴しか出ません。快楽の悲鳴です。そんな悲鳴ってあるんですね。

指がクリトリスフードから離れ、性器の左右を指で押される感覚がありました。

親指で割れ目を開いているのです。

幼い小陰唇に守られた外性器が、全てをめくりあげられて司政官に見つめられます。

ああああ。来るの？　来るの？

来るのね！

ずるっ。

来たー！

ついに性器の中へ舌が届きました。クリトリスの下から、尿道口、そしてまだ閉じている狭い膣の入り口を一気に舐められます。

谷間に溢れている恥ずかしい液を舐めとられながら、わたしは快感に溺れます。

おまんこを舐められるって、こんなに気持ちいんだ……。

性器からせりあがってくる快楽に、全身がぶるぶるとうち震えます。

足が再び水平に降ろされ股間の開きが大きくなります。基本のM字開脚ポーズです。

司政官がベッドを降り、下着を脱ぎながら頭側に回りました。

え、なに？

呆けた頭で何をするのかと見ていると、今度はヘッドレストがぐっと下に傾きました。後頭部が下がり、のどが開きます。

司政官がそんなわたしに股間を近寄せました。

わたしの目の先に彼の勃起した陰茎があります。

毛深い股間からそそり立つ大人ちんぽ。

血管が浮き、がちがちに反り返ったそれは、既に恐怖の対象ではなく、快楽を与えてくれる愛しいものに思えたのでした。

そして司政官の意図を理解しました。

舌を伸ばし、太いちんぽの先端を舐めます。パンパンに張った亀頭です。

司政官が腰を進めました。わたしは大きく口を開け、舌を絡めながら口に含みました。

おしっこと汗とシェーブルチーズにも似た発酵の臭いが喉を満たし鼻に抜けます。

この臭さが、でも愛しいです。

さらにちんぽを押し込んできました。カリがわたしの唇をずるっと抜け、喉の奥にぶつかります。

さらにさらに腰を進めようとしますが、さすがに無理です。５歳児にディープスロートは。

司政官も無理だと分かったのか、いったんちんぽを口から抜きました。

「うえっ、えっ」

たまらずえずき、よだれがだらだらと鼻に逆流します。

いったん抜けたので、わたしが少し落ち着いたのを見て、またちんぽで口を割ってきます。

今度は喉にぶつかる寸前で引き、また押し、また引きます。

カリが唇を擦って出たり入ったりします。

わたしは口をすぼめて出来るだけ刺激を与えようと努力します。

抜けたときは尿道口を舌先でちろちろと舐め、奥まで来た時には

陰茎に絡めます。

「んっ、んっ」

しばらくすると、司政官も声を出し始めました。彼も気持ちがいいのでしょう。

俄然やる気が出ます。

もっともっと！

舐めさせて！

おじ様ちんぽ舐めたいの！

しかし、無情にもズボンと抜かれてしまいました。口と亀頭の間によだれの橋が掛かります。

「そろそろ行くぞ」

司政官が宣言し、また股の方に回りました。

来た。

ついにあの剛直でまんこを貫かれるのです。

処女膜をお破りいただくのです。

わたしは、多分真っ赤になりながらも景色満面の笑みを浮かべていたはずです。

片手でM字の膝を持たれました。頭が下がっているのでちょっと

見にくいですが、片手は陰茎に添えているのでしょう。

クリトリスに亀頭が押し当てられました。
ぎゅっと圧を掛けられます。

イタ気持ちいい……。

亀頭が位置を変え、おまんこの縦割れを二度、三度往復します。

わたしの愛液をまぶしているのです。

自分でもどんどん溢れているのが分かります。

バージンブレイクの期待に、陰唇が震えます。

ああ、早く！
早く！

膣にぐっと圧力を感じました。

「あっ！」

声が出ました。大きな亀頭で狭い口を押し開かれます。

痛い。

でも昨日胸を切開された痛みよりははるかにましです。

むしろこの後にやって来る官能への期待の方が大きいです。

司政官はわたしの腰を両手でつかみました。

大きな手なので、親指が両方重なっておへそを押さえます。

まるでここまで入れるぞと言わんばかりに。

わたしの胴を支点にして、ぐいと巨大な質量が膣内に侵入してきました。

まだ先っぽなんでしょうが、治りかけた傷口を無理やり開かれるような痛みが襲います。

「つっ！」

声を我慢できません。

めりめりと亀頭がわたしを蹂躙します。

痛い、痛いです。

反射的に腰を引きますが、がっちり拘束されているので動きません。

腰を持たれてもいますし。

「あ、い、痛っ、いたい」

司政官は委細構わず腰を進めます。

大きな抵抗が入り口をくぐるのを感じましたカリがようやく膣口を通過したのです。

え、まだそれだけ？

これから本体が入ってくるの！？

わたしの細く狭い膣は、巨大な亀頭というシールドマシンで大きなトンネルを掘られていきます。

しかしすぐにぐっと抵抗が増しました。

「痛い！痛い痛い！」

今までとは比較にならない鋭い痛みが膣内から私を襲います。

これが、処女膜！？

これが、破瓜！？

これが、ロストバージン！

無情にもマシンは進み、ぶちいっという音が聞こえたような気がしました。

取り返しのつかないところに亀頭が侵入したのです。

膣の中が一気に拡がったのが分かります。

穴を内部から閉じていた肉の軛（くびき）が破られたのです。

「あああああっ！」

わたしは絶叫していました。

その隙に、司政官は陰茎をさらに奥へと進めます。

ごりごりと膣が削られていきます。

薄いお腹の皮膚をとおして、陰茎に押し出され内臓の位置が変えられていきます。

まるで王の帰還を祝福する家臣たちのように、道が開かれていきます。

王道です。

わたしは凱旋の行進にひれ伏すだけのか弱き乙女です。

もはやなにがなんだか、意識が混乱します。

意味のないことを私の口が叫んでいるのが分かりますが、自分でも止めようがありません。

ずぶずぶと、剛直は胎内を進み、子宮を押し上げながら、更なる奥地を開拓していきます。

ついに、司政官のジャングルがわたしのつるつるの股間とドッキングしました。

極点に到達したのです。

長さから言えば、あの剛直はおへそを超え、胃を押し上げ、心臓近くまで侵入したはずです。

しばらくその状態で司政官は動きを止めています。

わたしの膣と、征服者たるちんぽを馴染ませているのでしょう。

最初の身を斬るような痛みは引いてきましたが、お腹全体がじんじんと重く痛みます。

「ふむ」

「あああああっ」

唐突に彼はちんぽをずるずると抜き始めました。

内臓を持っていかれるような感覚に悲鳴を上げてしまいます。

そしてカリが表に出たところで、また侵入してきました。

「ふぐうううっ！」

内臓を押し開けられる感触に耐えきれません。

そして最奥点に到達。またしばしとどまり、抜く。

「あああああっ」

また入れる。

「ひいい」

抜く。

「あああ」

入れる、抜く。入れる、抜く。入れる、抜く。

だんだんわたしにもその大きさに体が馴染んでくるのが分かりました。

痛みはありますが、その痛みがじわじわと快感に変わっていきます。

あ、あ、あ！

「ふっ、ふっ、ふっ、ふっ」

抜挿のスピードをだんだん上げ、リズムを取るように彼が息をします。

「あっ、あっ、あっ、あっ」

彼のリズムに合わせ、わたしも声が漏れます。

何か大きな波がせりあがってきます。

それとともにわたしの中がグネグネと勝手に蠢き、彼のちんぽに絡みついていきます。

刺激が加速します。

「ふっふっふっふっ」

「あっあっあっあっ」

あああああああああーーーーーーーっ！

「うぐっ」

最奥点で彼が急停止しました。

ずぶっうううっっ！！！！！！

「あああああああああああああああああああああああああああああああああああああーーーーーっ」

断末魔のような悲鳴。

快楽の頂点で昇天する悲鳴です。

脳が頭から飛び出し、宇宙まで抜けていったような快感。

そして、お腹の奥底で熱いマグマが弾け、ゆっくりと満たされていく感触。

射精です。

彼の精液。

彼の子種。

あああああああ……。

なんという多幸感。

目の前がピンクに染まります。

きっと私の瞳にはハートマークが映っているのです。

「ふう」

ため息をつきながら、ずるずると彼が陰茎を抜いていきます。

どぶんと、白い精液が掻き出されてきました。

そして私の股間に流れる一筋の血。

処女喪失。

そして膣内射精。

一筋涙が流れました。

これは、うれし涙でしょうか。

「ふむ、なかなかいい締まりだった。さすが体が小さいだけのことはあるな」

小さいも何も、5歳児ですからね。まだ。

「では次だ」

え、まだ続くんですか！？

やだ、うれしい！

第３１話　破瓜（後書き）

というところで、毎日更新はいったん終了します。
少しお休みをいただいてから、再開します。
今後は週１、２回程度の更新を目指します。
まだまだ続きますが、飽きずにお付き合いいただければ幸いです。

しかし、あんまり地獄でもないですね。むしろメス堕ち天国みたいな有様に。

第３２話　失神（前書き）

お待たせしました。第３２話をお届けします。凌辱の続きです。

第３３話は週末くらいまでお待ちください。

第３２話　失神

司政官はまたわたしの頭側に回り、白濁液と破瓜の血で紅白に染まったちんぽを突き出しました。

熱く湯気につつまれた怒張を、わたしは上下逆さのまま首を伸ばし、はむっと咥えました。

生臭い香りが口の中に充満します。

彼の精液とカウパーとわたしの膣液と血が混じったえずくような臭いを放つ陰茎。

最高です。

ちゅぱちゅぱ。しゃぶしゃぶ。べろりべろり。ごっくん。

お掃除フェラです。ちゅううっと尿道口をすするのも忘れません。濃い味でおいしいです。

食事がずっとこの汁だったらいいのに。双脚豚よりずっと美味です。

彼がぐっと腰を進めてきました。射精後やや萎えていたちんぽが固さを取り戻していくのが分かります。

これはわたしもご期待に応えねばなりません。

舌を平たくして喉を大きく開けます。さあ、どうぞ。

ぐぐぐと亀頭がのどの奥に進んできます。のどちんこを超え、食

道に侵入します。狭い肉の筒が無理やりこじ開けられていきます。いけないいけない、つい吐きそうになります。

平たくなった舌が肉棒の掛け布団のようになっています。喉を突かれると反射的に舌が引っ込んでしまいがちです。さっきはそれでなかなか呑み込めなかったのです。

5歳児のディープスロート。今度こそちんぽの全長を愛せるように頑張らねば。

私は関節が外れるくらい大きく顎を開け挿入に耐えます。口の端からよだれが泡立ちながら流れ出し、こめかみへ垂れていきます。

わたしの眼球に彼の垂れた陰嚢がぶつかります。鼻が毛にくすぐられてくすぐったいです。吐き気と戦いながら陰茎の大部分を呑み込みました。

が、全長ではありません。彼の体は、わたしの顔とは密着していません。およそ1センチ離れています。

あと1センチ。

でも、それ以上はどうしても奥に入りませんでした。首の細い部分で骨に当たっているようです。痛いです。

幼児の喉の物理限界です。

ずるずるずるっとちんぽが抜かれました。

「ぐばああっ！」

大きな声を出してのどに溜まったよだれを吐きだしてしまいました。

口枷をされていた時より大量かもしれません。

鼻から額までよだれの滝まみれになりました。

汚いですが、そんなことはどうでもいいです。目の前には雄々しく立った彼のちんぽがお出ましなのですから。

「ふむ、そろそろいいかな」

彼はベッドの横に回り、わたしの胸を揉みながらそう言うと、拘束ベルトをオフにしました。

腕、胴、脚の各ベルトのロックが一斉に外れると、するすると収納されました。

わたしは自由になりました。

胸を両手で押し上げられ、その勢いで上半身を持ち上げられました。

彼がベッドに仰向けになりながら、わたしを引き寄せます。

屹立した亀頭に汁まみれの膣穴をあてがわれ、腰を持ってぐいと落されました。

精液や愛液でぬるぬるのまんこはずぶずぶ陰茎を呑み込み、ゆっくり沈んでいきます。

騎乗位。

ですが、わたしの体重だけでは亀頭を飲み込むのがやっとです。一度完全に貫かれたとはいえ、また膣肉は傘をたたむように狭くなり口を閉じています。

当てがった手で彼が力を入れて引き寄せました。ずぶずぶずぶと肉筒を押し開き再び貫いていきます。

力づくで腰を落とされると、頭に電流が走りました。子宮が陰茎に押し出され、脂肪のほとんどない薄い腹部がぷくっと膨らみます。

それはちょうどおへその下あたりで、腰を持つ彼の両手の親指が当たっています。

わたしに陰茎をめり込ませつつ、飛び出した子宮を腹越しにぎゅうっと押しつぶします。

「あぎゃあああぎゃあぎゃあああ！！！」

わたしはよだれを撒き散らして絶叫しました。体内からは太いちんぽ、外からは太い親指で子宮を、そして膣を圧迫され、目の前に無数の星が飛び散ります。

さらに、さっきは寝ていましたが今は体を立てているため内臓の位置が変わり、胃を直接亀頭で押し上げられました。強烈な刺激に、さっきせっかく飲み込んだ精液や体液が胃から逆流します。

「おげえええええぇえぇえぇえええ！！！」

わたしは精液交じりの酸っぱい胃液を吐きました。顔が、髪が、爆乳がどぼどぼと臭い胃液まみれになります。

司政官にもびしゃびしゃと掛かります。あああっ、申し訳ありません！

ですが、よく見れば胃液やその他の液は彼の皮膚表面ではじかれ床にそのまま落ちて行っています。まるで摩擦係数が０の物質のように。

魔法障壁ですね。彼を汚すことがなくてよかったです。

ですが、さっきお掃除した時ちんぽは体液まみれでした。選択的に障壁を展開できるのでしょう。

第一ちんぽまで摩擦係数が０だと、わたしのまんこの刺激を得られないですしね。

と冷静に状況を観察している場合ではありません。彼が最奥まで突き上げると、そのまま体を浮かされ、また引き降ろされました。

浮く。降ろす。

浮く。降ろす。

太いちんぽで股からみぞおち辺りまでおなかの中全部をごりごり削られます。

気持ちいいけど、でも、これって人間オナホールじゃないですか！？

身体ごとぐっちゃんぐっちゃんと上下されチンポで刺激されます。いや、事実上彼はわたしの小さな体で自慰しているのです。

ひどいです。モノ扱いです。

興奮します。

わたしは幼女オナホにされて、またまんこから大量の汁を溢れさせてしまいます。

おごおお！　おごおお！　と膣を、子宮を、胃を蹂躙される喜びに絶叫しながら、股の間から泡立った透明な汁を次々噴出します。

どのくらいオナホとして使われていたでしょうか。ずごずご上下に激しく揺り動かされるので脳震盪を起こし、意識が朦朧としてきます。

ずごずごずご……。

彼がうっ！と一声呻くと、上下運動が止まりお腹の中に熱いものが満たされました。

ああ、また膣内射精していただけた……。

彼が手を離し、わたしはそのまま彼の胸に倒れ込みました。爆乳がクッションになって頭は浮いたままでした。

胸から酸っぱい臭いがします。よだれや精液や胃液や汗が混じった悪臭です。

彼はわたしのおしりに手をかけ、一息で長いちんぽを抜きました。膣から白濁液がだらりと溢れます。

わたしは体がしびれたように動きません。半ば意識を失い、おそらく白目を剥いているのでしょう。視界もはっきりしません。

ですので既にこれは超感覚での実況です。

司政官はベッドを降り、わたしだけをうつぶせのまま残しました。またベッドが変形し、中央が山になったへの字に折れました。その上でうつ伏せのわたしは、おしりを突き出すように持ち上げられている格好です。

彼は今度はお掃除フェラを強要せず、後ろに回って両手でおしりの割れ目をぐいと開きました。

性器も肛門もすべて彼の前にあらわとなります。

だらり。べちょ。

彼は肛門につばを垂らすと、汁まみれの亀頭を押し当てました。そして何の予告もなく、ずぶっと挿入しました。わたしの体がビクンと跳ねます。

肛門が切れて鮮血が一筋流れましたが、司政官は構わず押し入ってきます。

身体が裏返るような我慢しがたい異様な激痛とともに、彼の太い怒張が腸を犯していきます。

すでに内臓をさんざん蹂躙されていたため、直腸はあっさり降参しました。さらにS字結腸、下行結腸も白旗を上げ、陰茎が大腸内をずぶずぶずぶと侵入します。

彼は全長が飲み込まれたのを確認すると、ずーいずーいとピストン運動を始めました。

超巨大なうんこが腸と肛門を通過していく羞恥の感覚と、体が裏返るような容赦ない痛みが交互にわたしを襲います。

「おごおぉぉぉ！　おごぉぉぉぉ！」

突かれるたびに口から胃液を吐きながらわたしはびくんびくんと断末魔のように跳ねます。

「ふんっ！」

彼の動きがまた急に止まり、腸に下痢便が溜ったような奇怪な感触が広がりました。

腸内射精されたのです。

ずぶずぶとちんぽを抜きます。わたしのおしりの穴は大きく口を開けたまま、真っ赤な内部を晒しています。

わたしは布団干しに二つ折りに干された布団のようにベッドで脱力していました。

とうとう失神したのです。

やがて、ぽっかり空いた肛門から、どぶんと白濁液が多少の茶色い物体とともに吐き出されました。

便はバキュームチューブで吸われていますが、多少残っていたようです。

「こんなものかな」

司政官はそういうと、部屋に展開していた魔法障壁を縮めました。

飛び散った液体や臭気が、魔法障壁の内側で集められていきます。

自分自身も表面のコーティングを脱ぐようにして魔法障壁から出ていきました。

やがて可動式ベッドの範囲まで魔法障壁を縮小すると、その透明な内側に様々な体液や汚物が溜りました。

わたしもまだその障壁の中で二つ折りで意識を失っています。

汚物と一緒の扱いです。

元通り法服を着用すると、内線で人を呼びました。

すぐにバルーチャ主任他数名が部屋に入ってきました。

「実験棟へ戻し、例の処置を」

「はっ」

主任が敬礼し、魔法障壁の中で布団干しになっているわたしをベッドごと引き取っていきました。

第３２話　失神（後書き）

今回もストーリーが展開しませんでしたが、次はお話が進むと思います。

第３３話　ゴレムペニー責め（前書き）

予定よりも公開が遅くなってしまいました。
しかもあんまりお話が進みません。いろいろ予告詐欺で申し訳ありません。

第３３話　ゴレムペニー責め

通路を移動している間にベッドがフラットに変形していきます。
そしてわたしはバルーチャ主任の魔法障壁で出来たマジックアームによりあおむけに戻されました。

司政官の障壁魔法の中に別の障壁魔法をネスト出来るのですね。
そういえばエルザさんたちも障壁魔法の重ね掛けをしていました。
魔法を共有するキーのようなものがあるのでしょう。

ベッドから伸びてきた拘束ベルトが手足に巻き付き、再び身動きが取れなくなります。目隠し、口枷も見えないマジックアームで装着されます。

魔法障壁は術者と距離が開くと減衰します。打ち合わせ済みだったのでしょう、司政官の立方体の障壁が消えると同時に、主任のマジックハンド状の障壁が球状に切り替わりわたしを包みました。

立方体の中に閉じ込められていた汚水ごと。

そして、ベッドやわたしの体からぺりぺりとラップをめくるように障壁が縮んでいきます。

その中心にあるのはわたしの顔。

つまり、わたしの頭の回りに縮小していく透明な球があり、その中に様々な体液や排せつ物が混じった汚水が集められていきます。

わたしの顔がみるみる汚水に浸かり……。

ごぶん。

汚水の水面がとうとう顔の高さを超え、枷により閉じられない口の中に流れ込んできます。

精液はともかく（ともかくです）、胃液や膣液や腸液や糞便が滝となって喉に侵入してきます。

主任はさらにひどいことに球を少し持ち上げました。

口の上に球が乗ってる状態で止めます。

必然的に、漏斗で流し込まれるように全ての汚水が流れ込んできます。

鼻はマスクで覆われているので、呼吸は口でしか出来ません。

口の中にあるものを飲み込まないと、窒息します。

ごっくん。ごく、ごくん。

もう、今更です。

精液以外はもともと自分が出したものですし。

人間の肉を食べたわたしがウンコや胃液ごとき、恐れるものですか！

泥をすすってでも生きると決めたのですから！

しかしこれ、酸っぱいし臭いし。

自分の体内にあったものとはいえ、いったん出たら汚物は汚物ですよね……。

覚悟が折れそうです。

お母様ごめんなさい。ミヤビは糞喰らいになってしまいました。

全部平らげるまで障壁は消えませんでした。主任、やっぱり鬼畜です。

気持ち悪い……。

「管理物質の消滅を確認！」

「よし、魔法障壁を解除する。念のため漏洩の監視を」

「漏洩、ありません！」

「了解だ。打ち合わせどおりゴレムペニー用意。まずは7インチを前後にセット」

いつの間にか既に実験棟に着いていました。

拘束されたわたしの性器と肛門に培養ちんぽがあてがわれ、無慈悲に貫通されました。7インチって18センチくらいですよね。で、でかいです、でかいですよ、これ！

管理物質の消滅って、さっき私が呑み込んだ汚水のことですよね。なんかバイオハザードか放射線漏えいみたいな扱いですね。

う！

お、おおっ。

あああああああっ。

ゴレムペニーがゆっくりピストンを始めました。

こ、これは、あっ。なんかっ。その、ゆっくりで力強くて一定間隔でこう長いストロークで抽挿されると。あっ、腰の奥からっ。

ああっ。なんか、なんかが持ってかれるっ。

ひいい。

あっ。待って。そんなっ。激しいっ！　おおおお。

あああああーーーーっ！

「心拍上昇。アルファ波、ガンマ波増大。快感曲線漸増」

「早いな。さすがは司政官殿だ。あの短時間でここまで仕上げている。これなら間に合うかもしれないな」

「儀式ですか。でも、境界（ここ）で行うのでしょう？　だったら……」

「わざわざ大聖会から賢者殿が来られるのだ。ここの設備が必要なだけで、われわれに用はないと言ってるのと同じことだ。賢者殿が来られる前に卵細胞を採取しておかないと、儀式の後は当分セカンドに関われないだろう」

「そうですね。急いでメス堕ちを達成しないと」

「ああ、せっかく司政官がここまで準備をしてくださったのだ。われわらがご期待に応えないで、どうする！」

「そうですね。主任。あと2日。この時間を最大限有効利用しませんとね！」

なんかいい感じでプロジェクトを進めているリーダーと部下みたいですが、幼女に人造ペニスをダブルファックさせてなにをいっとるんじゃあ！　って突っ込みたいところです。

突っ込まれてるのはわたしですが。　ってやかましーわい！

と心の中で悪態をつきながらも、無理やりに快感を引き出されていきます。あああ。くそっ。この人工ちんぽ、気持ちいいところを責めてくるなあ。

ひぎぃぃっ。

「いい感じだな。管理物質にセカンド自身の便が混じっていた。清浄機能は魔との細胞混合で弱まっている。ゼロにいくら掛けてもゼロだが、今はメス堕ちが可能ということだ」

「はい、ゴレムペニーを2時間ごとに交換していけば」

「うむ。境界のスパコン予想では16本目、すなわち32時間後あたりで卵液が噴出されるはずだ」

卵液？

ああ、女性型の魔物、ワービーが膣から噴射していたあの液体のことですね。

卵細胞が増殖せず、失敗だとか言ってましたっけ。

「本当はオルガを倒したあの謎の力の研究もしたいのだが、時間的に無理だな」

「そうですね。しかし、卵細胞さえ手に入れられれば、セカンドを連れて行かれてもわれらの研究は続行出来ます。培養に成功すればセカンドの量産も夢ではありません。その時には」

「おお、あの謎の力をはじめ、セカンドの全てが解明されよう」

「頑張りましょう、主任！」

またいい感じになっていますが、つまりわたしのクローンを増産するってことですね。

魔の軍団計画のアクションプランは、どうやらこの方向で決まったようです。

「せんぱーい、ぼくらの仕事ってセカンドの卵子を取り出すことですよね。卵巣を手術で摘出すれば早いんじゃないですか？　なんでこんな面倒なことを？」

「ベスター。お前いくら新入りだからって、それ基本だよ。オリエンテーションで説明受けただろ」

「えっ、そうすか？　覚えてないっす」

「寝てたなお前。あのな、卵巣摘出なんて乱暴なことしたら卵細胞、セカンドの場合はまだ卵子にもなっていない卵原細胞だが、すぐに死んでしまうんだよ」

「え、そうなんすか」

「ああ、取り出した卵巣が死んで、体内で臓器が復活するんだ。部分リポップだ」

「あ、それ聞いたことあるっす」

「お前よく境界の選抜試験に合格したなあ。……コネか？」

「それ、プライバシーの侵害すよ」

「図星か。まあそんなわけで、魔族の場合、リポップとの関係で細胞の培養ってのはデリケートなんだ。魔の気配や魔自体の意識レベルとの調整が難しんだよ。唯一、魔自らが性的に絶頂して排出した生殖細胞はリポップと切り離して成長可能なんだ。だからこういう手間をかけるのさ」

「へえ、そうなんですか」

「じゃないと魔力を有する兵士を増産できないだろ。魔が本来持っていた生殖能力を復活させるともいえるな。双脚豚のように食肉以外に使えない生物を増産してもどうにもならんからな」

ああ、そうですよね。レギオンの核心は、魔族をいかに繁殖させるかってことなんですね。
指導員と新人さん、解説をありがとう。
リポップは1が1になるだけだから、それでは数が増やせないですものね……。

しかし、わたしのクローン兵団というのは不気味です。
恐ろしいです。
だいたい、そんなの強いんでしょうか。

いや、強いのか。少なくともオルガは倒しましたからね。

主任が言ってたように、わたしの不思議な力を研究開発すれば十分魔に対抗できる戦力になるかもしれません。

それに魔蓄器を移植した人間。
わたしの細胞と混合した魔蓄器なら、適合調整が成功するかもしれません。
魔の力を有しているけど、ほぼ人間の細胞ですからね。
拒絶反応が薄いと思われます。

悪魔人間（デビルマン）の誕生ですね。

それに、魔にわたしの細胞を移植すれば、人間化できるかもしれません。

こっちは人間悪魔（マンデビル）とでもいえばよいのでしょうか？

それにしても、さっき司政官に抱かれた時に『彼』呼びとか。

どうしてそんな気持ちになったのでしょう。
あの時は司政官が愛しくて、愛しくてたまりませんでした。
おかしなことです。これがメス堕ちということなのでしょうか。
快楽優先の魔の本能がわたしの感情を犯しているのでしょうか。

あっ。

またゴレムペニーが微妙なところを責めてきます。

あっ、いやっ。そんなとこ。ああん。

「うー、うー、うー」

口枷のせいで呻き声しか上げられません。

ただわたしは、拘束されたベッドの上でわずかに動く体を震わせながら、機械に犯されているだけでした。

「よし、2本目に交代」

え?

もう2時間経った?

意識を失っていたのかしら?

体中汗まみれです。

股間に液が溜まっているのが分かります。

「時折、意識が戻るな。もっと刺激を高めよう。ゴレムニードルをセットだ」

乳首とクリトリスを針が貫通しました。

「うぐーーーー！！！！」

突き刺さった針から電気刺激が送られてきます。びくびくんと、乳首が、クリトリスが、まるで別の生物のように震え踊ります。

あああああああああああああああああああああああああああああああーーーーーっ

ゴレムペニーが抜かれました。

「よし、3本目。10インチに変更」

また意識のないうちに2時間が経ったのですね。

本当にイキ狂いそうです。

より太く長い人工ちんぽで膣と直腸をゴリゴリ拡張されます。

ああ、もう、あああ、もう。

うあああああ！　イク、イクから！　本気でイクから！！

あああああああああああああああっ！

ああああああああああああああああああああああああああああああああ！！

わたしは快楽の海に沈み、超感覚すら失い、これが夢か現（うつつ）か、何もわからなくなりました。

誰か。

誰か。

誰か、助けて……。

第３４話　卵液噴出（前書き）

また間が空いてしまいました。
申し訳ありません。

第３４話　卵液噴出

「夜勤お疲れっす、先輩」
「ベスター、早いな」
「余裕っす。今なら朝ごはんに間に合うっしょ？　先輩、寮に奥さんも娘さんもいるんっすよね」
「ああ、学校に行きはじめたばかりの可愛い盛りでな。っておい、お前それ個人情報！」
「先輩もプライバシーの侵害したんでこれでおあいこっす。にしてもここ学校もあるんすか！　なんでもありっすね！」
「境界内は広いからな。ショッピングモールの隣に教室がある」
「へー、今度行ってみるっす」
「父兄じゃないのにやめとけ。不審者扱いされるぞ」
「文化祭とか運動会とかはないんすか？」
「まあ、それはあるが……」
「じゃあ、それで手を打ちやす」
「手を打つってなんだよ」
「まあまあ、早く帰ってあげてくださいよ。可愛いお子さんが待ってますよ」
「お、おお。ま、まあ、そりゃありがとな。じゃあちょっと早いが交代頼む。認識キーをスキャンして、引継ぎをタイムレコード」
「へい。これで当番交代っす」
「じゃ、よろしくな」
「へっへー、じゃあ今からセカちゃんの担当は俺っすね」
「セカちゃんって、ベスター、お前、その言い方、主任の前では絶対にするなよ。双脚豚農場送りになるぞ」
「え、親しみこめてんですけど、だめっすか？」
「人間に見えても実験体は物だ。感情を込めるな。精神を病むぞ」

「うーす、気をつけるっすー。で、セカちゃんの具合はどうっすか？」
「だからセカちゃんって……。俺の娘の情報といい、お前もしかして」
「うっ！　ロリコンじゃないっすよ！」
「誰も言ってないぞ（語るに落ちたな）」
「さ、さあて、セカちゃんの具合はどうかなあ。うっわー、えっぐいことになってますねえ」
「だから感情込めるなって……。おい、お前、その目の輝きは何だ」
「え？（キラキラ）」
「（うっわー、こいつ異常性癖持ちか！？）……お、俺は帰るぞ（娘を守らねば！！）」
「へーい、あとは任せてくださいっす（キラキラ）」

意識が飛んで、また戻って、また飛んで……。

技師たちの会話が薄っすらと聞こえてきました。

……どうやら、朝になったのですね。

いったいわたしはあれからどうしてしまったのでしょうか。

「セカちゃんここに来た時マジ天使だったのになー。黒髪は珍しいし。爆乳化もどうなんよと思ったっすっけど、あーあ、乳首もクリもニードル刺さったままぷっくり腫れあがってまあ。あああ、もったいない。」

そういえば、ラリル村でもここでも真っ黒の髪の人はいませんね……。

「ゴレムペニー10インチまで呑み込んでるし。これ、子宮破ってないすかね？　まあ先輩がそんなへまはしないか……。まんこはかっぽり丸い穴になってるっし。小陰唇も伸びきって薄く取り巻いてるだけすね。でもこれだけ手ひどくやられても色はきれいなピンクのままなのはさすが5歳まんこ。あ、もう明日で6歳か」

この男、独り言が癖なのかしら？

「ケツのは12インチっすね。ああ、先輩、夜用は吸引ドレーン付きに代えてたんすね。うんこは吸いだされて今は空になってるかあ。おしっこはカテーテルで導尿なうっすね。パックにはまだ余裕があるっすね。ふむふむ。きれいな黄金色っす」

ゴレムペニーにバキューム機能も追加していたのですね。し尿処理していただけるのは助かります。もううんこを食べたくはないですから。

よく吐かなかったものです。吐いてもまたそれを食べさせられたでしょうが。

「にしても目隠しと口枷は邪魔っすねえ。セカちゃんのせっかくのイキ顔が見れないっす。しかしさすがに取るわけにもいかないしなあ……」

声の位置が変わっていきます。この男は、わたしの回りをぐるぐる回っているのです。

しげしげと観察しながら。

「まあいいや、確認終了！　っと。じゃあ朝のメニュー、まずは膣ペニー2本差し！　いってみよー！　きしししっ。これがやりたく

てわざわざ早起きしたんっすからね！　んじゃ、レッツ・ゴー！」

男の声とともに膣に挿入されていた太くて長い人工ペニスがずるずる後退していきます。

あっ、そんな。長い！　ストローク長い！　膣の粘膜が持っていかれるから！　ごっそり持っていかれるから！

あああああっ！

また軽くイッてしまいました。一体昨日から何度気をやっているのでしょうか。

記憶が断片的にしかありません。

おおむね失神状態なのでしょう。たまに今みたいに意識が帰ってくるのです。

ちゅぽんと水気の多い音を立ててゴレムペニーが膣穴から出ていきました。

肛門にはまだ挿入されたままですが、少し楽になりました。

膣が閉じないのでしょう。風でスースーします。

「んじゃ、ダブル挿入っと。えーと、ふむふむ。さすがに直径はダウンして2インチ径っすね。長さは１０インチのままでいいと。ほい、セット・オン！」

楽になったと思ったのもつかの間、さっきよりも若干細めのゴレムペニーが1本膣に侵入してきました。

穴が開いたままなのでさしたる抵抗もなく奥まで入ってきます。
ふ、深い……。

「最深部に到達したら、ちょっと持ち上げる感じにするっす。はい、ムーブ」

ブブブと微妙に震動しながら、ペニーがぐいと持ち上がり、腰が浮きそうになります。しかし、体はベッドに固定されているので、穴だけが縦長の楕円に開きます。

「おーおーセカちゃん。こんなにまんこ穴伸びちゃって。これ、口より開くんじゃないっすか？　５歳？　６歳？　どっちでもいいけど、幼女でこんなまんこしてるのセカちゃんくらいっすよ。さすが人間終了してるだけのことはあるっすね。きしし。さて、２本目、ゴーっす！」

膣の隙間に新たなペニーがあてがわれます。

え、ちょっと、それは、無理では！？

ワービーが卵液を吐いた時にやられていたダブルペニーファック。

そんな。わたしの大事な性器が、使い物にならなくなっちゃいます！

ぐずずず。

わたしの思いもむなしく、２本目のゴレムペニーは膣をこじ開けながらめり込んできます。

おおお。おごごおおおお。おごおおおおごおごごおおおおおおおっ！！！

めりめりめりめり。

膣が、膣が、裂けるぅうぅっ！

あぎゃあああああああはははあああああ！！！

見えない目の奥に火花が飛びました。激痛なのか快感なのか、それもわからないくらいの激しい刺激に、わたしの脳が焼け切れてしまいました。

……。

……。

……。

はっ！

再び意識が戻ったときに最初に感じたのは、まるで下半身がお餅になって杵で打たれているような、とろけたお腹全部をぐりごり掻き回される感覚でした。しかしそれは痛みというよりも、快感が勝っていました。

気がつけば、膣に2本、直腸に2本。計4本のゴレムペニーで責められていました。

あれからまたどのくらい時間が経ったのでしょう。わたしの股間はぬるぬるした愛液と腸液のプールになっています。前後に2本ずつ差し込まれた人工ちんぽは前後にピストンするだけでなく、互いにらせん状に回転したり、大きく穴を広げたり、立体的な刺激を休みなく与えてきます。

どうやら、わたしのまんこもケツ穴も裂けることなく、ゴレムペニーの蹂躙に対応する柔軟性を発揮しているようです。

膣と肛門が裂けて繋がっていたらどうしようかと思いましたが、そんな惨事にはなっていないようです。よかった。

いや、よくないです。これ、ぎもぢいいいいいい！

ぎもちいいいいよおおおお！

意識が戻ったせいで快感が一気に押し寄せてきました。失神から回復するたびに快感に対する感受性が一段上がっていってるように思えます。

強烈な刺激にも、そう簡単には気を失わなくなっていってます。

性のレベルアップ？

って冷静に考えてる場合じゃないです。

おごおおおごおごごおおおおおおっ！

ぞんなああ！　はげじい、はげじずぎるぅ！

あげべべべべべべえええええぇぇぇ！！！

「お、快感曲線がしばらく踊り場だったけど、また上がりだしたっすね。セカちゃんなかなか底が見えない逸材っすね。もちょっと刺激を足しちゃってみるすよ！」

え、なに？

はぎゃああっ。

イタイイタイイタイ！　ひぎいいいいっ！

乳首とクリトリスに新たなニードルをぶすりと刺されました。前の針と十字になっています。

そして微妙に電気刺激の位相をずらし、刺激が増幅されていきます。

あああっ。

前後ダブルペニーでゴリゴリするのはそのままなんて、ひどいです。そんなこと、そんなことされたら、また、わたしは。

あああああああっ。

あああああああああああああっ！！

あぎゃあああああああああはははあああああ！！！！

イッくーーーっ！

「おい、新入り、ちょっと責めすぎじゃないか」

「！！　お、おは、オハヨウゴザイマス主任！」
「声が裏返ってるぞ。ええと、ベスターだったか。マニュアルでは調教パラメーターに幅を持たせているが、ニードルの追加はなかったはずだが」
「え、そう、すか？　オプションの範囲じゃないすかね。工程表読み間違えてたっすか？」
「ふむ。まあここ数日ベテランたちの疲労がひどいんで、休息優先にしたのは俺だ。新人一人での担当の時間帯が出来てしまった管理自体に問題があるともいえる。モニターではたしかにメス堕ちは進んでいるし、今回は不問に付すが、新人といえど担当する以上は時間帯責任者だ。今後このような勝手をしないようにな！」
「はいっ、申し訳ありませんっす！」
「すは要らない」
「はい、以後気をつけますっす！」
「ぷっ。お前面白い奴だな。で、どうか？　そろそろ出そうか？」
「快感曲線は今さっき踊り場を超えたところですから、まだもう少しっすねえ。もう1段階か2段階、メスイキランクを上げる必要があると思いますっす」
「そうか、やはりスパコン予想と同じか。刺激に対する耐性も上がっているようだな」
「はい。それでニードル追加してみたっす。ところでスパコンってどういう意味っすか？」
「意味は知らん。伝承ではそういう名前らしい。しかしそうか。なるほどな。変化は大事だ。単調な刺激には慣れやすいからな。ベスターの言うように、少し工程を追加してみるのも手かもな」
「そうそう、っす」
「調子に乗るな。自分勝手にやってはいかん。そろそろ日勤の出勤時間だから、技師の数が揃ったら調教プログラムの追加変更を検討しよう。お前も参加するか？」
「喜んで！」

居酒屋か！

◇◇◇

ゴレムアームによるくすぐり責め。
火魔法による炙り責め。
ちなみに火魔法マスター者は低温で安定した炎を生み出せます。
エルザさんが以前ミンチの生肉を焼いたときめっちゃ雑だったのは、まだマスター出来てないからだったようです。

乳房締め上げバンテージ責め。
全身針責め。
舌引き出し責め。
爪に爪楊枝責め。
鼻の穴耳の穴拡張責め。
全身淫語責め。
魔物の精液一気飲み責め。
乳首伸ばし責め。
クリトリスゴレム回転歯ブラシ責め。
小陰唇引き伸ばし責め。
膣肛門ゴレム触手責め。

……。

快楽なのか拷問なのか、はたまたなにかの意味があるのかよくわからない責めもありますが、追加刺激はそれなりの、いえ、正直に言えば相当な快感を生み、自分でも（もしかしてドM？）と若干引くぐらいの快楽の波に溺れました。

失神に次ぐ失神。

今はいつなのでしょうか。もはやはっきりした意識が戻ることがほとんどなくなった頃。

「来るぞ！　採取器セット！」

「あああああああああああああああああああああああああああああああ！！！！」

わたしは、とうとう膣から大量の白い粘液を噴出しました。

信じられないくらいの快感とともに。

第３５話　賢者（前書き）

ハロウィン進行で（なんのこっちゃ）、今日だけ２０時公開としました。

なお、ハロウィン企画でこのＴＳ勇者のスピンオフというか番外編というか、短編小説を別にアップしています。作者マイページから、シリーズ管理していますのでシリーズ「ＴＳ勇者」から『大魔王のドキドキハロウィン』にアクセスください。

なお、別ＳＳなので、ブクマやＰＴもいただけると助かります。

一応ハロウィン２０１９企画なので。てへへ。

第３５話　賢者

……。

目を覚ますと、独房のベッドでした。

気絶している間にここへ戻されたようです。

裸ではなく、いつもの貫頭衣のような病院服を着ていました。目隠しも猿轡もありません。

首枷は外されていませんが。

手足には縛られた跡ややけどの跡が……、あれ？　ない。

服をめくってみると、爆乳はそのままだったものの（これは服をめくる前にわかっていましたが）乳首に穴が開いていたり長くなっていたりということはなく、元に戻っていました。

あわてて股間に手をやると、以前のとおり貝のように閉じていました。よかったガバガバになってなくて。

しかし、では相当の時間が経っているのでしょうか？

それとも、魔法で治してもらった？　いや、その線はないでしょう。わざわざメスイキさせやすいように肉体開発したのに、また元に戻す意味はないでしょうから。

やはり、時間がかなり経ったと考えた方がよさそうです。

儀式とやらはどうなったのでしょうか？

誰もいないし、放置されているようなので、この機会に事態を整理してみましょう。ずっと考えながら走ってるみたいな状況でした。

卵液を噴出した点、魔法とは違う謎の力で魔物オルガを倒した点、魔蓄器を浄化（？）し取り込んだ点などからみて、わたしが普通の人間ではないことは間違いないでしょう。残念ですが。

ですが、魔族かどうかはわかりません。むしろ、魔族と相反する存在である状況証拠が多いように思います。

お母様はどうでしょう？　お母様には魔核がありました。ドッチャが色がおかしいという趣旨の発言をしていましたが、魔核を持つ以上魔族と考えていいでしょう。

わたしがこれまでお母様に育てていただいたのは間違いないです。わたしの記憶だけじゃなくてサスナさんやリーさんもそのことは知っていましたから、親子関係であったのは客観的事実です。

が、わたしがお母様の実の子かどうかは今では疑問に思えてきました。何より全く似ていない。そのことは以前から自覚していましたが……。大きくなればお母様のように髪が金色になるかもと夢を見ていたこともありました。そんなことは、多分、ありえないですよね。

お母様が魔族で、わたしが実の子ではないとすると、大きな疑問が湧きます。お母様はなぜ私を育てたのでしょう？　そして私は本当は誰の子どもなのでしょう？

いえ、わたしは何者なんでしょう？

キーワードの一つは、賢者による約束の日の『儀式』。

もう一つは、ドッチャが言う『未来のわたしが世界を滅ぼす』。
そして三番目は、かつて第八境界（ここ）を破壊した『魔人と赤ん坊』。

爆乳にされ、処女を奪われ、性の快楽をこれでもかと刷り込まれ、魔物軍団の生体材料（マテリアル）にされましたが、それでも、この大きな疑問の前には枝葉、傍系、脇道の話でしかありません。

司政官や主任には女として散々な目にあわされましたが、お母様が吐き捨てるように言った『地獄が待っている』とはちょっとイメージが合いません。

もっと残酷で、過酷ななにか……。

それが、これから、始まる？　のでしょうか……。

突如、振動が伝わってきました。
さほど大きくありませんが、遠くで爆発音も聞こえます。

（なに？）

慌てて身を起こすと、今度は壁や天井が震えるほどの大きな振動と轟音が鳴りました。
ベッドと壁の隙間に潜り込みます。気休めですが、天井崩落の直撃を受けるよりはマシです。

（境界内で事故？）

超感覚はなぜか機能しませんでした。通常の感覚が生きている状態では発動しないのかもしれません。
なにが起こっているのかわからないまま、音と震動はしばらく続

きましたが、電源が落ちたり煙が入ってくるようなことはなく、やがてまた静かになりました。

（なんだったのかしら、今のは？）

危険がまだあるようなら、誰かがここに来るでしょう。なにしろわたしは実験棟の貴重な生体材料なのですから。

考えが中断されてしまいました。

わたしはまたベッドに寝転び、思索の続きを始めようとしました。

（足音……。エルザさんたちのじゃない。もっと大勢？）

「これか。セカンドは」

「はい、賢者様」

格子扉の前に一団が現れ、先頭の青い法衣の男がわたしを見てそう確認すると、隣の濃い藍色の法衣の司政官が答えました。

まあ、形式的な確認でしょう。

賢者。

儀式を行うもの。

わたしのことは当然先刻ご承知のはずです。

「で、お前たちの材料は採れたのか？」

「はい、研究には十分な量をいただきました」

「それは重畳。では、さっそく儀式を始める。あとわずかで満月だ。魔物どものせいで若干準備が遅れてしまったが、何とか間に合った

な」

儀式はまだ？
では、この回復は一体？
儀式用に治癒を施されたということでしょうか？

「拘束（バインド）を」
「オレがやろう」
「え、賢者様が御自ら、ですか？」
「コード９９９は未知の力を持っているからな。最も強い魔法で縛るのが当然だろ。あの場所に連れて行くんだし」
「恐れ入ります」

賢者はその役職名と反し、ざっくばらんな性格のようでした。
さっきの騒ぎは、魔族の襲来だったのですね。撃退したということなのでしょう。
しかし、あの爆発音と振動は、この第八境界の大きさを考えると、かなりの戦闘だったのではないでしょうか？

「正と義を執行するならばその名に懸け慈悲を捨てよ」

賢者の拘束魔法で両腕をひとまとめにされました。魔法の鎖の端は賢者自身が持っています。

格子戸が開かれ、別の青い法衣の男が入ってき、わたしを外に連れ出しました。
同時に魔法の鎖が縮み、結果的に賢者のすぐ横に並ばされました。

一団のうち、濃い藍色の法衣、つまり境界のプロパーメンバーが３歩ほど下がりました。司政官も同様です。

わたしの周りには賢者を含め、６人の青い法衣の男たち。

「我が望む地。我が望む刻。時空の繋がりを一たび解き此処と結び現れよ」

転移魔法（テレポーテーション）！

しかも拘束魔法を起動したままで！？

さすがは賢者と呼ばれるだけのことはあります。時空系の魔法を入れ子（ネスト）出来るとは。

周囲に光が集まり、一瞬真っ白になった後、そこは青や赤の光が点滅する大きな部屋でした。

「ふむ。神に最も近い場所にしては、相変わらず殺風景だな。境界の連中も大聖会程度には飾ればいいのによ」

「賢者様。それは唯一神に対する侮辱と取られかねませんよ。そもそも聖遺物は可能な限り復元にとどめみだりに加工ならじとのご指示ですし。それにコード９９９も聞いております」

「かまわんさ。こいつが儀式の中心なんだからな」

ん？　こんなやり取り前にもあったような。

しかし、これは。

赤と青の光は、整然と並ぶ黒い立方体それぞれにつけられたＬＥＤのサインでした。

ご丁寧にロゴマークまで入ったその立体の列は、どう見ても。

「スーパーコンピューター……」

主任が言ってたのはこれでしょうか。

「うん、見ただけでこれが何か分かるのか。覚醒前でも鍵は鍵ということか。だが、これは『スパコン』ではない。あれは用途を限定した小型版だ。これは神が『量子アレイコンピュータ』と示されたものだ」

「なんですかそれ？　ええと、配列だから、量子コンピューターを並べたもの？　つまり量子演算を用いたスパコン？」

「お前が、何を言ってるのかわからん。『スパコン』同様神代語で、その言葉自体がなんらの意味をもつのかは今では不明だ。が、これが何で、どう使うのかは知らされている」

スマホの演算や通信の仕組み自体を知らなくてもネットは出来る、みたいなものですね。

「神の御意思であり、大いなる過去の知恵の宝庫でもある『量子アレイコンピューター』は、聖遺物の頂点であり、最も神に近いとされている。時にご信託も下される」

なるほど。聖遺物が稼働していた時代からの記録が残されているのですね。

しかも人工知能のサジェスト付き。

まあ、当たり前ですよね。今時ＡＩは標準仕様でしょう。ましてやスパコンならば。

ん？　今時？

「そして『量子アレイコンピューター』は語られた。ごく近い将来、

魔を率いる『大魔王』が出現すると。オレたちはその対策を練った。そのことは既に知ってるだろ」

はい、司政官に聞きました。レギオンや聖遺物、そして勇者システム……。

そういえば、勇者は異世界召喚術によると言ってましたよね。

そしてそれを進めているのは大聖会の主要メンバー。

目の前にいるのは、そのメンバーである賢者。

「大魔王に対するもっとも根本的で根源的な対策、勇者召喚がオレたちの目的だ。召喚システム（儀式）は大聖会にあるもう一つの『量子アレイコンピューター』によってシステム設計（預言）が示された。だが、それには、オレたちが持っていないあるものが必要だった」

あるもの？

それが、わたし？

それが、儀式？

「未来において大魔王と勇者に連なるもの。最初は何のことか全くわからなかったよ。御神託の解読には大層時間がかかった。一時は無理とも思われた」

なるほど、だから勇者以外のレギオンや聖遺物など別の作戦も並行して実行せざるを得なかったのですね。

神託がついに解けないままに終わる、または解けたとしても大魔王襲来に間に合わない場合を想定した次善の策。

「大魔王と勇者は表裏一体、おなじ存在だったんだ」

は？

「長い間解けなかったのは、あまりにも常軌を逸脱していてそれが正しい認識だと信じられなかったからだ。最初に解読した時に、そんな馬鹿なことが、と捨てられた解釈。それが結局正しかったんだよ。そして、『そのもの』は、まさに大魔王と勇者が出会い、雌雄を決した時点から過去へと時間を遡り現れるのだと。因果が反転するのだと」

因果律の反転。

原因と結果の逆転……。

そうか、未来の光が、過去の電子と陽電子に分かれる。反転すれば、現在の電子と陽電子が、未来で対消滅して光に変わる。

勇者が大魔王を倒せる存在であるのは、まさに反物質の対消滅と同じ。

未来における勇者と大魔王の邂逅から時間を遡り、現在の二つの存在に分かれる。一つは将来大魔王になるものとして。もう一つは勇者になるものとして。

しかし、そのことと、異世界からの召喚とはどう繋がるのでしょうか？

「そして、大魔王も、勇者も異世界から現れる。その出口、あるいは異世界から誘導する灯台のようなもの。それが必要なのだ」

ビーコン！
あるいはターゲットマーカー！
異世界にこの世界の座標を示す灯台ですね！

「そしてそれもまた、御神託に記されていた。三人の魔人に育てられし三人の子ども。そのうち一人が大魔王に、もう一人が勇者に必要な鍵なのだと。三人の子どもは、時を遡ることが出来る三人の魔人とともに現れる」

時間を遡行できる魔人！

「その鍵が、わたしなのですか！？」
「いや、確率は三分の一だ。お前が勇者の鍵なのか。大魔王の鍵なのか。はたまた、外れのもう一人なのか」

子どもは三人。魔人に育てられた子ども。おそらく一人目はかつてここで生まれたという子ども……ファースト。二人目がわたし、セカンド。そしてまだ知らぬもう一人、サードがいる！？

しかし、なぜ三人なのでしょう。賢者は外れと言いますが、何か意味があるのでは。

ああ、そうか、ドッチャが言っていた、未来のわたしが世界を滅ぼすというは、三分の一で大魔王を召喚してしまうからなのですね。ドッチャ自身も儀式の詳細は知らないようでしたから、その部分だけを聞いて誤解したのですね。

「それは、召喚システムに組み込んでみないと正直わからん。御神託にはもっと長い記述があるのだが、すべては解読出来なかったのだ。あの子（ファースト）どもを逃がしたのは残念だった。あの頃はまだ鍵につい

ての記述すら解けていなかった。あの時このことが既にわかっていれば、絶対に逃がすことはなかった。ならば、オレたちの勝ちだったのに。まあ、あの事故があったからこそ、大魔王と勇者が同じ存在であることが確信出来たんだがな」

ファーストとわたしの二人を確保していれば、少なくともどちらかは魔王の鍵か勇者の鍵ですし、その両方が手に入る場合もあります。

どの場合でも魔王の鍵を無力化、あるいは勇者の召喚が出来るから、人間の勝ちという意味ですね。

最悪のケースでは勇者が大魔王に負けておしまいも考えられますが、勇者が勝てないような大魔王なら最初から人間側に希望はありません。このケースは考えから除外、ということでしょう。

「まあそれは仕方がない。オレたちには預言の三魔人と違って時間を戻す能力はないからな。済んだことを悔やんでも意味はない」

ポジティブですね。さすが賢者です。

しかし、三人の子どもと三人の魔人の関係は結局何なのでしょう？ともに未来からやってきたのでしょうか？

「説明は以上だ。わかったら、その機械に入れ。お前は分解され、召喚システムの一部となる」

えええええ！！！！

第３６話　勇者復活

「ちょっと待ってください！　分解されたら、死んじゃうじゃないですか！」
「いや、死ぬことはない。……はずだ」
え？
「量子化されて配列（アレイ）の一部となるだけだ。大丈夫、痛くないから！　ちょっと不確定になるだけだから！」
賢者はどこまでわかっているのでしょうか？　冗談のように言っていますが、量子化されたら私の存在は未確定状態で発散し続けるはずです。少なくともこの確定したマクロな世界とのかかわりがなくなってしまうでしょう。
この世から消える。それは、死と同じでは？
「いやです！　絶対にいや！」
「まあそうだよなあ。でも、お前に選択権はない。残念だが、納得しなくても、力ずくで儀式は行う。量子分解装置、起動！」
「起動シークエンス、全回路接続……。おわっ！」
ごごごごごーーーんんん。
飼育室奥で聞こえたのとは比べ物にならないくらいの轟音と震動が襲いました。
この部屋の配置がどうなっているのかわかりませんが、境界の表

面に近い場所なのでしょうか。

「魔族の攻撃が再開されました！」

「司政官は何をしているか！」

「現在戦闘艦橋に急速移動中ですが、反撃が遅れます！」

「くそっ、さっきので終わりだと思ったが、しぶといな！　ここでも火器管制が出来るんじゃなかったか！？」

「アレイの実行モードを切替えれば可能ですが、そうするとセカンドの取り込みが……」

「今は外敵の殲滅が先だ。いずれにしろこのままでは儀式が行えん！」

「了解、モード切替。権限００３『賢者』。認証通りました！　戦術コントロールを得ます。モニター展開！」

空中にワイドスクリーンが広がりました。月明かりですが、モニター感度を増光してあるのでしょう。やや粒子の粗い映像ですが、境界の外の様子がパノラミックに映りました。

なんですか、これは。

空中を埋め尽くす無数の影。そして森を、荒れ地を、山道を進軍してくる大小の影。

辺りは一面の魔族で囲まれていました。そして何匹かいる巨大な魔物から、炎や電撃などの攻撃が繰り返されています。いや、小さな魔物も岩や大木を投擲したり、境界の壁を殴ったり……。

魔族が、境界を一致団結して襲っている！？

社会性がないはずの魔族が！？

「主砲１番左１５度２番右１５度上下角０度！　その後左右０度まで掃射！　主砲発射！」

どっしゅうるるるるーーーーーーーんんん。

賢者の命令と共に、目がくらむような光が境界の上部から放たれました。モニターは一瞬白一色になりましたが、感度を急激に落としたのでしょう。細長いビームが左右に射ち込まれ、それが数秒続き、左右から正面まで薙ぎ払いました。

「敵２割消失！」
「残存魔族、逃げません！」
「攻撃再開！」
「主砲再充填！　いそげっ！」

感度の落ちたモニターでも白く輝く満月。

それが、最も高く、真正面に……。

かちり。

一瞬で、記憶が噛みあいました。

わたし……。ミヤビ……。

マサタカ……。ぼく……。

……！　あれからどうなった！？

お母様、じゃない。アズフル、あれは間違いなくフルだ！

ちょっと大人っぽくなっていたが、ミヤビが6歳。あれから6年経っているのならあの姿も合致する。
しかしなぜ魔族になった!?

そもそも勇者召喚システムがまだ完成してないってどういうことだ!?

そうだ、過去へ遡る魔人の話。
未来で大魔王と勇者が戦うと言っていたな。

ということは、ここは、過去!?
大魔王も勇者も、まだいない過去に来ているのか!?

しかし今、この第八境界を襲っている魔族の群れ。いや、この数、この統率のとれた攻撃。これはもはや魔族軍。
大魔王はすでに出現しているということじゃないのか!?

(鑑定(ジャッジ)、ステータス!)

ぼくは自分のステータス画面を呼び出した。ネーム：ミヤビ　クラス：???
なんじゃこりゃ。マスクされていて読めない。『勇者』じゃないのか?

各数値は軒並み凡人以下に低下している。まあ6歳の女の子の体だから体力は仕方ないが、攻撃力や防御力などの基礎ステがあまりに低い。低レベル魔法で一撃死だ。
しかも、勇者のユニークスキルもベーススキルも大半が使えない。スキル一覧表示でご丁寧に赤の二重線で消してある。殲滅(エクスタミネータ)も、学習(スタディ)も、不可視(インビジブル)も、覇道(ヘゲモニー)も。

かろうじて鑑定（ジャッジ）が橙、再生（リブロ）が赤文字で表示されている。これはパワーダウンしているが使えるということだ。まだ新米勇者だったころ、力を使い過ぎてよくこんな表示になった。

体が短時間で復元されたのは再生がわずかながら効いているからか。が、完全じゃないから魔蓄器は排除出来ず取り込んだようになったんだな。なるほど。

ファーストはジャーガなのか？　ジャーガもぼく同様転生したということなんだろうか？

それなら境界を破壊したのもわからなくもない。ぼくは自分の記憶を取り戻すのに6年かかった。ジャーガは半年で取り戻して脱出した。そのジャーガに率いられているのが今ここを襲っている魔族軍。

説明はつく。

しかし、3人目（サード）は誰だ？

そもそもフルがなぜぼくを産んだ？

いや、産んでないかもしれないが、なぜぼくはフルに育てられた？

アズフルがフルなら、ラヴィとアリスはどうなった？

ファーストを産んだ美形の母親……。

3人……。

まさか？　そういうことか？

こんなところで捕まってるわけには！　しかし、こんな拘束魔法が解けないなんて！

「主砲再充填完了！」

「１番左２０度２番右３０度、上下角マイナス２度、主砲発射！」

「発射――――！」

どっしゅうるるるーーーーーーんんん。

またモニターが白く焼け、すぐに輝度が落ちた。

（やっぱこれ、アニメに出てくる宇宙戦艦だよなあ。主砲、ビームキャノンだし）

『賢者様、戦闘艦橋に到着しました。火器管制をこちらへ』

「司政官、遅いぞ。以後は頼んだ」

『おまかせを』

「よし、モード再切替。外敵を排除出来次第、儀式再開だ」

「了解しました。アレイモード変更。権限００３『賢者』認証……」

（鑑定（ジャッジ）！）

「認証通りました。モード再変更完了しました」

「うむ。後は司政官からの報告を待つ。各自儀式の持ち場に戻れ」

「了解です」

ダメ元で試してみたが、橙色状態の鑑定でもなんとかなるもんだな。スパコンのパスワードゲットだぜ！

後は魔族の攻撃が収まり、量子化装置が起動するまではすること

がない。
とりあえずはおとなしくしながら、考えをまとめよう。
ここにつれてこられる前の続きだ。今はマサタカの記憶も戻っているし。

まず、自分のことだ。ぼくは勇者マサタカ。そして日本人の新妻雅貴。その記憶は戻っている。というより、ミヤビの時もぼくはぼくだった。
自分が6歳の女の子と思い込んでいたので、その設定にそって思考していただけ……。のはずだ。

あれ？

ぼく？　わたし？

また生をやり直したこの6年間の経験は、ぼく……、勇者マサタカにはない。
それにステータスの名前は『マサタカ』ではなく『ミヤビ』だった。

記憶があるだけで、今のぼくは勇者マサタカではない？　ミヤビという別個体なのか？

しかし、自分が別人になったという感覚はない。新妻雅貴、勇者マサタカ、ラリル村のミヤビ。それはすべてぼくだ。心は一つだ。

ミヤビの時はまだマサタカとしての記憶が戻っていなかったので、現代知識が不思議な言葉、謎のイメージとして浮かんでいた。
だが、逆に言えばミヤビの時からやっぱりマサタカだったということだ。ちょっと思い出しにくかっただけで。

ん……。てことは、司政官に処女を奪われて彼とか言っちゃたり、メスイキしたのも、あれはぼく、マサタカの魂？

ぼく、ＴＳ願望あったのかなあ？　メロメロにされちゃったよ。

フルたちとのセックスよりも気持ちよかった……んじゃないか？

イキ狂うなんて、男の時はなかったぞ。

しかも、今もなお爆乳幼女だ。再生が完全になればマサタカに戻れるような気がするけど、現状はこの体を使って何とかするしかない。

何とかって？　なにを？

まずは、フル、ラヴィ、アリスの三人だ。フルはドッチャに斬られたが、魔核が残っている。

魔に落ちた理由も調べたいが、魔に属するものなら魔核があれば再生可能だろう。そもそもフルは蘇生魔法持ちだ。もしかしたら、やられる前にジャーガ戦の時のような遅延実行型の蘇生魔法を仕込んでいたかもしれない。

そうであれば、今頃は既に復活していることも十分あり得る。

そしてアリスとラヴィ。どちらかがファーストの母親の線は濃厚だ。フルが魔人化したのなら、二人も魔人になっている可能性が高い。理由はまだわからないけど。

そして残りの一人がサードの母親。

これで子どもが三人の理由もつく。

そしてファーストもサードもぼく、勇者マサタカの記憶を持っているのではないか？

自分が三人に分裂するって意味が分からないけど、ここは魔と魔法の世界だ。時を遡れる。勇者が大魔王になる。そんなことがあるのなら、自分が分裂することだってあるだろう。

そうだ、思い出せ。ジャーガは日本のぼくをよく知っていた。勇者として仲間と旅をしていたことも。

そして、あの新古今集の歌。

ジャーガは、ぼくじゃないのか？

ぼく、イコールファースト、イコールジャーガ！

分裂し、時間を遡り、大魔王と化した勇者。

なんのために！？

『わしと組め。世界を滅ぼそう。このくそったれの世界をな！』

世界への復讐か！

第３７話　世界線を超えて

「賢者！　あなたの知らない勇者と大魔王の情報を教える！　この拘束魔法（バインド）を解いてくれ！」

ぼくは叫んだ。

既に勇者はここにいる。時を遡って。

ぼくが勇者だ。

そして、ぼくと同等なあと二人。

ファーストがこの境界で生まれたのが１０年前と司政官が言っていた。

ぼく、……ミヤビが誕生したのが６年前。

サードがすでに生まれているのか、まだなのかはわからないが、必ず出現する。

「なんだ？　口調が急に変わったな、セカンド。どういうことだ？」

「思い出したんだ。ぼくが、あなたたちが異世界から召喚しようとしている勇者だったことを！」

「なに？　……そうか、満月が既に南中しているな。御神託が導いた今夜この日は、そういうことだったのか？」

「今ぼくの記憶が復活したのはそのとおりだ。御神託がどうのってのは分からないけど……」

「ふむ、すると鍵じゃなく、勇者そのものの覚醒が、御神託の真の意味だったのかもしれんな」

「賢者様、大聖会の聖なる解析をそんなあっさりと否定されては……」

「かまわん。ひとまずは話を聞こう。お前らは黙っていろよ。オレが責任を持つ」

「ありがとう、賢者。大魔王ジャーガ……、アャジャーガ・ジャギャアージャと、ぼく、勇者マサタカについての情報だ。ジャーガは既に覚醒し、外の魔族を率いている。その正体はおそらくここを10年前に破壊したファーストだろう」

「むう。大魔王の真名か。よしわかった、拘束を解く」

「賢者様！　それは！」

「黙っていろって言ったろ！　こいつは大魔王の真名を知っている。それだけでも大した価値だ。よってオレの命においてオレ自身に許可する」

拘束魔法が解けた。ぼくは腕をさすりながら、賢者のそばに寄る。

「ありがとう、信用してくれて」

「ああ、勘違いするな。まだ信じたわけじゃない。いつでもお前を拘束しなおせるし、首枷はそのままだぞ」

「それでもいいさ。ところで外の魔族はいいのか？」

「大魔王ジャーガとやらが前面に出てくればともかく、今この周囲にいるのはせいぜいクラス3、4ってとこだ。境界の外壁は貫けんよ。数が多いから時間が掛かっているだけで、問題はない」

「エネルギー切れはしないのか？」

「まさか。聖遺物の動力が枯渇するとか、ありえんだろう」

そうなのか？

結構アニメだとエネルギー切れでピンチになっていたような気がするけどな、超弩級宇宙戦艦。

まあ、あの主砲のビームはぼくの殲滅の掃射（エクスターミネイター）の何十分の1の威力しかなさそうだし。それほどの消費でもないか。

もしかしたら既に残存エネルギーが枯渇していて出力が抑えられているのかもしれないが。

「で、どういうことだ。その情報とは」
「まず聞きたい。今は何年なんだ？」
「突然だな、セカンド。いや、そうか、未来から来て今覚醒したのなら、その確認は大事か」
「ぼくの、いや、ミヤビの……。どちらも同じか。まあいいや、ぼくの村ではそもそも暦を記したものがなかったんだ」
「ああ、どこでもない村だったな、セカンドの出身は。今は大聖暦２６１９年だ」
「そうか。ジャーガを倒した……、倒すのは大聖暦２６２９年だ」
「ふむ、ちょうど１０年後か。そして１０年前にファーストが現れた。これに何か意味があるのか？」

ジャーガが倒されるのが１０年後。
サードが現れるのが、その時？

いや、逆か。

サードは時を遡らなかった。つまり遡り０年。
遡り１０年がぼく。
遡り２０年がファースト。
なら１０年ごとになる。どういう理由かはわからないが、バランスはいいように思える。

「さあ、それはわからない」

まあ、憶測を話すのはやめておこう。

「ジャーガは、以前の勇者が大魔王に変化したものだ」
「勇者と大魔王が裏と表なのは、さっきオレが話したことじゃない

か」
「違う。裏と表どころじゃない。同一人物なんだ。勇者はやがて大魔王となる。そう言われて、ぼくも一度は殺された」
「誰に？」
「ぼくが救った世界自身にだ。三国、アリアガルド法国、タランジ王国、ガーランド帝国に」
「ふむ。大聖会も噛んでいたわけか。大魔王と勇者が同一であることを知っておきながら召喚したのか。なるほど。そういうことか」

え？
ここでいきなり納得したの？

「それは、お前が勇者であり大魔王ということだな」
「え、いや、それはジャーガの話で」
「お前の言っていることはそういうことだ。未来で召喚された勇者マサタカ。死んで過去に戻り、大魔王ジャーガになる。そしてまた未来で勇者マサタカに倒される。勇者過去に跳ぶ。大魔王になる……。一人芝居の永久ループだ」
「いや、それはちょっと違う。ぼくはどうやら3つに分裂した。確かにそのうちの一人は大魔王になるのだろう。というより、既になっているんだろう。外の魔族を率いているのがその大魔王だ」
「ファーストはお前の分身だが、大魔王ジャーガと化した。お前、セカンドはこれから勇者マサタカになる、と言うのか」
「そうだ。ぼくは今は勇者の力が使えないが、元のスキルの一部は残っている。ぼくが勇者になる。鍵じゃなく、勇者そのものに」
「なるほど。となると勇者召喚システムはもう要らないということだな」
「そうなるな」

あれ？

そうなると勇者召喚そのものが出来ない？
ということはぼくはこの世界に来れない？

これは、タイムパラドクス！？

しかし、時間線が異なるなら……。

「ふむ。過去に跳んだ時点で、その過去はその未来の過去ではないのかもしれない。なら、そんなこともあり得るか。そして未来で大魔王になる危険がありながら、勇者を召喚せざるを得ないところまで追い込まれていたのか、１０年後の世界は。もしかして、その未来を別の世界に押し付けることまで織り込み済みだった？　であれば、なかなか腹黒い奴らだなあ」

さすが賢者。
これだけの情報で世界線の移動に思い至るとは。
この世界で量子論はまだ確立されてなさそうなのに。
量子アレイの意味も分かっていなかったのに。

タイムトラベル物の親殺しのパラドクスは有名だが、いくつか矛盾を解決する方法があるなか、最もポピュラーなのは世界線を移動したという解釈だろう。

子どもが過去に戻って、自分が生まれる前の親を殺せるかという問題の解決法である。
つまり、時間軸Ａで生まれた子どもが過去に戻る。それは時間軸Ａの過去ではなく、別の時間軸Ｂのであるという解釈だ。
時間軸Ｂで親を殺しても、それは自分を産んだ時間軸Ａの親ではない。

よって親は殺せるし、親を殺しても自身が消滅することもない。

これは量子論でいうところの多世界解釈に相当する、というのがSF的な回答だ。

ただ、一旦これを認めると、時間軸は無数に分岐し、平行世界が無限に増殖する。

他の時間軸でも同じようなことが起こったら？

無数の自分が無数の親を殺したら？

それは、全体を無数の平行世界の巨大な集合として捉えた場合、結局最初の矛盾を解決出来ていないのではないか？

そういう意見もある。ま、SFの話だけど。

そういえば、ジャーガが『わしの世界線は終わったらしい……』と言っていたな。

ジャーガは、何度も世界線を超えて時間を旅していたのか？

だとすれば。

「だとすれば、お前が倒した大魔王はお前ではないということになるな」

そうだ。賢者のいうとおりだ。ぼくが召喚されたのは、大魔王ジャーガがいたからだ。

しかし、あのジャーガは、ぼくではない。

ぼくとジャーガが戦ったあの世界線でもない、もっと昔。ジャーガが何度も繰り返したであろう世界の、その最初の世界。

その世界線にて召喚された勇者。

それがジャーガなんだ。

ジャーガはぼくではない。
だが、ジャーガはぼくのことを知っていた。

……なぜだ？

「なるほどなあ。だが、証拠がないぞ」
「量子アレイコンピューターに確認してみてはどうだ？」

量子アルゴリズムは、重ねあった未来や過去をすべて演算するわけではない。あくまでも今の世界を確率的に捕らえるだけだ。
だから、新しいキーワードを入力してやれば、そこから新たな結論を導き出せる。

たとえば。

「大魔王アャジャーガ・ジャギャアージャ。そして勇者マサタカ……。量子アレイコンピュータ、モード変更！　御神託『命題：勇者召喚システムの是非』の再解析！」
「権限００３『賢者』。認証通りました！　ふたつの真名をもとに再解析を開始します！」

さすがに黙ってろとは言わない。伝達は大事。
コンソールが開いた瞬間、鑑定を飛ばした。微力でも、電子機器相手ならこのくらい。

「結果出力！」
「おお、これは……。そういうことか。面白い。よーし、量子化なんてヤメだヤメだ！」
「賢者様！　それで本当によろしいのですか！？」
「お前ら今の御神託の解析内容、理解できなかったのか？　もう勇

者は召喚出来てるんだよ！　違う世界線の未来の召喚術式でなあ。その世界で勇者を殺した奴らに感謝だな！　あっはっは！」

「ひどい言い方だなあ、賢者」

「でも、そのとおりだろ。労せずして勇者が手に入ったんだからな！」

「なんと、セカンドを勇者として賢者様がお認めになった！」

「ははははは！　ああ、もう黙ってなくていいぞお前ら！　だが、こうなったら別にやることがある」

やること？

「勇者セカンドはまだ勇者の力が覚醒していない。徹底的にメス堕ちさせ、能力を開花させるのだ！」

ええ？

なんでそうなる！？

「勇者の力も本質は魔族の力と同じだ。ならば本能を呼び覚まし、快楽を炸裂させるのが早道だろ！　幸い境界の連中が下拵えはしてくれてる。さあ、やるぞ。やりまくるぞ！　時間がもったいない！」

えええええええ！！！

「ちょ！　そんな！」

「正と義を執行するならばその名に懸け慈悲を捨てよ」

また拘束魔法で虜にされた。今度は両手と両足をひとまとめにされたので、その場でひっくり返った。

「おーお、御開帳かい。だが、ここじゃ雰囲気が出ねえ。ちょっく

ら行ってくるわ。後は頼んだぞお前たち！　我が望む地。我が望む刻。時空の繋がりをひとたび解き此処と結び現れよ」

賢者の転移魔法で移動させられた先は、豪華なベッドルームだった。

賢者とぼくだけが移動し、ほかの者は量子アレイの間においてけぼりだった。

「オレの宿所（へや）だ。あんまり子ども子どもしたのはオレの趣味じゃないが、乳は合格だし、面もいい。ま、壊さねえようにしてやるからよ。大船に乗った気分でイキ狂うといい」

なんじゃそりゃ！

「ぼ、ぼくは男だ！　男だぞ！」

「いや、どこからどう見ても女の子だぞ。お前頭おかしいのか？」

いや、そうなんだけど。そうなんだけど！

第３８話　メスイキ

拘束魔法で両手足を一緒くたに縛られたままのぼくは、転移しても茶巾のようになって床に転がっていた。
病院服がめくれて下半身が丸出しだ。そもそも、病院服はサイズが合ってないままなので、転がされなくても丈は足りていないのだが。

賢者が近づき、ぼくの尻を触る。うええ、勘弁してくれ。
男だったことを思い出した今では、おじさんに触られると鳥肌が立つ。
今からセックスするって!?
いや、無理無理無理!

ぜーったいに無理だから!

ミヤビの意識がなくなったわけではない。
新妻雅貴として成長した記憶、勇者マサタカとしての１年間の記憶、そしてミヤビとして生まれて育った６年間の記憶。ミヤビとして生まれた直後の記憶はないが、それは誰でもそうだろう。物心がついた後からの記憶なのはしょうがない。

それらはすべてそのままだ。ミヤビの自我も、マサタカの自我も、自分自身のものだ。

今の状態は、しいていうなら、思考のつかえがとれてクリアになったような感じ?
たとえば、たまたまばったり昔の知り合いにあって、なかなか名

前が思い出せないまま世間話をしていたが、そのうちひょんなことで思い出して、ああ、と納得出来て以降話がクリアに噛み合う。みたいな？

ミヤビの時に謎の知識に思えていたものは、マサタカの知識で。
そう噛み合ってみれば、不思議でもなんでもなく。

ただ、自分が幼い女の子で、しかもセックスで絶頂済み。

いったん元男だと自覚してしまえば、こんなことありえないし、おじさんとのセックスのようなおぞましいことには耐えられないわけで。

「ふむ、司政官が下拵えをした筈だが、やけに狭い穴だな」

ずぶっ。

「あっ！　ちょっと！　指入れないで！」
「ふむ、やっぱりきついな。膜はないようだが」

親指がぼくの膣に突き入れられた。
ぼくの膣って！
あああ、中をいじられる！
ミヤビの時に知っているけど、あるべきものがなく、ないはずの穴を蹂躙されるって、二重の屈辱！

「こっちはどうだ？」

ずにゅにゅ。

「ひっ！　おしりの穴も！」

賢者の人差し指がぼくの肛門をくじる。親指と人差し指で輪を作るようにして、膣と肛門を同時に責める。足が手にくっついておしりを突きだしている格好だから、丸くなった股間全体を片手で揉むようにしながら。

「こっちも狭いな。子どもだから括約筋の戻りが早いのか？」

とかつぶやきつつ、指を交互に出し入れしたり、ぎゅっと膣と直腸を体の中ではさむように力を込めたり。

そこに穴が開いていることをしっかり確認させられてしまう動き。
ないはずの器官。
ないはずの女性器。

それをことさらに意識してしまう。

「む、濡れてきたな。やはりちゃんと性的に開発したんだな。さすがは第八境界」

濡れてる……。

股間に感じる脂のような粘り。
指が出入りするたびに掻き出される甘酸っぱい匂いの汁。

ああ、なんで。なんでぼく、濡れるの？
いやなのに。
ぼくは男なのに。
なんで、なんで。

なんでだんだん気持ちよくなってるの？

「ほぐれてきたようだし、続きはベッドでだな」

ひょいと持ち上げられた。

膣と肛門の指を鍵にして。

まるでボーリングのボールか何かのように、二つの穴を持ち手にして。

括約筋に体重が食い込む！

「い、痛い！　痛い！」

「勇者なんだろ？　これぐらいで痛いって、何言ってんだ」

ぽんと、ベッドの上に放り投げるように置かれた。

するすると拘束魔法が変形し、見えない力で今度は大の字に手足をぐいと伸ばされる。

仰向けでベッドに磔にされてしまった。

賢者の拘束魔法は強力で、指先まで引き延ばされ、ピクリとも動かせない。

病院服が滑るようにひとりでにほどけて脱げた。

いや、そのように見えただけで実際は賢者の仕業だが。

賢者はベッドの脇で指に着いた粘液を伸ばしながらぼくを見ている。

拘束魔法を精密に操っているのだ。

剥き出しの爆乳がぼくの視界にも映った。頭は固定されていないので動かせる。
無理やり膨張させられた6歳の胸。
その重さを、今ぼくが感じている。

と、その巨大な球体が引っ張り上げられ、砲弾状に伸びた。賢者の拘束魔法だが、何をする気だ？
魔蓄器ごと毟り取る気か！？
要らなければ切除すればいいとか主任が言っていたが、まさか！？

そうではなかった。伸びた根元に魔法が巻き付く。
そしてぎりぎりと締められる。

「痛い！　痛い！」
「だから勇者なんだろ？　もうちょっとこらえろよ」

乳房を締め上げられる痛みなんて知らないよ！　そんな経験しないだろ普通！
あ、そういえばマンモグラフィーってかなり痛いらしいな。

って、冷静に過去の知識を思い出している場合じゃない！
見る間に根元はぎゅうぎゅうに魔法で巻かれ、円筒の先に球体が乗っているような、昔の白熱電球みたいな形に爆乳が変形した。
そして、白く血管が透けていた皮膚が赤く染まっていく。うっ血だ。

「魔蓄器も馴染んでいるようだな。勇者の力が大魔王と同じなら、そもそもどこかにもともと魔蓄器か魔核があると思うのだが、透過検査ではそのような器官はない。異世界から召喚されたものには不要なのか？　まあ、おいおい考えるか。今はまだその時じゃないな」

膣と肛門、そして尿道口に押し広げられるような力が加わった。
拘束魔法を触手のように使っているんだ。
あ、広げられる！

くぱあ。

穴という穴がぽっこりと丸く口を開け内部を晒す。小陰唇もピンでとめられた蝶の羽のように引き伸ばされる。クリトリスの根元にも魔法の糸が巻き付いた。
小さな肉の豆がぎりぎりと締めあげられ、狭くきつい肉の筒がじりじりと拡げられていく。

「い、痛い！　痛いから！　駄目だって！」
「やかましい勇者だなあ」

がぼっ！

口に太く長いものが入れられた。
しかし、入れられたものは何も見えない。

障壁魔法だ。障壁魔法を円柱、というか、陰茎を模した形に集束し、あたかも実体を持つかのように口腔を犯されている。

「うー、うぐっ、うううっ」
「やかましさのレベルが下がったところで、下の口にも入れてやろう」

ずぶぶぶぶ。

「ううううっ！　ううっ！」

魔法の透明バイブが膣と肛門を貫いた。串刺しにされたような衝撃が来た。

力場は広げるだけだったが、今度はずにゅずにゅと粘膜をこそぐよう実体を持ってピストンをはじめた。

ご丁寧にカリやイボの引っ掛かりまで再現している。

前後に動くたびに肉ひだの隅々まで刺激を与えてくる。

本物のちんぽで犯されているのと同じ感覚。

締め付けられた乳房とクリトリスの先から、じんじんと熱いなにかが全身に広がっていく。

痛いのに、きついのに、その痛みと三穴を犯されいたぶられているという屈辱が、なにか別のものに変わっていく。

これがメス堕ち……。

被虐の悦び……。

ダメだ、そんな、ぼくはMじゃない！

Mじゃない、はずだ！

しかし、この全身を焦がすような熱い波動は。

あああああ！

なんだこれ、すごい！

なんだこれ、なんだこれ！

ちきしょう、こんな障壁魔法と拘束魔法の組み合わせなんかで。

ぼくが。

勇者のぼくが。

ああ、ダメだ、どんどん濡れてくる。溢れてくるのが分かる。

一度卵液を噴出するほどの絶頂を知ってしまった体に、また快感の波が押し寄せる。

アレが来ることを知っているから、我慢出来ない。

いや、むしろ期待しているのか。

アレを。

頭がスパークするようなあの。

絶頂を。

イクことを。

あああああ、ダメだ、持っていかれる。すごい。

気持ちいいところを、全部刺激されている。すごい。

「ふん、もうすぐだな。ダメ押しだ」

いつの間にか賢者がぼくの上にいた。気がつかなかった。

ちゅぽ。

締め上げられた乳房の先の尖りを、賢者が吸った。レロレロと舌で転がされる。

あああああああああああああああああああああああ！

イク！　イってしまうから！　それダメ！！

反対側も吸われながら、賢者の手が股間に滑り込む。
魔法で剥き出しにされたクリトリスを摘まれ、擦られた。

あひゃあああああ！！！！
広げられた尿道口からおしっこがちょろっと垂れた。
ちょろっと！
ぶっしゃーじゃない！
まだ大丈夫！

もはや思考がおかしくなってきていた。何が何だかよくわからない。涙が出ていた。目を剥いてのけぞる。
クリを摘まれ、撫でられながら、ぶるぶると痙攣する。
ダメだ、もう自分の体を自分で制御出来ない。

イク、イク、イク、イク。

透明バイブに犯されている口に、賢者が優しくキスをした。唇を強く吸われる。
同時に、クリトリスをぎゅうと強く押しつぶされた。

あああああああああああああああああああああああああああああああああああああ！！！！！！

ぶっしゃー！

膣からまた大量の卵液を噴射し、ぼくの頭は真っ白になった。

「おい、汁噴いて寝てんじゃねえよ」

ぺちぺちと頬をはたかれた。

「これからが本番だぞ」

ぺろん。

賢者がちんぽを取り出した。

あ、あれは……。

ぼくも異世界で絶倫巨根になっていたからわかる。

あのちんぽは、ヤバい。

あんなのぶち込まれたら、狂っちゃう！

３０センチはあろうかという漆黒の極悪ちんぽだった。

第３９話　勇者セカンド

臭い。

賢者のちんぽから蒸れた臭いが立ち昇っている。

角度から見てまだ勃起度は八割というところだろうに、極太ちんぽはすっかり剥けて、亀頭がてらてらと輝いている。

ぼくの胸の上に賢者が尻を落とした。むにゅっと座布団にされた巨乳がへしゃげる。

「ほれ」

その腰の位置からぐんと伸びたちんぽはぼくの鼻梁の上に乗った。長くてでかくて太い。

ちょっとずらして、鼻の穴を亀頭でぐりぐりされる。賢者の臭い臭いちんぽ汁が鼻の穴に塗りたくられる。小便やうんこの臭いすらする。風呂に入ってないんだろう。

司政官のも発酵チーズのように臭かった。清潔にする習慣がないのかもしれない。

臭くてたまらん。

たまらん。

たまらん……。

……。

ぱく。

我慢が出来なかった。首を伸ばして、ちんぽを咥えた。いつの間にか拘束魔法が緩み、顔が動くようになっていたが、ぼくはそれを意識すらしていなかった。脳が既にとろけていたのかもしれない。小さな口には亀頭だけですら完全には呑み込めない。必死に周りをしゃぶりながら、舌を伸ばす。

れろれろ。れろれろ。

臭い臭い汁をしゃぶる。ねぶる。呑み込む。またしゃぶる。

大の字に拘束されているのはそのまま、不自由な姿勢でちんぽを口だけで愛撫するもどかしさ。
賢者の尻で押しつぶされた胸がじんじんする。

イッたばかりの膣から生暖かい汁が垂れてくる。
後から後から溢れてくるのだ。
じわじわと腰から放射状に広がる愉悦の波。
そして舐めている口からもなぜかじんじんと悦びの波動が。

ちんかすや小便汁を舐め取り、こそぎ、味わう。おいしいお菓子でもしゃぶるように。

「ふっ」

賢者は薄く笑うと、腰を少し進めた。口の中にちんぽの先が差し込まれる。ぼくは大きく口を開けて呑み込もうとするが、でかすぎで無理だ。

がごん。

いきなり顎が外れた。賢者の拘束魔法だ。グンと喉の奥までちんぽが侵入してくる。唇の端が裂けて血の味がした。

そんな痛みより、ちんぽを奥まで飲み込めた嬉しさの方が勝っていた。

喉の奥に亀頭が当たったが、それでも賢者のちんぽは消火栓のホースのように僕の口から伸びて半分ほどが出ていた。

その全長をかみしめながら大あごを開けた蛇のようにべろべろ嘗め回す。口の端から血が垂れまるで口の処女を破られたかのような凄惨な感じになっているが気にしない。ぼくの瞳にはピンクのハートマークが浮かんでいたのではないだろうか。周囲が桃色に染まって見えた。

口腔内が、鼻腔が、濃密な臭いに満たされ、熱い質量で充填される。本当に賢者のが熱いのだ。そして、どんどん固くなる。

ギンギンに勃起して、上顎を持ち上げられる。賢者も感じている。そのことが脳を焼いた。

うれしい。悦びに満たされる。

べろべろべろべろべろべろ。

舌をなめくじのようにしてちんぽを舐めあげる。ただひたすら、快感を与えるためのマシーンになるのだ。そんな使命感に支配されていた。ぼくはおちんぽ様の奴隷に堕していた。

そしてそれが心の底からの望みだった。
むしろ本音は、自分が道具になり果てることで快感を得たいだけなのかもしれないが。

「ぬぐっ！　ううぐっ！」

ちんぽを咥えたままなのでおかしな悲鳴が出た。賢者が後ろ手を伸ばしぼくのクリトリスを急に摘まんだのだ。ごりごりと乱暴にこねられる。

「うぐぅ、ううぅ！」
「セカンド、口をおろそかにするんじゃねえ」

苛立ったように賢者が腰をゆする。下敷きになった胸が破裂しそうになる。が、その痛みすらなぜか気持ちいい。胸の中でぶちぶちという音が聞こえる気がする。魔蓄器で腫れた乳腺が破裂しているのかもしれない。
胸がつぶれることよりも、賢者を苛立たせてしまったことに底が抜けたかのようなとてつもない罪悪感を感じ、ぼくは必至で舌をなめくじにして再びちんぽを愛撫する。

「ふん」
「！！っ」

再開されたフェラに応えるように賢者がクリトリスを潰したので、軽くイった。
無様にぶるると震えるクリを見捨てて賢者の指は濡れた縦割れをぬるりと下り、そのままちゅぽんと膣に入った。何の抵抗もなく。
入口のツブツブを均すように二本の指が入り口を丸くぐるりとえぐる。右に左に。

腰から背中にぞくぞくと震えるような刺激が駆け上るが、フェラは止めない。口をおろそかにしてはいけないのだ。賢者の命令は絶対だ。

膣の入り口から奥へと侵入した指は二本から三本に増え、やがて何本が入っているのかわからなくなった。というか、分身したように中のあちこちを刺激され、なにがなんだかわからなくなっていた。

入り口から奥に至るまで各々の指がまるで別の生き物かの様にくじられ、肉の襞を突かれ、掻き分けられ、えぐられる。

子宮頚部も指先でもぎゅっ、ぎゅっと摘み揉みしだかれた。目の前に星が飛んだ。

ぼくの意識を覆うピンク色の霞がますます濃くなっていった。

どのくらいたったのか、熱にうなされるように朦朧となっていたぼくの口から、鉄のように固く熱い賢者のちんぽがずるっと抜かれた。

ぼくの頭はそのちんぽに支えられ宙に浮かんでいたようで、ごんと後頭部からベッドに落下した。

手足ももう拘束されていなかった。賢者が尻を持ち上げ、体を入れ替えて片足を持ち上げられる。

ずぶううううっ！

音を立てて賢者の剛直が大きく開いたぼくの股間に入ってきた。既に溢れていた淫液がぶしゅっとあたりに飛び散る。

一瞬で膣の最奥まで届いた。が賢者の腰との間は開いている。ちんぽが長すぎて三分の二くらいしか埋まっていないのだ。

「あはああっ！」

挿入一発でぼくはイった。ちんぽの一突きで脳がずぽんと飛び出たかのような、爆発的な絶頂に襲われた。

普通に声が出たので、多分顎や口の怪我は賢者が治したのだろう。

さらにぎこっ、ぎこっ、ぎこっと股関節が外れそうな音を立ててピストンされる。

もう何もわからなかった。目の前はピンクを通り越して赤い世界になっていた。もしかしたら血の涙を流していたのかもしれない。そのくらい世界は真っ赤だった。

情熱の赤。はたまた劣情の赤。あるいは情欲の赤。情念の赤……。

熱いたぎるような快感が、賢者が動くたびに嵐のように押し寄せ、砕け、また重なり合い、振幅を強める。

ジェットコースターのような快感。正にも負にも、天にも地にも、翻弄され振り回され。

こんな快感があったのか。女の快楽は高く深く、太く長く。オーケストラのように重層になり、体の隅々まで強く響く。絶頂に絶頂を重ね、まるで霊峰連なる山脈のようにどこまでも高みと深みが続く。

フルも、ラヴィも、アリスも、こんな感覚だったのか。こんなに気持ちよかったのか。

ミヤビの時の絶頂は知っているが、男だったことを思い出した今は、この女の性感、いや、永遠に続くとすら思われるメスのエクスタシーが、快楽が、多幸感が、悦びが、何とも背徳的であり、何と

もみじめであり、何ともおぞましいものであり、そしてかけがえのないものだった。

おまんこ最高！

そうだ、ぼくはおまんこ。男を悦ばせ、その喜びを増幅して自らにフィードバックする器官。貪欲なメス穴。

そう認識した瞬間、プライドも、愛した女性の記憶も、勇者の誇りも、そんな取るに足りないものたちが、何もかも爆ぜて、純粋な快楽に昇華する。

これが、メスイキ。

ぼくはちんぽにご奉仕するだけの存在になる。

ぼくの右足を高く上げ、横位置でめきょめきょとピストンしていた賢者は、くるんとちんぽを中心にぼくをひっくり返し後ろから爆乳を揉みつぶすようにしてぼくを持ち上げた。

背面座位だ。

体重が掛かりちんぽに串刺しにされる。が、ぼくの尻は浮いていた。胃や心臓まで持ち上げられちんぽを呑み込まされているが、それでも全長は入らない。

また胃液を吐きそうになるが、食道を魔法障壁で塞がれた。喉の奥が胃液で膨らむ。

さすがにこれはあまり気持ちがよくないと賢者も思ったのか、すぐに背中を押され、前に伏し顔をベッドに埋めて尻を高く掲げさせ

られた。

後背位。ドギースタイルだ。上から覗き込む格好になっている賢者からは、ぼくの尻の間でぬらぬらと前後に動く自分のちんぽが良く見えていることだろう。

ぼくも見たいが、自分の爆乳越しに賢者の金玉が揺れているのが見えるだけだ。

更に正常位からの種付けプレス。当然だいしゅきホールドで返す。

持ち上げられ駅弁。

帆掛け茶臼から松葉崩し。

仏壇返しからの燕返し。

後はぼくも知らない体位へ次々に変化する。さすが賢者。物知りである。

……。

……それから、何年たったのか。何十年たったのか。

……そう感じるだけで、一瞬の出来事であったのか。

……魂は悠久の時を旅したように思えたが、現実はそうではなかったのかもしれない。

ぼくは、再び意識を取り戻した。

いつの間にか、法衣を着て立っている。青い賢者のでも、濃い藍色の境界のでもない、黒い法衣だった。

何か違和感が、と思ったら、爆乳でなくなっていた。ボールのような盛り上がりがない。

服を着ているから確認は出来ないが、小さくなっただけでむしり取られり、破裂したりしたのではないようだ。そこそこはあるように感じる。美乳だといいな。

ほぼ垂直に立ったシートに背をもたれていたようだ。拘束はされていないが、倒れないようにアームで支えられていた。

なんというか、アニメでよくあるハンガーでメンテナンスされている巨大ロボみたいな恰好だった。

「魔物どもの抵抗が一向に止まんな」

「半数は撃破したのに、どういうことか」

「大体、こんな長時間にわたってずっと攻撃をしてくること自体がおかしいがな。しかもこちらの攻撃を避ける気もないようだ。死ぬことを無視してやがる。まるで集団自殺だな」

賢者と司政官が話していた。横長のモニターがぐるりと囲み、外部の状況を投影している。

あいかわらず、魔族が周囲を取り囲こみ境界に攻撃している様子だ。

量子アレイのキューブはない。コンソールデスクがいくつも並び、

境界スタッフが着座して忙しそうにしている。賢者と司政官はやや後方で立ったまま会話していた。
その更に後ろにぼくはいた。そして口を開く。

「賢者、待たせた。準備は出来た」
「うむ、セカンド。ようやく戻ってきたか。魔力も安定しているようだな」

賢者が振り向き、ぼくの胸を見ながらそう言った。
そう。ぼくは理解した。
ぼくは勇者セカンド。魔族を撃ち滅ぼす聖なる剣。

「問題ない。やつらを掃討してくる」
「ああ、頼むよ。勇者」
「了解した」

ぼくは瞬間移動した。境界のはるか上空へ。

上空から見た境界は、明らかに戦艦……。長い紡錘形のような船体に、中央部に高く飛び出た艦橋。その前後に前2門後ろ2門の三連装主砲を備えた威容。

ＳＦアニメの宇宙戦艦にそっくりな外観だった。

そして、その戦艦を取り囲む、未だ数万のオーダーで存在する魔族を睨む。

第３９話　勇者セカンド（後書き）

次回、第１章完結です！

第４０話　一つの終焉（前書き）

新年明けましておめでとうございます。
第１章最終話です。
鬱展開です。寝取られや裏切りに敏感な方はご注意ください。

第４０話　一つの終焉

思うに、天国に招かれていた、もとい、気を失っていたのは数時間程度なのだろう。
まだ夜が明けていない。

瞬間移動の前に、鑑定で自分のステータスを確認した。

ネーム：セカンド
クラス：オルタード勇者
ステータス：……。
スキル：オルタード闘気、オルタード学習、オルタード不可視、オルタード覇道、オルタード再生

オルタード。〝調整された〟か。
勇者の能力をほぼ失っていたぼくを、賢者が再調整してくれた。

あのちんぽでおまんこされて。

思い出しただけで体がぞくぞくする。
股がじゅわと濡れる。

賢者にまた、愛してもらうためにも。

（魔族を全て殺す！）

それが賢者の指示だから。

空を飛ぶ魔物がぼくにようやく気付いた。
包囲するように数千の飛行魔族が迫ってくる。

ハ・ワーピー、ハ・ドラゴ、ハ・ガゴール。

境界の区分ではクラス３に相当する魔物群だ。オルタード勇者のステータスは勇者マサタカだった頃の４割程度だが、こいつら相手には十分すぎる。

第八境界の主砲より１００倍は強い！

「殲滅（エクスタミネータホーミング）！　追尾！」

ぼくから何十、何百というビームが撃ち出され、軸線上の敵を次々貫く。クラス３程度の魔法防禦では掃射（スウィープ）を使うまでもなく、複数を一気にビームで串刺しに出来る。

空中の魔族を全て貫いた。

「殲滅（エクスタミネータエクスプロージョン）！　爆裂！」

地上に輝く光球が出現し、周囲を呑み込んでいく。
ぼく自身と第八境界には魔法シールドを展開済みだ。

光の渦の中に、山も森も魔物も容赦なく巻き込まれ、塵となって消えていく。

やがて辺りの明度が元に戻ると、大地が丸く削れて、その中心に第八境界とその足元の地面がカルデラの中の小山のように残っているだけだった。

近くにいた魔物は全滅した。

が、外輪山のように残った崖の外側にまだ大型の魔族、長距離攻撃をしていた中ボスクラス……クラス４が残っている。

現在の爆裂（エクスプロージョン）の効果範囲は精々半径１キロというところだ。４割の能力だとそんなものか。

崖の周囲から、魔族の攻撃が再開される。

残り数千。

中ボスは数万の雑魚よりも強敵だが、負ける気がしない。

しかし、これだけの被害を受けているのに、撤退することもなく、攻撃の意志が全く削がれていない。

魔族は他人よりも自分。自己保存の塊のような存在なのに、それでも奴らは逃げない。

どこかで大魔王ジャーガが扇動しているのか。奴らに命令しているのか。撤退はないと魔族を縛り付けているのか。

死よりも恐ろしい何かがあるのか。

ジャーガがここにいるのなら、なぜ姿を見せないんだ？

魔族たちから射ち出された長距離攻撃タイプの悪魔力がぼくに迫る。瘴気、致死毒性の魔光、死の宣告、弱体化、闇への誘い。

中ボスども、ザ・ベルゼ、ザ・ザダン、ザ・アスモーデらの面倒な攻撃だ。

勇者になりたての頃には苦戦した。

フルや、ラヴィや、アリスに助けてもらいながら、勇者の力に慣熟していったんだった。

フル？

あれ、いま、何か大事なことを、……。

「瞬間移動」

余計なことは忘れて、戦いに集中する。それが賢者の命令だから。

ぼくは迫る悪魔力をなんなく中和し、中ボスたちに向かっていった。ここからでは殲滅（エクスタミネーター）が届かないからだ。

それに、接近戦も試しておかねば。

賢者に褒めてもらうために。

おちんぽ様に愛してもらうために。

勇者剣（ブレイブソード）を出現させ手に握る。ハーフサイズだ。かなり短い。

まあ、この体格ではフルサイズの剣の取り回しは無理だ。ちょうどいいだろう。

ライオンと昆虫が混じったような魔物であるザ・ベルゼの直前に出現し、頭を一刀両断。ただちに瞬間移動し、３メートル近くある牛頭の巨人ザ・ザダンの胴を袈裟斬りにし、さらに移動して三つ首の怪物ザ・アスモーデの頭を刎ねる。

いける！

魔物たちの間を瞬間移動で縦横無尽に飛び回り次々に屠る。さすがに捕まったらパワー負けする。スピードとトリッキーな移動で翻弄するのだ。

でも、数がやはり多いな。接近戦の練習はもういいだろう。

「分身」

僕は２５６人に分かれた。分身数の上限は依然と同じだ。それぞれが４割スペックだから、理屈は合っている。

「いくぞ。魔族ども、覚悟しろ」

後は一方的だった。２５６人の僕は殲滅追尾（エクスタネネミタダ）や複数勇者剣（マルチブレイブソード）などで残り数千の魔族を屠った。

あらかた片付き、僕は再び一人に戻って、境界の甲板部分に着地した。

（結局大魔王ジャーガは現れなかったな……）

累々とした魔族の死骸はしばらくすると黒い粉となって消えていく。そのため周囲一帯が煙幕に覆われたように見通しが悪くなっていた。明るかった月も見えない。

突如鑑定画面（ステータス）に警告（アラート）が真っ赤にポップアップした。

ナイフのように鋭くとがった殺気が急速に近づいてくる。二つの影！

「奥義、真・地獄極楽剣暗剣殺撃滅刃！」

がきいん！

振り下ろされた剣を勇者剣で弾いた。そのままバックステップして影と距離を開ける。この技は！

「ホーミング・サンダーアロー」

別の影から魔法の電気の矢がステップで逃げた位置に連続で射ち込まれた。地上での二次元移動は読まれている。空中に飛んでかわす。やけに抑揚のない詠唱だな！

しかしこの剣技と魔法は。

「奥義、真・魔神剣無明殺粉砕斬！」

剣を持った影が地を走り直角に上に曲がった。そして垂直な壁の如く空中を走り、必殺の剣技を放った。ぎりぎり瞬間移動で逃げる。

が、転送先に炎の渦があった。置き魔法（トラップ）！

「バーニング・ボルテックス」

転移直後で避けられなかった。が、僕の魔法耐性は高い。直撃を受けたが重傷ではない。飛翔しつつ、すぐに自動で焦げた法衣ごと再生が始まる。

そこにまた剣の影が。

「奥義、割砕剣一刀鎧斬！」

負ったダメージのため捌ききれなかった。剣そのものは勇者剣で受けとめたものの、斬撃の勢いで地面に叩き落された。

ぼごん！　と大きな音を立てバウンドする。

「ぐは！」

血を吐いた。全身に激痛が走る。あちこち骨折したうえ、内臓も傷ついたようだ。

「ぐうぅぅ……」

地に伏したまま動けない。再生（リプロ）が遅い！

「まったく、以前の癖がそのまんまだな。読み通りの動きでつまらんぞ」

「ん。初期化されたみたい」

影二体が僕を見下ろしていた。

聞き覚え、いや忘れようのない声。そして姿。

やはり、彼女らだった。

懐かしい、ラヴィとアリス。

だが、その姿は。

裸体に胸と股間にだけ赤い炎を纏ったラヴィと、青い炎を纏ったアリス。

背中には炎の翼。

渓谷で魔人と化したフル……アズフルと同じだ。眼球が赤く瞳が

金色なのも。

魔人になり果てたのか。三人とも。

いったい、何があったんだ。

そして二人の姿は魔人化しただけではなかった。

ラヴィは幾分年齢を重ねた容姿になっていた。カモシカのように弾ける元気と溌溂とした陽気さの代わりに、しっとりと脂がのった大人の妖しさがにじみだしている。褐色の肌は相変わらずだが。

そしてアリスは、顔やスレンダーな手足は以前のままだが、腹部だけがポッコリと丸く膨らんで飛び出していた。胸と腰の炎の間で、へそがなくなり丸い繭のようなお腹がむき出しになっていた。

「……ら、ラヴィ、アリス……。いったいこれは……」

「やあ、懐かしい名前だな。今の俺はサタラヴィだ」

「ボクはママーリス」

「……アズフル同様、ま、魔人化して真名が変化した……のか。アリス、そのお腹は……」

「ん。赤ちゃん」

アリス……ママーリスが隠微な表情でべろりと唇を舐めた。

アリスの子ども。

アリスが妊娠!?

誰の子だ?

あの時、ぼくはずっと鑑定していたが、凱旋の時まで三人とも受精も着床もしていなかったはずだ!

そうだよ。なんで今まで考えてなかった？

ぼくがアズフル……フルから生まれたのなら、父親は誰だ？

誰に孕まされた！

いや、誰に犯された！

妊娠したアリスを見て、その事実を意識的に忘れようとしていたことに気がついた。気がついてしまった。

アリスとフルだけじゃない。

「ラヴィ、ファーストは……お前の子……なのか？」

「ファースト？　ああ、そう呼ばれているのか。１０年前にここで子どもを産んだのは確かに俺だ」

やはり三人とも子を宿したのか！

孕んだのか！

あああああ！

ぼく以外の誰かの子どもを！

「い、いったい、なにが。どういうことなんだ……」

「そりゃこっちのセリフだよ。アズフルの娘ミヤビ。全く、あんたらは親子揃って支配されるとはね。まあ、そう予測したからここに来たんだけどさ」

「……お、親子揃って……？　なにを言って……？　あ！」

ぼくを罠に掛けた時のフルの話か！

「あたしたちが追っていた賢者にやられたんだろう？　あの賢者の真名を教えてやるよ。ダムス・アマル・ドゥエスガ。１０年後のアリアガルド法国司祭になっている男だ」

ダムス司祭！

いや、大魔王討伐のための世界連合軍、ダムス戦略統括！

あいつが！

あの賢者が！

あのおちんぽ様が！

がんがんがんと頭が痛んだ。

吐き気がする。

なんだこれ、なんだこれ、なんだこれ！

あのおちんぽ様には逆らえない。だって、さっきだってラヴィとアリスの技だと意識したが、ぼくはためらいもせずに影と戦った。

今も、魔人化したサタラヴィとママーリスを倒せと心の中で賢者の声が叫んでいる。

はっきりと二人を認識しているにもかかわらず。

子を宿したと聞いて胸が張り裂けそうに痛いのにもかかわらず。

二人を真剣に殺そうとしている。

フルもそうだったのか。

ぼくを愛していたのに、ぼくを罠に掛けた。変異薬で。

『夢なら……、よかったの……、ですが』

あの時のフルの姿を思い出す。

おちんぽ様の命令だったのか。

なら仕方がない。

メス奴隷はおちんぽ様には抗えない。

いやいやいや、ちょっと待て、フルは間違いなく処女だった。おちんぽ様にメス堕ちしたはずがない……。

「ああ、処女だったと思っているな。残念だが、フルはまんこは確かに処女だったが、ケツでメスイキしてたんだよ。あいつ、バックの時最初からイキまくってただろ？　たっぷり開発済みだったんだ。パーティーに加入した時には既に対勇者用の秘密兵器として仕上げられていたというわけさ」

な！

そういえば確かに指ちんこ平気で呑み込んでたな……。

「なんだよ……それは。それじゃ、なにもかも、はじめっから、全部嘘だったのかよ！　なんだよ！　なんなんだよ！　あれは！　勇者パーティーとして過ごした時間は！」

姫島さんと同じじゃないか！

他に男がいたんだ！

しかも１０年後の賢者、あんな爺さんにケツを掘られておちんぽ奴隷になっていたのか！

ラヴィもアリスも誰かと子供を作りやがって！

誰かにまんこ突かれてアンアン腰振ってたのかよ！

ちきしょう！

なんなんだ！　なんなんだよ！　まったく！

いや、ちょっと待て。

フルを調教したのがあの賢者なら、ぼくを殺したフルはダムス統括のもとにメス奴隷として戻った？

ぼくは、ミヤビは、ぼくのこの体はダムスとフルの娘？

ぼくはフルを寝取りやがった男の子どもに転生したのか！？

なんだよそれ！

で、ぼくもまた実の父にメス奴隷にされたのか！

若かりし父親のおちんぽ様に！

うわあああああぁあぁああぁぁぁぁぁぁあああぁぁぁぁぁぁぁあああああぁぁぁ！！！！

ぼくの中にどす黒い怨念と、憎悪と、嫉妬と、嫌悪と、吐き気と、おぞましさと、絶望と、そんな感情が混然一体となった爆発的な怒

りが渦巻いた。胸が膨らむ。いや、なにか期待しているわけじゃなくて物理的に。

乳房が膨らんでいるのだ。

オルタード魔蓄器が、周囲の何万という死んだ魔物の黒い塵、魔の気配を取り込んで膨れ上がる。

ぼくの内でたぎる心の痛みに反応して。

ぼくは立ち上がった。そのまま、ふわりと浮く。魔力が増大し、ぼくを赤いオーラで包む。一瞬で再生（リプロ）が完了した。

「ちくしょお！　ちくしょうちくしょうちくしょう！！　もう嫌だ！　何もかも吹き飛べ！　無に還れ！」

ぼくは絶叫した。

賢者の声が頭の隅でチカチカしたが、もう自分を失い絶望に震えるぼくには届かない。

「殲滅（エクスターミネーター）！　限界突破（リミットブレイク）、縮退（デジェネレーション）！！」

「ふふっ。それでこそ勇者……」

「想定どおり。また5年後の試練の夜に……」

サタラヴィとママーリスが最後にそういうのが聞こえたが、もう止められない。止まらない。

全てが白い光に包まれ、消えた。

ぼくと共に。

なにもかも。

第４０話　一つの終焉（後書き）

これで第1章は完結です。
充填期間を少しいただき、改めて第2章をスタートします。
では待てしばし！

第４１話　勇者を捨てた勇者（前書き）

第2章スタートです。

いきなり時間が飛びますが、回想形式で間のお話も語りますのでご安心ください。

第４１話　勇者を捨てた勇者

そして5年が経ちました。

あの時、深く傷ついたマサタカの精神は爆縮の閃光と共に砕け無に還りました。

ですが、わたし――ミヤビの自我は残りました。

それはそうです。わたしにとっての人生はお母様と暮らした6年間が全てです。マサタカの経験と記憶はあるものの、お母様、アズフルではないフルが賢者のメス奴隷であったことや、ラヴィやアリスが他人の子を身ごもったことに、特に感情も関心もありません。

だから、わたしの心は壊れることはありませんでした。

未来の賢者が私のお父さんかもしれない、ということには少々びっくりしましたが。

けれど、マサタカが理解したように、わたし――マサタカとミヤビが経験している未来から過去への時間遷移は、同じ世界の中を繰り返しているわけではありません。違う世界線に切り替わっているのですから、わたしを犯したあの賢者がイコールわたしの父、ではないのです。

だから、第八境界が消滅しても悲しくはありませんでした。

それにあの時、賢者はこう言い、首枷の火薬を発火させました。

『お前は俺のものだ！』

と。

オルタード勇者の暴走は想定内だった。そう思えます。

わたしの首は吹き飛びました。ですが、いったん始まった縮退連鎖は術者が死んでも止まらず一帯を破壊しつくしました。

第八境界も山脈ごと粉砕され吹き飛んでしまいました。数万の魔族の攻撃にもびくともしなかった無敵の装甲に覆われた宇宙戦艦が、木っ端微塵に。粉々に。

あそこで行われていた様々な実験や開発した技術も、すべて失われてしまったのでしょう。

さすがにこれは、賢者の想定外だったのかもしれません。

術者を爆殺すれば止まると考えての首枷という安全装置だったはずですから。

重力縮退が一旦始まれば中性子の塊あるいはブラックホールとなり蒸発するまで決して止まらない物理現象だなんて、そんな知識はこの世界の誰も持っていなかったでしょう。

わたしの体は、やがて再生（リプロ）によって復活しました。考えてみればこの力は魔族のリポップと同質のものなのかもしれません。

しかし、心はわたしのみが蘇り、マサタカの心はどこにも感じられませんでした。

マサタカの記憶がわたしの中に知識と経験として存在するだけでした。

思えば、お母様がおっしゃった、境界に行けば地獄が待っているという言葉の真実の意味は、マサタカの消失だったのかもしれません。

かつての、そして未来の勇者。その心が絶望の末に壊れ砕け散ったのですから。

5年たっても賢者をはじめ第八境界の中の人々がどうなったのかは、わたしにはわかりません。しかし、賢者の言葉を思えば、生き残ったのかもしれません。

あそこには相当数の法術士が勤務していましたし、そもそも戦闘態勢でした。不測の事態への対応は出来ていたと考える方が自然でしょう。

賢者も再生のことは知っていたはずですから、爆殺した後再生を待って回収するつもりだったのでしょう。わたしは賢者にとって貴重な存在なのですから。

何せこの責任を取るといったのは、賢者自身なのです。量子化することをやめ、わたしを勇者として認めたことの。

大失態です。第八境界を失い、研究成果を失い、そして勇者も失った。

賢者が生きていたとしても、法国での地位は危ういでしょう。

わたしが気に病むことではありませんが。

わたしは再生したとき裸でしたが、マサタカの記憶でフルの……お母様のアイテムストレージの暗号鍵を開いて服を取りだしました。

勇者パーティーとして冒険していた際、万が一のことを考え暗号鍵を共有していました。

そして勇者の力が復活したわたしは魔法が使えるようになってい

ました。

アリアガルドの法理魔法も、タランジの攻撃魔法も、ガーランドの剣技も。

まるで大魔王ジャーガのようです。彼女は詠唱していましたが、わたしは無詠唱で発動できます。

まああの時はマサタカを動揺させるためわざと口に出していたように思えますが。

かつて、マサタカの時は魔法ではない勇者のユニークスキルを使い、魔法はパーティーメンバーに任せていました。

けれど、魔法が使えないわけではなかったようです。

もしかしたら、賢者に調整されたからかもしれませんが。

ストレージには、丘の家から収納したものが全てそのまま残っていました。わたしの服も、お母様の調理道具も、薬草の畑も。

涙が出ました。

そして、この事実により勇者パーティーの賢者フルイコールお母様であることが証明されてました。どうして魔人化したのか。お父様は誰なのか、と疑問はまだ多く残っていますが。

その一方不安材料がありました。勇者パーティーの残り二人、魔人化したサタラヴィとママーリスもこのアイテムストレージにアクセス出来るということです。暗号鍵は術者が死んでも変更出来ません。

ですが、この5年間、ストレージの中のものが私が使う以外でなくなったりすることはありませんでした。むしろ、たまに肉や魚が増えていることがありました。

二人の施しなのかもしれません。手は付けませんでしたが。

このアイテムストレージに入っていた聖なる遺物（アーティファクト）には何度も助けられました。わたしが今日まで生き延びられたのはそれらのおかげです。

人間の領域を魔族から守護する北の砦たる第八境界の消失により、北の山脈から大量の魔族が南下してきました。

わたしの生まれ育ったラリル村はもうありません。怒涛のような魔族に蹂躙され、いつかドッチャに見せられた幻ではなく、本当に村は焼けて廃墟となりました。多くの人々が逃げ遅れ亡くなったと聞きます。リーさんやサスナさんがどうなったのか、それもわたしにはわかりません。

都市部にも魔族が押し寄せ、平和な場所は既にありません。各国の王都は防衛線を引き、人々は城壁の内側で不自由な暮らしを余儀なくされています。

貿易路が寸断され、経済も麻痺状態です。

一方、対魔族用の軍備増強のため重税となり、そもそも畑を魔族に荒らされ収穫の減った農民の多くが貧困にあえいでいます。

男たちは軍に志願し前線に出ることで報酬を得ようとしますが、多くは戦死してしまいます。

大黒柱を失った女性たちは、軍人相手に春を売るようになっています。未亡人も、少女も。

それでも生きているものはまだ幸福です。

飢饉に襲われるも、国の援助もなく、移動手段のないままただ餓

死し朽ちていく集落。
作物に恵まれた土地は、魔族の襲撃にも遭いやすく、惨殺され全滅した村々。

そんな地獄絵図が、惨劇が、世界のあちこちで起こっています。

マサタカなら、勇者として世界を救おうとするのかもしれませんが、あいにくわたしはただのラリル村のアズフルが娘ミヤビ。

お母様の魔核を取り戻すこと。そして5年後の試練の夜に起こるなにか。
それが、わたしが生きている意味でした。

そしておよそ5年。
今、わたしは魔族の領域（テリトリー）に建てた砦で暮らしています。アイテムストレージにあったものです。
かつて勇者パーティーが使っていた砦のひとつです。

備蓄品も豊富で、お風呂にも入れます。

頑丈なので、クラス5以下の魔族の攻撃ではびくともしません。
三魔王や大魔王ジャーガに対しては無力でしょうが、周辺の魔族に対しては十分すぎる防御力です。
小さな要塞といってもいいでしょう。

わたしは第八境界を破壊した張本人です。いずれは魔核の件もあるので、アリアガルド法国王都に行かねばならないのですが、賢者や司政官らがどうなったのかがわからないので、不用意に王都に入るのは危険です。
また、周辺の町や村にも手配書が回っているかもしれません。第

一人間の多い場所は、今や魔族に襲われやすい場所でもあるのです。人目を気にせず聖なる遺物（アーティファクト）を使える場所の方が何倍も安全です。

ということで、魔族の領域（テリトリー）にいるわけですが……。

「ミヤビ姉ちゃん、これ読んでよー」
「おなかすいたあ」
「うひっ、ぐすっ……」
「おしっこ！」
「お母さん、いつ帰ってくるの？　お外行きたいなあ……」

砦の中は小さな子どもたちでいっぱいです。世界を救う気はありませんが、かといって目の前で死んで行く子どもたちを見殺しにすることはわたしには出来ません。

気が付けば、今は12人。3歳から7歳までの子どもたちです。わたしより年上の人は、わたしのことを根掘り葉掘り聞くし、主導権（ウント）を握（とろう）ろうとするしで懲りました。

この5年間にはいろいろあったんです。

年上の人がわたしに対する態度は、わたし自身のせいでもあります。

第八境界で性に強制的に覚醒させられたわたしは、今や10歳とは思えない色気を発散するようになりました。

6歳にして爆乳にされた胸は、いったんは小さくなったものの、成長が促進されたのか、再び突き出たロケットおっぱいと化しました。そのくせ腰はきゅっとくびれ、お尻はパンっと張っています。

手足は長く、背も伸びました。お尻が大きくなった分太ももが随

分肉感的ですが、後はすらりと細い、メリハリの利いたボディラインになりました。下の毛も淡く生え、もう大人です。脇はまだ産毛なのですが。

そして漆黒の髪は長く伸び、顔つきからあどけなさが消え、妖艶ともいえる美人になりました。

え、自分で言ってて恥ずかしくないのかって？

客観的事実だから仕方がないです。

わたしを見た大人が、淫魔にでも会ったように性欲を我慢できなくなるのは日常茶飯事で、それも町や村に立ち寄らないという理由の一つです。

それに。

「おっぱいたーっち！」

「また尻デカくなったんと違う？　ミヤビねーちゃん」

「おふろおふろ～～」

子どもたちのスキンシップが可愛いのです。

かつて、お母様の美しい裸体を見てため息をついていたわたしを思い出して。

もちろん、あの頃のお母様の年齢の半分にも満たないのですし、まだまだメリハリも艶っぽさも足りないのは分かっていますが、子どもたちが大人の女性として見てくれているのが嬉しくて。

つい。

「今日のお風呂はマーサとシオットとデューイだったわね。そろそろ入りましょうか？」
「はいるはいるー！」

砦のお風呂は広かったし、魔法が使えるようになったおかげでお湯張りも服を脱いでる間に出来ます。浴室の温めも忘れずに。

マーサは3歳の女の子。シオットは4歳の男の子。デューイは7歳の男の子。

お風呂は日替わりで子どもたちと一緒に入ります。

みんなわたしと一緒に入りたがるのですが、さすがに子どもといえどそんなにいっぺんには入れませんから、いつしか輪番制になりました。

なぜみんなわたしと入りたがるかといえば。

「あっ、ねーちゃん、出るよ、出るっ」
「ちゅっ、ちゅっ。……ダメよデューイお兄ちゃんでしょ。シオットが頑張ってるのに。我慢しなさい。ちゅっ、ちゅぱ、ぺろぺろ」

わたしは湯舟の中でデューイの少し皮の剥けた、でもまだまだ幼いちんこを手コキしながら、シオットの、わたしの人差し指程度しかないのに生意気にもピンと硬く跳ねあがったちんこをフェラしています。

そしてわたしの大きな胸を両手に抱えて乳首を吸っているマーサ。ふふふ、ほんとにおっぱい好きよね。残念ながら母乳は出ないけど。でも一生懸命で可愛いわマーサ。

シオットは目をつむってプルプル震えています。

皮越しだから刺激は弱いけど、イキそうになってるのね。我慢我慢。

精通はまだないけど、イク感じはあるらしいわ。

わたしは今、こうして毎日子どもたちの幼い性と戯れています。

メス堕ちし調整（オルタード）されたわたしは、もはや性欲を抑えられない体になってしまったのです。

「あっ、あっ、ああっ」

シオットがつま先をピンと立てて湯舟に沈みました。おっといけない。

抱き起こして縁に腰かけさせます。はーッとため息をついています。達したのでしょう。

射精がまだ出来ないから、たぶんですが。

すぐに横に向いて、デューイのちょっと大人な仮性包茎をかぷんと呑み込みます。３０センチ級をディープスロートしたわたしには軽い軽い。

口をすぼめ、舌をローリングし、デューイの生意気ちんぽを吸い上げます。

「あひゃ！　あああああっ！　出る、出るよ！」

「まだまだ！（まひゃまひゃ）」

デューイの亀頭と皮の間に舌先を滑らせつつ、胸を吸っているマーサの股間を撫でます。

３歳のスジまんがしっとりしているのはお湯や汗のせいだけでは

ないでしょう。

そのとたん、びくぅっ！　と背中を震わせましたから。

「ああっ、出る！　出る！　ねーちゃん、まんこ！」

口を離すとデューイが自分でちんぽを擦ります。わたしはしょうがないなあという感じで、片脚を湯舟から上げてデューイに向けて大きく股間を開きます。片手でマーサをくじりながら、もう片手でVの字を作りおまんこをくぱあと開きます。

淡い毛に彩られ、襞が増え鮮やかさの増したおまんこを。

デューイは目を見開いて凝視しながら2、3度擦り、

「ああっ」

そう言うと、わたしのおまんこめがけて射精しました。ぴぴぴっと三滴ほど。まだわずかな量です。

「はああ……」

「うふ。どうして欲しい？」

「舐めて……」

わたしは、まんこに付いた白濁を指でこそぎ、ぺろりと舐めるとまだぴくぴくしているデューイのちんぽを再び呑み込みました。

丁寧にお掃除フェラしてあげます。

お股を擦られていたマーサがびくびくっと大きく震えました。3歳でイクのを覚えたのです。

わかっています。
わたしのせいです。

わたしからにじみ出る隠微な波動。そして私の体を舐め体液を取り込むことでさらに子どもたちに影響が出ているのです。

でも、やめられません。

それにここを出ていくという選択肢は彼らにもないのです。彼らにとって最も安全な場所はここなのですから。

そう言い訳しながら、今日も幼い性を弄んでいます。

第４２話　幼い性

もう一度からだを洗って、部屋に戻るとベッドの上で白い塊が二つ絡み合っていました。

レッピとカルドです。待ちきれずに自分たちで始めてしまったのですね。いけない子たちです。

レッピは7歳の女の子。カルドは同じく7歳の男の子。

お風呂番があるように、わたしと寝るのも順番です。今日は二人の番なのです。

もっと小さい子なら3、４人と一緒に寝ることもありますが、さすがに7歳ともなるとわたしを含めて3人でベッドが一杯です。

二人とも半年程前にそれぞれ初経験を終えています。セックスに慣れてきて、ちょうどやりたい盛りの頃なので、我慢できないのはまあしかたがありません。

１２名のうち5名が女の子。レッピは最年長の7歳です。男子最年長はカルドと先ほどお風呂場で果てたデューイの7歳コンビ。女の子は6歳、５歳もいますが、男の子は二人の次はシオットたち４歳組になるので、カルドがみんなのお兄ちゃんポジションです。

同い年ですが、デューイよりカルドの方がやや背が高く、性格もませています。デューイは性交そのものは未経験ですからね。手コキやフェラで何度も射精はしてますが、まだ精子も薄く量も僅かです。

わたしは入れてあげてもいいのですが、ちょっと臆病なところがあるデューイは、肝心なところで腰が引けてしまうのです。

あんまり強引にして変にトラウマになってもいけませんしね。男

の子は難しい。
だから、今のところ唯一非童貞のカルドが大人っぽくふるまうのは仕方がないです。
現在レッピをセックス相手として独占していますし。

まとめ役のお兄ちゃんポジション自体は問題ないのですが、いつかの大人たちのように勘違いした行動をとるようになったら困るので、注意はしています。

わたしはバスローブ1枚。
砦の中は魔力が循環しており、温度や湿度は快適に保たれています。明かりも魔力によるもので、今は照度を少し暗めにしています。

「あっ、あっ、あっ」
「レッピ、おれ、出る、出ちゃうよ」
「いいよっ！　いいっ！　カルド、出して！　中に出して！」
「……ダメよ」

上になってるカルドが振ってる腰をぐいと引きます。ちゅぽんと音を立ててちんぽが抜けました。

「あっ」
「ねえちゃん！」

刺激で射精するかと思いましたが、まだそこまで高ぶってはいなかったらしく、カルドがただ尻もちをつくだけで終わりました。

「私が入ってくるのに気がつかないなんて、ヤ・リ・ス・ギ」

カルドのおでこをチョンとつつきます。二人ともまだ毛も生えて

いないのに、セックスは貪欲です。

「ね、ねえちゃんが風呂なげーからだよ！」

「ううう……」

レッピが顔を真っ赤にして裸を隠すように丸まります。いまさらでしょうに。

「二人で始めるのはいいけど、勝手にイっちゃうのはずるいでしょ？　さあ、いらっしゃい」

ベッドに腰かけると、レッピとカルドがすぐに左右に貼りつきます。

カルドのちんぽはデューイ同様まだ包茎ですが、長さはもう大人並みです。皮がむけて、亀頭の傘が広がれば、女泣かせの一物になりそうです。

将来有望な肉棒はおへそにくっつきそうな勢いでそそり立っています。そしてぬらぬらと濡れ光っています。レッピの本気汁ですね。

レッピも、随分開発されたものですね。

まあ、わたしの影響なのはわかっているのですけれど。

「いじわるなねーちゃんは、こうだ！」

右のカルドがバスローブの中に片手を差し入れ、膨らんだ胸をこねるように強く揉み始めます。咎めるつもりでカルドの顔を向けると、勢いよく唇を吸われました。そのまま、カルドの舌が強引に侵入し、絡んできます。

「んっ、はっ、んっ」

ちゅうちゅうと口を吸う音が漏れます。左のレッピはわたしのバスローブをはだけ、もう片方の胸に舌を這わせ、レロレロと先端を舐め始めます。

「ん」

そのまま口に吸い込まれ乳首を甘噛みされました。ん、気持ちいい。

カルドとのディープキスを中断します。名残惜しそうによだれが糸を引きます。

「レッピ、カルドのちんぽがあなたのお汁まみれだわ。きれいにして」

「はい……」

レッピが胸を離れ、ベッドサイドを這ってカルドの股間へと顔を埋めます。

ピンと立った全長を下から上へ舐め上げて白いぬめりをこそぎ取っていきます。

先端に到達すると、皮の内側に舌を伸ばし、隙間に溜ったカスも舐めとります。

目がとろんとしています。自分とカルドの恥ずかしい液を味わっているのです。ますます顔が赤くなります。

ちんぽを丁寧に舐めながら、さわさわと睾丸を揉むレッピ。慣れてます。

「はあっ、はうっ」

寸止め状態のカルドがレッピに刺激され震えた声を漏らします。

わたしはカルドの首筋から胸を舐めつつ、若い桃のようにまだ小さなレッピのお尻に手を伸ばします。

浅い谷間を指でなぞると、随分と濡れています。お尻がいやいやするようにプルプルと震えますが、手から離れようとはしません。

期待しているのです。レッピもいいところで中断されてますからね。

人差し指と中指の二本をねっとりとした中心部に伸ばすと抵抗なく呑み込まれました。７歳なのに十分開発されています。

６歳で３０センチ級を呑み込んだわたしがいうことではないですが。

「んんっ」

お尻の桃がさらに濃いピンクに染まり、ふるふると揺れます。中を指でかき出すようにくじっていると、ビクンと電気に打たれたように背筋を波打たせる場所がありました。ここがレッピの弱点です。

そこを内部から指先でトトトトトと連続で突きます。

「あっ、あああっ」

たまらず、カルドのちんぽから口を放しレッピがのけぞります。

あっ、命令違反。ダメな子ですね。

と思いましたが、もうカルドのちんぽはつるつるに磨かれていました。きれいにしたのならいいです。

「ねーさま、ねーさま」

レッピが指を収めたまま体を反転してわたしに抱き着いてきます。

見捨てられたカルドが可哀そう。仰向けに寝かせちんぽを手で擦

ってあげます。
そして登ってきたレッピとキス。チンかすとマン汁が交じり合った臭いが口腔内に広がります。レッピは必死に私と舌を絡ませます。体つきが小さいので、舌が届きにくいのです。
空いた手でレッピの胸を揉みます。少し膨らんできていますが、まだおっぱいというには平坦な胸。
でも乳首はしっかり尖っています。カルドに吸われてよく伸びています。

「ねえちゃん、おれ、おれもう」
「まだですよ」

指を入れたままレッピを少し脇にやり、カルドの顔にまたがります。
カルドの瞳にやや口を開いたわたしのまんこが映ります。

「気持ちよくして」

そのまま腰を落とします。カルドが舌を伸ばし、わたしの谷間を舐(ねぶ)り始めました。
さすが非童貞。イイところを緩急つけて責めてきます。

小陰唇の裏側から蟻の門渡り。そしてお尻の穴。舌がこじ入れられ肛門の内側を伸ばされます。そして尿道口からクリトリス。フードの隙間に舌が入り、クリトリスの根をこそぐように舐られます。

やがて膣穴に舌をずっぽり入れられました。中を舌が出入いりするのは気持ちがいいです。

「あああああああーーー！」

今のはわたしではなくレッピの声です。ついレッピに入れていた指を激しく動かしていました。

叫んだ後、バタリとレッピがベッドに倒れました。失神はしてないでしょうが、イって一時的に動けなくなったようです。

指を抜くとずぼっと音を立てて白濁した液が溢れてきました。感じすぎです。

わたしのせいなのですが。

「カルド、入れていいわよ」

「ねえちゃん！　ねえちゃん！」

カルドがわたしの腰を引っ張り、騎乗位での合体をします。立派なちんぽがわたしの膣内にその全長を没します。

「入った……。どうしたい、カルド？」

「ねえちゃんが動いて」

「うふふ、勇者ね。知らないわよ」

ちんぽをぎりぎり締め上げながら、上下、左右、回転しながらの高速グラインド。カルドの腰の上でわたしのお尻がダンスします。

さらに膣壁を波打たせて刺激を補強します。締め付ける、緩める。締め付け位置を変える。二段、三段。わたしの膣がカルドの発展途上のカリを弄びます。そして全長を呑み込み、吐き出し、また呑み込み、また吐き出し。亀頭から根本までごりごり蹂躙します。

「あ、あああ、あーーー！」

カルドがたまらず叫びます。

どぴゅ。

あ、出ました。合体後４５秒。

「前回より5秒長かったわ。えらいえらい」

「その言い方、よけー傷つく！　でも2回戦は負けない！」

「勝つとか負けるとか意味が分からないけど」

若い、というか幼いせいか回復は早いです。

今度はカルドがリードしやすいよう私が四つん這いになる後背位（バック）。

腰を上げると、ツーと膣穴から精液が垂れるのが分かりました。

レッピがようやく目を覚まし、わたしの下に体を潜り込ませ、ぶらんと重力に引かれるおっぱいをあんぐりと口に含みます。口に含めるだけ含み、舌で乳首を舐りります。

レッピにおっぱいを舐められながら、バックからカルドが合体。

たらりと涎を垂らし、お尻の穴に指を入れてきます。

悪くないけど、カルド、それ自殺行為だから。

ぱんぱんぱんぱん。

カルドが腰を振り始めました。

わたしは、少し意地悪してキュッと括約筋をすぼめ、カルドの指を直腸深く呑み込みます。本来の腸の動きとは逆方向ですが、いろいろ鍛えたわたしは、今やお尻の穴で指を吸うくらい朝飯前です。

抜けないように締め付け、指を内部に押さえつけます。

これでカルドは肉の壁越しに自分の指で自分のちんぽを刺激することになります。ついでにわたしも結構気持ちいいのですが。

さらにわたしは三段、四段と膣肉を波打たせちんぽに巻き付けます。

カルドもピストンを打ち込んできますが、むしろ自爆です。自分の指のいぼ付き多段締め膣肉に早くも降参しかけています。

「うっ、うっ、はっ、はっ」

カルドの呼吸が荒くなってきました。ピストンも早くなってきます。

レッピを胸から離させまた口を吸います。お汁の臭いはもう薄くなっていました。

片手でレッピの背を抱え、片手をレッピの股間にまた侵入させます。二本、三本。柔らかくほぐれたレッピの膣に指を挿入し、本気モードで弱点部分を強くくじります。

レッピの背がびくびくびくっとさっきより激しくエビぞります。

「あ、ああ、あああああっ！」

ひときわ高くレッピが叫ぶとぷしゅっと股間から液が少し飛び散りました。少量とはいえもう潮吹きを覚えているのですね。

「う、うう、うわあああっ！」

ほぼ同時にカルドも二度目の射精をしました。きゅうっと絞り、しばらくそのままにし、そしてぽんと緩めてあげます。肛門から指が、まんこからちんぽがスポンと抜けました。

「57秒。1分までもう少しだったわね」

「も、もう、無理……」

そのままカルドは仰向けに倒れました。レッピはすでにうつ伏せに撃沈しています。

二人とも全面降伏の体ですね。

ぐったりした二人は、しばらくするとそのまま寝息を立て始めました。こういうところはまだまだ子どもです。

清浄魔法を掛け、パジャマを着せてやりました。手足を曲げても体を揺らしても起きません。

わたしの、媚薬にも似た体液を舐めたせいもあるのでしょう。

バスローブを着直し、部屋の照明魔法を暗くします。

わたしは二人を置いて外に転移しました。砦は堅牢で魔王並みの魔族が現れない限り、中にいれば安心です。

でも、外には魔族が溢れています。特に今は夜。魔族が活発な時間です。

わたしは、不敵な笑みを浮かべ、魔の気配が濃い場所に向かい駆けだしました。

第４３話　ブレンダとの再会（前書き）

新型肺炎騒動でちょっと大変でした（今も続いていますが）。
何とか頑張ります。

第４３話　ブレンダとの再会

ここ数日雨でしたので、外の森はひんやりしています。バスローブ一枚は失敗したかも。

なんて、そんなことはありません。オルタードとはいえ勇者の体。風邪をひくなどあり得ません。

むしろ火照った体には気持ちの良い空気です。

砦は森の奥に設置しています。周囲に食糧が豊富にありますし、魔族が多く普通の人間なら間違っても来ることがない場所です。

魔族討伐軍だけは別ですが。

その場合は間違ったわけではなく、目的を持って来ているのですけれど。

枝を土台に木々の間をジャンプして駆け抜けていきます。

だんだん、魔族の臭いが濃くなってきました。

魔族の方もわたしの匂いに気が付きはじめたのでしょう。複数の影が追って来る感覚があります。

このくらい砦から離れれば、もういいでしょう。わたしはバスローブを枝に掛け、裸で地面に降りました。

べちゃ、とぬかるみに足が沈みます。雨が乾いていません。

木々の生い茂った暗い場所です。普通の人なら真っ暗で何も見えないでしょう。

ですが、わたしには昼間と大して変わりません。

木々の間から、影が現れました。一匹、二匹、三匹……。

アプ・ゴブーリ。緑色の小鬼種です。クラス2の弱い魔物です。申し訳程度にまばらな腰蓑をつけていますが、隙間から勃起した細長いちんぽを既にむき出しにしています。

もうちょっとごついのが良かったのですが、子どもたちよりは大きいですし、三匹がかりなら多少ましでしょう。

カルドとの幼いセックスで刺激されたわたしは、あそこが疼いてそろそろ我慢できなくなっているのです。

つーっと股間から濃い目の液が糸のようにあさましく垂れていきます。

緑の小鬼は夜中に人間の女が裸でいることに多少疑念を感じているようで、ある程度の距離を保ったままなかなか近づいてきません。

知恵がつくのも面倒なことです。

少し前までは、有無を言わせず取り囲んで犯してきたのに。

仕方がありません。わたしから誘いましょう。

ぬかるみに腰を落とし、ゴブーリたちに向かって大きくM字に開脚します。

左手を胸に、右手を股間に滑らせ自慰を始めます。胸をわしわしと揉みながら親指で尖った乳首を転がします。

まんこをV字に広げ、膣を見せつけながらその円周をぐるりと指でなぞります。

とろとろした露が溢れ、濃厚なメスの臭いをまき散らします。

ゴブーリたちのちんぽがビクンと脈打ち、2割ほど径が太くなります。ふふっ、効果てきめん。

「がはああ、ががが、がっ、があっ！　（でる、がまんできん！）」

「おごっ！　がおっ！　ううぅごっ！　（やる！　だす！　かまうな！）」
「ごっがはああ、おごごごっ！　（おめこしとうて、たまらん！）」

『鑑定』が使えるようになり、魔物の言葉が理解できるようになりました。
話すのは、まだ抵抗がありますが。
あまりに下品な言い回しばかりなので。

緑の小鬼たちが我先にとわたしにのしかかってきました。
前戯も何もなく、まんこにちんこを突っ込まれました。そのまま少し持ち上げられ、お尻の穴にもめりめりと挿入され、同時に口に三本目が侵入してきました。喉の奥まで突かれますが、ディープスロートはお手の物です。

清潔なんて概念がない魔物のちんぽは垢とチンカスでえずくような悪臭がこびりついています。わたしはもぐもぐと喉でちんぽを刺激しながら、舌をなめくじのように這わせて大量のカスを丁寧に舐り取ります。
ごくんと呑み込む際に、亀頭を締め付けるので、目の前を覆っている突き出た緑の腹がぶるぶると震えます。
小鬼のくせに、感じているのです。
うふふ、かわいい。

まんことケツ穴を責めている二匹はぬかるみに中腰になって腰を振っています。
わたしはM字のままちんぽを支えに持ち上げられ、がに股になっています。下手なリンボーダンサーのような姿勢。
前後を魔物にサンドイッチされているからまだましですが、街中でこんなポーズを一人でやっていたら変態だと思われそうです。

薄い肉の壁越しに2本のペニスが擦れ合います。アブ・ゴブーリたちは相当気持ちが良いのでしょう。必死でピストンしています。

でも、わたしは。

長いのはいいんですが、やっぱり細い。

三人がかりでも、しょせん小鬼は小鬼。粗チンです。カルドたちと五十歩百歩ですねえ。

と思っていたら、膣にドンと衝撃が来ました。

めりめりめりっと肉襞をこじあけられ、子宮が巨大質量で押しつぶされました。

いや、正確には、そう感じられました。

この太くてでかいのは、ハ・オルガ、ですね。

クラス3。鬼族。

ふん、いいのを引き当てましたね、分身38号。

わたしは256体の分身を同時に森に放っています。そのうちの一人が、巨大な男根を誇るハ・オルガと遭遇したのです。

分身と感覚を共有し、アプ・ゴブーリに犯されながら、ハ・オルガに犯される快感が重なります。

「あはああっ！」

声が出てしまいました。

わたしを気持ちよくさせたと勘違いしたのか、まんこを犯している小鬼がにやりと笑い、わたしの乳首に吸い付きました。レロレロと乳首を舐め上げられます。

単調だったピストンにグラインドの動きが加わります。気持ちいいところを探っているようです。

当たりがあったのでしょう。子宮の上あたりをどどどどと突いてきます。

うん、いいところを探り当てましたね。

ちょっと前までは興奮してすぐ噛みついてきたりしていたのですが、こいつらも人間の女を喜ばす術を学習しているのです。

毎日というわけではありませんが、この森で夜を楽しむのも随分長くなりました。

２５６人のわたしがおよそ２０キロ圏を徘徊するのですから、結構な数の魔物の相手をしています。

魔族側の経験値も上がっているのです。

まあ、噛まれたぐらいでは勇者の体は傷ひとつ付きません。ですが、たまに本気で捕食しようとする馬鹿がいて、その時は一瞬で塵に変えてやります。

魔物どもはそんな経験を共有し全体にフィードバックするようです。

前戯や愛撫も、どれかの個体が学習すると付近の全魔族に伝わるようです。

そして、それが、現在、人類側が魔族に追い詰められている理由です。

これまでは、魔族が集団でいたとしてもただの群れにすぎず、リポップのせいもあって自己防衛本能が薄い彼らの戦術は、ただもう力によるごり押しでした。

個々がいくら強くても、知恵に優れ組織で対応する人類にとって

本質的な脅威ではありませんでした。
兵器を作り、城塞をこしらえ、罠を張り、地形や時刻、時には風向きや明るさなども利用する。
単調な攻撃しか出来ない魔族を経験と知識と組織力でねじ伏せてきたのです。

ですが、今や魔族も学習し、知恵をつけ、役割分担を行い、指揮命令に沿って組織立って行動しています。
それは個体の単なる集まりではありません。明確な戦略と戦術を有する軍隊です。

詳しくは知りませんが、王都では魔族が要人の暗殺や市民の扇動なども行っているそうです。まるで人間と同じです。

大魔王ジャーガ。

彼女が力をつけつつあるのは間違いありません。魔族、魔人、魔王を率いる人外の王。
この時間線でも勇者が召喚され、大魔王と戦うことになるのでしょう。

４年後。この時間線で、わたし……やっぱりマサタカなのか、別の誰かが勇者となるのかはわかりません。
この世界を救う勇者が召喚されたとしたら、オルタード勇者たるわたしはどうなってしまうのでしょうか。

この５年で得た知識によれば、勇者は同時に複数現れることはなく、世界に一人だけのはずです。

過去幾度となくこの世界を救った勇者の伝説。

勇者が同じ時代に二人以上いたことは決してありません。
わたしは、ジャーガのように、あるいはお母様たちのように、魔族になるのかもしれません。
ある意味、既に人間より魔族に近いのかもしれません。魔族の森に住み、魔族と交わる女。
尻穴にも大きなちんぽがねじ込まれました。いや、という快感が重なりました。
別の分身がデカマラに貫かれたようです。
さらに小さいのや大きいのや複数や長いのや臭いのやあれやこれやが次々に重なってきます。
分身たちがそれぞれお相手を見つけたのです。
まるで交響曲のように、フォルテッシモからピアニッシモまで様々な快感が多重に押し寄せ、わたしを翻弄します。
脳が四方八方からの立体快楽で焼けます。
夜の森での大輪姦。
「あはあああああぁあぁぁぁぁああぁああぁあああああぁあぁぁぁ！！！！」
ぶしゅばああっ！
潮を吹いてしまいました。止まりません。
あ゛あ゛、ぎもぢいい、ぎもぢいいよぉ！
わたしは白目を剥いてイキました。脳が溶けていきます。

でも、緑の小鬼も、重なってくる２５６人のお相手も、まだ終わらせてはくれません。
イったままごんごんと穴という穴を突かれます。

「おぼぼぼぼぼおおおおぶっ！　イ〝ってるがらっ！　イ〝ってる〝がらあああああっ！」

口の端から涎を噴きつつ、犯され続けます。ディープスロートしながら喋るのは腹話術に近い技能です。無駄に得意になりました。

「あげっ！　（うっ！）」
「ぼうごっ！　（でる！）」
「うげげ！　（はらめっ！）」

小鬼たちがわたしの胎内深く精を放ちました。

黄色くくっさいくっさい汚液で襞という襞が満たされます。
口に突っ込んでた小鬼は射精しながらちんぽを引き抜いたので、顔にふりかかり、ザーメンパックされてしまいました。
すぐにがびがびになり、片目が開かなくなりました。

ちんぽを全部引き抜かれると、脱力しきったわたしはぬかるみにどさりと落ちました。

小鬼たちは果てましたが、分身から届く犯されている感覚は終わりません。ぬかるみで泥とザーメンまみれになりながら、アヘ顔をさらしつつ、陸揚げされたエビか何かのようにびくんびくん無様に撥ねます。

小鬼たちがあきれたようにわたしを見降ろし、一斉に小便を掛け始めました。
マーキングなのか、尿道に残ったザーメンを洗い流しているのか。
その両方かもしれません。

わたしをおしっこまみれにすると、満足して小鬼たちは森の中に消えていきました。

それからまだ小一時間、分身たちが犯され続け、わたしは一人泥の中でべちべちと撥ね続けました。

◇◇◇

昼間、魔族が周囲にいないのを確認し、子どもたちを連れて砦の外に出ます。
生きていく知恵の勉強です。
食べられる植物やキノコの見分け方。小動物の捕り方。天気の読み方。計算の仕方。文字。等々。

そして大事なのが、魔法の勉強です。

わたしの影響を多かれ少なかれ受けている子どもたちは、魔法が使えるようになっています。

まだ初歩の初歩ですが、魔法が使えない人が圧倒的に多いこの世界では強い能力です。
わたしは法国の詠唱魔法も王国の単語魔法も、帝国の奥義も勉強していませんので、勇者流というか、我流です。

詠唱魔法も単語魔法も奥義も、流派が違うだけで力の根源は同じなのはわかっています。

わたし自身、いずれも無詠唱で使えますからね。

子どもたちと今は一緒に暮らしていますが、いずれは別れなければなりません。

ある程度の年齢になれば、独り立ちです。

戦禍から救いだした以上、わたしには保護者としての責任があります。

この世界を生き抜くだけの最低限の力は付けてやりたい。

他人より強くなる意味を、勘違いさせてはいけませんが。

「ファイヤー・アロー！」

カルドが片手を伸ばし、炎の矢を放ちます。枝にぶら下げた的に見事命中。燃え上がりました。

なかなかの威力です。

カルドは無詠唱より、タランジ流の単語魔法が好みのようです。必殺技っぽいですしね。

厨二にはまだちょっと早いような気もしますが。

「だいぶ安定してきたわね、カルド」

「ふふん、もう魔物を相手してもいいんじゃねえの、ねえちゃん？えへへ」

「ダメよ。一撃で倒すにはこれじゃ弱いわ。下手に手負いにすると、手が付けられないわよ」

「えー。大丈夫だよお」
「どこが大丈夫なもんですか。魔族を舐めると死ぬわよ。せめてファイヤーウォールを二重に張れるくらいにはならないと、いざという時に逃げられないわ」
「うへえ、あれ、疲れるんだよなあ」
「ファイヤーウォール程度で疲れるなら、やっぱりまだまだよ。魔力量をもっと上げないと。はい、繰り返し」
「ええーー」

こんな世界で調子に乗ったら待つのは死のみ。カルドはどうも世の中を舐めてるような気がします。どこで間違ったのかしら。
ちょっと厳しくしないとね。

ん？

（みんな、戻って！）

わたしは肉声ではなく、子どもたち全員に念を飛ばしました。

緊急集合です。子どもたちも慣れたもので、すぐ砦に戻ってきます。

（魔物が襲ってきた？）

念を飛ばせるレッピが尋ねてきます。周囲に魔族が近寄ったら刺激しないように黙って行動することを徹底させています。
魔法についてはレッピが一番でしょう。気が弱いせいか、攻撃魔法より防禦系や補助系を主にしがちですが。

（それもあるけど、違う。人間の気配が交じってる）

子どもたち全員を砦に避難させると、わたし一人砦の天井で立ち、周囲を警戒します。砦が見つかるのはどうしようもないので、隠蔽しません。

それよりも、何が起きているのかを確認することが大事です。

概ねは既に気配で掴んでいますが。

木々の間から、青い法服の女性が転がるように出てきました。

背中が裂けて、血がにじんでいます。

砦を見つけ、一瞬歓喜の表情を見せます。しかしその後ろから牛頭の巨人……クラス４の魔族、ザ・ザダンが４匹後を追って現れました。

それぞれ、片手、あるいは両手に血まみれの法衣姿の人を掴んでいます。男性も女性もいます。

まだ生きているようですが、激しい出血で、そう長くはもたないように見えます。

歓喜の表情も束の間、女性の顔に絶望が浮かびます。距離と魔族の歩行速度からして、彼女が砦に逃げ込む前に捕まってしまうでしょう。

あ、転んだ。これは絶体絶命ですね。

彼女が顔を上げました。

つい、目が合ってしまいました。

砦の上のわたしを見て、彼女は目を見開きました。

わたしは彼女に見覚えがありました。

「ブレンダさん……」

法国の術士などを助ければ厄介ごとになるのは分かっていました。だから、見て見ぬふりをするつもりだったのですが、一晩とはいえ知り合いです。ある出来事から仲間意識も多少あります。

それに、彼女の口が動くのを見てしまいました。

『タ・ス・ケ・テ……』

第４４話　治癒魔法（前書き）

ひと月ちょいぶりの更新です。遅くなり申し訳ありません。皆様も大変でしょうが新型コロナウイルスによる肺炎の拡大の影響でどうにも時間が取れません。皆様もお体にはお気を付けください。

第４４話　治癒魔法

ブレンダさんがいるということは、お母様を殺したドッチャもどこかにいるのでしょうか？

ザ・ザダンに捕まっているのは歳若い男女ばかりで、ドッチャの姿はありません。

あの時のように幻術でフェイクをかましている可能性もありますが、全員瀕死状態ですし、そもそも化ける意味がないでしょう。

魔物に殺されかけているのが芝居だとしたら大したものです。

念のため鑑定しますが、誰も幻術を使っている兆候はありません。

周囲に誰かが隠れているような反応もありません。また、最も近い他の魔物は２キロ先です。このザ・ザダンは単発の群れですね。

ドッチャがいれば４匹のクラス４程度にてこずることはないでしょう。

それに、勇者の力を得たわたしの探査能力を欺くことは不可能です。

今となってみれば、ドッチャや主任や司政官や賢者らの強さのランクが分かります。

自分の強さを基準として。

というような周辺情報を一瞬で整理・判断し、この遭遇は罠ではなく偶然で、ブレンダさんたちは本当に危機的状況だと理解しました。

仕方がありません。

臭い仲（物理的に）ですし、見殺しにしては心が多少痛みます。

とりあえず、助けてあげましょう。
アリアガルド法国の法術士を救うなんて、現状最も避けたいことではありますが。

（みんな窓際に。今から戦うから、よく見ておくように）

子どもたちに念を飛ばします。念を飛ばせるのはレッピ以下数名ですが、受信は全員出来ます。
と同時にブレンダさんとザ・ザダンらの間にふわりと降り立ちました。風魔法を応用したエアクッションです。

ザ・ザダンが立ち止まり、なんだこいつ、というような顔で私を睨みます。
法服も、鎧兜も身に着けていない村娘。勇者の覇気も隠微な匂いも、今は抑えていますから、魔族からはごく普通の人間と認識されているはずです。
不快とあざけりを混ぜたような表情がザ・ザダンの顔に浮かびます。

近くで見ると、ザ・ザダンたちは法術士たちをただ手に握っているだけではありませんでした。
自分の腰のあたりで上下にせわしなく動かしています。
法衣の裾からちらちらと見えるのは、獣毛に覆われた下半身から伸びるザ・ザダンのちんぽ。
生殖器の竿部分です。
かなりの幅で上下にしごいていますが抜けず、その全貌は見えません。なかなか長大なものを持っているようです。ちょっと興味が湧きます。
ザ・ザダンたちは法術士たちを使ってセックス、というかむしろオナニーというべき行為をしています。だらりと脱力している法術

士たちが締め付けているとも、快感を感じているとも思えません。
長大なちんぽは血に染まり、ピストンするたびに赤黒いものがぽとぽとと掻き出されています。
膣や腸が破れてしまっているのかもしれません。

魔物にとっては穴があればそれでいいのでしょう。特に男も女も関係ないようです。掴まれた法術士たちはうめき声すら上げられず、ただまんこやケツ穴を魔物のちんぽ入れに使われているだけです。
人間オナホールですね。
まだ生きてはいますが、このままだとあとわずかでちんぽを胎内に埋められたまま死んでしまうでしょう。
嫌な死に方です。

わたしを壁にして、ブレンダさんが砦に向かって這い、距離を開けます。
血の筋が地面に描かれていきます。ブレンダさん自身もかなりの深手のようです。股間に穴が開いているのかもしれません。いや、もともと穴は3つありますが、そういう意味ではないです。
治癒魔法持ちのはずですが、おそらく既に魔力が枯渇しているのでしょう。

時間がありません。あまり簡単に倒してしまっては子どもたちが魔族を舐めてしまいそうですが、やむをえません。

わたしは手の甲をザダンに向け、人差し指だけを立てかぎ型にくいくいと曲げました。
“かかってこい”のジェスチャーです。

「げぅぐわおっ（ふざけんなオラ）！」

先頭の1匹が女性法術士の体でオナニーしたまま、わたしに突進してきました。
他の3匹は後ろでニヤニヤしています。
人間のメス一人、何の障害とも思ってないようです。
むしろ新しい玩具がネギしょってやって来た、というところでしょう。

猛烈な勢いでタックルしてきたザ・ザダンを、わざとぎりぎりで避けます。
行き過ぎて慌ててたたらを踏み、わたしを振り返ります。
絶対捕まえたと思ったのに、という表情が浮かんでいます。
クラス4の魔族の目では、わたしの挙動を追いきれないのです。

他のザダンがゲラゲラと笑い出しました。

「ぎぇはっががあ（おいおい、逃げられたぞ）」
「ぐぶえええ（ドンくさいな）！」
「ぶげえぶげえ（しっかりしろ）」
「べじぇ（くそっ）！」

ザダンが女性をずぼんと引き抜き、地面に投げ捨てました。
血まみれのちんぽが反り返っています。
現れたその長さからすると、女性は心臓辺りまで貫かれていた格好です。彼女の内臓はどうなってしまっているのでしょうか。
投げ捨てられた人体は地面に勢いよくぶつかり、めきょという鈍い響きを立てました。
よくないですね。

ザダンがまた突進してきます。今度は両手を前に出して。
ザダンの腕が急にグンと伸びました。いや、魔法で作った仮想的

な腕です。半透明の巨大なヴァーチャルアーム。
わたしの全身を握りつぶします。
いや、握ろうとしました。
ですが、その攻撃はとうに知っていました。

魔族と戦い続けた5年間です。魔王クラスならともかく、クラス5以下の魔物のスキルや戦術は熟知しています。

勇者の剣（ブレイブソード）が4本、わたしの腰を中心として水平に十字に顕現しすぐに旋回、わたしを握る寸前のヴァーチャルアームを丸鋸よろしく切り裂きました。そして魔法を斬って消滅させたのみならず、回転しつつ1本ずつミサイルのように射出します。

迫り来るザダンに4本の勇者の剣が次々に突き刺さりました。顔、心臓、ちんぽ、睾丸。

「ぐわおおおお！」

意味のない叫びを発しながら剣を生やしたまましばらく走ってきましたが、ぱあん、とわたしの直前で黒い粒子になってはじけて消えました。
勇者の剣は1本に纏まり手に戻ってきます。

「がはああ！（なに！）」

残り3体のザ・ザダンの動きが変わりました。油断ならぬ敵と認識したのです。
同じようにちんぽケースにされた法術士たちを投げ捨て戦闘モードに切り替わります。
男女を両手に握っていた1匹は、なんと長大なちんぽが2本股間

から伸びていました。体も他の2体に比べやや大きい亜種です。クラス5のガ・ザダンへ変異しつつあるのかもしれません。

この小集団のリーダーでしょう。

3匹が左右に分かれ、わたしを取り囲むように迫ります。バーチャルアームを3匹が同時に出しわたしを圧壊する作戦ですね。

このように連携して襲ってくるのが近頃の魔族の変化で、普通の人間にとっては大変な脅威となっているのですが、わたしには無力です。

そもそも同じ攻撃が通用すると思っている時点で思考力というものがこいつらにはないのです。

12本の勇者の剣（ブレイブソード）がわたしの腰を中心にジャキン、と生えました。

3匹の魔族が驚愕で目を見開きましたが、それで最後。

次の瞬間には、4本ずつの剣で貫かれ、黒い粒子となってザ・ザダンたちは消えていきました。

残ったのは地面に倒れた傷ついた法術士たち。ブレンダさんを入れて女性3人、男性3人の6人。ブレンダさんは魔物が消えたことに安堵の表情を見せたものの、這ったまま動きません。ただ血だまりが大きくなっていきます。

（みんな出てきて！　回復魔法を頼むわ！）

法術士たちは正直かなり危険な状態です。

ブレンダさんたちを助けてしまったのは余計な騒動を生むでしょう。おとなは、子どもばかりだと知ると、すぐに場を仕切りわたしたちを制御しようとするからです。

だから、今は自由に動けない程度に回復させるのが次善の策といえます。

わたしがやると一気に治しきってしまいます。治癒魔法というのものは基本的に加減が出来ません。わたしは今や普通の人間程度なら燃えカスからでも完全蘇生させてしまうほどの魔力があるのです。

そのうち魔力が戻れば自分たちで治してしまうでしょうから、その間の時間稼ぎでしかありませんけれど。その間に追い出す算段をつけておきましょう。

だから子どもたちにやらせます。

それに回復魔法の練習にはまたとない被験者です。普段は動物で練習していますからね。

わたしなら、変な風にくっついても後で修正出来ますし。

ブレンダさんは砦からばらばらと現れた子どもたちに驚きを見せました。同時に自分が大怪我をしていることを思い出したのでしょう。アドレナリンが切れたのかもしれません。体を丸めて呻きはじめました。

急ぎましょう。

結界魔法で周囲を覆います。法術士たちを砦の中に入れるのはためらわれましたし、そもそも動かすとそのせいで死んでしまいそうです。クラス４程度の魔物ならこの結界は超えられません。

法衣を切って裸にします。全員傷だらけです。腕や脚は何とか繋がっていますが、ブレンダさん含め女性は皆股間が裂けています。ブレンダさんがここまで歩けたのは大したものです。見知らぬ若い女性の一人は片方の乳房がえぐり取られ肋骨が見えています。

お尻の肉がごっそり毟られた男性もいます。そして全員、喉を斬

られています。ブレンダさんが口だけ動かしていたのは声が出せなかったからです。

それ自体は致命傷ではないですが、詠唱を封じ魔法を使えないようにされたのです。

無詠唱魔法は普通の法術士には使えませんからね。

魔法を封じ犯してなぶり殺し。なるほど、やっぱり知恵がついています。

「レッピはブレンダさん（この女の人）、カルドはその男の人、デューイはこの男の人。カナンはその女の人。シブルとテデネは二人でこの男の人。シオット、フラボ、レイジは3人であの女の人。マーサ、エント、テルケルはみんなのお手伝いを。わかったわね。急がないと死んでしまうわ」

「「「はい！」」」

さすがに血まみれの重傷者を前にしてみんな素直です。生意気なカルドもやや蒼い顔をしています。

結界の中で、子どもたちがめいめい治癒の魔法を発動させます。

数名を除き基本無詠唱ですが、ブレンダさんを含めそのことに気が付いた法術士はいませんでした。

全員、既に意識を失っていましたから。

呼吸器や心臓、内分泌系など生命維持に必要な臓器を集中的に治癒させます。骨や筋肉は後回し。

治癒魔法の得意なレッピとカナンにほかのメンバーの仕上がりを確認させます。うん、なんとか血は止まりましたね。呼吸も安定しつつあります。

少し時間が掛かりましたが、このままだとすぐに死ぬというレベ

ルではなくなりました。
欠損部位はそのままです。

小さなテントを6つ、ストレージから取り出し簡易ベッドを組み立て、障壁魔法で法術士たちを運び入れました。清浄魔法で汚れを取り、病院服を着せます。境界で着ていた貫頭衣風のじゃなく、ちゃんとしたパジャマタイプですよ。
さながら野戦病院ですね。
テントは布製ですが、全体に結界魔法を張り直しました。当面はここで療養してもらいましょう。
砦に入れる気はさらさらありません。強固なうえ中は快適なので、知られれば活動拠点にするとか言い出しかねません。

大人は嫌いです。

第４５話　はじまりのダンジョン（前書き）

緊急事態宣言延長で先行きが全く見通せませんが、なんとかやりくりつけて書いています。
しかも、エロなし回です。申し訳ありません。

※第５０話以降の描写と矛盾があった部分を修正しました。

第４５話　はじまりのダンジョン

法術士たちは欠損部位をそのままにしているので、見た目はひどい有様ですが、生命維持に必要な臓器は修復したので、ひとまず峠は越えたとみていいでしょう。

「はい、みんな、お疲れ様。ちょうど治癒魔法の実践が出来たから、今日の魔法授業はこれで終わりにしましょう。では、食事の準備を始めましょうか」

「うえ、食事……」

「ねえちゃん、俺、今メシ食う気しねえよ……」

「ワタシも……」

「ダメよ。カナン、カルド、レッピ。みんなも。戦うとはこういうこと。そしてどんな状況でも、冷静でいること。平常心を失った者、焦った者、心の弱い者から先に死ぬわ。あなたたち、これからも生き抜いていきたいのでしょう？　なら、心を強く持ちなさい。そして、食べられるときにはしっかり食べなさい」

そう、わたしはこの子たちを助ける時に確認しました。『生きたいの？』と。

その問いに、生きたいとはっきり答えた子どもたちです。だからわたしはここに住まわせ、生きる術を教えているのです。

第一、助けた時は餓死しそうだった子もいたのに。慣れというものは恐ろしい。

食事が要らないなんて。

あまり快適に暮らせるのも、人間をダメにしてしまいますね。

「わかった」
「わかったわ」
「……うん」

7歳、6歳の年長組がそういうと、5歳以下の年少チームもうなずきました。

「今日の当番は誰だっけ？」
「シブルとレイジとテルケル」
「じゃ、さっそく厨房で調理に取り掛かって。ほかのみんなは食堂の準備よろしく！」
「「「はい！」」」

珍しく声が揃いました。真面目にやれば出来るじゃないですか。

遅めの昼食を終える頃、テントの中でブレンダさんが目を覚ましました。

結界の中ですし、探知もあります。わずかな動きでしたが、分かりました。

あまり会いたくはないですが、話をしないといけません。子どもたちも午後の剣術訓練のため外に出さないといけません。アリアガルドの法術士たちはテントから出られる状態ではないと思いますが、先にくぎを刺しておく必要もあります。

「デューイとカルド、二人で剣の指導をして。わたしはテントに様子を見に行くから」
「わかった」「了解」

個室のテントの中でブレンダさんがぶるぶると痙攣していました。

魔力がほとんど回復していません。苦痛軽減のため魔力を自分の体に流しているのでしょう。

痛みは一時的に緩和されますが、治癒者自身がこれをやると魔力が貯まらず治癒魔法がいつまでも使えないので回復がかえって遅れます。せっかく喉は繋いだのに。

ブレンダさんもわかっているのでしょうが、それ以上の激痛なんでしょう。股の大穴はそのままになってますし。……痛いですよね。

仕方ない。少し魔力を分けてあげましょう。このままでは話が進みません。

「うっ、ふぅ、……ふぅふぅ、はあ、はあ、はあ」

ブレンダさんの痙攣がようやく収まってきました。痛みを緩和する魔力が増えて落ち着いてきたようです。魔法詠唱用の魔力も治癒魔法が使える程度になったはずです。

「み、導かれし癒しの使者よ彼の者に許しを与えたまえ……っ！」

治癒魔法を自己詠唱します。完治するには至らぬよう少なめに調整したのですが、そこはアリアガルドの正規軍の法術士。治癒魔法のレベルが高く、なんと欠損個所がほとんど治ってしまいました。

いささか見くびっていました。

「はあ、はあ、はあ。今回は流石に死んだと思った……」

ブレンダさんはよっこいしょ、という感じで半身を起こし、わたしに顔を向けます。

「ありがとう……。さっきはまさかと思ったけど、あんた、……ミヤビね」

「ご無沙汰してます、ブレンダさん」
「ああ、本当に助かったよ。部下たちも助けてくれたんだな。恩に着る。にしても……」
「？」
「大きくなったな。いろいろと」
身長は負けてますが、胸はわたしの方が大きいみたいですからね。
ブレンダさんも探知が使えるようです。個別のテントで仕切ってあるので他の5人の様子は見えませんが、魔法で感知したのでしょう。
「とりあえず応急処置ですが」
「生きていれば何とかなる。これでも今は教官なんだ」
軍属を指導出来る魔法レベルということですね。なるほど治癒性能が高いはずです。
「そういえば、あんたが第八境界に行ってすぐ、魔族の集団暴走（スタンピード）が起きたと思うんだが」
「そうなんですか」
わたしは何が起こったのかは知らない体をすることにしました。
拉致されただけの被験者で、なにがなんだかわからないうちにこうなったんです、というふりです。
アリアガルドの法術士相手にこちらの事情を教えるわけにはいきません。
「終結した数十万の魔族を境界の最終兵器で殲滅した『北の山脈最終防衛戦』。だが不完全な状態で作動させたため境界自身も消失し

てしまった『第八境界の悲劇』。あんた、よく生きていたね」
「爆発が起きたのは知っていますが、気が付けば、外に投げ出されていました」
「そりゃそうか。あんたは魔人に育てられた珍しい子として調査されただけだったね。何が起きたかは知らないのは当然か」
ブレンダさんの言葉に嘘は含まれていません。言葉の鑑定スキルには真偽を判定する効果もあります。わたしが勇者の転生者であったことは軍内部にも秘匿されているようです。機密事項なのでしょう。
ブレンダさんが素直な性格でよかったです。
それにしても、殲滅の爆縮（エクスタミネイタアロージョン）が秘密兵器にすり替えられているとは。隠蔽工作とはこういうものなのですね。
「『第八境界の悲劇』ということは、相当数の方が亡くなったのですか」
「ああ。そもそも境界は、魔との最前線だから緊急事態に備えていたはずだが、かなりな。もっぱら下級係員たちが犠牲になった。役職クラスは障壁魔法や転移魔法を使って脱出されたので、概ね無事だったそうだがな。あんたも魔法持ちじゃなかった……よ、な、ぁ……」
どうやら、ブレンダさんはドッチャにいいように弄ばれたあの夜の出来事を思い出したようです。急に口ごもりました。
ということは、賢者や司政官たちは生きているということですね。
エルザさんやカデナさんは無事だったのでしょうか。
わたしを嬲った技師たちは。双脚豚の子どもたちは。
気にはなりますが、いささか時間が経ちすぎています。

ずっと軍関係者との接触は避けていたので、５年目にしてあの夜の出来事が少しわかりました。

「ま、まあ今は多少魔法が使えるようだな。おかげで傷もほぼ治ったよ。いろいろとありがとうな」

「そういえば、ブレンダさん口調変わりましたね」

「今は人魔戦争だからな。修羅場をくぐれば心も荒れるさ。鬼教官といわれてるしな。くそっ、それにしても今日はしくった。あんたに会わなかったら全滅だったよ」

「人魔戦争？」

「魔族との戦いを軍ではそう呼んでいる。今の魔族は昔の魔族じゃない。組織立った軍隊だ。一つの国といっていい。正直、手ごわいよ」

大魔王ジャーガの率いる魔王軍。

勇者マサタカとして戦った１年を思い出しました。

あれは主観的には１０年以上前のことですが、客観的には今から４年後に起こる出来事です。確かに数も威力も人類側三国すべて足してさえそれを凌駕する規模の軍隊でした。

まだその規模ではないはずですが、相当強化されているということなのでしょう。

魔族のカテゴリーであるクラス４『ザ』やクラス５『ガ』シリーズは、４年後には賢者級でないと太刀打ちできないほどレベルアップするのですが、まだそこまでの脅威にはなっていないと思いますが。

それにしてもブレンダさんが教官ですか。

嘘をつけないし、嘘を見抜けない時点で向いているとは思えないですが。

失礼ながら、アリアガルドも人材不足なのかもしれませんね。

「で、あんたはここで何をしてるんだ？」

「それはこっちが聞きたい話です。ブレンダさんたちは何でザ・ザダンに殺されかかってたんですか？」

「質問に質問で返すなよ……。まあしかし、そうか……。こっちは助けてもらった身だしな。実は、新兵の野戦訓練でとあるダンジョンに潜っていたんだ」

あ、ブレンダさんたちがなぜここにいるか分かりました。でも、そこに至る経緯が分かりませんね。もう少し話を聞く必要があります。

「そのダンジョンって、ハレラニの洞窟じゃないですか？」

「何で知ってる！」

ハレラニの洞窟は、アリアガルド法国法都から最も近い洞窟で、勇者マサタカとして召喚された時の『はじまりのダンジョン（ハ・ドラゴ）』でした。全１０層。ラスボスはクラス３の炎竜です。

このダンジョンでフル、ラヴィ、アリスとパーティーを組み勇者としての初期訓練を行ったのです。

ポップする魔族は階層ごとに徐々に強くはなるもの、クラス３までに限られ、初期から中期のレベル上げに適した場所でした。

「そりゃ有名ですよ。法都に一番近いダンジョンでしょう？」

「あ、ああ、そうか。あの頃あんたは国の名前も知らない子どもだったと記憶してるが、５年も経ってるもんなあ……。確かに、アリアガルドの新兵訓練といえば、ハレラニの洞窟を思い浮かべるよな。そのとおり、教官１人、新兵５人を１チームとし、５チーム３０人でハレラニに潜ったんだ。はじめのうちは順調にプログラムをこな

したよ。ところが、第5層に降りたところで突然ガ・アッシュ、ガ・ヴァッシュの大軍が出現したんだ」

どちらもクラス5の高位魔族です。ハレラニの洞窟ではありえない高レベルですし、同時に現れる魔種ではないです。しかも出現は1体が基本なのですが。

「大軍って？」

「第5層を埋め尽くすほどだった。何体いたかはわからん。当然新兵では歯が立たん。即時撤退を決断した」

「高位魔族の大量出現、ですか」

「ああ、上層へ撤退しつつ本部に情報伝達と殲滅応援を通信した。王都のそばの洞窟でクラス5だ。即時対応が必要だった。我々は自らの撤退戦が精一杯だったしな」

魔導通信。軍用の念話です。ダンジョン内から直接外部に念を飛ばすのは無理ですから、入口に中継器を有線で置いていたのでしょう。軍のダンジョン攻略でよく行われる通信確保のやり方です。

「ところが、第4層にもガ・スフィンク、ガ・リヴァイアが現れた。挟撃されたんだ」

これもクラス5の魔族です。しかもクラス5でも強い方の。超位魔（スーパーエビル）ですね。

わたしも新米（マサタカ）勇者の時には苦戦しました。けれど今はまだオルタード勇者のわたしでも苦戦することはありません。わたし自身の経験値が上がっているのと、大魔王による魔族全体の底上げがまだ完了していないのです。ただ、着実に知恵はつけてきています。

連携して挟み撃ち。

「挟み撃ちにあい、あたしたちは分断された。新兵の練度の低いチームから犠牲になった。新兵たちも善戦したが、クラス5はダメージが通りにくいうえに数が多い。そのうち魔法切れを起こし始め、負傷の回復もままならなくなった」

「だんだん戦力を削がれていったということですね」

「……ああ、ケガで動けなくなる者も増えてきた。……ステファニー……。彼女が二つに裂かれるのを見てしまった。あれではもう生きてはいまい」

ブレンダさんの戦友さんでしょうか。

普通の人間は再生出来ませんから、二つに裂かれたら厳しいでしょうね。

わたしや、お母様は違いますけど。

まあ、そういうこともあるでしょう。

「第4層は身を隠す窪みが多いのが多少の幸いだった。あたしのチームは窪みに潜り持久戦に持ち込んだ。半日耐えしのげば法都から応援部隊が到着する。けれど、その窪みにも魔物が現れた。あたしらのチームを襲ったのがさっきのザ・ザダンだ。先に逃がしたつもりの新兵から襲われた。そのまま狭い穴倉で戦闘になった。万全な装備であれば6人掛かりなら対抗出来る魔族だが、魔力も体力も底をついていた。そしてやつらは1匹ではなかった。若い兵たちは次々に奴らに嬲られ、弄ばれた……」

あのちんぽをぶち込まれたのですね。

「奴らは窪みの奥で転移を使った。あたしたちは連れ去られ、景色

が洞窟から森に切り替わった。ザ・ザダンに転移能力はないはずだ。あれは洞窟に転移門があったということなのだろう。これまでハレラニの洞窟にそんな転移門は確認されていない。高位魔族の大量出現と何か関係があるのかもしれない」

その転移門はわたしが設置したものです。

ここから法都の様子を探るのに都合が良かったので。マサタカの時代に行ったことがある場所は、瞬間移動可能です。もちろん、転移門も置けます。それでこの森に飛ばされてきたのですね。

でも魔族が使っているとは知りませんでした。

転移門というのはいったん設置すればただの空間の穴なので、小動物なども結構な頻度で出入りするのです。洞窟の方は万一に備えわかりにくい窪み、というか小部屋に設置しておきました。

けど、こちら側の門は森に入ってすぐの大岩の上に置いてあるので、そこから洞窟に行けば小部屋の場所はばれてしまいます。

ザ・ザダンがわざわざ獲物を連れてこの森に来たということは、ザ・ザダンはこの森がホームで、こちら側の転移門からハレラニへ行き、初心者狩りの味を占めたということなのでしょう。

この森にはガ・アッシュやガ・リヴァイアなどはいないはずですから、クラス５の集団発生はハレラニの洞窟自体の異変でしょう。

しかし、洞窟に討伐部隊が向かっているということは、いずれ転移門が調べられ、ここに部隊が来ると考えた方がいいでしょう。

ふむ、ちょっと見に行った方がよさそうですね。ブレンダさんの話だと、まだ洞窟に討伐部隊は着いていないはずです。

それに、ザ・ザダンもなかなかのものを持っていましたが、ガ・スフィンクやガ・バッシュはまだ味わったことがありません。

何匹か連れて帰ってくるのも、ありですね。

第４６話　魔物との性交（前書き）

えらく時間が掛かってしまいました。申し訳ありません。再開です。

第４６話　魔物との性交

「ところで、ここはどのあたりなんだ？」
「ああ、ここは法国からは遥か南、むしろガーランド帝国に近い森です。南西に徒歩で二日ほど行けば村がありますよ」
「そうか、で、あんたはここで……」
「その話はまたいずれ。しばらくここで回復していてください。必要なら食事も出しますよ」
「そうか、いろいろあるんだな。ありがとう、ミヤビ。ひとまず世話になる。かなり強い結界を感じる。あんたが護ってくれてるんだね」
「ええ、ザ・ザダン程度なら追い払えます」
「そうか。強くなったんだな。遠慮なく、もう少し休ませてもらうよ」
「ごゆっくり」

わたしはテントを出、デューイとカルドに念を飛ばしました。今、子どもたちは砦を挟んで反対側の広場で剣の練習をしています。

（少し離れるわ。稽古が終わったら砦に戻って。何かあったらレッピに連絡させて）
（わかった）

念は転移門を通過出来るのでレッピならダンジョン内まで届くでしょう。

わたしは森に入り、大岩の上の転移門に向かいました。特に準備はありません。お母様のアイテムストレージはどこでも使えるので、

手ぶらでも大丈夫です。

門をくぐると、洞窟の中の小部屋のようになっている窪みに出ます。小部屋に魔物はいませんでした。

人の気配がないからでしょうか。

探知を飛ばすと、この４層には魔物は数匹しかいません。３層に上がったか、５層に降りたのでしょう。

探知は、ダンジョンの中では今いる層の中しか有効化出来ません。魔導通信用のケーブルを張ってあるはずですが、すぐには見つけられません。

傍受すれば、ほかの層や外の様子もわかるのですが。

王都からの討伐隊が上層で戦闘しているのかもしれません。そっちに魔物も向かっているのかも。

いずれにせよ動かなくては何もわかりません。

わたしは小部屋を出て、ひとまずこの４層を調べることにしました。

転移門は暗号化しました。

収納と同じような魔法なので、ロックすることも出来ます。

ハレラニ洞窟のマップはぼんやり覚えていましたし、探知もあるので探索に問題はありません。

ひどい有様でした。まだ生々しい血肉や内臓、骨などがあちこちにこびりついています。

それだけではなくて、ブレンダさんたちがクラス５と遭遇戦を行ってからまだ数時間ですが、既にアンデッド化している死体があり

ました。
おかげで腐臭も強烈です。

最初に探知した数匹の魔物は、これでした。
そのうち、女性の上半身だけのアンデッドと下半身だけのアンデッドがいました。
下半身だけで女性とわかったのは服を着ていなかったからです。
ちなみに上半身も顎を残して顔はありませんでした。食われたのでしょう。

もしかしたら、ブレンダさんがつぶやいたステファニーさんのなれの果てかもしれません。
全て火の魔法で完全に灰にし、聖なる魔法で消滅させました。復活したら面倒ですし。

上下層を繋ぐ階段はそれぞれ4か所あります。そのうちの下り階段の一つで通信ケーブルを見つけました。

ケーブルを掴んで探知を飛ばします。

フロア内でのマップのように鮮明な3Dではなく、ピンを打つような感じですが、2層と5層に魔物の集団の反応がありました。

5層のはもともと5層にいた魔物でしょう。2層に魔物が集まっているということは？

討伐軍が到着して戦闘になっているのでしょうか？
魔導通信は暗号化されていて、すぐには解読出来ません。直接見に行った方が早そうです。

わたしは上り階段に移動し、ひとまず3層に上がりました。

3層ではひどい死骸などはなく、ただ普通にクラス2の魔物が出ましたが、瞬殺しつつ進みます。

さらに階段を上がりました。

ひょこっと顔をのぞかせると、魔族とアリアガルド法国軍が今まさに戦っていました。

鎧姿の兵士が何人も倒れています。

もちろん魔物の死骸もいくつかありますが、パッと見た感じ法国軍が押されているようです。

さすがにクラス5相手では正規軍でも荷が重いようです。

討伐隊は陣形を取って突入してきたはずですが、すでに分断され、少人数に分かれて各個戦闘状態になっています。

ひしゃげた法国装備品の盾や兜もあちらこちらに散乱しています。前衛が既に相当損耗しているようですね。

それでも総崩れになっていないのは、さすがです。魔法に秀でた法国軍ならではです。

倒れている兵士の鎧兜を剥がして自分に装着しました。手で剥がしたら大変なので、転移を使いました。剥がして元の持ち主が下着姿になったので、彼の腹が破れているのが目視出来ましたが、今は治してあげるわけにはいきません。腸がはみ出たぐらいでは死なないでしょう。鍛えてるはずですから。

ちらっと股間を見ましたが、ふくらみは大したことはありませんでしたし。

たまにいるんですよね。死にかけているのにフル勃起している人。

いえ、死にそうだからこそ、子孫を残そうとするのかもしれませ

ん。そのくらい精力の強い人なら、すぐに全快させてあげるんですけど。

あの子どもたちのように。うふふ。

さすがに背が低くてサイズがあってませんが、この混戦ならごまかせるでしょう。

たまには魔法抜きで暴れるのもいいかもしれません。

落ちていた斧と盾を装備します。

がん！
ごきぃ！
ばごん！

四つ足の魔物ガ・スフィンク、大蛇のような魔物ガ・リヴァイアをなぎ倒します。

どっちもそそられる魔物ではありませんでした。

獣タイプでも、アスモーデのような牛馬タイプはいいものを持っているのですが、スフィンクは猫系なのでいまいちです。

リヴァイアに至っては蛇なので、なんだか細い角みたいで、どう見ても気持ちよさそうではありません。

クラス５ならもうちょっと凶化しているかと思いましたが、全然そんなことはありませんでした。

やはりザダンは惜しいことをしました。でもあの森がホームなら、いずれまたリポップするでしょう。クラス４だから、少し先になりそうですが。

第5層にいるはずのガ・ヴァッシュ、ガ・アッシュに期待ですね。

ということで、わたしは遠慮なく魔物を斬り捨てていきます。

１０匹目あたりで斧が折れました。やわですねえ。

「斧貸して！」

「お、おう！」

横で踏ん張っていた兵士の背中から斧を抜きます。どうせ両手で盾を押さえて壁役になってましたから、斧は振るえません。兵士も文句を言わず貸してくれました。

わたしの勢いに反論できなかっただけかもしれませんが。

スフィンクの首を飛ばし、リヴァイアを輪切りにします。

「なんという。まるで鬼神だ。あんな兵がいたか？」

「奴に続け！　押し返せ！」

「右翼法術隊。聖魔法、斉射！」

「行け行け行け行け！」

「ゴーゴーゴー！」

形勢逆転です。後は任せましょう。

わたしは敗走しはじめた魔物を深追いするような振りで群れの中に突っ込みました。

背後から「先行しすぎだ！」と叱責が飛んできますが、気にせずに。

何匹か斧で斬り捨てつつ、鎧兜を残して４層への階段入口まで転移。そのまま下に降ります。

５層にもクラス５が出た報告は受けているはずですから、法国軍も降りてくるでしょう。
前衛がかなり損耗したので、戦力補充後でしょうけど。
２層で既に押されてた以上、更に減った戦力で連戦するような無謀なことはしないでしょう。

ということで、多少の時間はあるはずです。

ほぼ空の４層はさっさと通過し、５層に降りました。おお、います。いますいます。たくさん。

クラス５の中でも特にやっかいな高位魔、ガ・ヴァッシュとガ・アッシュです。どちらも背の高い筋肉質の男性の人型魔物ですが、ヴァッシュは単眼、アッシュは顔が鷹のようになっています。ヴァッシュには３つ目や５つ目などの亜種がいます。なぜ奇数になるのかは知りません。

そしてガ・アッシュは魔法耐性が高く、ガ・ヴァッシュは物理耐性が高いという特徴があります。顔以外の姿は双方よく似ていますが、性質が真反対のため同時に現れることはほとんどありません。
もちろんこんな大軍が一度にというのもあり得ないことです。この階段口から見えるだけでも双方２０体はいます。５層全体に何体いるのかわかりません。

ガ・アッシュが５体同時に出た時は勇者パーティーでも苦戦しました。大魔王の影響で魔物の強さが底上げされ耐性がカンストしていましたし、勇者パーティーも未熟でしたから一概に比較は出来ませんが。

あの時はアリスが瀕死の重傷を負ったのでした。

アリスのことを思い出した時、心がざわっとしました。５年前に見たお腹の大きなアリス。いや、魔人化したママーリス。

あの姿はマサタカのわたしには衝撃でした。ミヤビのわたしには関係ない人のはずですが、マサタカと記憶が共有しているせいか、懐かしさと裏切られた憎しみが心の奥でどろっと固まっています。

忘れなさい、わたし。マサタカの気持ちは封印です。

しかしクラス５が見えるだけでも４０体。ラストダンジョンで３０体のクラス５に大魔王討伐軍が３割損耗したことを考えると、今の法国軍には荷が重いのではないでしょうか。

高位魔であるガ・ヴァッシュとガ・アッシュ相手では。

それに、現在のこの光景を見て冷静に対応できるとは思えませんし。

ガ・ヴァッシュとガ・アッシュは裸に剥かれた法国兵を体の前にぶら下げているのです。

そう、ザ・ザダン同様太く長いちんぽで貫き、ケース兼肉の盾にしています。貫かれているのは若い男女。訓練に参加していた新兵でしょう。ザダンほど凶悪なちんぽではないので、膣や肛門が裂けているわけではないようですが、その分生々しくて卑猥です。

器用にちんぽを波打たせ、ずぶずぶと抜き差ししています。痛みから逃れるためでしょう、人間たちが魔物の首に手でぶら下がったり、腰に足を掛けたりしているので出し入れが可能なのです。

それは見た目は恋人とのセックスのようですが、犯されてる方は快楽どころではないようです。ただ、痛みから多少でも逃れること

に必死なのでしょう。喘ぎ声も聞こえていますが、快感の喘ぎでは全くありません。顔が蒼白で死にそうになっています。特に男性がひどいです。

まああんなに太くて長いものを肛門にねじ込まれたら心も折れるでしょうね。初めての経験でしょうし。

それにしてもザ・ザダンといいこいつらといい、魔物の間で人間をちんぽケースにするのが流行っているのでしょうか？

人間の数の方が少ないのでちんぽを余らせているヴァッシュやアッシュがちんぽケースを嬲っている魔物に何か話しています。重なって聞こえる上に反響するので聞き取りにくいですが、早く代われと文句を言っているようです。

無理やり剥ぎ取らないのは、そうすると人間が裂けて死んでしまうからでしょう。

魔物の足元にばらばらになった手や足がいくつか転がっています。何人か殺してしまった後なのでしょう。

ブレンダさんのチームや４層のアンデッドを除いても２０人以上残ったはずですが、数えたらちんぽケースにされているのは１５人しかいません。

というような様子をざっと見わたしたわたしはいそいそと服を脱ぎ全裸になると、階段口から出ました。

既にわたしの股間からは大量の汁が垂れています。ぶんと雌の匂いがダンジョン内に漂います。

魔物たちが気がつかないはずはありません。

わたしの方を魔物が一斉に向きました。と、ちんぽケースにあぶれていた魔物たちがすかさずダッシュしてきます。

一番乗りでわたしを担ぎ上げたのは単眼のガ・ヴァッシュでした。雄たけびを上げながらてらてら光る亀頭をわたしのまんこにあてがい、そのまま一気に貫きました。

いいっ！　いいよっ！

硬く、大きくカリが開いた長大なちんぽがゴリゴリと膣のひだを削りながら子宮を突き上げます。

これです、これ！　あああああっ！

ガ・ヴァッシュは意味不明な声を発しながら私の腰を掴んでバンバンバンと高速ピストンします。

襞がぺしゃんこに均され、また抜かれると同時にざわざわッと立ち上がり、すぐさまローラーが押し通るように平たくされます。

鋭い爪の付いた両手で二つの乳房をぎゅううッと握りつぶされます。

でも、勇者の肌が裂けたり貫かれたりすることはありません。わたしの物理耐性はガ・アッシュのそれすら遥かに上回っているのです。

乳房もヴァッシュが手を離せばぽんと元に戻ります。張りのある乳房に乳首がむくむくッと起き上がっています。本当に潰されてしまうようなことはありません。

同様に凶悪なちんぽでどんなに乱暴にされても私の膣肉は傷つくことはありません。

逆に、内臓をひっくり返されるような高速ピストンが快感を生み、

隠微なお汁がとめどなく溢れます。

いつの間にか複数の魔物に取り囲まれていました。順番待ちですね。

なかなか賢い、というか紳士的な魔物たちです。これも大魔王の影響でしょうか。

周囲にそそり立つ立派なちんぽたち。これは全部味わわないともったいないですね。いつ法国軍が下りてくるか分からない今、一体に時間を掛けるのは悪手でしょう。わたしはぐっと膣に力をこめ、内部を複雑にグラインドさせました。立体刺激です。

「おぎゃほげっぐおあああ（うおおたまらん）！」

ガ・ヴァッシュが中であっさり果てました。接続部分からぶしゃあああっと精液が噴き出します。大量で膣内には入りきりません。

ガ・ヴァッシュが仰向けに倒れるこみ、ちんぽがずるっと抜けました。失神したようです。

ぽっかり開いた膣からどぶんと残りの精液が垂れました。

宙に浮いていたわたしは支えるものが無くなったので落下しますが、地面に足がつく前に別の手で掴まれまた持ち上げられました。

今度はガ・アッシュです。鷹の双眼が狙いをつけるようにすうっと細くなります。

どすん！

2本目ちんぽきたーーー！！

ガ・ヴァッシュよりちょっと短いですが、その分太いです。めりめりめりっと肉が広げられます。

くうっ！　これもいいちんぽです！

それにしても、マサタカの意識が残っていたらどう思うでしょうか。境界では無理やり犯されメスイキしたと落胆していましたが、今のわたしは自分から積極的にセックスをしています。

だって、そのように調整されたのですもの。

わたしの勇者の力の源泉はセックスの快楽です。性衝動を抑えることは出来ません。

その意味では、マサタカの意識が消えたのは彼にとって幸いだったのかもしれません。

第４６話　魔物との性交（後書き）

次はもう少し短いインターバルで公開できるように頑張ります。

第４７話　フルとの遭遇（前書き）

ちょっとずつですが、ペースが上がってきました。
頑張ります。

第47話　フルとの遭遇

わたしが立ったままのガ・アッシュに両手両足を絡めて太いガチガチちんぽを味わっていると、お尻を少し持ち上げられました。角度が変わって膣の前側をゴリゴリ削られるような刺激が襲います。実際に削られることはないのですが。

ぐっと肛門に圧力が掛かります。

「はうあああああっ！」

直腸をこじ開けて、長いちんぽがみちみちとねじ込まれました。深いです。

後ろを振り向くとこちらもガ・アッシュでした。順番待ちをしていたようですが、我慢をしきれなかったのでしょう。

2体がずにゅ、ずにゅと前後でリズムを取るようにしてわたしを犯します。まるでシーソーです。突かれるたびに内臓が前へ後ろへ押しのけられます。

薄いおなかの筋肉越しにちんぽの形が分かります。ぐねぐねと蠢きます。

ぼたッ、ぼたッと重い音を立てて汁の塊がダンジョンの床に落ちます。出し過ぎですわたし。恥ずかしい。

いつの間にかわたしは前のガ・アッシュを足ではさみ、後ろのガ・アッシュに背中をもたれ掛け後ろ向きで顔の羽毛を撫でまわしていました。後ろのガ・アッシュはわたしの胸を背後から鷲掴みにし、

ゴムボールのように伸ばしたり押しつぶしたりしています。ガ・アッシュは鷹頭ですが。

乳首が固く固く尖り、かぎづめでゴリゴリ刺激されます。

ますます隠微な臭いが濃厚になり、周囲のちんぽケースを犯しているヴァッシュやアッシュが雄たけびを上げ腰をさらに高速に振りだしました。ちんぽケースにあぶれた魔物たちは自慰を始めています。

魔物の自慰。目撃したことは何回かありますが、こんなに多くの魔物が一度に自慰をしているのは初めて見ます。

ある意味知恵の産物ですから。オナニーって。想像力がなければ単なる刺激だけでそうは抜けないものです。

ちんぽケースにされた人間たちは苦悶とも、愉悦とも取れる表情で呻いています。多分どちらもなのでしょう。人外のちんぽをあんなに高速で出し入れされたら、普通の人には気が狂うほどの刺激でしょう。快感と苦痛の波が交互に襲っているはずです。

どぶうっ、じゅぶっと周りで射精音が響きます。ちんぽケースたちが少し浮いたようになって、股間から白濁液を噴き出します。射精の勢いで押し上げられたのです。

わたしの頭上にも魔族の精液が降ってきました。髪や顔にべったりと糊のように貼りつきます。

オナニー組がぶっかけてきたのです。

白目を剥いたちんぽケースたちが床に投げ出され、すかさず別の魔物が拾って己のちんぽにねじ込みます。

意味不明な悲鳴をちんぽケースたちが上げますが、魔族たちは意

に介しません。ずぶりと差し込んでまた持ち上げます。

オナニーで射精した魔族が慌ててちんぽケースの方に駆け出しますが、もう全部別の魔族に取られてしまいました。しまったというように頭を抱えます。

魔族にも間の悪いものがいるようです。わたしはちょっとおかしくなりました。

笑ったのでつい腹筋に力が入ったのでしょう。わたしをサンドイッチしていた二体が「おぎゃほげっぐおあああ（うおおたまらん）！」とシンクロするように叫び、同時に射精しました。子宮と腸を噴き上げる圧力に襲われます。少し浮きながら、精液が胎内に充填される満足感と射精で脈打つちんぽを味わいます。

ずるるっとちんぽが抜けました。肉襞をこそげて持っていかれるような快感がたまりません。

また私は地面につく前に持ち上げられ、精液と淫液で白く塗りつぶされた股間を2本の長いちんぽで前後から貫かれました。今度は2体とも単眼の魔物ガ・ヴァッシュです。

「はあああっ」

立て続けに嵌められ快感の上書をされ、だんだんわたしも余裕がなくなってきました。

さすがはクラス5最強ランクの魔物です。

力業ではありますが、快楽の引き出し方が桁違いです。神経の奥底から強引に掻き出され、感度が無限に上昇するようです。

さっきちんぽケースを取られた魔族の1体がわたしに駆け寄って

きました。これもガ・ヴァッシュです。
まったく間の悪い。もうまんこもケツ穴も埋まってますよ。

ずぶずぶずぶっ！

そうあきれていたら、長いちんぽをさらに長くして私の口に突っ込んできました。長くなった分細くなっており、自在に曲がるようです。まるで触手です。

そのくせ、カリだけは大きく広げ、わたしの喉穴を無慈悲に削りにかかります。長い触手を波打たせ、わたしの喉を蹂躙します。有線ミサイルのような遠隔型ちんぽです。

わたしから生まれる隠微な臭いはさらに濃厚に充満し魔族の性衝動をますます強めます。

また絶叫しながら、三体の魔族が体の奥深くで射精します。喉のカリが抜けるとげぶっと嘔吐したかのように口から精液が溢れました。

また地面に落ちる前に別のちんぽをねじ込まれます。あああ。

周囲でオナニーしている魔族も一向に減りません。何回抜く気なのでしょうか。

ちんぽケースたちはどうなったのでしょうか。あっちも交代で犯されているのなら、もう壊れているかもしれません。

一体何匹に犯されたのか、もう数えるのが億劫になって来ました。
快感に身をゆだねてしまいます。

どのくらいの時間が経ったのかも分からなくなっていました。

「破魔の輝き持て清らかなる乙女の吐息」

清浄魔法が辺りを包みます。

はっと正気に戻りました。

アリアガルド法国の討伐隊です。兵を整え降りてきたのです。

つい快楽に負け引き際を逃してしまいました。

仕方がありません。ここは犠牲者のふりをしましょう。

いくら訓練中の新兵といえど年齢が合わないですが、大人びてみえるわたしです。おまけに今の惨状ならなんとかごまかせるでしょう。

「万象の伝わりを隔て森羅の理（ことわり）を離せしむ」

「立ち昇る芽吹きの宴よ太陽のもとに集い賜え」

魔法障壁に光の加護です。

「魔族を押し込め！　救出が最優先だ！」

隊列を組んで進んできたのは聖遺物（アーティファク）の複製（もどき）の盾を装備した白銀の騎士団です。驚きました。近衛騎士隊です。さっき上で戦っていたのは法国軍の防衛兵隊でした。

クラス5を相手にするには力不足だと判断したのでしょうが、近衛を動かすとは。討伐隊のボスは相当大物のようです。

ガ・ヴァッシュもガ・アッシュも猿のように射精している場合ではないと判断したのでしょう。清浄魔法で淫臭が消えたこともあるのでしょう。

わたしやちんぽケースたちを放り出し、近衛騎士たちをロックオンします。

アリアガルド法国の近衛騎士の装備は聖遺物（アーティファクト）の解析によって得られた剣と盾、そしてフルプレートの鎧です。

本物の聖遺物（アーティファクト）ほどの強力な加護はありませんが、マサタカの記憶ではクラス４辺りの魔物は歯牙にもかけませんでした。

あの頃より今の魔物のパワーは落ちてますから、クラス５にも対応可能でしょう。

さらに魔法で光の加護を強化していますから、対抗戦力としては十分なはずです。

事実、魔物をじりじりと奥へ押していきます。わたしを含めた犠牲者は騎士たちの壁の内側となりました。

「顕現せよ大いなる癒しの使者」

ひときわ年若く、けれど冷静な声で詠唱が響きました。高位魔法に属する範囲回復魔法です。

祝福に包まれると、ちんぽケースにされ瀕死の状態だったにもかかわらず、彼らはすぐ起き出しました。

驚きました。幼い少女の声でしたが、魔力の質が相当高いようです。

何人もの青服が貫頭衣のような簡易な服を持って駆けてきます。わたしにもかぶせられました。

境界で着せられた病院着に似ていますが、サイドもしっかり縫製してあるのでかなりマシです。
境界の病院着は誰の趣味だったのでしょうか。

下着はないので、股間がスース―するのは相変わらずですが。

「16人の生存を確認！」
「ただちにダンジョン外へ運べ！」

わたしたちは通常の鎧を付けた防衛兵に肩を抱かれ、後退します。
近衛騎士がいるので、防衛兵は救出任務にあたるようです。

青服の法術部隊の横を通り抜けます。一人だけ白い法服の男性がいました。顔はフードで見えません。
一人、場違いに背の低い法術士がいました。フードをかぶっていますが、美しく長い金髪が胸まで垂れています。少女です。
この少女がさっきの全体回復魔法を唱えたのでしょう。

彼女のそばを通り抜ける時、少女がはっとしたように私を振り返りました。
わたしもつい目を合わせます。

！　お母様！

（フル！）

心の奥底で小さな叫びが聞こえました。マサタカの感情が一瞬感じられましたが、またすぐに闇に消えていきました。

その少女は幼い容貌でしたが、お母様に似た顔立ちをしていまし

た。瞳は金色ではなく普通でしたが。
お母様よりも、マサタカの記憶にあるフルを少し幼くした方が確かにそっくりです。フルは今１０歳のはずですから、年齢を考えるとこの容姿はピッタリでしょう。

わたしも１０歳ですが、調整された今は年齢より４、５歳上に見えます。

目が合っていたのは一瞬でした。わたしは歩みを止めずさっと前を向きます。

「フルフール。ウィルウィルス。生存者についてダンジョンを出ろ。魔に染まっていないか救護所で念入りに確認せよ」
「はい、司祭殿」

やはりあの少女はフルです。
白い法衣の男が司祭ですね。
彼女ともう一人、大人の青服がしんがりを務めついてきます。

ウィルウィルス……。

記憶にあります。アリアガルドの高位魔術師。大魔王ジャーガを倒した宴の席でフルに酸を投げた犯人です。

そして近衛騎士を動かせた理由も分かりました。大聖会の司祭が指揮しているのです。
法都直近のダンジョンに沸いたクラス５を相当の脅威と認識したようです。

ああ、そうですね。魔物を退治した後、ダンジョンコアを破壊す

る必要があるからですね。

ハレラニ洞窟のコアはクラス３までした生み出せないはずでした。一度ダンジョン化したコアが再度成長することはないので、クラス５のコアがどこからか持ち込まれたのでしょう。

大魔王の仕業なのでしょうか。

クラス５のコアを破壊するには相応の法力が必要です。賢者か、大聖会の司祭でないと無理でしょう。

階段を上ります。わたしはともかく、瀕死だったちんぽケースたちが、肩を支えられているとはいえしっかりとした足取りで進んでいくのにまた驚きました。

性器や肛門、下手したら内臓や骨盤すら傷めたはずですが、もう治っているようです。

フルの癒しは既に高位法術士クラスに達しているようです。

外に出ると、簡易テントが張られていました。ベッドもあります。３０人分用意されていますが、およそ半数しか埋まりません。

わたしも寝かされました。

「楽な姿勢で結構です」

ウィルウィルスがわたしたちの前に立ちました。ついベッドから降りようとしたものが何人かいますが、それを制しました。

新人からすればかなりの上官に当たるようです。

周りが半身だけ起こした傾聴姿勢になったので、わたしも同じ格好を取りました。

「皆さん、今から魔の侵食がないかどうか確認します。法都に魔に染まったものを入れるわけにはまいりません。必要な確認ですので、恥じらわずに協力してください」

ウィルウィルスがそう諭すように語ります。

新人たちもこの確認の必要性は知っているのでしょう。黙ってうなずきます。

「では完全に横になり、目を閉じて足を開いてください。男性はわたしが、女性は女性法術士が診ますので楽にしてください」

どうやら犯された場所を直接調べるようです。逆らって注意されても困るので、おとなしく目を閉じて足をM字に開きます。

「ふむ。相当溜まっていますね。フル、魔法障壁と清浄魔法の重ね掛けで掻き出せますか？」

「大丈夫です、学士様。全員一度に掛けられます」

「皆さん、少し穴が拡がる感覚があると思いますが、しばらく我慢してください」

「万象の伝わりを隔て森羅の理（ことわり）を離せしむ。破魔の輝き持て清らかなる乙女の吐息」

フルが詠唱した途端、まんこと肛門がグイっと奥まで広げられました。遅れて食道が押し広げられます。気管が押されて息が出来なくなりました。

「喉を犯されたものがいるようです。呼吸困難になるので、急ぎます」

「ああ、頼みますよ、司祭の秘蔵っ子」

障壁魔法が穴の内側に貼りつき、ラップを剥がすようにぺりぺりと奥から捲られていく感覚が始まりました。これは、境界で司政官にやられた清浄方法と同じですね。

入口までぺろんと捲られ、障壁の膜につつまれた魔物の精液がズボっと引っ張り出されました。

大きなちんぽを抜かれるような快感が背中を駆け抜けました。

あちらこちらでうっとかはっとかという声が短く聞こえますが、皆それ以上は飲み込んだようです。上官の前で快感にあえぐわけにはいきませんよね。

「随分溜まっていましたね。管理物質は魔法障壁で囲ったまま収納を」

「隔絶された空虚との繋がりを許したまえ」

またまた驚きました。魔法障壁を保ったまま収納魔法が使えるとは。魔法の入れ子（ネスト）なんて賢者級ではないですか。

「これで確認が出来ますね。では」

また短い悲鳴が傍で上がりました。魔に侵されたかどうかの調査が始まったようです。

第４８話　賢者再び

一人当たり結構な時間を掛け診断しています。魔に侵食されているかどうかは直接犯された場所を調べて確認するようです。

男性をウィルウィルスが、女性をフルが診ています。

診断されている兵が「うっ」とか「ひっ」とか短い悲鳴を上げます。二人がゴレムペニーのような道具を手にしているのが横眼に見えました。あれで魔の気配を測るのでしょう。

だんだん悲鳴が近づいてきます。もうすぐわたしの番です。

え、ちょっと待ってください。フルってお母様の若い時ですよね。１０歳のお母様にわたしの使い込んだまんこをお見せするということですよね。見せるだけじゃなくて広げられてゴレムペニーを入れられるんですよね。まんこだけじゃなくてケツ穴にも口まんこにも。

なんでしょうこの感情。悪辣な罠にはまった恥辱のような、聖母に癒される至福のご褒美のような。意識すればするほどドキドキしてきました。

しかも心の奥ではマサタカの、フルへの愛情と裏切られた憎悪が黒い火のようにチリチリとくすぶっています。もう、ＮＴＲで脳破壊されたマサタカの感情なんて、わたしには不要です。完全に消えてほしいものです。

まあ、それを望むのは無理なのもわかっています。マサタカとわたしは同一個体。表面的な人格こそ違いますが、記憶も自我も一体なのですから。

マサタカの人格が崩壊し、わたしが前面に出ていますが、マサタカが死んだわけではありません。
マサタカが死ぬ時はわたしも死ぬ時なのですから。

「失礼します」

わたしのまんこにたおやかな指が添えられ、くぱあと広げられました。ちゅぽんと恥ずかしい液体が溢れてこぼれます。

「あら」

朗らかに笑うような口調で驚かれ、わたしは真っ赤になりました。お母様に恥ずかしいところをお見せしてしまいました。

「ローションは必要ありませんね。診断器具を挿入します。痛かったら手を上げてください」

お母様……フルの優しい声が心地よいです。幼いながらも懐かしい、5年ぶりにお聞きするお母様の声です。
ずにゅにゅ、とゴレムペニーが膣を割って入ってきました。お母様に犯されていると思うと、つい興奮してしまいます。クリトリスがはしたなく立ち上がり、陰唇が膨らむのが自分でもわかります。

「そんなに緊張しなくても大丈夫ですよ。すぐに済みますから」

ゴレムペニーが子宮口を押し上げます。最奥まで到達しました。さっきの魔物相手だとここからさらに胃や心臓まで押し込まれましたから、随分優しい挿入です。乱暴で異常な性交に慣れすぎてしまったかもしれません。
多分、普通の人間同士のセックスよりもゴレムペニーは大きくて

長いと思われます。他の兵たちは悲鳴を上げていましたし。

わたし基準では優しい疑似ちんぽは、ピストンすることもなく最奥でしばらくとどまると、ずるずると抜かれていきました。

「問題ありませんね。破魔の輝き持て清らかなる乙女の吐息」

フルは魔法でゴレムペニーを清浄すると、今度はケツ穴にあてがいました。

「もう少し、膝を持ち上げてください」

わたしはいわれた通りにします。腰全体がやや上向きになり、まんこが真上、ケツ穴が斜め４５度ぐらいを向きます。

肛門がぐいと押し広げられ、ゴレムペニーが腸を犯します。先端部が伸びて大腸を逆に上っていく感触があります。

「ちょっと苦しいかもしれませんが、我慢してください」

フルはそういいますが、まったく苦しくありません。こっちもさんざんデカくて長いので犯されていますので、耳掃除をされているようなくすぐったさと気持ちよさです。

このままずっとフルにケツまんこをいじっていてほしいくらいでしたが、やがて先端部が順方向に下っていき、ゴレムペニーに格納され、太いうんこをひりだすような感触と共に抜かれてしまいました。残念。

「こちらも問題なし。破魔の輝き持て清らかなる乙女の吐息」

フルがゴレムペニーをもって頭側に回ります。最後は口まんこで

すね。わたしは膝を下し、口を大きく開けました。

「あら、あなた……」

フルがわたしの顔を見て、驚いた表情をします。お母様の顔、記憶にあるフルの顔を随分幼くした、けれど美しい容貌です。その美少女が、わたしを見て目をぱちくりとさせています。とても可愛い。

「珍しい髪の色ですね」

そうです。マサタカと同じ黒い髪。この世界では日本人の黒髪は珍しいのです。黒に近くても、青みがかっているとか、緑がかっている髪が多く、カラスの濡れ羽色のような真っ黒の髪はほとんどいません。

「よく、いわれます」

「ごめんなさい、あまりに素敵な髪だったので。すぐに検査しますね」

わたしは貴女、……フル、……お母様のような金髪に憧れます。

「息がしにくいかもしれませんが、我慢してください」

喉奥にゴレムペニーが挿入されました。首半ばまで押し込まれ、そこからまた先端部が胃まで伸びます。

これも平気です。口が裂けるくらい太いのを呑み込んだこともあります。まだ小さかった頃、顎を外されたこともありましたね、そういえば。

しばらくすると、ゴレムペニーを抜かれました。

「問題ありません。これで検査は終了です。体調が悪ければ、このまましばらく寝ていても構いません。動けるようなら、向こうのテントに軽い食事と着替えの法衣を用意しています。官姓名の確認もそちらです。上官たちも待っていますから、早く安心させてあげてください」

フルはそういうと、清浄魔法を掛けながら次のベットに移っていきました。

新兵ではないことはバレなかったようです。セーフです。

ベッドを降り、隣のテントに移ります。まだ大半は寝ていますが、数人は起きて隣に移動したようです。多分教官でしょう。新兵よりは荒事に慣れているはずですから。

途中ウィルウィルスとすれ違いますが、特に何も言われません。診断に集中しているようです。

テントをめくり、隣のテントに入るタイミングで転移しました。

ハレラニの洞窟です。5層に服を置いたままです。どうしようかと思いましたが、法国軍に見つけられて持ち帰られても嫌です。下着だってあるのですから。

戦闘継続中のはずですし、ダンジョンコアの破壊もしないといけませんから、まだ時間はあるでしょう。

わたしは第4層の転移門に転移しました。ダンジョン内への転移は位置決めが面倒ですが、転移門をポータルにすれば確実です。

そこから階段を使って5層に降りました。階段口のそばに畳んでおいていた服は、法国軍に踏まれてぐちゃぐちゃになっています。足跡だらけで泥だらけですが、一応全部ちゃんと残っていました。

再生（リプロ）できれいに戻します。

病院着から普段着に着替え、４層に戻ろうとしたところで、奥の方で爆発音が聞こえました。遅れて火の手が上がります。いえ、火炎流です。急激に炎の壁が迫ってきます。慌てて階段に隠れ、シールドを張ります。

ごごおおおっという轟音と共に視界が炎の奔流で埋め尽くされます。その中でシルエットのように見えるのはガ・ヴァッシュとガ・アッシュでしょう。何体もが炎で押し流されるように目の前を横切っていきます。

やがて、炎の奔流が通り過ぎ、収まったのを見て、シールドを解除します。服は蹴り飛ばされて階段口からはみ出ていましたので、もう少し戻るのが遅れたら危うく燃やされるところでした。逆に病院服はわざと外に残して燃やしました。証拠隠滅です。

話し声と足音が近づいてきましたので、階段に身を潜め、不可視（インビジブル）を発動します。

「ふむ、光魔法にタランジのバーニング・ボルテックスを混ぜてみたが、ダンジョン内では使い勝手が良いな。光魔法は直線的にすぎる。やはり殲滅系の魔法はタランジに一日の長があるな」
「さすがは司祭様です。新魔法の開発にもご熱心ですな」
「これでも元技術畑だからな。任を外され今は魔人狩りが生業だ。ドサ回りなのは今も昔もあまり変わらんがな」
「ご謙遜を。大聖会での祝福は司祭様の独壇場ではありませんか。それに法理大学も」
「つまらぬことだ。……法理大学については確かに来年は少しは面白くなるかもしれんな」

「飛び級入学予定のあの娘ですな。司祭様のお気に入りともっぱらの噂でございますよ」
「それにはまだいろいろ足らん。伸びしろには期待しているがな」
「なにせ戦力不足です。魔族がじわじわと強くなっていますし。ハレラニにクラス5が出るご時世では枕を高くして眠れやしません」
「そうだ。才は早く熟さねば。大魔王の動きは早く、人類には時間が足りない。……オレが顔を変えたわけが分かるか？　ドッチャ」
「いえ……？　第八境界で大きな傷を負われたから……、ではないので？」
「オレは過去を捨てたのだよ。賢者ダムス・アマル・ドゥエスガはオルタード計画と共に死んだ。今は司祭ダムス・アマル・ドゥエスガとして召喚計画を進める。その決意の証だ」

わたしは陰から二人を見つめていました。あいかわらず伸ばした茶色の髪を後ろでくくっている青い法衣はドッチャです。そしてその横にいる白い法衣を着た男は、第八境界にいた賢者ダムスではなく、マサタカの記憶にある魔王討伐連合軍の戦略統括ことダムス司祭の顔をしていました。

顔を変えたのですね。第八境界では同一人物だと気づけなかったわけです。

オルタード計画とは、わたしのオルタード勇者化計画のことでしょう。あれは破棄されたのですね。賢者自身がわたしを爆殺したのですからそれも然りです。
あの時賢者が言った『お前は俺のものだ！』ってどういう意味だったのでしょう。心中でもするつもりだったのでしょうか。
わたしの再生（リプロ）のことは知らなかったのかもしれません。

だとすれば、賢者を捨てたというのも納得です。賢者は賢者なり

に、わたしに対して真剣だったのでしょう。オルタード勇者を大魔王に対する決戦兵器として認めていたということですね。

にも拘わらず、わたし、いえ、マサタカは怒りに任せて殲滅（エクスタミネーター）で第八境界ごと何もかも吹き飛ばしました。制御できない兵器など、もはや兵器ではありません。

境界ではひどい目にあいましたが、賢者や司政官も真面目に世界を救おうとしていたのでしょう。

方法は納得できませんし、おかげでわたしは性欲（イロ）に狂ってしまいましたが。

「うむ？」

ダムス司祭が階段口の前で立ち止まりました。わたしが潜んでいる辺りをじろりと睨みます。目が合いました。でもそれは一瞬ですぐに視線はそらされました。

「どうかされましたか？　司祭様」

「いや、気のせいだろう。さて、向こうもあらかた片付いたようだ。合流して最下層に行くぞ。コアを破壊せなばな」

「承知」

二人は戦果を確認すると、足早に戻っていきました。どうやらダンジョン内の魔物はすべて討伐したようですね。

わたしも4層に上がり、転移門を使って砦の森に戻りました。

さて、ブレンダさんたちをどうしましょうか。

転移でさっきのハレラニ洞窟の救護所に戻してあげるのが親切でしょうが、ここの砦のことがばれます。それに法国上層ではわたしことオルタード勇者は死亡扱いになっていることが分かりました。

ミヤビに助けられたなどと報告されてはたまりません。

かといっていまさら口封じも。そもそも見殺しに出来ず、面倒になることはわかっていて助けてしまったのです。

やはり適当に治ったところで、自力で法国まで戻ってもらうしかありませんね。徒歩なら半年ほどで戻れるでしょう。南の村で馬車でも調達出来れば1、2か月。そのくらいあれば、わたしたちも別場所に移動出来るでしょう。もう少し南下して帝国領に入ってもいいかもしれません。

そんなことを考えながら砦に向かうと、様子が違っていました。

子どもたちをブレンダさんたちが取り囲んでいます。

第４８話　賢者再び（後書き）

すみません、事情でしばらくお休みします（既に１ヵ月以上更新できてませんが、もう少しお時間いただきます）。

かならず完結まで書きますので、お許しを。　作者（２０２０年９月７日記）

第４９話　ブレンダ死す

「ねーちゃん！」

木剣を構えたデューイがわたしを見つけました。
カルド、レイジも剣を構えていますが、後は丸腰です。

「ミヤビ姉ちゃん！」
「ねーさま！」

レイジやレッピもほっとしたようにわたしを見ます。
既に剣を取り上げられているぐらいです。ブレンダさんと子どもたちの間でかなり緊張するやり取りがあったのでしょう。

「ブレンダさん、これはどういうことです？」

かちりと怒りの火が心の奥で点きましたが、努めて冷静に声を掛けました。ひとまずは状況確認です。

「ああ、ミヤビ。砦には入れられないってこの子たちがね」
「なんで砦に入ろうとするんですか」
「え？　そりゃそうだろ。ここに砦があるんだ。軍としては確認する必要がある」
「その砦は今はこの子たちの家です。何を勝手なことを言ってるんですか」
「勝手なことを言っているのそっちだろ。この砦はわが法国の様式だ。軍の資産だぞ」

確かにこの砦はアリアガルドの前線拠点型です。フルのストレージに入っていたものは、聖遺物（アーティファクト）以外はアリアガルド法国製の物資が大半です。

「確かにそうかもしれませんが、わたしたちが見つけた時には既に放棄されていました。あるものは遠慮なく使わなければわたしたち難民は生きていけません。それともブレンダさんはこの砦がどの隊のものであったかお分かりになるのですか？」

「それを調べるためにも中に入れろと言っている」

「この砦の中には軍の資材は何もありませんでした。今中にあるのはわたしや子どもが集めたものばかりです」

「それを聞いてはいそうですかとはいかんのだ。とにかく現認しないと報告書も書けん」

やはり、この砦の所在を軍上部に伝える気ですね。ブレンダさんの立場なら、そうせざるを得ないのは分かります。ですが。

「もう一度言います。ここはこの子たちの家です。勝手に入ることは許しません」

「別に取り上げたりはしない。中を確認させろと言ってるだけなんだがな」

「おい、貴様！」

新人法術士の一人が急に声を荒げ割り込みました。

上官が話している途中なので厳密には軍規違反ですが、若い民間人の娘のわたしが正規軍人のブレンダさんに抵抗しているのが許せなくなったのでしょう。

「教官は穏便に事を済まされようとしているのに、何だ貴様の態度は！　法国民なら反逆罪、他国民なら敵性行為で処分するぞ！」

「やめろイルーク！　彼女は我々の窮地を救ってくれたんだぞ」
「教官、それもおかしいのです。こいつら、軍の回復薬か何か、ごっそり貯めこんでるんじゃないですか？　砦の中に」
「回復薬じゃない。治癒魔法だ。さすがに子どもの魔法なので傷が塞がる程度だったが。収納（ストレージ）に魔力薬が残っていて助かった」

見落としでした。タネは収納魔法ですか。
ブレンダさんに収納魔法の気配がなかったので安心していました。
新人法術士の誰かが収納持ちだったということですね。
アリアガルドの法術士は治癒と回復についてはレベルが高いので、魔法薬さえあればあの酷い欠損状態からでも全員が普段通り動けるまで回復出来ます。
あえて子どもたちに弱い治癒をさせて彼らを寝たきりにしていたのに、意味がなかったです。
うかつでした。

「ガキどもが治癒魔法……。そりゃますます怪しい。砦があったって、こんな魔物の森だ。ガキどもだけでここまでたどり着けるはずがない。誰か裏で手引きしている大人がいるんじゃないか？　ならタランジの草か？　あるいはガーランドの隠密？　こいつら匿っているんですよ、きっと！　教官！」
「ブレンダ教官、自分もイルークの意見に賛成です。この子どもらはどこか不自然です。砦に何か秘密があるのは間違いありません」
「ふむ。スダハも同じ意見か。あたしももちろん不自然さは感じている。……ということだ、ミヤビ。家だという気持ちは分かるが、こちらもいろいろ調べないと帰れないんだ。わかってくれ」

わたしは話をしながら、子どもたちの中心へ移動していました。
そして、砦の前に皆を集め、前に一歩出ます。
そしてはっきりと宣言しました。

「お断りします」
「あたしはお願いしてるんじゃない。軍規に基づき民間人に命令してるんだ。軍命に対し異を唱えるのは反逆罪に値する。本当にそれでいいのか？」
「わたしは、アリアガルドの国民ではありません」
「ということは、敵性存在扱いでいいということだな？」
「イルーク、お前が決めるな。あたしがこの子と話しているんだ」
「意見具申。教官、我々を治癒したのはやはり砦にあるものを隠すためだったのではありませんか？　恩を売って穏便に我々を去らせる目論見に思えます」
「教官、スダハの言うとおりです！　だまされてはなりません。こいつらは、敵です」

イルークとかいう新人の目が血走ってきました。
これだから大人は。
やっぱり助けるんじゃなかった。面倒ですね。

そう思いつつ、わたしは収納魔法持ちの兵を探します。
魔法薬が残っていたということは、収納から取り出す前に魔法切れを起こしたということです。初心者がよくやる失敗ですね。ストレージを開く魔力が残っていなければ、いくら残数があっても無駄です。そうでなければ、ハレラニの洞窟での窮地で使い切っているはずです。
そして、魔法薬が残っているということは、取り出せなかったものが他にもあるという可能性が当然高いです。
けれど、魔力がごく僅かだからでしょうか。探知に引っかかりません。収納魔法を使ってくれればすぐ特定できるのですが。
「ねーちゃんに助けてもらってて、何だその言い草は！　何がこい

つらは敵だ、だよ！　くそ穴にでかチンぶち込まれてひいひい言ってたくせに！　お前なんかこわくないぞ！　このおとこおんな！」

デューイが叫びました。あまりに身勝手な物言いについにキレたのです。

気持ちはわかりますが、ちょっと下品ですね。おねえちゃん引いちゃいます。

「このガキ！　お前、言っていいことと悪いことがあるぞ！」

「法術士を愚弄するか！　少年！」

「我らが魔と戦うからこそ貴様らは生きておれるのだ！　感謝こそすれその暴言、年端もいかぬ子どもといえど見過ごせんな！」

「なに言ってんだ。ザダン倒したの、ねーちゃんじゃんかよ！」

「あ、デューイ！　それ言っちゃダメ！」

「しまった！」

カルドの注意はいささか遅かったのです。

「なに？」

「確かに、ザ・ザダンから子どもらだけでよく我らを助け出したとは思っていたのだが」

「まさか。そんな」

「あのザ・ザダンは進化手前の強さだったぞ……」

「やはり、何か隠しているようだな。まさかミヤビが？　いや、未だ姿を見せぬ手練れがいるということか。シューゲル」

ブレンダさんが後方の女性法術士に視線で指示します。鋼鉄の剣が空間から現れました。彼女が収納魔法持ちですね。魔力探知に反応もありました。

「はあ」

わたしはわざと大きなため息をつきました。

「ザ・ザダンを倒したのはわたしです。あんな魔物にいい様にやられるとは、新人は仕方ないとして、ブレンダさんも教官を名乗るにはまだまだじゃないですか？」

「ミヤビ。あんた、やっぱりあたし以上に変わったね。あんたは一体何者だ？」

「少なくとも、『第八境界の悲劇』から生き残る程度の実力は持っているということです」

「その力があって、軍命を拒否する。そういうことでいいんだな？」

「教官、俺が出ます」

「だめだイルーク。貴様は新兵だ。これはあたしの仕事だよ」

シューゲルと呼ばれた女性法術士がブレンダさんに剣を渡します。

「ブレンダさん、正気ですか」

「本気じゃなくて、正気と来たね。なるほど。だが、あたしは今この隊の責任者だ。この兵たちを率いてアリアガルドに無事戻るという責任がある。敵が目の前にいるんだ。あたしがやるしかあるまい」

「ついに敵認定ですか。面倒な話ですね」

「ああ、面倒な話だ。だが、それが軍人というものだ。砦の調査も含め、責務は全うしなければならない。あんたには助けてもらった恩はあるが、それはそれ、これはこれだ」

「一度は助かった命です。無駄に散らすことはないと思いますが」

「よく言ってくれる。これでも教官だと言っただろ？　破界は限りにあらず、輝く法にこそその望みを与えよ！」

魔法強化し、一気に距離を詰めてきます。残存魔力が純粋な攻撃

魔法には足りないので、バフ上げ物理攻撃に勝機を見出したということですね。思い切りはいいです。ブレンダさんの戦闘経験値が上がっているのは間違いないです。

しかし、素手の相手に自分だけ剣とは、純粋な剣士ではないからこそなのでしょう。多少の矜持があるならわたしにも武器を取れという場面だと思いますけど。

でもまあ確かに、こんなに遅くてもろい相手に勇者の剣（ブレイブソード）を使う必要もありませんが。

迫るブレンダさんの前にすっと手刀を入れます。ほとんど手ごたえなく鋼鉄の剣がすぱりと裂けました。

「な！」

ブレンダさんは真ん中で左右に分かれ2本になった剣を握り、行き過ぎてわたしを振り返ります。

驚愕の表情のまま、右肩から左腰までが斜めにずれていきます。

「あ？　あっ！？」

剣だけではなくブレンダさんも斜めに切断しましたからね。

頭の付いた左側の上半身がずるずるずれて、ゴトンと大きな音を立て地面に落ちました。

切断面がきれいな平面になっているせいか、さほど出血はありません。内臓も少しはみ出る程度です。

「教官！」

新兵たちが一瞬遅れて悲鳴を上げ始めました。

「だから大人は嫌いです」

わたしは手に少し付いた血を振るい、地面に横倒しになったブレンダさんの顔を見ながら声を掛けました。まだ生きています。

慌てて駆け寄ろうとしている新兵たちへ、ブレンダさんが手を挙げて制します。

半身だけなのに、大したものです。

ちなみに右手側と下半身は立ち止まった状態でしっかりと地面に立っています。

なかなか安定しています。武術の訓練を怠らなかった証拠ですね。

「ミヤビ……。あんた、バケモノだね……。すまないが、あたしの命だけで、許してくれないか……。新兵たちは、解放して……、やって……、くれ……」

治癒魔法を体内に循環させ意識をもたせているようですが、魔力がもうありません。

数分で命が尽きるでしょう。

「砦と子どもたちに手を出さないと誓っていただけるなら」

「ああ……、スダハ……、聞いての……、とおりだ。貴様が……、兵を率いて……、このまま、去れ！」

「教官！　ですが！　敵を！」

「ならぬ！　……手を出すな、……これは命令だ……」

「教官！」

「あたしの……、最後の……、命令だ……。聞いて……、くれるな……」

「も、もちろんです。上官の命令は絶対です……」

「という……、ことだ……。こいつらの……、無礼は……、あたし

の……い、命で……、チャラに……、し、してくれ……。すまなかった……、ミヤ、……」

ブレンダさんの言葉がそこで途切れました。
瞳は空を見上げたままですが、何も見ていません。
ブレンダさんの命が消えました。

「諸君！　教官の最後の命令を実行する！　全員、アリアガルド法国へ直ちに帰還の途に着け！」
「はっ！」

新兵たちの声が揃いました。ブレンダさんの死体に最敬礼し、踵を返して立ち去ろうとします。

「待ちなさい」

わたしは新兵たちの背中に声を掛けました。びくっとするように立ち止まり、恐る恐るわたしを見ます。

目の前で教官が一瞬で真っ二つになったのです。彼らからしたらわたしは魔人よりも恐ろしい敵です。撤退命令が上官から出た以上、何もかもなかったことにして一刻も早くここを立ち去りたいのでしょうが、そうはいきません。

第４９話　ブレンダ死す（後書き）

ああああ！　久々の更新なのにエロがない！　すみません！
リョナはあるけど。
次回はエロ回です！（希望的観測）

第５０話　イルークとシューゲルその１（前書き）

少しだけ、過去に戻ります。

第５０話　イルークとシューゲルその１

俺の名はイルーク。

アリアガルド法国軍の法術士だ。春に法理高等学園を卒業、二級法術士の免状を得、法国軍に入隊したばかりの新兵だが。

人魔戦争でアリアガルドはじめ各国が魔人の脅威にさらされている今、俺たち若者が軍人を目指すのは当然のことだ。

俺の田舎も戦渦に巻き込まれ、知り合いのおじさんたちやおばさんたちが何人も亡くなった。幸い、俺の両親は無事だったが、孤児になった友達は街に売られていった。

こんな悲劇は早く終わらせなきゃ。

俺は法術のほか、剣術に軍学も必死に勉強した。甲斐あって、入隊後、第１６特別キャンプに配属された。

ご尊名を直接呼ぶのは憚られるが、あのドッチャ将軍の直属の部下だったブレンダ教官、ステファニー教官の教えを頂戴する精鋭育成のための教練部隊だ。俺の両親もとても喜んでくれた。誇らしかった。

入隊後すぐに始まった訓練は苛烈だった。入隊時に３０人いた仲間はＢ班（ブレンダ）、Ｓ班（ステファニー）合わせて半年で１０人に減っていた。後の者は途中で試験に合格出来ず下位部隊に降格となったのだ。

逆に言えば、残った１０人は歴戦の兵士並みの技能を獲得していた。俺と同じＢ班にシューゲルがいた。これも俺には嬉しいことだった。

収納魔法を得意とするシューゲル。魔法薬や武器をおよそ千も保持出来る素晴らしい才能を有していた。

そして収納魔法薬と得意の治癒魔法で驚異的な癒しの能力を持つ彼女は、俺にとってアリア神の御使い、天使だった。

美人というより、いつも笑顔で愛くるしいその容貌。

どこかオタオタしながらも一生懸命に訓練するその姿勢。

そして女性らしい柔らかく優しい体つき。

入隊時に姿を見かけて、思わず声を掛けてしまった。話をすれば故郷も結構近い村だった。そして同じ第１６特別キャンプＢ班に配属され、半年。

俺が脱落しなかったのは、シューゲルがいたからだ。

もちろんシューゲルだけじゃない。リーダー格のスダハ、寡黙なガトプ。そしてもう一人の女性法術士ヒズ。俺たち５人は最高の仲間だ。胸を張ってそう言える。

けど、シューゲルは俺の中では別格だ。

「あたたたた……。ゲロきつい。体中の骨がバラバラになったみたいにいてえ……」

「イルークは無茶しすぎなのよー。しょうがないなー。ほんとはダメだけど、ちょっとだけね」

「おおっ、痛みが！　助かるよシューゲル」

「訓練中の回復は内緒だからね」

「サンキュ！　マジ天使！」

俺は毎回魔力が枯れるまで必死なのに、シューゲルは余裕だ。アイテムボックスに収納している魔力薬でズルをしているわけじゃな

い。そもそも彼女の基礎魔力量は俺より桁違いに大きいのだ。
基礎魔術訓練では自己回復しか本来許されない。こっそり癒してくれるシューゲルは本当に俺の天使だった。

戦時であるが、俺たちが人魔戦争の最前線に出ることはまだ先だ。訓練は厳しいが、特別キャンプに残留したという連帯感と、やがて訪れる戦地への派遣への期待と不安が、俺たちを必要以上に親密にしていたのかもしれない。

ある日、スダハにシューゲルが夜呼び出されたという噂を聞いた。別班の女性新兵が宿舎裏でひそひそと話している二人を見かけたらしい。スダハは俺たちをまとめるポジションだ。オレと違って言葉遣いも丁寧だし、何よりイケメンだ。その女性も新兵ではエリートであるスダハにちょっと憧れていたようで、ショックを感じて噂を広めてしまったようだ。

俺は急に焦りを感じた。シューゲルとスダハは何を話していたのだろうか。もしシューゲルとスダハが男女の仲になったのなら。
心に重い澱みが溜るような気がした。

その後も訓練は続き、表面上は何もなかった。訓練後の宿舎でもシューゲルをそれとなく気にしてはいたが、特に変わった様子はなかった。
もちろん女子と男子は寝室は別棟なので、女子棟に戻ってからはどうしているのかは分からなかった。けれど、男子棟からスダハがこっそり抜けだしていくようなこともなかった。
しょせん噂は噂だったのかもしれない。あるいは悪意のある中傷か。

けれど、俺の気分は晴れなかった。

王都近郊のダンジョンで実践訓練が行われる直前、俺は思い切ってシューゲルを呼び出した。

夜に呼ぶような勇気はない。昼飯の後、時間をくれと言っただけだ。

「いいよ？　どうしたの、イルーク？」

「その時話す」

「うん、わかった」

昼休憩。俺とシューゲルは食堂裏の茂みにいた。

「で、なにかな？　なにかな？　イルーク」

「軽いな……。ここしばらく、俺、いろいろ考えてたのに」

「うん？　なにを？」

「シューゲル、夜にスダハに会ってたって噂聞いてさ」

「ふーん。で、それでシューゲルは何を考えてたのかな？」

否定しないんだ。

「何の話をしてたんだろうってさ」

「それ、考えてわかるものなの？」

「わかんないから考えてたんだろ！」

「それ、ムダじゃない？」

「むう……」

「でも、イルークも知ってるのね。やっぱり噂って結構広まるものね」

「会ってたのは本当なんだな」

「会ってたっていうか、呼び出されたんだけどね」
「就寝時間後に男女が会うってさあ！」
つい声が大きくなってしまった。
「……まあ、誤解されるよねえ」
誤解？
「イルークはどう思ってたの？」
「いや、俺はっ！　だから何の話をしてたんだろうって！　考えてた……、だけで」
「うふふ、大したことじゃないよ」
「ほんと？」
「うーん、大したことじゃないって言ったらスダハに失礼かな？　3回も呼び出されたしね」
3回も！
「スダハの気持はうれしいんだけど、でもねえ」
シューゲルが上目遣いに俺を見る。何その普段と違う色気！
「ここに気がついてない人がいるからね！」
は？
「こっそり傷を癒してあげるの、君だけなんだからねっ！　イルーク」

え？　待って？　どういうこと！？
いやいや、鈍感系主人公じゃあるまいし！　自分に嘘をつくな俺！
そういう意味で、いいんだよねっ！

……、やったぜ！

午後からの洞窟での実地訓練がまるでピクニックのような気分になった。
ダンジョン・デート。

うん、悪くない！

よーし、はりきっちゃうぜ！

……その数時間後、ハレラニ洞窟は、阿鼻叫喚の地獄絵図と化した。

第４層までは本当にピクニックのような行程だった。教官１人＋新兵５人のチームが５チーム、計３０人。俺たち第１６特別キャンプＢ班、Ｓ班にとってはいつもの訓練の方が厳しいくらいだった。
他の３班はそれなりに緊張しているようだったが、俺たちは軽口を交えながらクラス２、３レベルの魔物を難なく狩っていった。

第５層に降りたとたん、様相が一変した。ハレラニではありえないクラス５の高位魔、ガ・ヴァッシュ、ガ・アッシュがフロアを埋め尽くす規模で出現したのだ。

悪夢のような光景に、俺は一瞬立ちすくんでしまった。が、教官たちの対応は早かった。俺たち新兵に鋭く喝を入れ階段まで下がらせ、教官5人が前衛で出て魔法障壁を展開、同時に光魔法で攻撃を開始した。

そのまま反転し、教官を殿に第4層へ後退する。同時に通信兵が軍本部に異変を連絡した。法都に最も近い訓練用ダンジョンにクラス5の大量出現。異常事態だ。

ハレラニの洞窟のダンジョンコアのように安定していたのものが、急激にレベルが上がることなど自然にはありえない。おそらく、というか間違いなく魔族の仕業だ。

コアを置き換えたんだ。法国軍に気付かれることなく。恐ろしく器用で知恵が回る奴がいる。

魔族はかつての『力が正義』的な脳筋集団じゃない。戦術を立て、粛々と実行する『組織』となっている。

まさに軍隊だ。魔人軍だ。俺は今までどこか知能の低いモンスターの集まりだと舐めていたのかもしれない。

しかし現実はこの通りだ。

これは本当の『戦争』だ。人と魔族の。

第4層に逃げた俺たちを待ち構えていたものがいた。

高位魔、ガ・スフィンクとガ・リヴァイアの大軍。

俺たちはクラス5の魔族に挟み撃ちにあった。

初めから俺たちを狙っていたのだ。人間はリポップしない。兵を一人前にするには手間も時間も資金も掛かる。一人前になる直前の新兵を失うことは軍にとって大きなダメージだ。

そして新兵の補充がなくなれば、ベテランもいずれ疲弊する。軍全体の戦力ダウンを誘発出来る。

卑劣な手だが、魔族相手にそんな文句は通用しない。

混戦になった。俺たち第１６特別キャンプは新兵といえど地力がある。Ｂ班、Ｓ班共に教官を中心に防御、攻撃、回復支援の役割分担を行いながら第４層で安全地帯を探した。

ほかの３班がどうなったのか分からない。挟み撃ちにされてすぐ、ガ・スフィンクに胴を噛みつかれ、悲鳴を上げながら連れ去られる女兵士を見たが、何も出来なかった。

シューゲルがあんな目に遭ったら……。いや、何としてもシューゲルは助ける！　守り抜く！

「本隊には連絡済みだ！　必ず救援が来る！　防衛に徹しろ！　シューゲル、魔法薬と回復薬を全員に持てるだけ配れ！　持久戦だ！」

ブレンダ教官の声が力強い。そうだ。俺たちは特別なんだ。クラス５が何だ！　絶対に生き残ってやる！

ガトプと俺が前衛で盾役に徹する。ガトプは文字通り魔法障壁の盾で、俺は障壁と魔槍の併用でガ・スフィンクとガ・リヴァイアを寄せ付けない。

中衛のスダハ、ヒズが光魔法で敵の魔力攻撃を中和、教官が広域殲滅魔法で敵を削る。後衛のシューゲルが治癒、そして魔法薬・回復薬の配布、損耗した武器防具の交換を一手に引き受ける。

連携はきちんと出来ている。

状況は厳しいが、俺たちはクラス５相手に善戦していたといえる。教官がダンジョンの壁を探り、立て籠れる場所を探す。第４層には小部屋のような穴がいくつもある。地形をうまく利用すれば、より

有利に、安全に防衛出来るはずだ。

だが、やがて拮抗状態は崩れる。

「シューゲル！　魔法薬！」

「はいっ！」

「左からも来る！　右に気を取られ過ぎだヒズ！」

「くっ、狙いがぶれて……」

いくら回復薬を飲んでも、疲労が治らない。こんなに長い間休みなく戦ったのは初めてだ。精神的に追い込まれてくる。魔法の精度が下がってくるのが分かる。

「ぐぁ！」

ガトプの魔法障壁がガ・リヴァイアに砕かれた。脆くなり重ね掛けしたが、それももう限界だ。

俺は魔槍を突き出し、ガ・リヴァイアを下がらせる。その隙にガトプが魔法障壁を展開しなおす。

「ガトプ下がれ！　交代だ！　背後を調べてくれ！」

教官が前に出る。まだ良い陣地が見つけられない。６人が立て籠れるような場所がまだない。

「万象の伝わりを隔て森羅の理（ことわり）を離せしむ！」

教官の魔法障壁だ。分厚い。これならしばらく持つんじゃないか？

しかし教官も苦しそうだ。無理もない。前衛、中衛、後衛と俺たちが疲弊し崩れかけるのを教官一人で支えてくれている。その分負

担が大きい。そもそも教官らでもクラス5は難敵だ。新兵を護りながらの戦いでは教官一人ではいくらなんでも無理だ。

しかし、そんなことは言えない。無理を承知で対処してくださっている。俺たちを生かすために。

そうだ、絶対に生きて戻る！　シューゲルと共に！　みんなと共に！

「ぐわあっ！」

そばのS班から絶叫が聞こえた。ガ・リヴァイアに噛みつかれ宙を舞う法術士が見えた。……あいつは、マッズ！　ガトプと同じ盾役（タンク）だ。

「マッズ！」

追いかけるように飛び出したのは、S班（ステファニー）の教官だ。光の矢を何本も両手から撃ち出し、噛みついたガ・リヴァイアを攻撃する。マッズの体を避けて全ての矢を敵に撃ち込むのは流石だ。ガ・リヴァイアの首がちぎれ、マッズが落ちる。

その体を受け止めようと手を伸ばすステファニー教官。

一瞬だが無防備となる。そこを。

ガ・スフィンクが強靭な前足でステファニー教官の胴をえぐった。鋭い爪が長く伸びていた。

「ぎゃあっ！」

「ステファニー！」

二人の教官の悲鳴が交差した。

ステファニー教官は、腰のあたりでざっくりと上下に割かれた。
上半身はガ・スフィンクの腕力でどこかへ吹っ飛び、倒れた下半身から内臓と血が噴き出した。

「す、ステファニー！！　くっ！」
「教官！　S班を助けに……」
「だめだ、……無理だ。このまま後退する」
「S班を見捨てるのですか！？」
「全滅は避けねばならぬ！　後退だ！　S班から距離を取る！」
「そんな……っ！」

スダハが唇を噛むが、俺たちにもわかっている。S班にシューゲルはいない。既に魔力の限界だったのだ。
そして教官はB班だけでも救おうとしている。
何を救い、何をあきらめるのか。瞬時に冷静な決断が出来なければ軍人として生き残れない。

だが、しかし。

俺は絶対にシューゲルをあきらめたりはしない！

「小部屋のような空間を発見！」

後方のガトプが叫んだ。

「全員飛び込め！　魔法障壁で蓋をする！」

俺たちは狭い穴から窪みの中に入った。穴自体は小さいが、奥は広く、6人が余裕で入れる小部屋のような空間だった。

穴の部分だけに魔法障壁を展開すれば立て籠れる。ガトプが魔法薬を飲み、教官と交代して障壁を二重に張った。しばらくは大丈夫だろう。

外で魔物が叫んでいるが、入ってくる気配はない。

「助かった……」

「まだ気を抜くな。クラス5で終わりとは限らん。それ以上の魔物が現れる可能性もある」

「り、了解です！」

教官に叱られ、俺は顔を引き締めた。

わずかの差だった。後2、3分持ちこたえていれば、S班もここに逃げ込めたのに。その程度の広さはあった。

戦場で死ぬものと生き残るものの差など、本当にこんなに小さいんだ。ぎりっと胃の底が痛んだ。

「とはいえ、薬漬けじゃ無理が出る。交代で休め」

「了解」

俺たちはようやく腰を下ろした。どっと疲労感が襲う。

そしてS班の……ステファニー教官の最期を思い出す。一番悔しい思いをしているのはブレンダ教官だろう。戦友が目の前で殺された上に、敵（かたき）すら取れなかった。俺たちを護ることを優先したからだ。

教官の表情は固く、感情が読めなかった。凄い精神力だということは分かった。

ふう。

腹が減ったなあ。でも今食ったら戻しそうだな。
せめて水が飲みたいな。
教官に意見具申してみるかな。また気を抜くなって怒られるかな？　なあ、シューゲル……。

「きゃっ」

短い悲鳴が突如上がった。シューゲル！？

振り向くと、シューゲルとヒズの姿がなかった。たった今までここにいたのに！

「シューゲル！　ヒズ！」

慌てて立ち上がった教官の腕に、長く太いひものようなものが巻き付いた。

いや、そのグロテスクに蠢くそれは……生きてる。傘が開いてテラテラしている。

超デカくて長い男根！？

第５０話　イルークとシューゲルその１（後書き）

エロ直前で終わってしまいましたが、まだ続きます。

第51話　イルークとシューゲルその2

腕に巻き付いた怒張（ちんぽ）に教官がぐいと引っ張られる。性器というよりそれはまるで触手だった。

ちんぽは何もない空間から伸びていた。いや、なにもなくはない。ちんぽの根っこでうっすら輝いているの……魔法陣か？

転移魔法。

いや、転移門だ。そんな高等魔法を操れるのか、魔族がっ！？

「教官！」

「く」

教官がちんぽに引っ張られて転移門をくぐった。今のは『来るな』と言おうとしたのだろうか。が、その声は途中で消えて届かなかった。だから、命令違反じゃない。

残った俺たち男3名は、一切ためらわずに教官を追いかけ転移門をくぐった。

深く暗い森。

並んで立つ3体の魔族、クラス4の牛頭の魔人ザ・ザダン。

蠢く長大なちんぽ。

それぞれのザ・ザダンに一人ずつ捕まっている教官、シューゲル、ヒズ。

その光景が一度に目に入った。

◇◇◇◇◇

あたしの目の前でステファニーが死んだ。

上下に裂かれたひどい死にざまだった。

ヒュイやバルグはどうしているのだろう。彼らはまだ生き残っているのだろうか。大聖会の暗部で働いていた頃が懐かしい。あの頃は収納破り（ストレージ）だの、扇動だの、誘拐だのと、アンダーグラウンドなひどいことに手を染めていると思っていたが、今よりはまだましだった。

教官同士の通信で他の班の様子はわかっていた。S班の魔力が底をつき、怪我人が続出していることも。

だが、救助する余力はなかった。

攻めて転移魔法でもあればシューゲルの薬を届けられるのだが、転移持ちはB班にもS班にもいない。

他の3班はもっと悲惨だった。大半がもうとっくに無力化され第5層に連れていかれていた。生きているのかもすでにわからない。うちと違って新兵の練度が低い。入隊して半年だから無理もないのだが。

だから合同演習でこのビギナーズダンジョンと呼ばれるハレラニ洞窟を選んだのに。

まさかダンジョンコアが置き換えられているなんて。

うかつだった。

B班の新兵たちにこの悲惨な現実は伝えられなかった。自分たちは生き残れると示し、鼓舞するしかない。

マッズやステファニーがやられるところを見てしまったのは仕方がない。

S班をあきらめても、自分自身を護る。

何が何でも生き残る。

そう、決してあきらめない者にしか戦場で明日は来ないのだから。

しかし、小休止が出来て良かった。本当にちょうどいい安全地帯だ。ガトプめ、いい仕事をしたじゃないか。

今のうちにシューゲルに糧食を配らせるか。この状況で新兵たちが食えるかどうかだが、食事は弾を込めるようなもんだ。

神経がず太い奴ほど生き残れる可能性が高くなる。

「きゃっ」

短い悲鳴が上がった。声の方を振り向く。そこにいたはずのシューゲルとヒズの姿がなかった。

「シューゲル！　ヒズ！」

あたしが慌てて立ち上がるのと、右手に何かが巻き付くのが同時だった。

生暖かい濡れた太い紐。いや、触手。いや、この鼻につく臭いは、男根（ちんぽ）！？

グイと窪みの奥に引き寄せられた。目の前に薄く輝くものは、転移門だと！？

「教官！」

イルークの声が響く。

「来るな！」

そう言い終わる前に風景が切り替わった。どこかの森だ。

目の前に、クラス４の魔族ザ・ザダンがいた。自分の男根（ちんぽ）で器用にあたしを引き寄せていた。

そのまま抱き着かれる。

「ぐはっ！」

優しいハグなんかじゃない。背骨が折れそうな勢いで締め付けられた。

ザ・ザダンの肩越しに、他のザ・ザダンに同様に捕まっているシューゲルとヒズが見えた。

しゅるしゅると長いちんぽが二人の下半身にまとわりついている。その凶悪なブツで彼女らを犯すつもりか、おいやめろ。

締め上げられる激痛の中、あたしの腕に巻き付いていたはずのちんぽもいつの間にか法衣の下へ潜り込んでいた。

くそっ！　あたしを犯すのはいい。もうとっくに散々汚れた身だ。だが奴らはまだ軍に入って半年、たった１６歳なんだぞ。

こんなでかいちんぽを突き入れられたら、きっと壊れてしまう……。

◇◇◇◇

「シューゲル――――ッ！！！」

俺は絶叫しながら魔槍を繰り出し突進した。

「破界は限りにあらず、輝く法にこそその望みを与えよ」

ガトプが俺に魔法強化を掛けてくれた。踏み込む速度が上がる。

「福音よ、聖なる柱となりてそのものに祝福を与えよ」

スダハが光の矢を放つ。同時攻撃だ。

スダハの矢が手前で教官を拘束しているザ・ザダンの顔に直撃した。その脇を駆け抜け、シューゲルを抱きしめているザ・ザダンの頭を魔槍で貫く。そいつはお前なんかが抱いていい女じゃないんだよ！

手ごたえがあった。やったぞ！

そう思った瞬間、俺は地面に叩きつけられた。ごぎっという鈍い音がした。右手が折れた……？

首だけで見上げれば、左腕だけでシューゲルを抱いたザ・ザダンの頭に槍が刺さっていた。ザ・ザダンはそれを右手で握り、ぐいと抜いた。穴が開いているが、粘土でもこねたように蠢くと穴は塞がって消えた。

牛頭が笑ったように見えた。

「ぐわっ！」

俺の無防備な背中に魔槍が突き刺された。入隊後の新人戦で2位になった時の賞品として中隊長から戴いた俺の愛用の武器。その槍で俺は右の肩甲骨のど真ん中を刺し貫かれ、地面に縫い留められた。

「うぐ、ごはっ！」

肺が破れたのか大量の血が口から吐き出る。動脈をやられたのかもしれない。

「イルークッ！」

捕まっているシューゲルが叫ぶ。

泣いてる……。シューゲルが……。

やべえ。泣かしちゃったよ、俺……。

「顕現せよ優しき癒しの使者！」

「立ち昇る芽吹きの宴よ太陽のもとに集い賜え！」

スダハとガトプが治癒魔法と光の加護を与えてくれる。一瞬ボウッとしていた頭がすっきりする。と同時に激痛が俺を襲った。感覚が戻ってきた証拠だ。だからまだやれる！

俺は左腕の力だけではね起きた。馬鹿力で刺してくれたおかげで槍はほとんど地面にめり込んでいた。下手に槍を抜くより体を抜いてしまう方が簡単だった。

だが右手は使い物にならない。胸にも穴が開いたままだ。仲間の魔法のブーストで今は動けるが、失血がひどい。長くは戦えない。てかこのままじゃ死ぬ。

「正と義を執行するならばその名に懸け慈悲を捨てよ！」

拘束魔法をザ・ザダンのちんぽに掛けた。残った魔力全部使ってシューゲルに纏わりついたその汚いものをねじ切ってやるのだ！

砲弾のような亀頭のすぐ下が雑巾のように絞られる。

「ごぐうぅ！」

ザ・ザダンが呻く。ざまあみろ！　早くシューゲルを放せ！　べりべりとシューゲルの足から長い長いちんぽを蔦をむしるようにはぎ取っていく。

「万象の伝わりを隔て森羅の理（ことわり）を離せしむ」

「導かれし守護の法よ彼の者に顕（あらわ）せ」

背後でスダハとガトプがまた詠唱した。魔法障壁と魔法防禦の連携魔法（コ・マジック）だ。

二重詠唱で教官を捉えているザ・ザダンの腕を強引にこじ開ける。

「福音よ、聖なる柱となりてそのものに祝福を与えよ。漆黒の闇を払え四獣の咆哮！」

教官がわずかに開いた自分とザ・ザダンの隙間に光の攻撃魔法を撃ち込む。さすがのザ・ザダンもひるんだ。その隙に教官が後方に跳び着地する。スダハとガトプのすぐそばだ。

「連携攻撃！」

「「はいっ！」」

「「福音よ、聖なる柱となりてそのものに祝福を与えよ」」

教官とスダハ、ガトプが唱和し、

「漆黒の闇を払え四獣の咆哮！」

教官が下の句を詠唱した。スダハ、ガトプは下の句がまだ使えない。連携魔法（コ・マジック）で共鳴ブーストした魔法力を教官が受け取り四重攻撃として撃ち出したのだ。

俺がちんぽを引きはがしているザ・ザダンの頭を直撃した。

「ぐごはっ！」

三合唱攻撃にはたまらずシューゲルを放す。俺はダッシュしてシューゲルを左手で抱えた。

続けざまに教官たちが攻撃魔法をザ・ザダンに撃ち込み牽制してくれている。転移門で不意打ちを食らったが、建て直せている。

いいぞ。さすが俺たちB班だ！

「シューゲル！」

「イルーク！　酷くやられちゃったね……」

「このくらいなんてことない！」

「ばか！　顕現せよ優しき癒しの使者」

シューゲルの強力な治癒魔法で胸の穴が塞がる。右手はまだ痺れているが、痛みはなくなった。

「すげえよシューゲル。今のうちに教官のところへ！」

「イルークの方が凄いよ。助けてくれてありがとう」
「まだヒズが捕まっている。あいつも助けるぞ！」
俺は左手でシューゲルの手を取り教官へ向かって駆けた。
ごがん。
目の前で教官、スダハ、ガトプが吹き飛んだ。
なんだ！？　何も見えなかったぞ、と思う暇もなく、地面に転がった三人に更に見えない何かが撃ち込まれた。ぼこぉっという轟音と共に、三人の体がエビのように撥ね、地面に丸い大きな窪みが穿たれる。三人とも目を剥き口からごぼっと吐血する。
内臓がやられた！
「魔力の腕（ヴァーチャルアーム）！」
「なっ！？　シューゲル？」
「ザ・ザダンの攻撃、見えない腕だわ！　七人の導師が生みし七つの壁を持て、いざ屹立せよ絶対の防禦。導かれし守護の法よ彼の者に顕（あらわ）せ！」
シューゲルがフル詠唱で強力な魔法障壁を空中に張りヴァーチャルアームを受け止める。もう一撃食らったら、教官たちがぺしゃんこになる！
俺は背後の三体のザ・ザダンを振り返った。どいつだ？　無傷なのはヒズを捕まえている奴だ。あいつか！？
「正と義を執行するならばその名に懸け慈悲を捨てよ！」

俺はヒズを捕まえているザ・ザダンに拘束魔法を唱えた。
亀頭ねじ切りの刑だ！　どうだ！

ぼかん！

デカい音を立てて、手を握っていたはずのシューゲルが吹っ飛んだ。何も出来なかった。

見えない腕で正面からぶん殴られたのだ。
シューゲルが地面で2、3度バウンドし、力なく転がる。そのまま動かない。

「シューゲル！」

背後から、教官たちが倒れているまだ後ろから、新たな魔物が現れた。

ザ・ザダンの4体目だ。しかも、今までの奴よりでかい。そして、そいつの股間からは、おぞましくも2本の長大なちんぽが鎌首をもたげていた。

「シューゲル！　起きろ！　顕現せよ優しき癒しの使者っ！」

だが魔力が足りない。連続して使い過ぎた。体の中から集めようとしても、もう出てこない。魔力が空になったんだ。それでもっ！

「顕現せよ優しき癒しの使者あああああっ！！」

俺は絶叫した。

絶唱。
法術士最後の手段。自らの命と引き換えに奇跡を起こす技。

だがそれは、賢者クラスに至った者にしか使えない技だ。見習い新兵の俺に、法術よりも武術の方がましだとよく言われる俺に、そんな奇跡は起きない。起きるはずがない。
わかっているが、叫ばずにはいられなかった。

「顕現せよ優しき癒しの……！！」

頭上から降ってきた巨大な拳に殴られ、俺は昏倒した。ザ・ザダンの見えない腕の一撃だった。

俺は目を覚ました。気を失っていたのはさほど長い時間でなかったようだ。地面に突っ伏しており、頭と首に激痛が走る。だが、生きている。頭痛のおかげか、逆に痺れていた右手の感覚が戻っていた。俺は跳ね起きようとして、足が動かないことに気が付いた。

両足とも膝下で折れていた。それを認識した途端、今度は下半身から激痛が届いた。ヴァーチャルアームで頭上から殴られたとき、衝撃が下半身に逃げたのだ。そうでなければ、頭が砕けていただろう。背骨や骨盤も損傷したようだ。痛みをこらえるために体内に流す魔力もない。悲鳴を上げずにいれただけまだましだった。

地面に転がった姿のまま首を回す。ヒズの法衣のズボンが引きちぎられ、下半身が丸出しにされているのが見えた。背後から片手でヒズを抱いた格好になっているザ・ザダンが、膝を持ち上げて股を無理やり開かせている。触手のようなでかいちんぽが、開いた股に

あてがわれていた。

「……やめて、やめて、やめてやめてやめて」

ヒズが震えながら泣いている。ヒズの薄い恥毛に覆われぷっくりとした縦割れに、凶悪な砲弾亀頭がめきめきとめり込んでいく。

ザ・ザダンの黒光りする水牛にも似た顔が、にたあと笑った。

「あぎぎゃぼおぉぉぉぉぉおおおおおぉぉぉっっっぶおおおおっ！！！」

ヒズが絶叫して白目を剥いた。

同時に砲弾がヒズの割れ目に姿を消した。そのままずるずると触手ちんぽが膣内に送り込まれていく。

ぶしゃあああああ。

ヒズが小便を引き出した。

「あごう！　あごう！　あぎゃぎゃぎゃぎゃぎゃあああっ！」

壊れたゼンマイ人形、あるいは死にかけの昆虫のように自由な両手と片足をじたばたと動かし人間とは思えない悲鳴を上げて暴れる。必死にちんぽから逃げようとしているのだ。しかし胴と片足をがっちりホールドされており、ずんずんと長大なちんぽが胎内へとめり込む。もはやこれは串刺しだ。

ビシッと言う嫌な音がヒズの股座から聞こえた。ざばーっと鮮血が滝のように流れ出る。

膣が裂けたのか。もっと大事な器官を潰されたのか。

「ぎえぎゃーーーーー！！！！」

ヒズが一声絶叫して、こてんと首が傾いたまま動かなくなった。

死んだのか……？

おい、ヒズ。

嘘だろ。

その無防備な首に、ザ・ザダンが爪を掛け、ゆっくりと引いた。

喉が斬られた。

詠唱阻害だ。仮に意識が戻っても、魔法はもう使えない。

こいつ！

「あぎいいいっっっーーーっ！！！」

別の悲鳴が聞こえた。動かない首を声の方向に無理やり曲げる。

教官が別のザ・ザダンに捕まっていた。同じように下半身をむき出しにされ、濃密な毛に覆われた部分に極悪ちんぽをねじ込まれたところだった。

「おえっ、おえええっ！」

口から血と吐しゃ物が混じった赤黒い液体を噴きながら教官は犯されていた。

内臓が潰された状態だったはずだ。その上あんなでかいちんぽで

かき回され、教官の腹の中は一体今どうなってしまっているのだろうか。

教官を犯しながらザ・ザダンが首を裂いた。詠唱阻害して犯す尽くす気なんだ。

「あ……っ、ひっ……」

また別の声がした。痛みに耐えて顔を向ける。

肩を掴み、ザ・ザダンが倒れたシューゲルを持ち上げるところだった。ちんぽが2本ある。最後に出てきた巨大なやつだ。

シューゲルもボロボロになっていた。全身泥だらけで、顔も半分が血にまみれている。

ザ・ザダンはシューゲルを片手で高く掲げ、空いた方の手で首元から法衣を引き裂いた。ついでのようにシューゲルの細い喉も斬られた。

シューゲルの小ぶりな胸、へそ、そして案外濃い目の恥毛が露わになる。

初めて見たシューゲルの裸体は、あちこち赤黒くうっ血しているのが痛々しかった。

ザ・ザダンの2本の極悪ちんぽが鎌首をもたげ、シューゲルの股間へ近づく。

やめろ……！

やめてくれっ！

第５１話　イルークとシューゲルその２（後書き）

まだ続きます。この後どうなるのかはみなさんご存じのとおり確定しているので、イルーク君を精神的に嬲ってるだけといえばだけですけどね。

第52話　イルークとシューゲルその3

「シューゲル……」

ちゅ。ちゅぱっ。

「うんっ……、ちゅ……。もう、すぐ出発なのに！　イルークは……」

「ごめん、我慢出来なかった」

ハレラニ洞窟への合同演習直前、俺はシューゲルを抱きしめ口づけをした。初めての経験だった。

つい勢いで胸に手を回す。でも、シューゲルの法衣のその部分は硬く、肌の弾力を感じることはなかった。

「だめ。ついでみたいにしちゃ、いやだから」

法衣は魔法を通す布で作られている。術者の魔力に感応し硬化する魔法の鎧でもあるのだ。

シューゲルは胸を揉むのを許してくれなかった。

「だって、わたしも、その、はじめてなんだからね！　もっとちゃんと、場所とか、ムードとか、そういうの、整えてからじゃないと！」

そう言って真っ赤になるシューゲルが可愛くて。

法衣の襟をめくって、露わになった細い首の根本に口づけをした。

わざと強く吸う。

赤い跡が付いた。

「見えないところだから、いいだろ？　俺の……、しるし、付けとく」

「ば、ばか！」

ぽかぽかと胸を叩かれたが、ちっとも痛くなかった。

◇◇◇◇◇

白い肌に顔や喉からの血が垂れ、あちこちに青や赤のうっ血や打撲痕があるが、それでもシューゲルの裸体はきれいだった。

片手で肩を摘まれ吊り上げられ、喉を裂かれた後はシューゲルに声はない。

全てをあきらめたのか、気を失ったのか、四肢を力なく垂らしているだけだ。

意外に肉付きのいい二本の脚の間で、シューゲルの一番大事な部分が無防備に晒されていた。

ぷっくりとした丘に、童顔なシューゲルからは想像できない濃い陰毛が扇のように生えていた。

初めて見た思い人の股間。

ギャップはあるが、それすらきっと魅力に感じてしまう秘められた部分。

俺は今の危機的状況にもかかわらず、興奮を隠しきれなかった。

そんな自分が悔しくて、そして怒りで顔が赤くなる。

ザ・ザダンが空いている手の爪でシューゲルの乳房の根元をなぞるようにひっかく。すうっと円周を描くように薄く皮膚が切れ、血が滲む。そしてすっと指を伸ばし、可愛いピンク色の乳首を刺した。

ぷくうっと小さく血の玉が盛り上がる。

やめろ。これ以上シューゲルを傷つけないでくれ！

ザ・ザダンはシューゲルを自分に引き寄せると、長い舌を伸ばし、血にまみれた彼女の顔を舐めはじめた。赤黒くなり始めたかさぶたのような血痕がベロベロと舐めとられていく。

半開きになった眼球や形のいい鼻にも無遠慮に黒い舌が這う。長く、平たく、肉の粒々がびっしり生えた舌だ。あっという間に血がこそぎ落ち、代わってぬめった唾液がシューゲルの顔一面に塗りたくられる。血の跡は消えたが、きれいになったわけじゃない。余計に汚された。

そしてザ・ザダンはシューゲルの花びらのような唇を舌でこじ開けた。歯を、歯茎を舐め上げ、上下の歯の間に舌を差し入れる。

俺が数時間前にキスしたばかりのシューゲルの口の中が、魔物に蹂躙されている。

くそっ！　シューゲル！　目を覚ませ！　そんな魔物の舌、噛み千切ってやれ！

俺は怒りと憎しみで頭が沸騰するが、現実には何も起こらない。シューゲルも、俺も無力だ。

魔物の舌に引っ掛けられるようにして、シューゲルの小さなピンクの舌が口の外へ引き出される。

伸びたシューゲルの舌の表も裏も、先端から根っこまで太い黒い

舌がアメーバーのように波打ち舐る。

何分ぐらいそうしていたか。やがて飽きたのかザ・ザダンが自分の舌を戻すが、シューゲルの舌はふやけたようにだらんと口元に垂れたままで、長い唾液がつららのように垂れた。

にやあ、と牛頭が俺を見ていやらしく笑った。

その瞬間、俺は理解した。

この魔族、俺に見せつけてやがる！

どういう理由か分からないが、俺とシューゲルの関係をわかっていて、わざといたぶる様子を俺に見せているのだ。

魔族の知能が上がっているという話はもちろん学んでいる。

しかし、暴力でいたぶることはあっても、精神的に人間を追い詰めるなんて、そんなことが。

だが、現実の目の前のザ・ザダンは、俺の最も心の弱い部分を的確に攻めている。

必ず護ると誓った彼女を、目の前で汚すことで。

そうか、バーチャルアームで一撃で殺せたのに、身動き出来ない程度に加減したのも、このためか。

こいつ、人間がもがき、苦しむのを楽しんでやがる。

もうこいつは魔族なんてもんじゃねえ。

悪魔だ。

「ぶばばっ、ぶばばっ　ぶばばっ！」

突然ザ・ザダンが腹を抱えて吠えだした。いや、笑ってやがるんだ。

ようやく嬲られていることに気がついたのか。ぎゃははは！

そう言っているんだ。

くそう！　くそう！　くそう！

はっ。

スダハとガトプはどこだ！　嬲るのがこいつらの目的なら、どこかでまだ生きているはずだ！

激痛に耐え、首を巡らす。二人に魔力が残っていれば、治癒を重ね掛けしてもらって……。

いた。

４体目のザ・ザダンと共に。

法衣のズボンを剥ぎ取られ、四つん這いになったスダハが後ろからでかいチンポで肛門を犯されていた。その横でガトプは同じく肛門に腕を突っ込まれていた。

二人とも、剥き出しの尻が血まみれだった。

ひでえ。

こいつら、女も男も関係ないのかよ。

二人も喉を斬られ、白目を剥いていた。ヒズと同じだ。

俺が二人を見ていると、犯しているザ・ザダンと目が合った。

そのザ・ザダンも、にちゃあ、と笑った。残念でしたーといわんばかりに。

今、仮にも意識があるのは俺と教官だけだ。そして俺は魔力が枯渇し、教官は喉を斬られて詠唱出来ないまま犯されている。

くそっ！　くそっ！　くそっ！

考えろ俺！

何かないのかっ！　何かっ！

シューゲルがグルンと空中で回された。両の太腿を両手で捕まえられ、逆さに吊られる。だらんと垂れた両手が一瞬地面に着くが、すぐに持ち上げられた。

そして、ぱかん、と両の太腿を開かれた。グンと引き伸ばされ、足が横一直線になる。

シューゲルはTの字になった。

頭が地面側になったのでシューゲルの顔が良く見えるようになったが、気を失っているのかどうかははっきりとは分からない。

少なくとも目の焦点はあってなく、俺を見てはいなかった。

こんな恥ずかしい格好を認識出来てないのはせめてもの救いか。

地面から見上げている俺には見えないが、上から覗き込んでいる

ザ・ザダンの目にはシューゲルの乙女の部分が丸見えになっている。はずだ。くそっ！

そしてザ・ザダンは抱くようにして股間を顔に近づけると、ベロンと黒い舌で舐めた。

シューゲルのあそこを。

あああああっ！

なんてことしやがるっ！

くそっ！　くそっ！

べろべろべろべろ。

粒々だらけの舌で舐め回す。

その時、半目のシューゲルが、おっ、とかひっ、とか反応した。

「ぶばばっ、ぶばばっ　ぶばばっ！」

シューゲルの微妙な反応がおかしかったのか、俺が怒りで真っ赤になっているのが面白いのか、またザ・ザダンは笑った。

そして、俺から肝心の部分が見えないことに気がついたのか、にちゃあとあの下品な笑みを浮かべてシューゲルの腰を少し倒した。

腰に無理が掛かる姿勢だが、シューゲルは体が柔らかいのか、ぐいと股間だけが下を向いた。

魔物の唾液で濡れたシューゲルの性器が、俺からも見えた。

べったりと周囲の毛が濡れて股間に貼りついたため、茂みに隠されていたはずのピンク色の襞が露わになっていた。

毛の量こそ多かったが、シューゲルのその部分はシューゲルらしい慎ましやかなものだった。

色素沈着一つないピンク色の性器。

股間を大きく開かれているため、中身までが全て見えていた。それでも固く口を閉ざしている膣は、まさに処女のものだった。

そして、少し皺のよったおしりの穴までもが丸見えだった。

衝撃的な光景に俺は目が離せなかった。

これがシューゲルの一番大切な部分。

シューゲルの、女そのもの。

シューゲル自身……。

俺は、股間が熱く硬くなってくるのを恥じた。

そのピンクの宝石のような部分を黒い軟体動物のようなものが覆った。

ザ・ザダンが俺に見せつけるように首を伸ばしてまた舐めはじめたのだ。

粒々がいっぱいの黒い舌が清らかなシューゲルの襞を伸ばすよう

に、隅々まで抉るように、舐める。

シューゲルの肉の豆がぷくッと立ち上がってくる。
それを笑いながら舌で擦り上げる。

そして最も大事な、大切な、誰も触れていないはずの閉じた穴に舌先がめり込んでいく。

やめろ！

そこは、俺んだ！

俺のものだ！

俺の怒りが届いたのか、舌が離れた。

お……、と思う間もなく、そこに砲弾のようなものが貼りついた。

ギンギンに勃起した爆弾ちんぽ。

さっきヒズの中に入っていったものより、でかい。

おいやめろそんなモノをシューゲルに入れるなやめてくれシューゲルの清らかな大切な場所を汚すなお前ごときが魔族がいれていい場所じゃないんだよ俺のための大切な大事なやめてくれ頼むからやめて……。

「ぎゃぎゃぁあああはははあああぁぁぁぁぁぁぁっつううぎゃあああああ！！！！」

喉を斬られたはずのシューゲルが狂ったような悲鳴を上げた。目を見開き、喉からまた血を噴きながら。そして自由な両腕が壊れたように振り回される。

シューゲルの股間にザ・ザダンの極悪ちんぽがねじ込まれた。

処女喪失。

そんな生易しいものではなかった。

シューゲルの叫び、泣き、真っ赤に歪む顔がすぐ目の前にぶら下がっている。

ずっ、ずっと出し入れされる剛直におびただしい血が描き出される。ピンク色の何かも血に混じっている。処女膜どころか、膣の内壁までごっそり削られているようだ。

それだけでは終わらなかった。

2本目のちんぽが、シューゲルの破壊された股間に近づく。おいまさか。

シューゲルの小さな肛門に、砲弾亀頭が沈んだ。

「ぶばぎえええええええごあああああぎあああああぎぎゃあああああ!!!」

シューゲルの悲鳴はもう人間のものとは思えなかった。

ぶちぶちぶちっと、取り返しのつかない音がした。

膣と肛門の間の括約筋があっという間に裂け、大きな穴になった。

「ぎあああああぎぎゃあああああ！！！……」

「ぶばばっ、ぶばばっ　ぶばばっぶばばっ、ぶばばっ　ぶばばっ！」

急に悲鳴の音量が落ち、静かになった。そして逆にザ・ザダンは大笑いしながら、股間全部が穴になったシューゲルに2本のちんぽを高速で出し入れする。そのたびにシューゲルの股間から血と共に赤やピンクや黄色の何かが周囲に飛び散る。

シューゲルの顔色がどんどん青ざめ、表情が失われていく。

第５２話　イルークとシューゲルその３（後書き）

まだ続きます。

スミマセン今回は特殊性癖は押さえようと思っていたのですが、ついつい楽しくなってきてしまいました。

特殊性癖、特にリョナ全開がお好きな方は『かきしの』こと『かわいい女の子やきれいなお姉さんが見る影もなく破壊しつくされて殺されるだけの話』をお勧めします！（おい

第53話　イルークとシューゲルその4

シューゲル！

そう叫ぼうと思って、いままで声が出ていないことにようやく気が付いた。え、なぜだ！？

かろうじて腕を持ち上げ、喉をなでると、べったりと手のひらに血が付いた。

俺の喉も斬られていたのだ。

全身の激痛と怒りで気が付いていなかった。

バーチャルアームで下半身をつぶされる前までは出ていたから、一瞬気絶している間に裂かれたらしい。

班の全員が詠唱出来なくされたことをようやく認識する。

誰も治癒魔法が唱えられない。じゃあ回復は絶望じゃないか！？

だめだ、なんとかして、シューゲルだけでも、助けなきゃ！！

シューゲルの股座は完全に破壊され、ただ一つの大きな穴と化していた。そこに2本の極太触手ちんぽが交互に突き入れられる様は、肉穴に挿入というより、肉の臼を叩きつける2本の杵のようだった。

愛するはずの秘められた肉の器官は影も形も亡くなり、削岩機のようなちんぽで骨に沿ってすり鉢のようにえぐられていた。その骨盤が割られるのも時間の問題のように思われた。

シューゲルはもう悲鳴すら上げない。目は瞬きもせず薄く開いて

いるが、瞳孔には何も映していないようだ。

首筋のキスマークはもう見えない。
それは何度も治癒魔法を使ったせいなのだろうから、今なくなったわけではないが、シューゲルとのつながりがどんどん断ち切られていくように思えた。

首筋も、唇も、顔も、胸も、腰も、処女も、シューゲルの全てが奪われ消えてしまったように思えた。

ちくしょう！
ちくしょうちくしょうちくしょう！

動け、俺！

今動かないで、どうすんだよ！

その瞬間、俺は地面から離れていた。

奇跡が起きた！？

俺は立ち上がった！？

いや、違う。

俺の股の間をくぐるように、ザ・ザダンのちんぽがあった。

いつの間にか1本がシューゲルから抜かれ、俺を持ち上げていた。
そしてぐいと引き寄せられる。

おいまさか。

びりっと、俺の法衣のズボンが裂かれた。情けなく勃起していた俺のちんぽをザ・ザダンのデカマラが押しつぶす。

そして灼熱の塊が俺の尻の中に打ち込まれた。俺の脳が炸裂した。

シューゲルを破壊した極悪ちんぽが今度は俺の肛門や腸を破壊しながらめり込んできた。

「ぐぎぇぎゃげぎゃぎゃごぎゃぐぎぎょぎゃげぎゃあああああっっっ！！！」

喉を斬られているのに俺は絶叫した。

「ぶばばっ、ぶばばっ　ぶばばっ！」

ザ・ザダンが大笑いしている。そしてシューゲルの体を抱き頭を上にする。

俺とシューゲルが肩を寄せまとめてザ・ザダンに持ち上げれる格好になった。

俺は肛門から腹の中を剛直で貫かれ、シューゲルは壊れた股を貫かれたまま。

怪鳥のような声を発している俺の口がすぐそばにあるが、シューゲルは正気に戻らない。

もう死んでいるのかとすら思った。俺はいつの間にか涙を流しながら絶叫していた。

ザ・ザダンは泣きわめいている俺をにやりと一瞥すると、シュー

ゲルの胸に顔を埋めた。

小ぶりな乳房をカブっと一飲みすると、そのまま歯を立て、そして噛み千切った。

シューゲルの左のおっぱいがびちびちと毟り取られ、真っ赤な肉と肋骨がベロンと露わになった。薄い胸膜ごしに心臓が脈打つのが見えた。まだ生きている！

がぶがぶとシューゲルの乳房を噛み潰し、ごくりと呑み込む。そして、全部食べたぜといわんばかりに俺に向かって口を開けて中を見せる。ちぎれたピンクの皮膚が歯の間に挟まっていた。

生きたままシューゲルが喰われている！

俺の目の前が赤く染まった。

血の涙を流していた。

「ぶばばっ、ぶばばっ　ぶばばっ！」

ザ・ザダンはまた下品に笑い、俺の頭の上にシューゲルを高く持ち上げる。

極悪ちんぽをすり鉢化した穴から引き抜き、シューゲルの体をそのままぐいと俺に向かって引き下げた。

おいやめ

次の瞬間には、俺の顔はシューゲルの股間の大穴にずぼりと嵌められていた。

血と肉が俺の顔にみっちりへばりつく。口を閉じていてもシューゲル自身の胎内の圧力で耳や鼻の穴からミンチ化した肉や油が浸み込んでくる。

息が出来ない。

やがて俺はシューゲルの股にスカルファックした状態のまま、窒息した。

俺は……

死んだ……

のか……？

◇◇◇◇◇

白い幕が天井から四方を覆っていた。

近くに人の気配を感じ反射的に起き上がった。そして自分が動けることに驚愕した。

怪我が治ってる！？

「ようやく気が付いたか、イルーク」

「教官！」

ブレンダ教官が横に立っていた。俺はどうやら小さなテントの中のベッドに寝かされているようだ。

「ご無事で……。教官が俺を治癒して下さったのですね？」

「うむ。協力者がいてな。助かった。どうやら動くのは支障がないようだな」

「はい。助かりました。……協力者……、とは？」

そしてシューゲルの惨状を思い出す。

「……、あっ、教官！　シューゲルは！？　いや、隊の仲間は、無事ですかっ？」

教官が苦笑いしたのがわかった。個人的な質問を先にしてしまった。これじゃシューゲルと俺の仲がバレる。

「全員無事だ。貴様とシューゲルが特にひどかったが、すでに治癒した。目を覚ましたのは貴様が最後だ。みんな外にいるぞ」

シューゲルが治った。

無事なんだ。

良かった……。

俺は安心し、教官の前だというのに脱力して倒れそうになった。

いかんいかん。

すぐにベッドから降りる。病院服で素足だったが、気にせず地面

を踏み、敬礼する。

「ありがとうございます！　教官のおかげで命を拾いました！」

「あたしの手柄じゃない。後ほど、協力者を紹介する。靴や服はそこにある。着替えるといい。あたしは外の見回りに行く」

教官はテントの隅の籠を指さし、そして出ていった。

俺はちょっとサイズが小さい服を着た。法衣ではなく兵士が鎧の下に着る簡易な装備服だが、病院服よりはうんとしっかりしている。ブーツは逆に少し大きかったが、裸足でいるよりはずっといい。

テントの外に出ると、同じような服を着た男二人が大きな木の根元で話していた。

「スダハ！　ガトプ！」

「おお、目が覚めたか、イルーク！」

「なかなか起きないから心配したぞ。酷くやられたようだな」

「お前らもだろ、ケツをよ」

「それな……。お互い忘れようぜ……」

「ああ……」

あの体験はひどすぎた。今度会ったらザ・ザダンの野郎ぜってえぶっ殺す！

いや、それよりも。

「ヒズとシューゲルは？」

あえてヒズを先に言った。さっきの教官とのやり取りの反省だ。シューゲルとの仲はまだこいつらに言ってないし。特にスダハに

はまだ知られたくない。

「ああ、この向こうの広場にいる。子どもたちのところだ」

「子どもたちって？」

「なんか、ちっせえ子がいっぱいいてさ。教官の知り合いの連れらしい」

さっき言ってた協力者か。

どこにいるんだ、その人。

うん？

「なあ、このこんもりした丘みたいなの、人が作った物じゃねえか？」

「うん。わが軍の砦のようだ」

砦！

そういえば、外から見たらすぐわかったが、テントもわがアリアガルド法国軍の仕様だ。

協力者は軍属ということなのか。

教官の知り合いならそうに違いない。

子どもたちとやらは難民なのだろう。軍人にしては面倒見がいい。

ならば砦に備蓄している各種物資も、そこそこ余裕があるということだ。

これは助かる。

「じゃあ中で休もうぜ。魔族が出る森だろここ」

「いや、それがさ。教官がちょっと待てって言ってるんだよ」
「どういうことなんだ？」
「詳しい説明を受けていないが、今その協力者があいにく不在らしい」
「子どもだけを森に置いたままどっかに行ったってことか？」
「教官がいらっしゃるからかもな。その辺はよくわからないんだ」

スダハには珍しく、要領を得ない。いずれにしても教官が待てと言うなら俺たちが勝手をするわけにはいかない。

「まあいい。ヒズとシューゲルに会って来る。子どもたち……にも会ってみたいしな」
「必要以上の接触はやめておけよ。それに、わかってると思うが、俺ら以上に女子は非常にデリケートな状態だ。言葉には気をつけろよ」

スダハはシューゲルに気を使っているのだろう。
わかってるさ。そしてシューゲルを慰められるのは俺だけだ。あいにくな。

俺は砦の外をぐるりと回り反対側へ向かった。

こちらが砦の表側になるのだろう。石組みに大きな鉄の扉が組み込まれた入り口前が広く抜けた草地になっていた。小さな子どもがたくさんいる。
3歳ぐらいの幼子から、体が出来つつあるガキまで。全員が真面目に剣を振る練習をしていた。
彼らも法国軍への志願を目指しているのだろう。
なかなか微笑ましい光景だ。

てっきりこのガキどもについているのだと思っていたが、シューゲルとヒズは少し離れた岩場に座っていた。簡易装備服を着ている。

「シューゲル！」

元気そうな姿を見て声を掛けた。が、シューゲルは俺を見たとたん、森の方に駆けだした。

逃げた？

「イルークか……」

残された格好になったヒズの表情が暗い。

「ああ。ええと、大丈夫そうだな、ヒズ。シューゲルはどうした？　なぜ逃げる？」

「アンタ、シューゲルと付き合いだしたんだろ？　聞いたよ」

「お、おお……」

「アタシは操を立てる相手がいない。それでも、屈辱だった。シューゲルは前からアンタのことを好いていた。だから、普通じゃいられないよ」

「そんなの、シューゲルのせいじゃない！」

「本人にそう言ってやりな。ザ・ザダンは４体とも始末されたが、まだ安全とは言えない。ついていてやれ」

「おおっ！」

俺はヒズに軽く礼をして、すぐシューゲルの後を追った。

大きな木の陰で、シューゲルが後ろを向いてうずくまっていた。

「シューゲル！」
「来ないでっ！」

シューゲルは顔を隠したまま尖った声を上げた。泣いてる？

「シューゲル……。あの、その……、うん、大丈夫だよ」
「何が大丈夫なのよっ！」
「ごめん……」
「謝らないでよっ！　謝りたいのはこっちよ！　なにもかも、奪われて……、あたし、どうしたらいいのか」
「奪われてなんかいないっ」
「え？」
「俺のシューゲルは今ここにいるっ！　からっ！　何も奪われてないっ！」
「イルーク……」

ようやく、シューゲルが顔を上げ俺を薄く振り向く。青ざめた頬に涙がボロボロ流れてる。

「痛かったの……」
「え？」
「痛くて、怖くて、失って、気が狂いそうに痛くて」
「も、もう大丈夫だ！　だからっ」
「ううん、痛くて、だから、あたし、治癒魔法を、自分に掛け続けたの……。死んじゃうと思って」
「うん、そりゃそうだ！　シューゲル、そりゃ当たり前だ！」
「だから、魔法薬や回復薬や、武器もまだ残ってたのに、出せなかったの……」
「え？」
「あたしが自分のために魔法を使ったから、みんなひどい目に。あ

たしのせいなんだ」
「違う！」
ゼッタイに違う！　あの状況で仮に魔法薬がまだあっても、喉が斬られていては。
「イルークのせいじゃない！　魔物が強くて、ずる賢かった！　俺たちは、歯が立たなかった！」
そうだ。
認めたくない。認めたくないが、俺たちは魔物に負けた。
完膚なきまでに敗北した。
「だからっ、シューゲルは何も悪くないっ！　悪いとしたら、俺たち全部だ！　俺たちが弱いから負けた！　だから、もっと強くなろう！　一緒に！」
「イルーク……」
シューゲルが完全に俺を振り向いた。玉のような涙があふれ、地面を濡らす。
「許して……くれるの……？」
「当たり前だ！　許すも許さないもないっ！　俺のシューゲルが帰ってきてくれた！　俺はそれが嬉しいんだっ！」
俺はシューゲルを抱きしめた。
暖かい。

俺の胸がシューゲルの涙で濡れるが、それすら心地よい。

無事でよかった……。

「おうおう。お熱いねえ」

ヒズの声がして、俺たちはばっとと身を離した。

「機嫌は治ったみたいだな。テントに戻ろうか。隊長はテントの辺りで待つように言ってたし」

「そ、そうか。そうだな」

俺は真っ赤になりながら、シューゲルの手を取った。シューゲルも真っ赤だった。

第５３話　イルークとシューゲルその４（後書き）

いやあすみません。この話、その４で終わる予定だったんですが、もう少し続きます。

ＮＴＲ後の純愛もいいですね（棒）。

第５４話　イルークとシューゲルその５

砦をぐるっと逆回りに帰ろうとして、まだ剣を一生懸命振っているガキどもがつい気になった。
なぜかというと、さっきはシューゲルを探していてそれどころじゃなかったのだが、よく見たらまったく法国の型じゃなかったからだ。軍人が指導しているとは思えないおかしな素振りだった。

「ヒズ、シューゲル、先に戻っていてくれ」
「イルーク、どうする気？」
「ちょっと小僧どもに稽古をつけてやろうと思ってさ」
「教官にむやみに動くなっていわれてるよ」
「ヒズ。これはむやみじゃない。将来の法国兵に早期教育をするだけだ」

多分子どもたちの保護者は剣術の心得がないのだろう。なら、ここで世話になる間、お礼代わりに訓練を手伝うのは当然のことだ。
俺は槍が一番得意だけど、剣もそれなりに使える。
愛用の魔槍はもうないが。

「じゃあ先に戻ってる。無茶しないでよ」
「ああ、ヒズ。シューゲルをよろしく」

二人を先に行かせ、俺は子どもたちに近寄った。

「よお、頑張ってるな」

爽やかな笑顔で声を掛けたが、反応がない。

「おいおい無視かよ。つれないなあ。ちゃんとした剣術を教えてもらいたくないかい？」

そう言っても子どもらはこっちを見もしない。何も聞こえないかのようにただ素振りをしている。

「そんな素人剣術じゃ何年練習しても強くなれねえ。軍の訓練のイロハぐらい知っとくべきだと思うけどなあ」

「ほっといてくれ」

「おい、デューイ！　喋るなって」

お、生意気そうなガキが反応した。ふむ、ちょっと怒らせるぐらいがよさそうだな。

「ほっとけねえな。せっかくお前ら頑張ってんのにさ、手本が悪すぎる。お前たちの先生、剣術は下手だな」

「ねーちゃんは強い。からこれでいい」

「へっ、貸してみろ」

俺は生意気なガキの木剣を取り上げようとした。が、ガキは即座に反応し、ためらうことなく俺の手首めがけ剣を振るった。

思い切りがいい。けど、生意気なガキ相手に反撃は予想していた。手首をくるっと返して掌で受け止める。そしてくいと腕を引いて、あっさり木剣を取り上げた。

「あっ」

「木剣の場合はこうやれば得物を奪える。真剣だとまた違う方法がある。な、これがほんとの軍の訓練だ」

「返せよ」
「まあまあ」

そういうと、俺は軍隊式の剣術のさわりを見せた。訓練の最初に行う上段、中段、下段の素振りの組み合わせだ。

「こんな感じだ」
「ただの踊りにしか見えない」

生意気なガキがつぶやく。

「ただの踊りだと」
「そんな剣じゃ魔物に勝てない」
「なに」

魔物に勝てないといわれた瞬間、俺は頭に血が上った。
確かにクラス4、クラス5の魔物に負けた。シューゲルを、愛する彼女を護れなかった。その自責と屈辱と憤怒は今も俺の心を焼いている。
沸点が低いどころか、煮えたぎったままだったマグマの蓋は簡単に開いた。

「そこまでいうなら、手合わせしてもらおうか」

俺は低い声で唸るように言った。言ってしまった。

「おいデューイ、ほっとけ」

別のガキが制しようとするが、俺はあえて煽った。

「ガキ相手に1対1は卑怯だからな。まとめてかかってきていいぜ」
「そんな必要はないね。カルド、剣を貸せ。こいつ、ねーちゃんをバカにした。オレが締めてやる」
「仕方ない。わかった。デューイ、これ使えよ」

別のガキから渡された木剣を構え、デューイというガキが俺に相対した。
こんなガキ相手に何してんだという思いが頭の片隅でしたが、怒りが勝った。そして、素振りより実戦的な稽古だと自分に言い訳する。

軍剣術を叩き込んでやる。

「いつでも来いよ」

オレがそう言うと、

「そっか。後悔するなよ」

とデューイが言った瞬間、その姿が消えた。

身体強化!?

上かっ！

コンマ何秒以下で俺はデューイが頭上にいることを察知し、剣で頭を防いだ。がきい、と盛大な音を立て、木剣同士がぶつかる。あっぶね。

「ちっ」

地面に降りたデューイが舌打ちし、姿がまた消える。ただの身体強化じゃない。加速している。

背後から膝裏を狙ってきた。剣を大きく下げ払う。また鈍い音が響く。

「デューイの剣を二度も防いだ！？」

剣を貸したガキが驚きの声を上げるが、俺も驚いている。何だこの戦い方は。

この高速戦闘なら、流れるような動作を重んじる軍式の剣術よりもさっきの素人剣術の方が合っている。

というか、あれは素人剣術なんかじゃなかったんだ。

魔法と合わさって真価を発揮する実戦剣技、武技とでもいうべき技だ。

こいつはおもしれえ。

俺は剣術をやめた。両手を開いて木剣を持ち、体の脇で水平に構える。

槍の構えだ。

デューイはいったん離れ、ジグザグに走りながら接近しようとしている。

俺は水平にした剣をくるんと体の周囲で旋回した。木剣を槍として使った場合の間合いを測る。把握した。

加速したデューイが間合いに入った。

必殺の突き！

槍がデューイを貫く。あ、やばい。手加減が甘かった。その感覚があったが、デューイは瞬時に腕を引いて俺の突きを木剣で受けた。しかし、衝撃で後方に吹っ飛び、地面をコロコロと転がって、立ち上がった。

よかった、怪我はさせてない。

そして俺の勝ちだ。

「くそっ！」

「わかったか。お前たちのは素人剣法だ。まずちゃんとした師に着いて、基礎をしっかり磨け。魔法との連携はそれからでいい」

この年齢でこの動きだ。ちゃんとした訓練を受ければ相当の腕になるだろう。

「そんな暇ねえよ！　魔物は毎日襲ってくるんだぞ！」

「毎日……？　お前らがやっつけてるのか？」

「いや、主にねーちゃんだけど……」

「ねーちゃん？」

「デューイ、喋りすぎ」

別の女のガキが睨むように言った。気の強そうな女だ。

まあいい。ガキどもも今のままじゃダメだということには気がついただろう。

俺は木剣をデューイに返そうとして、柄に掘られた紋章に気がついた。

「なに！？　これはっ！」

それは大聖会の紋章だった。なんでこんなもんが。

「おいお前たち、木剣を全部よこせ！」

「何だお前、勝ったら全部よこせって、大人はやっぱ強盗じゃないか！」

「は？　……ああ、いや、そうじゃない。勘違いするな。木剣の紋章を確認するだけだ」

「紋章？」

デューイも手にした木剣の柄の紋章を見た。

「なんか意味があるものだったのか？　ねーちゃんの落書きかと思ってた」

「これはわが法国最高機関、大聖会の紋章だ。ただの備品じゃない。その砦も大聖会のものなのかもしれない」

教官は待つようにいったようだが、そもそも大聖会の紋章の木剣でガキが訓練って、それ自体既に不敬罪だ。

砦も大聖会のものだったら？

これは見過ごしてはおけないぞ！

「おい、イルーク、何やってる？」

背後から声がかかった。スダハだ。振り向くと、シューゲル、ヒズ、スダハ、ガトプが姿を見せていた。

「いつまでも戻ってこないから見に来たら、子どもたち相手に何している？　待てと言われたって伝えただろ」

スダハにガキどもと口論していたことを咎められた。

「それどころじゃない。この木剣を見てみろ」
「うん？」

スダハが近寄り、俺が目の前に突き出した柄の紋章を見て顔色を変える。

「大聖会の紋章！？　これは司祭様、いや、賢者様の近衛か！？」
「大聖会の紋章だって！？」
「これは……」
「そしてこいつら、この紋章を知らないんだ。言ってる意味が分かるな？　みんな」
「ああ……。大聖会の装備や備品を勝手に使っているなら、極刑は免れない」
「君たち！　これは君たちの命にさえかかわる問題だ。砦を確認させてもらいたい！　いや、調べなければならない！」

スダハがガキどもに向かって言った。

◇◇◇◇

「こんなものかな」

ミミナガネズミ3匹にホールドリ2羽。それにキノコ。6人で喰うにはちょっと多いが、余った分はミヤビに渡せばいい。回復して貰ったお礼だ。子どもらも喜ぶだろう。

この森は食材が豊富だ。人の手がほとんど入っていない。どの国からも遠いというミヤビの話は本当なんだろう。

あたし、ブレンダは縄で縛った獲物を肩に担ぎ、テントに戻ることにした。

ぐるっと周囲を一回りしたが、魔物の気配はない。料理と食事の時間は十分にあるだろう。

シューゲルに収納させていたのはもっぱら薬品と武器だった。今回の訓練では野営を想定していなかったから当然なのだが。

火は魔法で起こせるし、ナイフがあれば調理も出来る。薬の中には塩もあるから、鍋釜がなくても料理は出来る。あたしは特務の時に長期の野戦だって経験済みだ。

新兵たちも野営の手順は教えているから、手伝いくらいは出来るだろう。

おっと、そんなことを考えていたら急に腹がすいてきた。

早く戻って飯にしよう。串焼きか、炙りか。

そんな、ちょっと浮ついた気持ちで戻ってきたら、子どもたちと新兵が一触即発だった。

なんでこうなる。

「あんたたち、なにやってんの！　子どもに手を出すなんて！」

「教官、報告します。子どもたちは大聖会の備品を使っておりました。このとおりです」

スダハが取り上げた木剣をあたしに見せた。まだ子どものうち三人が木剣を構えているから全部ではないが、束になった木剣には同じ紋章が刻まれていた。

確かに大聖会の紋章だ。

何でミヤビが？　第八境界の紋章ならわかるが……。

「砦を至急確認する必要があります」

「そう……、だな。スダハ」

「この子どもたちに剣を教えている者は大聖会の関係者なのですか！？」

シューゲルが不安そうにあたしに尋ねる。ミヤビのことを聞いているのだろうが、あたしにも何でミヤビが大聖会の紋章入りなんかを使っているのかわからない。

「いや、協力者は、大聖会とは関係ないはずだ」

「ならば、一層危ういことになります。このままではこの子どもたちも罪に問われます。慎重な調査をお願いします」

「そうです！　教官、シューゲルのいうとおりです。砦の中を徹底的に調べないと！」

イルークが噛みつくように言う。こいつほんとにシューゲルが大切なんだな。

確かに、このままだと良くて国家財産の無断使用、悪くすれば国家反逆罪で子どもたち含め死刑だ。

まったく、なんてもんを使ってんだい、ミヤビ！

「お前らさっきから何勝手なこと言ってんだよ。砦の中に大人は入れさえねえ」

剣を構えた子どもがあたしたちを睨む。

子どもの一人が急に遠くを見て叫んだ。

「ねーちゃん！」

◇◇◇◇◇

教官が斬られた。

剣も持たない素手の相手に。

なにが起きたのか俺には一瞬理解出来なかった。事実を受け入れるのを脳が拒否したのかもしれない。

袈裟懸けに切断された教官の上半身がずるずると地面に落ちた。

誰かの悲鳴が聞こえた。

駆け寄ろうとしたが、瀕死のはずの教官が手を挙げた。来るなという合図だ。

そして、教官の最後の命令が紡がれた。

教官を斬った女は、教官が話し終わるまで何もせずに立っていた。

シューゲルがガタガタと震え出した。目の前の女は魔物よりも恐ろしい。圧倒的な強さだ。ザ・ザダンをこの女が倒したと聞いたときはまさかと思ったが、今はこいつの方がはるかにバケモンだとわかる。

シューゲルの肩を抱いた。

「大丈夫だ。俺がついてる」

シューゲルだけに聞こえるようにつぶやく。

「諸君！　教官の最後の命令を実行する！　全員、アリアガルド法国へ直ちに帰還の途に着け！」
「はっ！」

俺たちは臨時の隊長となったスダハの指示に声を揃えた。
そして教官の死体に最敬礼をし、回れ右をして駆けだそうとした。

どうやって法国に帰るのか、どっちの方角なのか、そんなことはわからないが、とにかくあの女から逃げたかった。
みんなもそうだろう。
あんなバケモンと一緒になんていられない。
けれど、絶対シューゲルと共に生き延びてやる。なにがなんでも！

だが、その女が背後で冷たく言った。

「待ちなさい」

俺たちは、金縛りにあったように動きを止めた。

第５４話　イルークとシューゲルその５（後書き）

ああ、わかっていたけどエロがない！
そして時間軸が第４９話に戻りました。
次回はイルークとシューゲルその６ならぬ、第４９話の続きです。
でもここまで引っ張っておいて、イルークとシューゲルがラブラブのままの展開なんて、ないですよね（下種）。

第５５話　勘違い

「待ちなさい」

わたしがそう言うと、新兵たちはびくっと痙攣を起こしたかのようにぎこちなく立ち止まり、ぎぎぎと壊れたおもちゃのような動きで私の方を振り返りました。

一様に怯えの表情が浮かんでいます。

それはそうでしょう。

足元にはブレンダさんの上半身だけの死体が転がっています。

わたしは、彼らにとって魔王にも等しい存在でしょう。

しかしわたしも、自ら人を殺めることに思うところがなかったわけではありません。

そもそもブレンダさんとは知り合いですし、一度は助けた命です。

「答えなさい。ブレンダさんはなぜ私を待たなかったの？」

そう、違和感がありました。子どもたちしかいない時に砦の調査なんて、いくら何でも強引です。中を案内させるためにも、普通なら私の帰りを待つはずです。

ブレンダさんの言い方にも引っ掛かりがありました。

わざと全責任を自分で負ったように思えました。

だとすれば、この騒ぎのきっかけは、子どもたちと新兵のトラブルではなかったのでしょうか？

「そ、それは……」

スダハと呼ばれた新兵が何か言いかけようとしますが、うまく言葉になりません。わたしを恐れるあまり、蛇に睨まれた蛙状態になっているようです。

さっきまでの威勢は何処に行ってしまったのでしょうか。

新兵たちはそれっきり押し黙ってしまいました。困りましたね。話が進みません。

「ねーちゃん、これ」

デューイが自分の木刀を示しました。

「木刀がどうかしたの？　デューイ」

「この印をみて、あいつが急に騒ぎ出した」

デューイが一人の新兵を指さします。さっき結構私に噛みついてきた男です。今は黙っていますが。

ええと、イルークといいましたね。

「印？　この印が何？」

「わかんない。あいつに聞いて」

これは大聖会の紋章ですが、それがどうしたというのでしょう？

「イルークでしたね。説明してください」

名指しされたイルークがはっきりとうろたえました。情けない顔です。

その隣の女性は収納魔法持ちの人ですね。名前はシューゲルといいましたか。

イルークはシューゲルの顔を見ますが、シューゲルは視線をそらしました。さっきまでは手を繋いでいたようでしたが、今は離しています。イルークがますます情けない表情になります。

が、さすがは軍人。決意をしたようにきっと表情を改め、焦ったように話し始めました。

「それは大聖会の紋章だ。つまり大聖会の装備、備品だぞ！　だったら、その砦も大聖会直轄だろ。だから調べないといけないんだ！　大聖会のものを勝手に使うとは、国家財産の窃取にあたる！」

「ああ、そういうことですか。砦は大聖会とは関係ありませんよ」

「は？」

「この木刀は昔訓練用に準備したもので、この砦にあったわけではないです」

「き、貴様は何を言っている？」

イルークの表情に再び怒りの相が浮かんできました。喋りはじめて少し自分を取り戻したというか、興奮しやすい性質のようです。

隣のシューゲルには逆に焦りの色が見られます。わたしを怒らせたらイルークが危ないと心配しているのでしょうか。それとも、わたしの怒りがすぐ横の自分に飛び火することを心配しているのでしょうか。

「事実です。別に大聖会のものだけではないですよ。ほら」

わたしはストレージからタランジ仕様の訓練用の魔法の杖、ガーランド仕様の訓練用の刃をつぶした鋼剣を出現させました。その数それぞれ４０本。ストレージに入っていた全部です。

ガラガラと地面に撒かれたそれらは、ガーランド帝王、タランジ

国王直轄部隊の紋章入りです。
勇者パーティに対し各国から供与されたものですから当たり前のことですが。

「ひっ！」

８０本もの武具を一度に取り出したので、シューゲルが短い悲鳴を上げました。彼女も収納魔法持ちですが、これだけの量を一度に出し入れは出来ないのでしょう。目を丸くしています。

「収納魔法……。この紋章は、帝国に王国？」
「ああ、イルーク、間違いない。それも帝都直衛軍に王室近衛隊の紋章だ」

それまで黙っていた別の男性新兵がうなずきました。ブレンダさんに引率を頼まれたスダハでしたね。他国軍のこともよく勉強しているようです。

「ほらね。砦とは全く関係ないんです。元から持ってたものです」
「な、なんで貴様が、こんな３国トップの貴重な物資を……」
「貴重？　こんなものは訓練用の消耗品です。子どもたちにちょうど良いと思って使っているだけですよ。これを貴重というなら、これらはどうなるんでしょうか？」

わたしはそういうと、訓練用の杖や鋼剣、ついでに新兵たちが抱えたままだった木剣も収納し、かわりに多数のものを出現させました。

「ああっ！」
「ひぃっ！」

思わず悲鳴を上げる新兵たちの前に並んだものは、眩しく輝く剣や炎を纏った槍、宙に浮く大きな錫杖などをはじめ、白銀に輝くパワードスーツ、連装式ロケットガン、エアバイク、変形式マジックビークル、ハンディマルチプルランチャー、ビームシールド、重力子銃……。

聖なる遺物（アーティファクト）の数々です。

「な、なんだこりゃ……」

「聖なる遺物（アーティファクト）……」

「なにっ。ヒズ。これがそうなのか？　本当に？」

「ええ……、多分。魔力とは違う気の流れが凄い。でも、こんなにあるなんて……」

新兵たちが騒ぎ始めます。聖なる遺物（アーティファクト）の現物なんて見たことないでしょうから。

ヒズという女は内包されたエネルギーを感じることが出来るのでしょうか。他の新兵より多少聖なる遺物（アーティファクト）の知識があるのかもしれません。

わたしは手近にあった輝く剣を取り、森に向かって軽く振りました。

剣先から三日月状の光の塊が飛んでいき、大きな木々を何本も軽々と切断します。轟音を立てて斬られた木が倒れます。

新兵たちが唖然としています。デューイたちもあっけにとられたようで、固まっています。これだけの数の聖なる遺物（アーティファクト）は子どもたちも初めて見るものですし、威力のデモンストレーションも初めてですからね。

「ほら。あんな木剣なんて大した値打ちじゃないでしょ？」
「あ、あ、ああ……。貴様、じゃない、あ、貴女は一体何者なんですか？」

イルークの口調がまた怯えたようになります。忙しい人ですね。

「わたしはミヤビ。ラリル村のミヤビ。ただの村娘でした」
「嘘だっ！　ただの村娘がこんな物凄い力を持ってるはずがないだろっ！」

イルークの口調がまたキレ気味になります。感情のコントロールが下手なんでしょう。

「だから、でした。今は、勇者」

わたしは聖なる遺物（アーティファクト）を収納し、代わりに自分の回りに勇者の剣（ブレイブソード）を5本出現させました。
剣は縦になったまま、わたしの回りをゆっくりと旋回します。

「なぜ聖なる遺物（アーティファクト）を見せたか。なぜ貴方たちに自分が勇者だと教えたか、分かりますか？」

わたしは勇者の剣（ブレイブソード）を飛ばし、新兵たちの喉元すぐに切っ先を向けました。

「ひっ！」
「ひいいっ！」

生き物のように空中で自分を狙っている勇者の剣（ブレイブソード）に新兵たちがく

ぎ付けになります。少しでも動いたら殺される。きっとそう思っているのでしょうね。

「し、死人に口なし……。教官同様俺たちを始末するから……？」

「いや、伝説の勇者なら、人間を魔族から救ってくれるはず……」

「こ、殺さないで……」

シューゲルがガタガタ震えだします。

「殺させるもんか！」

イルークが叫びました。ほう。

なかなか肝が据わっていますね。キレてるだけかもしれませんが。

「俺たちは軍人としての務めを果たすため砦を調べようとしただけだ！　それだけでなんで殺されにゃならない！　理不尽だろ！」

「そう言ってブレンダさんをたきつけて、結局あたしに古い知り合いを殺させたのは、イルーク、貴方です」

うん、ようやく話が戻ってきました。

「貴方が騒ぎ出したから、調査の必要があると言い出したから、ブレンダさんもあたしを待たず砦に入ろうとした。違いますか？」

「だから、大聖会の紋章があったからだ！」

「木剣と砦は関係ないと言ったでしょう？　話を聞いてなかったのですか？　それは貴方の勘違いです。勘違いでブレンダさんを追い詰めたんですね」

「そ、それは」

「そうです。イルークの勘違いです。それがこのいさかいの始まりです」

スダハが割り込みました。言葉遣いが変わりましたね。

「勘違いで砦に入ろうとして申し訳ありませんでした。仮のリーダーとしてですが、ミヤビ殿、いや、勇者様。深く謝罪します」

スダハが膝を地面につけ、頭を下げました。土下座に似ているポーズです。

ちなみに勇者の剣（ブレイブソード）は自動追尾するのでスダハの頭の位置に下がっています。

「スダハ。きっかけはイルークですが、貴方も煽っていたではありませんか」

「申し訳ありません。勘違いとは思わず、イルークの言葉通りに考えてしまいました」

その時、別の男性の新兵とヒズも近似土下座を始めました。そういえばこの男性新兵、さっきから一言もしゃべらないですね。言葉が話せない……、わけはないですね。法術士なのですから。

「申し訳ありません！」

「ごめんなさい！」

あ、喋りました。

「そこの男の人。お名前は？」

「ガトプ、と申します」

「そう。ガトプ。貴方はただ一緒にいただけでしたね。先ほども煽りはしていなかったですし」

「ただ、止めることもしませんでした。だから同罪です」

「なるほど、正直ですね。一緒に死にたいということですか」
「い、いえ、一緒にお許しいただきたい、ということです」
「仲間想いな方ですね」

スダハ、ヒズ、ガトプと話している間にイルークとシューゲルが何か小声で話しています。ちょっと言い争っている感じですね。

「イルーク？」

わたしが訝ると、シューゲルが先に行動しました。同じように近似土下座をします。

「申し訳ありません勇者様。伝説の勇者様とは露知らず数々のご無礼、心よりお詫び申し上げます。あのっ、あのっ、イルークは最後に目を覚ましたんですっ。だからまだ魔物との闘いの後で頭が混乱していて、何もわからなくなって、その、勘違いをっ。本当に申し訳ありません。勇者のお慈悲を。なにとぞお許しくださいっ！」

随分な早口で捲し立てました。
そんなシューゲルの隣で、イルークは一人立ったままです。多分さっきの言い争いは、近似土下座で命乞いをする、しないというやり取りだったのでしょう。
イルークも自分だけが孤立している自覚はあるのでしょうが、意地になっているのかバカなのか、謝罪はしないとでも決めているのでしょうか。シューゲルが詫びの言葉を話しながらイルークに並ぶように手招きしているのに、無視しています。

「全てはイルークの勘違いから始まった。ブレンダさんが死んだのもイルークのせい。それでいいですね」

ギルティ。わたしはイルーク有罪を宣言しました。
わたしは、イルークに向けたもの以外の勇者の剣（ブレイブソード）を高く引き上げました。狙われたままですが、喉元からは外れた状態です。

「シューゲル。立ちなさい」
「は、はい……」

シューゲルが少しもじもじしながら立ち上がりました。簡易服のズボンの股間から太腿にかけて濡れています。漏らしたのですね。
わたしは勇者の剣（ブレイブソード）を再びゆっくりと下げて、シューゲルの手の位置に合わせました。

「その剣で、イルークを刺して殺しなさい。それで貴女を含めた４人は見逃してあげます」
「えっ」
「そんなっ」

イルークとシューゲルが同時に叫びます。

「既に貴方たちはブレンダさんを犠牲にしたのです。あと一人、元凶のイルークを殺せば逃がしてあげると言っているのです。悪いのはイルークです。ブレンダさんを殺したのはイルーク。罪を償い、さらには仲間も救える。イルークにとってもいい話ではありませんか」
「シューゲル！　騙されるな！　こんな奴、勇者じゃない！　俺を殺したら、その後でみんな殺すつもりだ」
「勇者を疑うとは失敬な。仲間のために犠牲となる。そんなことすら貴方は出来ないんですか。軍人の矜持はどうしたんですか。新兵とはいえ、見習いじゃない。もう立派な軍属なんでしょう？」

「この悪魔！　そうか貴様、実は魔人だな！　人間に化けて、騙してるんだな！」
「もう無茶苦茶ですね。理屈も何もあったものではないですね。シューゲル、早く殺しなさい。心臓を刺すだけです。その剣は力を入れなくても、人間の体ぐらいなら難なく貫通出来ますから簡単ですよ」

わたしは腕組みをして待ちます。私の後ろでは子どもたちが固唾をのんで成り行きを見ています。
きっと、子どもたちは。

このやりとりを楽しんでいるはずです。

「あ、あたしが、イルークを殺す……」

シューゲルが勇者の剣（ブレイブソード）を両手で抱くように掴んでいます。そしてゆっくりとイルークに向かって足を踏み出そうとします。
ですが、ほんのわずかな距離なのに、足が震えて前に出ません。

「やめろ、やめてくれ、シューゲル。一緒に帰らないと、意味がないだろ！」

イルークは逃げようとしますが、勇者の剣（ブレイブソード）が回り込んで首筋をちょんと突きます。それだけで血が筋になって流れ出してきました。

「つっ！」
「イルーク、ごめんっ、ごめんなさいっ！」

イルークの首に流れる血を見てあきらめたのか、シューゲルが泣きながらイルークに駆け寄りました。そして勇者の剣（ブレイブソード）を振り上げま

す。

思わずイルークが目をつむりました。

けれども。

「で、出来ないよ！　出来るわけないよ！　イルークぅ……」

振り上げた姿勢のままシューゲルが号泣しました。イルークがシューゲルの肩に手を置きます。

「当たり前だ。シューゲルが人殺しになっちゃいけない。あの悪魔を、一緒に倒そう！　その剣を貸せ！」

ずぶう。

イルークの胸から勇者の剣（ブレイブソード）が突き出しました。シューゲルのとは別の物です。

そのまま、イルークは声も出さずに地面に倒れ込みました。

「え、イルーク？　イルーク！？　いやあああああ！」

シューゲルが絶叫して膝から崩れ落ち、イルークを揺さぶります。イルークの目は見開いたまま、もう何も見ていません。ブレンダさんと同じです。背後から心臓を一刺し。即死です。

イルークの後ろにいたのは、スダハでした。

第５５話　勘違い（後書き）

ああああ！
まだエロがない！
ほんとごめんなさい！

第５６話　裏切り

「イルーク！　イルーク！」

シューゲルが胸に大穴の開いたイルークを強く揺さぶります。

うん、もし生きていたとしても、それがとどめになりますから。

重傷の人を揺さぶってはいけませんよ。

心臓を刺されたのに、血が噴き出すこともありませんでしたから、動脈含め周辺丸ごと切断されたと思われますので、完全に死んでいるのでしょうけれど。

わたしはスダハに声を掛けました。

「シューゲルに殺すよう命令したのですが」

「承知しております勇者様。しかし、シューゲルは実行をためらっていましたので、リーダーの私が代わって執行しました。そもそも班員の不始末ですので、責任を取るのは私の役割です」

さっきまでと違って堂々とした物言いです。ちょっと引っかかるものを感じましたが、人を殺して度胸がついたのかもしれません。

「なるほど。一理ありますね。多少命令と異なる結果でしたが、許します」

「ありがとうございます」

「では約束どおり、貴方たち４人は解放しましょう。どこにでも行くといいです」

「は、はい。お許しいただき光栄です。ではただちに出立します」

「いえ、もう少し待ちなさい」

わたしはまだイルークの亡骸のそばでうずくまっているシューゲルに顔を向けました。さすがにもう揺さぶってはいません。暗い瞳でイルークの死に顔を眺めています。

「シューゲル」

わたしが声を掛けると、びくっとし、おそるおそるという感じでわたしの方にゆっくり振り向きました。

「さすがに何もなしでこの森を抜けるのは難しいと思います。差し上げましょう。あなたの収納に入るといいのですが」

わたしは野営用の中型テント二つに軍用剣を4振り、それにいくばくかの食料と水をストレージから出して地面に並べました。

「戴けるのですか、勇者様！」

「ブレンダさんとの約束がありますからね。森で野垂れ死にだけは避けてください。頼みましたよ、スダハ」

「ありがとうございます！　シューゲル、収納出来るよな？」

「は、はい、スダハ……」

シューゲルは提供品を全て収納しました。一人でブレンダさんの班の荷物持ちやってただけのことはありますね。

「よし、シューゲル。では行くぞ！」

「待って、スダハ！　教官とイルークを埋葬しないと」

「ああ、それはわたしがやっておきます。魔物を引き寄せたらかなわないので、丁寧にしておきますから、安心してください。特にブレンダさんは知人ですし」

「重ね重ねありがとうございます！　ほら、立てシューゲル。みんなも！」

半ば引きずるようにスダハはシューゲルを連れて行きました。ガトプ、ヒズも続きます。

やがて、彼ら4人は森に消えました。南西方向に向かいましたから、ブレンダさんに教えた一番近い村の情報は彼らにも伝わっていたようです。

しかし村まで無事に着けるでしょうか。

新兵たちがいなくなって、子どもたちが駆け寄ってきました。

「ねーちゃん、あいつら死んだな」
「デューイ、滅多なことを言うもんじゃありませんよ」
「だってあいつらの腕じゃ無理だ。今夜のうちに魔物のえさだな」
「一応軍用のテントなので、結界は張れるんですよ」
「ねーちゃんの結界なら楽勝だけど、あいつらじゃなあ」
「ねーさま、この死体はどうするの？」

レッピが聞いてきます。ブレンダさんとイルークのことです。

「そりゃもちろん……」

◇◇◇◇

俺は目を覚ました。

石造りの天井が見える。明かりの魔道具がぶら下がっている。

ここはどこだ？

なんだか、ついさっきもこんなことがあった。あの時はテントだったが。

傍に人の気配がして起き上がった。俺はベッドで寝ていた。隣、といっても結構離れた場所にもう一つベッドがあり、教官が腰かけているのがわかった。

この部屋はやけに広いようだ。

「生き返ったか、イルーク」

え、生き返った！？

そういえば！？

シューゲルが剣を振りかぶって……。でも、シューゲルは出来ないって泣き出して。

結局シューゲルに刺されたのか？

でも生き返ったって？　どうなったんだ？

いやいや、そうだよ教官も二つに斬られてた！

教官こそ生き返った、だ。

そういうことなら、やっぱり俺も殺されたのか。

「お前を斬ったのはスダハだ。シューゲルには出来なかったそうだよ」

「スダハが……」

リーダーとしてシューゲルに代わってってことか？
いや、まさかと思うが……。
あの女の前で、俺はシューゲルとの仲を隠すような余裕がなかった。
それに俺を殺せなかったシューゲルの泣き顔。

俺とシューゲルが恋仲なのは、誰にでもわかっただろう。
スダハにも。

「シューゲルたちはどうなったんですか？」
「昨日、ここを出ていったそうだ。南西に村があることはスダハに伝えていたから、そこを目指して森を抜けようとしているはずだ」
「そうですか。よかった……」

シューゲルは無事逃げたと聞いて、俺はホッとした。

「それでここはどこですか？　教官が俺を生き返らせてくれたんですか？」
「死人を蘇生させるような魔法はあたしは使えないよ。それに、当然だが自分が死んだ後で復活するような魔法は使えない。噂ではそういうのも実はあるらしいがな……。やったのはミヤビだ。そしてここは例の砦の中だ」
「あのクソ女が！」
「……イルーク、貴様まだ馴染んでないのか？」
「馴染む？　どういう意味ですか？　教官」
「いや、いい。いずれ分かる」

教官の言葉をやや疑問に思いつつ、それよりもここが例の砦の中

ならチャンスだと感じた。
俺はベッドから降りて、手足を動かしてみた。大丈夫だ。体内の魔力も十分。相変わらず服装は法国仕様の簡易服だが、砦の中には武器防具がある。それを奪えば。

「教官、監視もつけずに我々を放置とは、あの女も油断したものですね。砦の中の物（ブツ）、奪えるだけ奪って、シューゲルたちを追いかけましょう！」
「イルーク、貴様の目は節穴か。よく見てみろ」
「え？」

その途端、俺の右手の甲にぎろっと目が開いた。

「うわっ！」

その目は俺を見つめている。思わず左手でふさぐと、その左の甲に目が開いた。

「な、なんだ！」
「その目はいつもあたしたちを見ている。ほら」

教官の頬に目が開いた。教官自身の目と比較できるからはっきりわかったが、第3の目は人よりもやや小さく瞳が縦に細い。

これは魔物の目だ。

「あの女、魔物を俺たちに埋め込んだんですか！？」
「埋め込んだというのはちょっと違うかもな。この目は体に固定されているわけじゃない。お前の右手から左手に移動したようにな」

そう言われ、左手をどけると確かに右手の甲の目はなかった。

「使い魔のようなものですか」

「そうかもな」

「ならあの女、やはり勇者ではない！　魔族が化けていたに違いない！」

「生き返らせてあげたのに、ひどい言い様ですね。わたしは勇者ですよ。かつて第八境界の賢者にそう呼ばれましたので」

「うわっ！」

左手の目が口に変化していきなり喋り出した。俺は今度は右手でふさごうとしたが、口は右手に移った。なんだこれは。

「無駄なことはやめなさい。それは単なる通信手段で、害はないものです」

「ああ、イルーク、ミヤビの言うとおりだ。それより話を聞け。今後のためにもなる」

教官はこの状況を受け入れている。俺が寝ている間に今のようなやり取りは一通り終わってるということなんだろう。

状況確認は確かに必要だ。

「貴様はミヤビだな」

「ええ、イルーク。体調は良いようですね」

「なぜ俺たちの命を救った」

「ブレンダさんは知り合いだし、そもそも殺す気なんてなかったですから。イルーク、貴方は……、ちょっとしたお礼です。子どもたちが喜んでましたし。この森にはあまり娯楽がなくて退屈していましたからね」

「なにっ！　ふざけてるのか貴様！　どういう意味だ！」
「シューゲルに殺されかけた時、どうでした？　興奮したんじゃないんですか？」
「貴様は何を言っている！」
「わたしはちょっとぞくぞくしましたよ。子どもたちもハラハラしてましたし。最後に恋敵のスダハに殺されるなんて、実にいい落としどころでした。まるで台本がちゃんとあるみたいでしたね」
「貴様！　俺たちを愚弄しているのか！」
「素直な感想ですけれど。楽しませてくれたので、お礼に蘇生させてあげたんですから、いいじゃないですか。それに出ていったシューゲルたちも面白いことになってますしね」
「なにっ！」

そうだ。ここを出て行ったのが昨日だと教官は言った。もう森は抜けたのか？
それに、俺を殺したスダハにシューゲルはついて行っている、ということだ。
スダハはもともとシューゲルが好きだった。
そして俺はもう死んだと、シューゲルもスダハも思っている。

……いや、そんなことは。
あいつは仮にもリーダーだ。何よりも優先すべきは班員の命。そして母国への帰還。さらにはこの砦と魔人のような女の存在の報告。
あいつの生真面目さはよく知っている。
だが……。

「わたしは軍用の野営テントを二つ彼らに与えました。普通なら男女別に使いますよねえ。でも、昨晩彼らは男女の二組に分かれて使いましたよ。当たり前のように」
「なに！　そんな馬鹿な」

野営中の男女同衾はやむを得ない場合は認められるが、軍務に不要な混乱を生じさせがちなので原則禁じられている。野営テントが二つあって、男女に別れないとはどういうことだ。

「イルーク、貴方にも残っているでしょう？　ザ・ザダンに犯された記憶が。貴方やブレンダさんは肉体を再構成しましたからもう大丈夫のはずですが、魔物の体液には催淫作用があります。性器や腸が破壊され吸収出来なくなっていたので、影響はむしろ軽微になっていましたけれど」

「魔の影響で感情を操られたというのか！　そんなバカな。アイツらがそんなに意志が弱いわけがない！」

そうだ。魔物と交わると魔に染まることはもちろん知っている。精神の鍛練も法術士には必須だ。特にスダハやガトプが得意な分野だ。

それにシューゲルも。

「貴方たちはもう少しレベルが高いと思っていたのですけれど、わたしの見込み違いだったようです」

何があったというんだ。

このクソ女、わざと勿体付けてやがる！

「それで、どうなったんだ！」

「わたしが話すより見た方が早いです」

教官が、憐れむような顔で俺を見た。

その瞬間、俺の視界は夜の森に切り替わった。

そのまま、かなり速い速度で木々を抜ける。鳥の視点なのだろうか。真っ暗に近い夜なのに平気で枝を避けていく。

少し先にテントが二つ立てられているのが見えた。魔物除けの結界が貼られているが、鳥の視点は難なく侵入する。そしてテントの布をすり抜けた。明かりの無いテントの中は暗闇のはずだが、薄明るくかく見える。光の感度が調整されているのだろうか。

そのため中で何が行われているのか、全て見わたせた。

ヒズとガトプが素っ裸で性交していた。テントがあまり広くないからか、座位で互いに向き合った体位だった。

お互いにむさぼるように口を吸っていた。汗だくだ。ヒズの裸は魔物に襲われた時に見てしまっていたが、正直いって細く、女らしい曲線に乏しい。薄い胸をガトプの武骨な手が乱暴に揉みしだいていた。

痛くないのかと思ったが、どうやらそれで気持ちいいらしい。ヒズは何の抵抗もしていないし、乳首が針のように尖っている。

ヒズって、どちらかといえば冷ややかで寡黙な感じだったが、実はそうでもないようだ。

寡黙といえばガトプもそうだが、今は全く違う。

ガトプのもう片方の手はヒズの尻を掴んで、腰の動きを補助している。

ひたすら自分のちんぽをヒズのまんこに打ち付けている。

正直、結構デカい。ちょっと羨ましく思えた。

魔人じゃないからまんこを壊しはしないだろうが、ひどく乱暴なピストンだ。

そして、そうして粗雑に扱われつつもガトプの口を情熱的に吸うヒズ。
二人の繋がった股間からはぐっちゃぐっちゃという汁気の多い音がする。

なんなんだこいつらは。
欲望に呑まれているのか。見ているこっちが恥ずかしくなる。

二人の痴態をしばらく見ていた鳥の目は、ふっと動き出した。ヒズとガトプのテントから離れもう一つのテントに向かう。

おい。

やめろ。

その中を見せるんじゃない。

見たくない。

見ないぞ！

しかし無情にも鳥の目はテントの布を通過する。

同じように明るさを調整された視界の中で。

全ては明らかに見えていた。

裸のシューゲルが、スダハと交わっていた。

ぐちゃぐちゃに。

第５６話　裏切り（後書き）

ギリエロまで来ました！　滑り込みセーフ？　アウト？

エッチの描写不足は次回でフォロー入れます！　すみません！

第57話　スダハとシューゲル

イルークが死んだ。

あたしの目の前でスダハに刺されて。

あの悪魔があたしにイルークを殺せと命令した。でも出来なかった。

そんなの無理に決まっている。

あたしがイルークを殺せるわけない。

ようやく、両想いになれたばっかりなのに。ずっと気になっていたイルーク。イルークも同じ気持ちだったと知ったときのうれしさ。

そして初めてのキス。

それが、今日だったのに。

これから始めようとしていたのに。

魔物に襲われて犯され死にかけた。

助かったと思ったら教官が殺され、そして。

あたしにイルークを刺せなんて。そんなの。出来ないよ。

どうしようもなくて泣き崩れたら、スダハがイルークを刺した。

あたしの代わりに。

目の前でイルークが死んだ。

なんであたし、イルークを殺したスダハに手を握られているんだ

ろう。
どうして一緒に森を走っているんだろう。
頭がぐちゃぐちゃになる。
死んだイルーク。殺したスダハ。
そうしなければ、逃げられなかった。
教官を一瞬で斬殺した恐ろしい女。少女の皮をかぶったバケモノ。
あの悪魔から。
それはそうだけど、でも　！　なんで!?
思考がまとまらない。
ひとしきり走ると、やや開けた丘に出た。
スダハが立ち止まる。
手は握られたままだ。なんだか連行されているみたいだとあたしは思った。
スダハはあたしが逃げると思っているのかもしれない。
なぜ?
イルークを殺した犯人だから?
後ろからガトプとヒズが追いついた。４人で逃げていたんだ、とようやく頭が動き出した。
そう、４人だ。
イルークも、教官ももういない。
「ここでテントを張るの?」

ヒズがスダハに尋ねる。

「いや、小休止だ。水分を補給したら、もう少し進もう。まだ日が落ちるには時間がある」

あたしの手を取ったままスダハが答えた。

ガトプとヒズも手を繋いでいた。

なぜだろう？

不安だから？

その後、アプ・ゴブーリ3体、ハ・オルガ1体に遭遇したが、難なく撃退した。思考が混乱していても、軍人として訓練された体はちゃんと動いた。

あたしたちは決して弱くはない。

夕闇が迫ってくる頃、また少し開けた場所を見つけ、今度はテントを張った。悪魔がくれた二張りだ。

当たり前のように片側のテントにヒズとガトプが入り、あたしはスダハにもう一つのテントに連れ込まれた。

体が熱い。

夕方魔族を狩った頃からぞくぞくと高ぶった気持ちが収まらない。

魔に侵されたのだろうか。

魔族の体液を浴びると魔に侵食される。もちろん光魔法で対抗（レジスト）出

来るが、高位魔族ほど侵食力が強い。

ザ・ザダンによって破壊された部分は教官と力を合わせ魔法で再生した。だから新品同様の器官なのに。

魔の侵食は、治癒魔法でも退けられないのだろうか。

あたし同様、スダハも、ヒズも、ガトプも興奮状態にあるのだろう。テントが2張り、普通なら女子と男子で別れるところだ。

なのに、ヒズとガトプ。あたしとスダハに別れた。まるで申し合わせたように。ごく自然な成り行きで。

隠微な予感が膨らむ。

頭の隅で小さな警鐘が鳴っていたが、あたしは無視した。

どうなるかなんて、分かり切ったことじゃない。もう止められない。

きん、と結界が張られた。スダハの魔法だ。

外と音や光が遮蔽される。

暗くなったテントの中で、スダハがあたしを抱きしめた。分厚い男性の体があたしを包む。

口づけされた。舌が唇をこじ開け押し入って来る。あたしも絡めた。

昼間イルークと初めてキスしたばかりだというのに。

そのイルークを殺したスダハと口づけしている。

なんでこうなるのかわからない。けど、背中がぞくぞく震える。

もっと激しくしてほしい。

もっとぐちゃぐちゃにしてほしい。

あたしは心からそう願う。

スダハの手があたしのお尻を撫でる。撫でるというより掴むに近い乱暴な動きだ。でも、優しくされるよりそのほうがいい。

あたしからもスダハの背中に手を回し、密着する。

口を舐る動きが一層激しくなる。垂れる唾液であごがぐちゃぐちゃだ。

ひとしきり吸い合い、スダハから離れた。涎の橋が架かる。

私の胸をスダハが掴んだ。そして揉む。法衣は硬化しない。イルークにはまだダメって言ったのに。なぜ抵抗しないのだろう、あたしは。

そんなのとっくにわかっている。

してほしい。胸を乱暴に摘まれ下腹部がうずく。もっと強く。

もっと。

そうあたしは望んでいる。

して、スダハ。もっと、もっと、激しく。

イルークを忘れるように。

はっとした。

イルークを忘れる……。

イルークはもういない。死んだ。スダハが殺した。だから。だから？

だからあたしはもうスダハのモノ……？

いや、そんな理屈や言い訳じゃない。体が熱い。揉みしだかれる胸が脳の芯を溶かし、体の奥からじゅるりと粘つく露が溢れてくる。

情欲が膨れ上がる。

耐え切れず、あたしは呻いた。

「あ……、ん」

それを合図にしてか、スダハがあたしを押し倒した。背中にひんやりとした感触。薄い寝床越しに地面の冷気が伝わる。

それでも、あたしの疼きは収まらない。むしろもっと体を熱くしてほしい、淫靡に燃え上がらせてほしいと願った。

スダハがあたしの法衣を乱暴にほどく。法衣は紐で何カ所も止めているので、簡単には脱げない。暗いし、手探りのため時間が掛かる。

あたしは背中や腰を浮かしスダハを手伝う。スダハも焦っていたのだろう。ようやく紐が全部ほどけた。

めくられた。下穿きを吐いただけの裸になったあたしに、スダハが倒れこむように抱き着き、そして首から胸をしゃぶる。

すぐに胸の先端を吸われた。勃起した乳首を歯で噛まれる。痛い。けれど気持ちいい。舌でレロレロと嬲られながら、胸を揉まれる。豊満とは自分でも思わない。再生魔法は遺伝子情報（にくたいのきおく）に基づいて器官を復活させるので、おっぱいを大きくしたりは出来ない。それだけは不満だが、形は整った胸だとひそかに思っている。その胸を餅をこねるようにぎしぎしと絞られ、同時に乳首をこれでもかと吸われ

る。

胸からの刺激が子宮を疼かせる。背筋がぶるぶると震えはじめる。

スダハの手があたしの股間に入った。恥毛をぞりっと撫でられる。あそこの毛が濃いのもちょっと恥ずかしい部分だ。時々少し剃るのだが、今は再生直後なので手入れもしていない。伸び放題だ。

スダハはそのまま縦割れを指でなぞる。包皮に包まれた肉の豆を探り当てられた。思わずびくっとする。皮を指の先でめくられ、豆を摘まれた。

「はぅっ」

声が出てしまった。指先で突起を回すようにいじられる。どくどくと血が集まってくるのが自分でも分かる。嬲られながら、固く尖っていく。

「ああっ、ああ」

もう声を止められない。乳首を吸っていたスダハが離れる。そして、下穿きを脱がし両腿を押しのけるように股を大きく開かされた。

スダハの息が股にかかる。

べろん。

尖りに尖った肉豆を舐められた。べろべろと縦横無尽に動き、表も裏も前も後ろも全部、舌で磨き上げるかのように。さらにぱくんと口に呑まれ、チュウチュウと吸い上げられる。

「ああっ。いいっ」

あたしのその部分はほかほかの貝柱のようになった。ひと満足したのか、スダハの舌は豆から始まる二枚の襞をなぞりはじめた。ビラビラの裏を舐め、唇でついばむ。

左右の襞を随分と弄び、舌はついに内部に入ってきた。

おしっこの出る穴をちょんちょんとつつき、あたしの女の穴をついに舐める。あたしのそこはもうドロドロだ。泡交じりの粘液を掠め取り、舌にまぶしたまま膣を舐る。

丁寧に再生した部分。魔物の痕跡をなくすため、乙女の純潔まで再生した箇所。

だって、あんな魔物との交尾はすべて忘れたい。そのためには想い人との行為で上書きしないと。そう思ったから、ここだけはこっそり自分で蘇らせた処女膜。

想い人……？　恋人……？

恋人って、誰だっけ？

今その狭い肉筒を舌で舐っているのはスダハ。

あれ？　恋人って、スダハ？

スダハも服を脱いでいた。反り返ったスダハの男性器が、あたしの顔の上にある。

いつの間にか体を入れ替え、スダハはあたしの上で上下逆になっていた。スダハのおちんぽがあたしの鼻先に当たる。熱い。

おまんこを舐められながら、あたしはスダハのおちんぽを口に含んだ。そうしたい、そうしなければと思った。初めてのおちんぽは苦い汁がしみ出していた。口の中でびくびくと動く。不思議な器官。でも愛おしい。

「うっ」

亀頭を舌でレロレロとしゃぶる。スダハが声を上げた。気持ちがいいんだ。スダハの舌が激しさを増す。あたしも気持ちいい。おまんことおちんぽを舐めあった。お尻の穴まで舐められた。あたしもおちんぽだけじゃなく金玉も口に含んだ。大きな豆のようなものを口の中で転がす。スダハのおちんぽがビクンビクンと荒ぶる。

スダハがあたしの上からどいた。

「シューゲル、入れるよ」

「うん、来て、スダハ」

スダハがあたしの足を大きく開き、その間にしゃがむ。丸い塊がおまんこに押し付けられた。そしてぐいと進む。

「つっ！」

鋭い痛みがあった。でもスダハのおちんぽがぐいぐい体に入ってくる。熱い。痛い。けど、気持ちいい。

ぐっちゃぐっちゃぐっちゃぐっちゃ。

湿った音が響く。おちんぽがおまんこにこすれてどんどん気持ちよくなってくる。

スダハに純潔を捧げることが出来た。
あたしは幸せだった。

「あっ、すごいっ、いい、いいよっ　シューゲル！」
「あたしもっ、いい、気持ちいいっ。もっと強く、もっと激しく、もっと動いて！　スダハ！」

手足をスダハの体に絡めて、より深くおちんぽを味わおうとするあたし。
身体の奥からどろどろの何かが溢れてくる。

もう何も考えられない。ただただ気持ちいい。

スダハとの性交。

初めてなのに、頭が爆発しそうな快感に満ち溢れる。あああああ。

「スダハ！　スダハ！　スダハ！」
「シューゲル！　シューゲル！　シューゲル！　あっ！」

スダハのおちんぽがひときわ反り返り、熱い液体がドクンドクンとあたしに注がれた。

幸せだ。

第57話　スダハとシューゲル（後書き）

クリスマスなのでラブラブセックスで区切りにしました。
年内更新はこれで最後になります。
皆さま、大変な年末年始ですが、ひとまず良いお年を！

第５８話　魔人再び（前書き）

明けましておめでとうございます。本年もＴＳ勇者をよろしくお願いいたします。

第５８話　魔人再び

「ああっ！　ああっ！　シューゲルっ！　なんでっ……」

イルークが喉が焼けたようにしわがれた声を絞り出します。泣いているのかもしれません。ブレンダさんは何も言いません。ブレンダさんはもうこの記録を見ています。

そう、今イルークが見ているものは昨日の夜の記録です。イルークにとってはリアルタイムのように感じられるでしょうが、これはもはや過去の出来事なのです。

これが『もう遅い』ということですね。

この５年の間にわたしは勇者の複製能力でさまざまな魔族や聖遺物（アーティファクト）の能力を写し取りました。イルークやブレンダさんに通信端末（目口耳）をくっつけたり、使い魔でテントを覗いたり、過去の出来事を相手の脳内で再現したりなどはほんの一部です。

だんだん自分が人間ではなくなってきたような気もします。今では、お母様のような美しい魔人になるのも悪くないと思っています。

さて、イルークも現実が分かったでしょう。ちょっと残酷だったかもしれませんが、わたしに逆らったお仕置きは必要ですからね。

「どうでした。イルーク。結構面白かったでしょ？」

「ふざけるなくそ女！　面白いだと！　貴様がっ！　貴様のせいでっ！」

「八つ当たりはやめてください。魔に侵されたのは彼らの未熟さだ

し、その感情を受け入れたのも彼ら自身の選択です。わかっているでしょう？」

「貴様が誘ったんだろ！　あいつらがそんなっ。シューゲルがスダハとなんて！　ありえん！　信じないぞっ！」

「現実逃避は何も生みませんよ。イルーク」

「貴様！　声だけとは卑怯だぞ！　姿を現せ！」

端末越しなのでわたしの声しか聞こえていません。こちらには映像も転送されてくるので、イルークが天井に向かって叫んでいるのがよくわかります。どこを向いて叫んだらいいかわからない時ってなぜか宙に向かって喋りがちになるのは不思議ですね。

「教官！　俺はスダハたちを追います！　正気に戻さねば！」

「やめておけ」

「え？　しかし！　な、仲間と合流するのが当然では！？」

「イルーク、お前が今見たのは昨夜の出来事だ」

「そ、それはわかっております！　丸１日経ち更に移動していることも承知しております！　ですので一刻も早く追いかけるべきだと！」

「スダハたちはもう死んだ。全滅だ」

「は？」

そうです。ブレンダさんが何も言わないのは、彼らの結末をもう既に知っているからです。

魔に侵され性愛に溺れようと、一晩だけでも幸せであったなら、それは最後の情けというものでしょう。

わたしはイルークに現在のスダハたちの姿を見せました。

イルークの顔がみるみる青ざめ、やがて絶叫しました。

「シューゲル！　こんなっ！　これは嘘だ！　まやかしだ！」
「まやかしじゃないですよ。現実です。なんなら、見てきますか？　イルーク」
「なに！？」
「瞬間移動で現地に送れますけど。どうします？」
「うぐっ、うおおっ！　この目で確かめてやる！」
「やめておけ。まだ魔物が徘徊している。せっかく助かった命を無駄にするな」
「教官、この目で実際に見ないとオレは納得できません！　幻術の類のはずです！　しかし、それでも、もしこれが現実だと確認したらせめてシューゲルの遺品を回収させてください……」
「ブレンダさん、イルークを飛ばします」

私は少し強い口調で言いました。
ブレンダさんが瞬時に立ち上がり宙に向かって敬礼しました。

「了解しました！」

ブレンダさんの豹変ぶりにイルークも怪訝な顔をしますが、そのまま瞬間移動させました。
現地のモニターもしていますので、魔族が出てきてもイルークを安全に回収可能です。確認したいという気持ちもわかりますし。

しかし、イルークは一瞬で惨劇の跡も生々しい場所に連れてこられ、現実を突きつけられました。
モニターではわかりませんが、血肉でひどい臭いでしょう。軍人でなければ吐いているはずです。これが嘘や幻ではないことを肌で知ったでしょう。

それにしても昼間からハ・オルガの大群に出くわすなんて、あの連中も運がないですね。もう数日ぐらいは頑張れるかなと思っていたのですが、2日目で全滅とは。

全員がハ・オルガのでかチンポで犯された後、生きたまま肉や内臓を喰われて死にました。骨も齧るハ・オルガですが、なぜか頭は脳と頬と唇ぐらいしか食べず、デスマスクみたいに目から鼻にかけて残るので、犠牲になった人が誰かはわかるのです。

時間が経てば腐敗したり獣や虫に食べられたりしてしまいますが。

でもデスマスクを遺品として持って帰られても……。

いや、持って帰って来るかなあ。

「ミヤビ様、イルークの態度が改まらず申し訳ありません」

「ブレンダさんの服従ぶりもちょっと困りますけどね」

「いえ、絶対者であるミヤビ様にお仕えできるだけで幸福でございます」

「なんですか絶対者って。まあいいですけど」

「イルークも馴染めば平伏すると思います。何せミヤビ様ですから」

「素直に言うこと聞いてくれるだけでいいんですけれど……」

魔蓄器。

かつてわたしに移植され、そして私の中で浄化され変質した魔族の器官。そもそもは魔の気配を貯めこみ魔族の力の源になる魔族特有の器官ですが、勇者の力を取り戻した私の中で、魔法やユニークスキルの増幅装置（ブースター）のような役割を担うようになりました。

また、魔蓄器を普通の人間に移植すると半魔のように変質し情欲に狂ってしまいますが、浄化されたわたしのものは無害です。

ブレンダさんとイルークには蘇生時にその力の一部を与えました。
ブレンダさんはすでにその力に馴染んでいます。

ただ、忠誠心がこんなに上がるとは予想外でした。無害化したはずですが、意外な副作用があったのかもしれません。
反抗されるよりは手が掛からないのでいいのですが、ちょっと怖いです。
誰彼構わず与えるのはやめておきましょう。

もちろん子どもたちには与えていません。が、一緒に生活しているので、勇者のベーススキル覇道（ヘゲモニー）の影響で同様に忠誠心が高くなってはいます。

ブレンダさんのように性格が一変するような跳ねあがり方はしませんでしたが。

あ、イルークがシューゲルの顔の一部を見つけました。
抱き上げて、大泣きしています。

しばらく泣くと、顔を持ったまま何かを探し出しました。
今度はスダハの顔を見つけました。
あっ。足で踏みつけました。ぐりぐりと体重をかけ左右に均すようにすり潰します。ひどいなあ。
最後に蹴り飛ばし、気が済んだのか、シューゲルの顔を地面に置きました。

それからヒズ、ガトプの顔の皮を探し出し、シューゲルの傍に置き、火魔法を放ちました。
置かれた3つの顔を中心に巨大な火柱が立ちました。

思った以上に威力が高く、イルーク自身が驚いていましたが、ちゃんと3人の火葬が出来たようです。
蹴とばしたスダハの一部はそのままでした。焼いてあげる気もないのでしょう。

火が消え、煙だけが空に舞っていきました。惨劇の跡は、きれいな焼け野原になりました。

イルークは呆然と煙を見送っています。
もういいでしょう。

「イルーク。戻りますよ」
「はい……」

魂が抜けたようになったイルークは、素直にわたしのいうことを聞きました。反抗する気力すら失ったのか、馴染んできたのか。

その両方かもしれません。

瞬間移動で元の部屋にイルークを戻すと、ブレンダさんに預けました。通信端末（目口耳）も切ります。もう放っておいていいでしょう。

あの二人は今回のように不測の事態が起きた時の用心棒になってもらいます。大人の対応も出来るでしょうし。
わたしだと、どうしても力の差を見せつけることでしか解決できませんからね。

それに子どもたちが喜ぶはずですから。主に夜に。

◇◇◇◇◇

「ああ、イルーク、いいわ！　そこ！」
「はいミヤビ様！　ミヤビ様のおまんこ気持ちいいです！　中の粒々がそそり立って俺のちんぽをびんびん刺激します！」
「いやっ！　そんな詳細に実況しないで！」
「はいっ！　クリトリスも持ち上がって俺のちんぽの根っこをぐりぐり刺してきます」
「だから言わないでって！」
「はいっ！　俺が言うたびに汁がじゅくじゅく溢れて、おっぱいもとんがりまくりです！」
「ああっ！　もう！　そう、そうなんだけど！」

ぐちゃ、ずにゅ。ぐちゃ、ずにゅ。

部屋に粘った水音が響きます。

あれから数週間が経ちました。

イルークもあたしの信奉者と化し、様付で呼びます。きっとブレンダさんの教育のせいです。セックスの最中までミヤビ様と呼ばれるのは困りものですが。S的な女王様感があります。そんなキャラじゃないのに。

ブレンダさんとイルークは昼間は子どもたちと一緒に稽古や素材集め、料理などを担当、夜はこうしてわたしや子どもたちとセックス三昧です。

イルークはすっかりシューゲルロスから立ち直ったようです。ひねくれたところが消え、前より明るい性格になりました。

忠誠心マックスのくせにわたしを言葉でいじめるのは以前の性格の名残かもしれませんが。

「ああっ。ミヤビ様の膣が俺のちんぽをぐいぐい締め付けます！　亀頭の裏まで襞がしゃぶりつくようです！　最高です！　も、もう我慢出来ません！」

「だから実況しながらは……」

「ああっ、ミヤビ様のまんこの最奥、子袋の口とキスしながらちんぽから子種汁が出ます！　出ちゃいます！　お許しください！」

「……恥ずかしいけど、いい、出して！　今！　いいからっ！」

「出ます！　あっ　、出た！　出ました！　だくだくぶちゅうっとめっちゃ出ます！」

イルークの実況通りわたしの中はイルークの精液で膨れ、密着した接続部からぶちゅうっと溢れ出しました。出し過ぎです。

「出しました！　ミヤビ様のまんこからちんぽを抜きます！」

いや、だから実況しなくていいから……。

「お掃除フェラお願いします！」

はいはい。

元の世界のマサタカ用語にも随分慣れてきました。私が教えているのですが。

イルークのちんぽを舐めていると、ブレンダさんがやって来ました。全裸です。

濃い陰毛に精液が点々とこびりついています。今日の相手はカル

ドとレッピでしたっけ？

子どもたち、お尻までびっしり生えているブレンダさんに最初驚いてましたが、もう慣れたみたいです。

つるつるの子どもたち、うっすらとしたわたしとは違った大人まんこですから、彼らにとっても新鮮なセックスが出来ているようですね。なによりです。

「向こうは終わりました。ミヤビ様もちょうど終わられたところですね。御一緒にお風呂に入りませんか？」

「そうですね。イルーク、貴方は後で」

「はい、ミヤビ様」

ブレンダさんはわたしをお風呂で洗うのが大好きになったようです。髪や背中はもちろん、背後から手を回し胸やあそこも隅々まで磨いてくれます。

時々乳首を摘んだり、膣や肛門に指を入れてくるのが困りものですが。子どもたちとおんなじです。

元をただせば私のフェロモン体質が原因なので、時々はあきらめてそのまま風呂場であそこを舐めっこしたり指を入れあったり、ブレンダさんに付き合ってあげます。

お尻の穴に舌を入れると盛大に潮を吹くのがわかり、ああ、ブレンダさんの弱点ってやっぱり肛門なのねと納得したりもしました。

そんな充実した（爛れた？）毎日を過ごしていましたが、その深夜。

満月の日でした。

わたしは気配で目を覚ましました。

瞬間移動で砦の上に出ます。

（来ましたね！）

月を背に空に浮かぶ2体。

1体は赤く、もう1体は青い炎に裸体の胸と股間を覆われた二人の女型の魔人。

背中には同色の炎の翼が拡がり、赤い眼球に金色の瞳が輝いています。

青い炎の魔人の腹はポッコリと卵のように膨らんでいます。5年前と同じ妊娠した姿です。

赤い魔人、サタラヴィ。

青い魔人、ママーリス。

5年の時を跳びまた彼女らがわたしの前に現れました。

『ふふっ。それでこそ勇者……』

『想定どおり。また5年後の試練の夜に……』

あの時の言葉の通りに。

第５８話　魔人再び（後書き）

シューゲルの最後はあっさり描写にしました。今回は特殊性癖抑え気味で行こうと決意してスタートしておりますので（これで？というツッコミもおありでしょうが）。

さて、2章もいよいよ最終コーナーです。執筆速度を上げていきたいですが、ここにきて緊急事態宣言……。ううむ。

第５９話　６人の転生体

「奥義、真・地獄極楽剣暗剣殺撃滅刃！」

サタラヴィが仕掛けてきました。問答無用といわんばかりです。

がきいん！

高速で迫るサタラヴィの剣を瞬時に出現させた勇者剣で弾き返しました。

「ホーミング・ファイヤーアロー」

抑揚のない声でママ―リスが詠唱し、炎の矢で追撃してきます。

わたしは魔法障壁（バリア）を周囲に展開。全弾防御します。

「奥義、真・魔神剣無明殺粉砕斬！」

炎の矢の陰からのサタラヴィの斬り上げ攻撃です。実体剣が魔法障壁（バリア）を抜けてきます。勇者剣でがっちりとガードします。

「ライトニング・ボルテックス」

ママ―リスの雷の嵐に魔法障壁ごと巻き込まれます。即座に瞬間移動で脱出します。

「奥義、割砕剣一刀鎧斬！」

転移先を読まれていました。サタラヴィの渾身の一撃が頭上から襲ってきます。勇者剣を5本重ねて防ぎます。４本まで砕けましたが、最後の1本で喰い止めました。

この連続攻撃パターン、5年前のとよく似ています。

「ほう、なかなかやるな。マサタカが消えミヤビだけになった方が強いというのか」

「この5年、伊達に過ごしてきたわけではありませんから」

「なるほど」

5年前は同じような連携攻撃に対処出来ませんでした。あの時の主人格はマサタカでしたが、わたしも副人格として体験しています。

サタラヴィが構えを崩し剣を下しました。これ以上戦う気はないということでしょうか。

「合格だ。これなら次の段階に進めるだろう」

「合格？」

「ああ、アズフルの復活だ」

「お母様を!?」

サタラヴィとママ―リスが一度互いに目を合わせ、そして頷きました。

「お母様か。アズフルとお前は親子であって親子ではない。まもなく月が南中する。その眼で見るといい」

「何を？　どういうことですか？」

「見ていればわかる」

サタラヴィが私のそばに降りてきました。赤い炎がわたしの顔にすぐそばにありますが熱気は感じません。

空中に浮かんだままのママ―リスの頭の真上に月があります。ママ―リスの顔が月光に照らされます。

サタラヴィもそうですが、お母様とは別のベクトルで美しい顔です。サタラヴィは情熱的で妖艶。ママ―リスはクールビューティーです。

その、冷たく整ったママ―リスの表情が突如崩れました。

「あはっ！」

眉が下がり、目の焦点がずれ表情がとろけます。だらしなく口を開き、涎を垂れはじめました。

「あっ、あはっ、あっ、あああああああっ！」

空に浮いたまま手足をぶんぶんと振り回します。気でも違ったかのようです。

いや、むしろ情欲が迸っているといった方が正しいのかもしれません。あの表情は、どう見ても快楽堕ちしたメスのそれ、そのものです。

絶頂地獄に醜く歪んだメス豚のアヘ顔です。

「おはあっ、あほぉっ、おごっ、うぶぶっ！」

口から涎をまき散らし、鼻水すら噴きます。月光を反射してきらきらしますが、正直汚いです。

「あっ、あっ、あっ！　あああああーーー！」

ピーンと手足を伸ばし、酷いアヘ顔をさらしたままママ―リスが硬直しました。青く燃える股間からも液体がぴゅーっと噴き出します。

おしっこ？

それとも愛液でしょうか？

空中に磔になったような硬直状態のまま、ポッコリ膨らんだおなかが光り出しました。そしておなかが前にせり出してきます。臨月状態よりもさらに膨張しようとしているのでしょうか？

そうではありませんでした。おなかの部分が本当に卵のように、ママ―リスの胴体から分裂して離れていきます。分裂した球体がさらに明るく輝きます。

そして、ひときわ明るくなり、すぐに消えました。そこにはもう卵のような球体ではなく、体を丸めた小さな人間……赤ちゃんが浮いていました。まるでまだ子宮内にいるかのような姿勢で。

でもへその緒はありません。

丸まっているので顔はよくわかりませんが、髪の色は真っ黒でした。

わたしと同じです。

ママ―リスが両手を差し出します。いつの間にかアヘ顔は消えて慈愛に満ちた聖母のような表情になっていました。クールビューティーが柔らかな笑顔を浮かべています。美しいです。

さっきまでの痴態が嘘みたいです。

赤ちゃんの丸めた手足がほどけ、ママ―リスが胸にぎゅっと抱え

ました。青い炎が赤ちゃんを焙りますが、お母様同様炎自体に熱がないのでしょう。赤ちゃんは安心しきったようにすやすやと眠っています。

男の子でした。小さなおちんちんがついています。

けれど、これは出産なんでしょうか？

細胞分裂と言った方が正しいように見えました。

「この子は、トトシー。境界のコード的に言えばサード」

ママ―リスがわたしに語り掛けます。

「ファーストと呼ばれたのがあたしが産んだワフ。産んだといってもさっきのママ―リス同様に分離したんだけどね」

サタラヴィが続けます。

「わたしも、お母様から今のように生まれた……？　分裂したということですか？」

「そうだ、セカンドのミヤビ。ファーストことワフ。セカンドことミヤビ。サードことトトシー。３人はかつての勇者マサタカの転生体だよ。自分がマサタカなのはミヤビ自身ももう理解しているよな」

「わたしのことは承知しています。が、でも、３人ともがマサタカなのですか！？　その赤ちゃん……、トトシーも、ファースト……、ワフも！」

「そうだ。そしてあたしたち、アズフル、サタラヴィ、ママ―リスもマサタカの転生体だ」

「え？」

一体どういうことなのでしょう？
お母様はフルではなかったということですか？　アイテムストレージがフルのものと同一だったのに？
サタラヴィもラヴィではなく、ママ―リスもアリスではないのですか？

混乱してきました。

しかし、分裂した子どもがマサタカの転生体であるなら、確かにその元となった母体も転生体であるというのは理屈に合っています。
同じ個体が分かれて増えた、クローンのようなものだとすれば。

「すべての答えはアズフルが復活すればわかる。法都のアカデミアにあるアズフルから取り出された魔核。その魔核にミヤビが触れれば、アズフルが蘇る」
「それは本当ですか！？」
「ワフとあたし、トトシーとママ―リス、そしてミヤビとアズフル。それは一つの個体の表と裏だ。だから、魔核は二人で一つしかない。アズフルの魔核は、ミヤビの魔核でもある」
「あの金色の魔核が、わたしの魔核でもあると。そうだったんですね……」
「アズフルの復活はミヤビ、お前にしか出来ない。そしてお前にはもうその力がある」
「そのためにわざと攻撃してきたということですか。力を試すために」
「そうだ。５年前は無理だったが、今なら任せられる。あたしたちはそれぞれの時間軸に戻らねばならない。これ以上は手伝えないんだ」
「それぞれの時間軸……！？」
「そうだ。あたしたちに出来ることはここまでだ」

「もう会えないのですか？」

てっきり、マサタカの転生体全員が揃う必要があると思っていました。お母さまを蘇らせ、６人の転生体が一堂に集えば真の勇者マサタカが復活する、的なイベントになるのかと。

「いや、お前がアズフルと共にあれば、いずれ必ずまたあたしたちと出会う。詳しくはアズフルに聞け」

「では、今はこれで」

２体の魔人、サタラヴィとママーリス、そしてトトシー、３人のマサタカの転生体は出現時同様唐突に消えました。

鑑定しても追えません。サタラヴィが言ったように、この時間軸から別のどこかに消えてしまったようです。

しかし、目標が明確になりました。

やはり当初の目的通り法都に行き、奪われた魔核を取り戻さねばなりません。

それでお母様が蘇るのならば、何をおいても！

ブレンダさんとイルークを配下に出来たのでは僥倖でした。法都に子どもたちを連れていくわけにはいきません。危険すぎます。あの二人に護ってもらいましょう。

もしかしたら、ブレンダさんたちが砦に来たのは偶然ではなかったのかもしれません。

サタラヴィやママーリスの差し金か。

それとも勇者の干渉か。

考えてもわたしにはわかりませんが。

それにしても、マサタカの自我はどうなっているのでしょう。サタラヴィやママーリス、トトシーのなかにもマサタカがいるのでしょうか？

わたしの中のマサタカは壊れてしまいましたが、他の5人の中にもいるのならマサタカも蘇れそうですね。

お母様の中にもいるのでしょうか？

◇◇◇◇

翌朝。

昨夜の砦の上の戦闘は、結界に阻まれてブレンダさんたちや子どもたちには全く気付かれていませんでした。

ブレンダさんはイルークとよろしくやっていた、せいもありますが。まったく。

母親の手掛かりが法都にあるという情報を得たので行ってくる。皆はお留守番。

それだけの説明で全員納得しました。さすが忠誠心マックス。

小さい子はちょっと寂しそうでしたが、イルークお兄ちゃんやブレンダお姉さんがいるから大丈夫よね、と語り掛ければ、うん、大丈夫！　と返してくれました。

この数週間ですっかり仲良しさんです。

「では、行ってきます」

「お早いお帰りをお待ちしております、ミヤビ様」
「ねーちゃん、お土産ヨロシク～」

砦のみんなに見送られ、わたしは例の転移門に向かいました。
ハレラニ洞窟経由が法都への一番の近道ですから。

ちなみに手ぶらです。ストレージがありますから、必要な荷物はその中に収納しています。

転移門をくぐり、ハレラニ洞窟４層の小部屋に出ました。静かです。
ダンジョンコアが修復され、初心者向けダンジョンに戻ったのでしょう。サーチに掛かる魔族の反応もまばらで、低級魔のみです。

ん？

小部屋の出口にトラップの反応。置き式の拘束（バインド）魔法陣ですね。
どうやら、この転移門は法国に見つかったようです。

けれど、砦周辺は毎日サーチしていましたが、ハレラニ側から誰かが来た形跡はありませんでした。転移先がどこかわからず危険だと判断したからでしょうか。確かに、うかつに出ていくよりやって来たモノを捕まえる方が危険度は低いですね。

わたしはトラップの上に魔法障壁を重ね難なく外に出ました。この程度の魔法陣を無効化するなんて軽いことです。

と、思った時、何者かが転移してきました。瞬間移動です。

小さな影と、比較的大きな影。

子供と大人。

「あなたは！」

「あなた！」

「ほう、これはこれは。よもやと思ったが、お前に再会出来るとは！」

洞窟に出現したのは、法衣に身を包んだフルとダムスでした。

第５９話　６人の転生体（後書き）

あと1話で2章を終わります。次回、蘇る大魔王。お楽しみに。

そして最終章へ！

第６０話　蘇る大魔王

「セカンド。やはり生きていたか。そして貴様がいるということは、御神託は今もなお有効ということだな」

量子（スパ）アレイコンピュータ（コン）が示した回答（預言）のことですね。

「賢者……、いえ、ダムス司祭。大魔王はもうこの世界に襲来しているのではないのですか？　ここのダンジョンコアを置き換えるなんて、普通の魔物の知恵ではあり得ないでしょう？」

「ふむ？　その口調。元に戻ったのか？　一度爆散したせいか？……まあそれはいいか」

賢者の虜になったのは主人格に戻ったマサタカでした。直後に心が壊れてしまいましたが。

「大魔王アャジャーガ・ジャギャアージャ。存在はまだ確認出来ていないが、教えられた真名は非常に強い。魔物の凶悪化はその影響だとすればあり得る話だ。だがそれならどうして隠れているのか？　むしろ復活を派手に喧伝し俺たちを怯えさせる方が魔王にとって有益だと思うが」

「司祭様。この少女とは昨日会っています。新兵の一人かと思いましたが……。彼女があの三人のうちの一人なのですか？」

「フル、少し待て。話が済んでいない」

「申し訳ありません」

フルが一歩下がりました。

わたしとしてはダムスなどより若かりしお母様とお話をしたいと

ころですが、そうもいきません。

「あれから5年か。ここの転移門は大したものだった。念のため俺自らが監視していてよかったよ。お前に会えてよかった。強くなったな、セカンド」

「……生きていかねばなりませんでしたからね」

なにがよかったのでしょう。

目の前にいるのは、マサタカの自我をメス堕ちさせ調整勇者（オルタード）にした男です。

おまんこ最高！　と叫んだマサタカ、……いえ、わたし自身の記憶が呼び覚まされます。

マサタカは意識を快楽ですりつぶされ、この男の傀儡に成り果てたのでした。

「ここに門を置いた目的は、法都にあるアレか」

「奪われたものを取り戻すだけです」

「取り戻してどうする」

「母を復活させます」

「なに？　……そうか、なるほど」

わたしはダムスの反応に違和感を覚えました。魔核について知っているのは当然ですが、お母様の復活に納得するのはなぜなのでしょう？

「ダムス司祭。あなたはどこまでご存じなのですか？　御神託は勇者から分かたれた三人の子どもについてでしたね」

第八境界で賢者だったダムスから聞いた、勇者の鍵と大魔王の鍵ともう一人、賢者が言うには外れの三人の子に関する預言。

「時を遡る三人の魔人と共に現れる三人の子が御神託だった。ならば、三人の魔人も共に揃っていることが必要だ。そうだろう、セカンド」

鋭いですね。さすが元賢者です。子だけではなく、魔人も重要な要素だと推察したようです。

「であれば俺が協力してやろう」
「なぜですか？　いや、本気ですか？　ダムス司祭」
「ああ。俺はもともと鍵を得て、勇者召喚を成功させるのが目的だった。今は立場が違うがな」
「大聖会のアカデミアに保管されていると聞きました」
「俺はその大聖会の司祭だ。利用したくはないか？　セカンド」
「魅力的な提案ですね」
「だろう」
「司祭様、この少女が大魔王の鍵である可能性も残ります。危険ではありませんか？」
「フル！」
「はっ、はい！　あっ、ううっ」

ダムスがフルのお尻を撫でました。指先が割れ目をなぞるような動きをしたのが分かりました。

「俺の行動はいつも正しい。そうだな。フル」
「はっ、はい……。その通りです。申し訳ありません」
「よしよし。よい子だ。後で褒美をやろう」
「あっ。はい……。ありがとうございます」

フルの声が湿り気を帯びていました。そうなんですね。既に調教

が始まっていたのですね。
わたしの心の奥底で、がさりと何かが崩れる音がしました。

マサタカ……。

「セカンド、ついてくるがいい」

先行するダムス、後ろのフルに挟まれわたしはハレラニ洞窟を昇っていきました。
途中、洞窟内を探索している兵士や法術士たちを見かけました。彼らは司祭に敬礼をすると、そのまま任務を続行しました。私にあからさまに注意を向ける者はいませんでした。
でも、司祭と法術士に挟まれダンジョンから出ていく民間人って、絶対気になりますよね。どう見ても訳ありですが、ダムスが傍にいるので黙って見過ごしたのでしょう。

洞窟を出ました。治療に使われた簡易テントがあります。ですが、もう負傷者はいないため洞窟捜索の基地に転用されている様子です。軍服を着た男女が事務的な作業をしていました。

「司祭様。お戻りですか。その娘は？」

テントにいたのは法国軍の幹部なのでしょう。さすがにダムスに声を掛けてきました。

「例の転移門のそばで見つけた。事情を知っている可能性が高い。訊問するため法都に連行する」
「司祭様御自らですか？」
「高位魔物の襲撃との関連性も考えられる」
「はっ。承知いたしました」

「護衛にフルを引き続き借りる。よろしいな、中隊長」
「もちろんです、司祭様」

ダムスの権限は大したものです。わたしはダムスとフルと共に軍用馬車に乗り法都に入りました。
客車の中でダムスはフルの胸やお尻をいやらしく撫でまわしていました。
箱型車なので窓のカーテンを閉めれば御者や外から見えないのをいいことに。まるで私に見せつけるように。

そういえば、あまり子ども子どもしたのは趣味じゃないといっていましたね。
おっぱい星人でしたし。
フルも、年齢よりも胸があります。
ダムスがわたしの胸を粘っこく見ています。わたしを視姦しながらフルのお尻の奥まで指を伸ばしているのです。

いやらしい。

やがて御者が法都到着を告げました。フルいじりをやめ、ダムスが窓を開けます。
ミヤビとしてははじめてですが、ほぼ1年を過ごした都です。数年のずれがありますが、法都の景色や雰囲気は以前（未来）のままでした。石造りの建物が立ち並び、中央にひときわ大きな大聖会の聖堂がそびえたっています。そして多数の人で賑わっています。
この世界の大都会です。
もともと歴史ある古い都なので、数年程度では何も変わらないのでしょう。４年後も魔軍の直接的な被害は受けていませんでしたし。

馬車に揺られたまま、法都中央へと向かいます。大聖堂の近くに

ある法術研究機関（アカデミア）。法理大学の一部であり、軍と大聖会双方の下部組織でもあります。

白亜の殿堂のような美しい建物ですが、限られた者しか出入り出来ません。勇者マサタカの時も自由に入れませんでした。

ここにお母様（とわたし）の魔核（コア）が保管されているのです。

3階くらいまである巨大な正門前で馬車を降りると、ダムスに気付いた門番が敬礼し横にある通用口の扉を開けます。フルもわたしもフリーパスでした。

当然といえば当然ですが、ここまでスムーズだと逆に何かの罠ではないかと少し不安になります。また量子分解するとか言い出すんではないでしょうか。

大理石でできた豪華な柱に支えられた明るく広い廊下を進みます。研究者らしき人々とすれ違いますが、皆ダムスに黙礼をして通り過ぎていきました。

大聖会の司祭であり、元賢者です。

何をしに来たと疑問に思っても、声を出して止められる者などいないでしょう。

ダムスはとある鉄の扉に触れ開錠しました。魔法鍵？　それとも生体認証でしょうか？　ダムスらと共に中に入ると、暗く奥行きのある大きな部屋でした。

扉の外とはうって変わって、金属的で現代的な空間です。境界のスパコンルームに似た意匠です。この部屋自体が聖遺物（アーティファクト）なのでしょう。背後で勝手に扉が閉まり鍵の音がしました。オートロックです。

「ここにあるのですか？　ダムス司祭」

「その前に、ヤルことがある」

ダムスは服を脱ぎ始めました。え？
遅れてフルも法衣を脱ぎ始めました。まるでダムスに付き合うように。というか、多分本当にそういうことなんでしょう。さっきも褒美がどうとか言ってましたし。
ダムスがヤリたい時にヤれる女。フルはもうそう調教されているのでしょう。

また、心の奥でなにかがさりと崩れる音がしました。

裸のフルがわたしの前に立ちます。１０歳にしては大きな乳房。その先端にあるはずの乳首は隠れて見えません。わずかに色づいたピンクの真ん中に小さな窪みがあるだけです。陥没乳頭です。
腰のくびれはあまりめだたず、まだふっくらとした少女の体つきですが、お尻は張っています。
そして薄い金色の恥毛ごしに、くっきりとした縦割れがあります。

お母様が子どもなら確かにこんな感じになるでしょう。

ダムスがフルを背面から抱きしめました。毬のようなおっぱいを揉み、前から股間に手を入れます。恥毛を撫でるザリザリという音が聞こえます。
まんこに指は入れず、クリトリスや陰唇を嬲るだけに留めるようです。この世界線でもフルの処女膜はキープしておくのでしょう。

……未来に罠を張るために。

がさり。

「あっ、うっ」

外性器の愛撫で感じてきたのでしょう。フルがますます上気し、艶声が漏れ始めます。

ダムスが離れ、フルの前に回りました。わたしから見て二人は斜め前の位置にいます。

「たっぷりとしゃぶれ。たっぷりとな」

「はい」

フルが頬を染めながら、素直に従います。恥ずかしくて赤くなっているわけではなく、ダムスの言葉に欲情しているようです。瞳が期待に輝き、蜘蛛の糸のような涎がつーと垂れ始めました。

フルの目の前にはダムスのちんぽが反り返っています。

フルの片腕ぐらいあろうかという漆黒の巨根。極悪ちんぽです。剥けた赤黒い亀頭が金属のようにテカっています。パンパンです。

「はむっ……」

フルが大きな口を開けてその剛直を呑み込みました。しかし、さすがに全部とはいかず半分くらいが口から出ています。ディープスロートは未修得なんでしょう。その分、亀頭を舐め、横からハーモニカのように舐め、裏筋を舐め、金玉袋を舐めと細かい動きでフォローしています。

と冷静に観察するようなことではありません。なぜ今わたしはダムスとフルのセックスを見せられているのでしょう？

他人に見られて喜ぶ変態さんなんでしょうか。

ダムスのことだからあり得ますね。

他人の前で口淫をためらわないフルも調教が相当進んでいるようですし。

「ケツを突き出せ」
「はい」

フルが反対向きになり、ダムスに下半身を突き出しました。桃のようにきれいなお尻をダムスがごつい指を広げて掴み、そのままぐいと溝を割り広げます。

フルのお尻の穴と性器がぱっくりと開きます。その一帯はすでに刷毛で糊を塗ったかのようにとろとろに濡れ光っています。粘液を噴き出し発情しきったほかほかまんこです。ダムスのちんぽへの奉仕のせいなのか、わたしに見られながらのせいなのか、その両方なのか。

「あああっ！　はぎっ！　ぐぅっ！！」

ずぬぬぬと音が聞こえるような気がしました。ダムスのでかちんぽがフルのケツ穴を割り広げ、ゆっくりとその全長を沈めていきます。

「ああっ！　いいっ！　いいよお！」

フルが叫びます。ちょっと心配になりましたが、鉄扉の分厚さを思い出しました。外に声が聞こえることはないでしょう。

しかし、お母様の声でこうあられもなく叫ばれると、何とも言えない気持ちになります。

うん、お母様とフルは別人。世界線が違うのですから。きっと。そう信じましょう。

「だいぶっ、慣れてきたがっ、まだきついなっ！」

「ああっ！　ああっ！　司祭様！　ああっ！　いいですっ！」

ダムスは激しく腰を動かしながらフルの尻肉を叩いたり、おっぱいを揉みしだいたり、背後から好き放題です。フルも被虐志向があるのか、乱暴にされるほど喜んでいます。

そういえば、そうだったような……。

がさり。

いえ、あのフルとこのフルは別人。違う世界線の違う人生。そうでしょう？　マサタカ。

でも……。きっとあのフルも、この頃にダムスに仕込まれて精神支配されていたのだと思います。でなければ最後の最後で裏切ることなんてなかったはずです。

「ああっ、もうっ、ああっ、激しいっ、あああああっ！」

「直腸の襞が喜んでいるな！　一枚一枚が震えるようだっ。いいのか！　フル！　いいんだな！」

そもそも裏切ったのでしょうか？

はじめから最後の刺客として勇者パーティーに送り込まれたのではないのでしょうか。

肉人形と化し、身も心もダムスに支配され、命令のままに勇者を愛するふりをしていた。

がさり。

いや、しかし。

『夢なら……、よかったの……、ですが』

最後にフルはそういいました。あれは後悔、あるいは懺悔だったのではないのでしょうか。

そして魔人と化し、わたし、マサタカの転生体を生み、育てました。

それがマサタカに対する贖罪だったのではないのでしょうか。

「ああっ、ああっ、もう、今っ、あああああ！」

「おおおおっ！」

ダムスの腰がひときわ強くフルの尻に打ち付けられ、動きを止めました。腸の奥に中出ししているのでしょう。長い射精です。

しばらくして、ダムスが離れました。ずるずると陰茎が抜き出され、白濁した精液がずびゅとこぼれます。ちんぽの支えがなくなったフルは床に崩れうつ伏せになりました。床に顔をつけているので表情はわかりませんが、イキ切った感じです。

「ふん。まだまだこれからだが、仕込みがいがあるケツだ。さて、セカンド、次は久々にお前の相手をしてやるか」

ダムスが全裸のまま私に声を掛けます。

「お断りです。なんでわたしが今更あなたとしないといけないんですか。そもそもなんでいきなりここでセックスしているんですか」

「洞窟探査で昨日今日とお預けだったからなあ。フルにも褒美をやらないといけないが、さすがに他の兵の目のある所では難しい。けれど、セカンドは共犯みたいなもんだからな」

性欲の塊ですがこの男は。

「気安く言わないでください。そんなことよりもお母様の魔核は一体何処にあるんですか」

「この部屋だが」

「魔核の保管庫で行為に及んだんですか！？　それでも司祭ですか」

「ここなら完全な密室だからな。安心してヤレるだろ」

あきれてしまいます。

ダムスと、ようやく起きたフルが清浄魔法で身を清め、淫臭を消し、服を着るのを待ちました。なんなんでしょう。このグダグダ感。そして緊張感のなさ。

お母様復活の儀というのに、なんだかもう全部台無しです。お母様に近い存在のフルがケツ穴淫乱ビッチなのがまた腹立たしさに輪をかけます。

……気を取り直しましょう。深呼吸。すー、はー。すー、はー。

ダムスが壁に向かい手を動かしました。ジェスチャ入力なのか、壁が開きスクリーンになります。

ソフトウェアキーボードをタッチしコードを入力します。

このコードは憶えています。第八境界でゲットした賢者のパスワード。司祭になっても同じなんですね。権限クラスが一緒なのでしょう。

ごしゅん、と蒸気が漏れるような音がして、別の壁の一部が開きせり出してきます。その上に置かれたガラスのキューブに入っているのは、金色に輝く球体。

お母様の魔核（コア）です。

「開くぞ」

キューブが展開し、魔核が外気に触れます。弱い魔力が感じられます。今はこんな微細な放射もわかるようになりました。

「これからどうする？」

「触ります」

わたしが魔核に触ればお母様が蘇る。サタラヴィはそう言いました。

魔核に近づき、伸ばした手をかざします。わたしの中から魔力が光となって魔核へ流れていきます。不快なものではありません。むしろ安心するような感覚。

そう、お母様に抱き締められているような。

わたしは、光に包まれた手で魔核に触れました。

そのとたん、魔核が魔力を猛烈に吸い込み始めました。光の流れが怒涛のような勢いに変わります。

魔核がぶれ始め、姿を変えていきます。

女性の頭……。

ツインテールの石の首。

これは……。

「いかん、すり替えられた！　離れろセカンド！」

ダムスが叫びます。わたしも手を引き戻そうとしているのですが石に吸い付いて離れません。光の奔流が収まりません。ダムスとフルがわたしを羽交い絞めにして引きはがそうとしますが、動きません。

ばちいっと大きな音がして、突然わたしはダムスたち共々ひっくり返りました。

キューブのあった引き出しあたりが壁ごと破壊され、土煙がもうもうと立っています。

「んはははははは！　復活じゃ！　ようやったぞマサタカ。いや、ミヤビじゃったか」

そこに立っていたのはゴスロリツインテアイパッチの美少女。

大魔王ジャーガでした。

この作品の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
https://novel18.syosetu.com/n3682fo/

ＴＳ勇者、メス堕ち地獄のその先に。

2024年7月18日20時58分発行